藝苑一夕話

藝苑一夕話 下

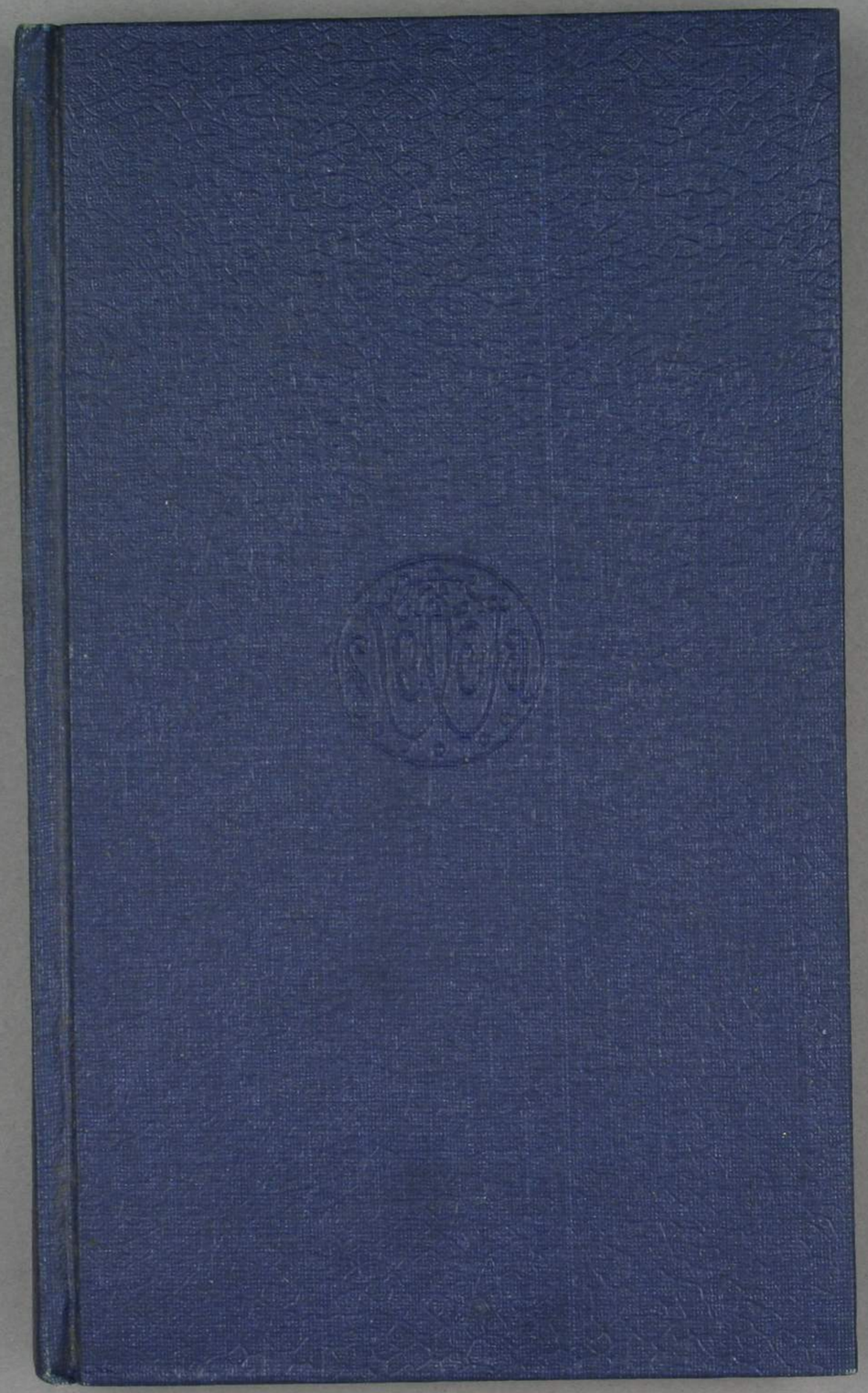
市島春城著

藝苑一夕話

下

藝苑一夕話 下

市島春城著



市島春城著

羅苑一夕話

下

藝苑一夕話　下卷　目次

一　熊澤了介……一
　　箔の落ちた渠……一
　　渠の功名心……六
二　塙保己一……一三
　　渠の前半世……一三
　　渠の事業と述齋……一五
三　小澤蘆庵……二〇
　　三井を破門す……二〇
　　渠と君平……二一
四　平田篤胤……二八

大道講釋……二八
富豪の聟……三一
五　尾高高雅……三五
吟咏天闇に達す……三五
民政を執りて信望を博す……三八
財政難を救ふ……四〇
六　閑叟と穀堂……四五
穀堂の忠勤……四五
閑叟の新政策……四八
七　谷　文晁……五一
斯界の巨匠　田安家との因縁……五五
八　曾我蕭白……五五
揮毫の神速　渠の美人畫……五五
九　久隅守景……五九
師の畫に惡戯　加賀へ放浪……六三
一〇　松尾芭蕉……六三
君侯の侍女と翁の遁世……六五
一一　山崎宗鑑……六五
それにつけても金のほしさよ……六七
一二　細川幽齋……六七
風流武將……七二
一三　烏丸光廣……七二
公家の變種……七四
江戸土産の都々逸……七四

一四　近衞家熙……七六
名物家の大名物
唐六典の較刊……七六
一五　山崎闇齋……八〇
權貴眼裏に置かず……八三
一六　荻生徂徠……八三
さはられない人物……八六
一七　林　述齋……八六
家傳の祕事……八九
英雄の持病……八九
一八　土井聱牙……九一
二箇の奇室……九二

一九　村瀨栲亭……九六
才思敏贍……九六
二〇　貫名海屋……一〇〇
悉く是れ努力の賜……一〇〇
二一　釧　雲泉……一〇〇
崛奇孤高……一〇四
二二　田能村竹田……一〇四
非凡の向上心……一〇八
二三　細井廣澤……一〇八
立志の妨と情婦を一刀の下に……一一三
二四　勝間龍水……一一五
佛具が初松魚に早變り……一一五

二五 森川竹窓……一一八
不換妓之書……一一八
二六 細川林谷……一二一
一粗字是れ渠の勝處……一二一
神前より古鈴を失敬……一二一
二七 建 凌岱……一二四
可なら不る莫き才……一二八
二八 寶井其角……一二八
反故の幅……一三三
梅香の句……一三三
二九 中川乙由……一三三
迷里劇場は句の仕入所……一三四

三〇 卷 菱湖……一三七
胡坐かいて追出さる……一三七
講釋の旨さに烈公泣出す……一四〇
三一 中澤雪城……一四四
廣告術の妙諦……一四四
義士遺墨蒐集の苦心……一四八
三二 賴 春水……一五二
剛毅の質……一五二
三三 筱崎小竹……一五四
渠と精里父子 山陽をして詩文に驥足を展べしむ……一五四
三四 福地苟庵……一六一
附會問答 「雲耶山耶」の粉本……一六一

三五 江馬細香……一六五
山陽と相思の仲……二六五
果然祕密あり……一六八
三六 中島棕隱……一七二
泥鰌割き……一七二
嵯峨小稿……一七三
三七 菊池五山……一七三
出入の一書肆曰く……一七四
三八 平野金華……一七七
默齋饒舌金華文無し……一七七
三九 本田正鄕……一七九
肥前越中の取組……一七九
四〇 館柳灣……一八二
館姓の由來……一八二
智等が制裁覺悟の詩集出版……一八四
四一 柏木如亭……一八七
薄倖の詩人……一八七
渠の吉原詞……一九二
四二 鷲津毅堂……一九六
文人知事……一九六
四三 僧西笑……二〇〇
案側に女子を侍せしむ……二〇〇
四四 了覺道人……二〇二
元祿義學の讖……二〇二

四五 岸 玄智……二〇五
玄智梅……二〇五
四六 一陽齋豐國……二〇八
渡世の筆と感激の筆……二〇八
四七 葛飾北齋……二一一
渠の大宣傳……二一一
御前席畫の離れ業……二一一
四八 其一と孤村……二一四
蕭疎と濃艶……二一六
四九 大石眞虎……二一六
版行の詫證文……二一一
五〇 謝 蕪村……二二二

開帳に日參……二二三
芝居の眞似……二二四
五一 坂田鷗客……二二六
眞面目で自信が厚い……二二六
五二 菅井梅關……二二九
畫是れ子孫……二二九
渠の死因……二三一
五三 田崎草雲……二三三
佛前より斗帳の拜借　内君の戮力……二三三
五四 蘆 和亭……二三七
北海道で拾はれた……二三七
五五 小川子明……二四一

忘卻先生……二四一
五六 間宮林藏……二四四
路銀の始末に窮した乞丐の變裝……二四四
五七 大鹽後素……二四七
矢部の大鹽論……二四七
五八 藤田東湖……二五一
勝つた方から白旗……二五一
小兒に閉口……二五二
五九 佐藤信淵……二五四
物質界の開拓者……二五四
六〇 小野蘭山……二五七
勤勉無比……二五七

六一 屋代弘賢……二六〇
卷册故の借金……二六〇
六二 松崎慊堂……二六四
娼婦の仕送で勉學……二六四
六三 小川心齋……二六八
晩酌の興に國史談……二六八
六四 秋元安民……二七一
國學者連の珍妙運動……二七一
六五 清原雄風……二七九
遁世菩提居士……二七九
六六 原雲庵……二八三
病家に告ぐる三箇條……二八三

六七　曲直瀬道三……二八六
英傑の意外な一方面……二八六
禁裏拜診の模樣……二九一
氏鄕病狀錄……二九三
養安院本……二九六

文人の旅

小　引……二九九
一　太田蜀山――旅中の狂歌……三〇三
二　拍木如亭――旅行詩人……三〇六
三　龜田鵬齋――北地留連の因由……三〇八
四　賴　山陽――寸翁と船中の邂逅……三〇九

五　豐　谷――信州の山村で身賣の場に出會ふ……三一一
六　俳人支考――深夜女の一喝を頂戴す……三一三
七　江村北海――氣早の待遇振に愕く……三一五
八　森　春濤――渠の俳句狂歌……三一六
九　河野鐵兜――渠の餘藝……三一八
一〇　良寛と西行――默々として打毆かる――同行の爭心あるを
　　遺憾とす……三二〇
一一　惟　然　坊――女の盛服を着て道中……三二三
一二　大一栗齋――足跡天下に遍し……三二四
一三　湯淺常山――私送では無い……三二六
一四　小河仲栗――博徒を屈す……三二七
一五　案山と雲居――如是草賊發菩提心……三二九

一六　石島筑波＝賊徒を追散らす……三三三
一七　春木南湖＝山中へ擔込まる……三三四
一八　藤本鐵石＝轎夫の智に及ばざること三十里……三三六
一九　大窪詩佛＝貴僧は眼力が高い……三三八
二〇　釧雲泉＝詩佛の題詩を謝絶す……三四〇
二一　鈴木芙蓉＝人爭ひ索む……三四一
二二　西山拙齋＝春水を瞞す……三四二
二三　野呂介石＝會泝熊谿五十回……三四四
二四　渡邊崋山＝渠が閉口した一夜……三四五
二五　卷　菱湖＝くわつと隣室に闖入す……三四六
二六　山梨稻川＝椒齋との初對面……三四八
二七　長尾秋水＝詩の著作權の讓渡……三五〇
二八　鴨厓と武四郎＝江差の文嬉……三五二
二九　足代弘訓＝一座服す……三五七
三〇　十返舍一九＝秋山旅行……三五八

雜話

一　一勇齋國芳＝五十疊敷大の九紋龍圖……三六五
二　勝川春亭＝敷居が高い……三六六
三　山東京傳＝沓々下駄〳〵……三六七
四　畠中銅脈＝咄嗟の佳對……三六八
五　小山田與清＝上には上があつても……三六九
六　加藤千蔭＝千蔭緞子……三七〇
七　中山高陽＝火災を餘所に松島行……三七一

八　高久靄崖＝渠と竹田……三七二
九　高橋草坪＝師の賴まれた畫を賣して金に換ふ……三七四
一〇　竝河天民＝渠の古歌評……三七五
一一　齋藤拙堂＝本居を罵つた歌……三七六
一二　朝川善庵＝鼈に這込まる……三七七
一三　曾我耐軒＝是可忍也孰不可忍也……三七八
一四　江村北海＝悴も生きて居たら……三七九
一五　松岡玄達＝藥包に狂詩……三八二
一六　有馬涼及＝日本の柳下惠……三八二
一七　服部元好＝家の黑燒の效能……三八四
一八　名村太吉＝膽力露使を屈す……三八五
一九　佐久良東雄＝天皇こそ吾が主人……三八六

二〇　山崎三綱＝官の旌表を辭す……三八八
二一　横井也有＝隨展隨贊……三八九
二二　藤江石亭＝風流合作……三九〇
二三　乾貞恕＝馬糞子……三九一
二四　俳人五雲＝疊を踏んで參詣に代ふ……三九二
二五　關雪江＝掛引なしの湯屋淨瑠璃……三九二
二六　尾形光琳＝奇想……三九三
二七　尾形乾山＝風韻……三九五
二八　德川家綱＝酒井家の小屏風……三九六
二九　增山雪齋＝蟲籍……三九九
三〇　櫻木勘十郎＝卓犖けた縞好き……四〇〇
三一　奧田三角＝器物調度までも三角形……四〇二

三二　岡本況齋＝札配をへこます……四〇三
三三　市野迷庵＝ジンノシクワウ……四〇四
三四　賴圓杏坪＝手數の掛る先生……四〇六
三五　石弓久文＝君は人間で無い……四〇七
三六　服部南郭＝垢拔のした人……四〇九
三七　狩野典信＝氣の利いた思付……四一〇
三八　谷　文一＝繪を書いて關を通る……四一〇
三九　岸　竹堂＝畫室の大穴……四一二
四〇　風流丐兒＝禮謝の一句……四一二
四一　乙骨耐軒＝都下の溝通……四一三
四二　寺門靜軒＝越女の辯護……四一四
四三　佐藤直方＝言行總べて意表外……四一六

四四　淺見絅齋＝まだ餅を買ふ錢があるか……四一八
四五　三宅尙齋＝獄中血書の二著……四二〇
四六　龍　女＝業平涅槃圖……四二一
四七　小林一茶＝渠の俳句……四二三
四八　伊藤仁齋＝堀川塾の靑天霹靂事……四二六
四九　英　一蝶＝女達磨……四二八
五〇　荻生徂徠＝雇婆さんの觀察……四三〇
五一　谷　文晁＝竹林七賢亦躍る可し……四三〇
五二　大　雅　堂＝再び指畫を作らず……四三一
五三　柳澤淇園＝だいこごんぱう歌……四三二
五四　春濤と春水＝興味ある對照……四三二

（下卷目次終）

藝苑一夕話 下卷

市島春城著

一 熊澤了介

箔の落ちた渠

熊澤了介は、蕃山の號で知られて居る。(蕃山は號でなく、蕃山と云ふ所へ隱退したので、それを姓としたと云ふ說もある)闇齋や益軒、徂徠などと竝稱された、元祿頃の大儒で、豪傑風な學者として評判の高い人だ。併し、近頃の研究では、此人に對して種々の議論がある。つまり、評判の方が人物よりも勝つて居る樣だ。勿論、備前の

藩主として聰明賢達を以て聞えた芳烈公、乃ち池田新太郎少將が心を傾けて之を用る、晩年には其三子を養子にくれられた位だから、凡庸の學者で無いことは云ふまでも無い。併し、岡山に於ける芳烈公の著名な施設は、何から何まで、皆熊澤のなしたことであるかの如く云はれて居るのは間違ひであつて、前卷津田永忠の項に掲げた樣に、多くの事業をなしたものは、熊澤ではなく、津田であることが、今となつては明瞭である。

熊澤は、十六歳の時から二十歳まで岡山に居り、芳烈公の小姓であつた。二十歳の時、修業の爲に京都に出て、中江藤樹の門に入つた。藤樹が其師たるを辭したので、熊澤は、二晝夜其の門外に彳み、懇請して已まなかつたと云ふ話しのあるのは、此時のことである。二十二三歳の頃、又再び岡山に戻つて、それから重く用ゐられ、終には三千石の大身とまでなつたが、其藩政に與つた間は甚だ短かつた。津田は之に反し、

芳烈公光政と其嗣綱政との二代に亙り、四十年の間政權を握り、思ふ存分の事を遣つた。其津田の遣つたことが、後世皆熊澤の遣つたことの樣に解されて居るから、熊澤は如何にも岡山で政績が多く、大政治家大事業家の樣に思はれて居る。所で、芳烈公の治蹟として世に名高い新田開鑿や、井田の事や、水戸の彰考館よりもずつと早く閑谷に黌を起したことなどは、皆熊澤が岡山を立つて後、津田の遣つたことである。是等の諸施設を、熊澤に關係なしとして熊澤を考へて見たならば、熊澤の箱は餘程落ちる譯である。全體、津田と熊澤の年輩は、二十一も違つて居る。何人も、津田は後輩であるから、熊澤の示教を受けて、熊澤が畫策したことを、後に津田が追々實行したものだと考へるのも無理はないが、どうも實際はさうでない樣である。重野博士は、嘗て岡山に出かけて、熊澤と津田との間柄を取調べられたことがある。それに據ると、熊澤が津田を惡むで排斥したことは非常であつて、芳烈公が天和二年に逝去され、綱

政公が嗣がれた時、熊澤は大和の郡山に居つたが、昔の緣因で、一篇の上書を爲し、津田の奸惡なる證跡を擧げ、彼れを黜けよと熱烈に勸めたものである。熊澤と津田とは、斯樣に中のわるい間柄である所から考へると、熊澤の畫したことを、津田が遣つたとも思はれぬ。寧ろ、津田の治蹟の盛んなのを、熊澤は內心喜ばず、暗に之を陷れんとしたものではあるまいか。斯樣な疑ひの熊澤にかゝるのは、その綱政公に呈した、津田の彈劾書の中に云云することが、津田を罪するには如何にも薄弱で、却つて熊澤自身の人格を損ふ嫌ひがあるからである。其罪條の一に、津田は伯州大山より出た馬を、備前の某島の產だと云ひ、五歲の馬を六歲だと云うて、君侯を欺いて居る。これは趙高が馬を指して鹿としたと同じく、君を欺罔する不臣の所爲であると彈劾し、又津田に徒黨せりと、熊澤の目して居る、池田三郎兵衞の子が、一旦他藩の家に養子に行き、それが離緣となつて岡山に戻つて徘徊してゐる。斯ることは藩法の許さない

ことであるのに、之を不問に措くのは不都合であると云うて、これも罪に數へて居る。

全體かほどの瑣事を、熊澤とも云はるゝ大人物が、大聲疾呼して罪を鳴らすと云ふは不似合の事で、寧ろ其心事が疑はれるではないか。末に至つて、津田の如き奸惡な人物を君側に置けば、自然、君侯も衆怨の府となるから、一日も早く處分さるべし。彼れの如きは、如意山の墓守にでも命ぜらるれば、意外の仕合せであるなどと云うて、君子にあるまじい激語を發して居る。さて又津田に果して小人とか奸惡とか云はるゝ缺陷があるかと云ふに、岡山には一向何も傳はつて居らぬ。重野博士の云はるゝには、湯淺常山の文會筆記の附錄（未刊本）に、津田の奸惡なることを云うて王安石に比して居るが、全體、常山は熊澤崇拜の人で、且つ津田とは私怨があつたから、其言ふ所は一概に信を置き難い。其惡く云ふ常山ですら、同じ書中に、津田の雄才、及ぶべからずなど云うて、褒めて居ると云はれた。何にしても、熊澤の上書が敢て津田の位置

を動かすに至らず、依然藩政を執つた所から見ると、彼れには黜けらるゝ樣な缺陷が無かつたと見るの外は無い。

渠の功名心

熊澤は自負心と功名心が盛んで、それが兎もすると鋒鋩を露し、時には災厄を招いた樣である。熊澤が三千石の高俸で取り立てられながら、間もなく致仕隱退した原因は、頗る不明であるが、重野博士の取調に據ると、岡山の家老壹岐竹之助、後に長門と云うた人の話しが、事實に近いと云うて居る。夫は岡山藩の財政改革に就き、熊澤は實に突飛な策を獻じたことがある。卽ち池田家大身の家祿を三分の一に減ぜざれば、池田家の財政は維持が出來ぬと云ふ趣意であつた。光政公は之を採納されたけれども、何分當時戰國時代を去る未だ遠からず、祖先の武功で其祿にありつき居るものが、直ちに其祿を三が一に削らるゝとあつては何れも堪まらないので、流石に光政公も、此

改革には手を下しかねた。其內斯る獻策が熊澤より出たと云ふことが、追々大身の知る所となつて、禍ひまさに熊澤に及ばんとしたので、已むなく熊澤は致仕するに至つた。併し、此事は熊澤の失策であるのみならず、亦君侯の失策でもあるから、曖昧に附されて、熊澤致仕の原因は夫が爲判然せぬ。併し、多分これが原因であらうと、重野博士は言うて居る。全體、財政整理には、時に荒療治も必要である。熊澤の此獻策一概に不可とすべきでも無いが、其決行の出來なかつた所から見ると、徒らに功を急ぎ、政治家的主腕を缺いたことは明かである。熊澤の性格が君子風の溫厚でなく、寧ろ嚴勵に過ぎたことが、これで讀める。津田永忠も、曾て揭げた樣に英氣橫溢の才で、人の顏使に任せぬ性格であるから、兩者の間に衝突の起つたのも決して不思議はない。

熊澤は、前述のごとく隱退したが、君侯から養子を貰ふの光榮を贏ち得た。此の養子は池田丹波守と云うて、一萬五千石の池田家の大名となつた。熊澤は乃ち其養父で

あるから、自ら池田を名乗り、前に舉げた上書の末には、現に池田主水と署名して居る。君家の子弟を養子に貰つた熊澤の態度が、又あまり香ばしからぬ性格を語つて居る。嘗て其の養子に與へた手紙が、今も存在して居ると云ふが、それには、自分の處へ方々の大名が尋ねて來るが、貴樣は嘗て來たことがない。全體、貴樣は養子で、俺は假りにも父である。訪ねて來るが當然であらう。その來ないのは、俺の子でない振りをするのであらうと、忌味を云うてゐる。重野博士は、之に就き、如何に情に馳せたからと云うて、其の語氣の卑劣なる、到底蕃山の口から發すべき言とも思へぬ。これが良知良能の學を修めた人とすると、自分は蕃山の心術を疑はねばならぬと云うてゐるが、自分も全く同感である。

熊澤は、晩年(貞享四年)その著「大學或問」(一名經濟錄)を、時の將軍綱吉公に上り、旨に忤うて古河に永年禁錮された。此の著述は、時弊を二十數節に分つて忌憚な

く指摘したもので、爲政家の參考ともなり、採るべきものもあつたに相違ない。而るに其の採納を得ざるのみか、刑を受くるに至つた譯は、時弊の指摘が露骨であつたので、將軍の近侍の忌諱に觸れたのと、其の言辭の傲慢に失し、其の結論に、「いよ〳〵すぐれたらん人は、公方の師とも客としても召さるべし」など云うて、暗に乃公の如き學識ある者を、輔佐に舉げよと云はぬばかりに放膽の筆を揮つたので、意外の累を釀した。これも學者の見識で、一概に非難すべきではないが、これに據つて見ても、其の性格が君子風で無かつたことが窺はれる。眞に時弊を憂へて、其匡濟を欲するものであらば、婉曲の言ひ廻しをして人の怒りを避け、一意言の行はるゝを力むべきであるのに、然はなくして、己がえらさを衒つた氣味のあるのは、やはり其の功名心の發現と見なければならぬ樣である。昔から傳はつて居る逸事に、或る諸侯の邸に、熊澤が山井正雪と出食はした話がある。熊澤が其の邸に入ると、威容堂々たる非常の骨

骼の一人物が、玄關を出るのを見た。兩人互に目を張つて見合つたが、遂に一語も交へず、すれ〳〵に別れた。熊澤、侯に面し、唯今爾々の士を見た。あれは誰だと問ふと、侯は、余が爲に兵書を講ずる山井民部助であると云はれた。熊澤之を聞き、自分を以て彼れの相貌を見、其の意を測るに、彼れは危險なる人物である。御近付けなさらぬがよいと云うた。他日、正雪が侯に會した時、正雪の云ふには、前日退出の時、異樣の一士を見た。あれは何人であると問ふと、經書を講ずる熊澤次郎八であると云はれた。正雪色を正して、つら〳〵彼れの相貌より其の心術を察すると、汕斷のならぬ人物である。斯樣なものを御近付けなさるなと、恰も熊澤が云つた通りなことを云うて、互に危險呼ばはりを遣つたとあるが、後に正雪、非擧を企てたから、熊澤は先見の明ありと云はれ、ます〳〵熊澤をえらいものにして居るけれども、奸雄、奸雄を知るの古語のごとく、正雪の評の間に實相を穿つた所が無いとも云へぬ。

蕃山は元京都の人で、音律に委しく、現に其の作曲に係る琴謠などが、人口に膾炙してゐる。そこで、何となく熊澤を優美な人であるかの如く、人は思うてゐるが、例の「露の乾ぬ間」の琴謠の作曲から、熊澤は脚本家の材料に借りられ、それで風流の人のごとく、聯想さるゝことになつたので、實は骨骼たくましく、戰國時代の餘風いまだ去らざる折柄とは言へ、武張つた風を好み、自分の體格が斯樣に肥大では、いざ戰爭と云ふ時には困るとあつて、常に槍劍を操縱し、或は野に出でて銃獵に耽り、十數年の努力、やつとの事に軀幹や、瘦せたと云うて喜んだ位である。熊澤は、何故か、自室の壁には常に源義經の肖像を掲け、決して他の書畫を掲けなかつたと云ふ。了介、名は伯繼、息游軒と號し、元祿四年、七十三歳で歿した。

二　塙保己一

渠の前半世

「番町で目あきめくらに道を問ひ」と云ふ川柳は、盲儒塙保己一が、如何に當時重んぜられたかを、簡明に說明するものである。此の盲儒は番町に住し、彼れが主宰の「和學講談所」なる學堂も、又番町に在つた。塙は、武藏の兒玉郡保木野村に生れたので、一時、名を保木野一と云うたこともあるが、後學者になつてから、文選に「保己安二百年一」とあるに取り、保己一と改めた。

此人、貧家に生れて、七歲明を失し、實に氣の毒なる境遇であつた。彼れは、幼少の時、或る人から、江戸には、太平記讀みを家業として世を渡る盲人のあることを聽き、その位の事で生計が立つものならばと、初めて學に志し、江戸に出掛けたのが、

そも〳〵の踏出しだと云ふ。此人、天性無器用で、按摩も鍼も拙く、琴三絃の藝も出來ず。およそ盲人に必要となつて居る藝術は、皆不向であつた。師なる雨富檢校（須賀一）も持て餘し、時には叱り勵ましたこともあつた。彼れも此時分大に悲觀し、水に投じて死なんとまで思ひ立ち、九段の牛ヶ淵まで步を運んだこともあつた。若し此時に死したならば、彼れは平凡の按摩で終つて、闇から闇へ葬られたのである。然るに、彼れは考へ直して、發奮、學に努めた。藝にかけては無器用で、盲人不似合に勘が惡かつたが、文字にかけては、驚くべき頭腦を有し、且つ非凡の記憶力が有つた。そこで師も、遂には盲人藝を廢して學者となるべく勸めた。これが番町に一明星を生じた、そも〳〵の淵源とも見るべきものである。

保己一は、これより、刻苦、文を學ぶにつとめ、按摩を揉ませる人々も、其學を好むを知つて、揉ませながら、書物を讀むで聞かせるもある。松平織部正（乘尹）の如き

は、雨富の隣家に住まつて居つたので、其必ず他日大成すべきを期し、篤志にも、種種の書物を讀み聽かせるを以て日課としたと云ふ。乘尹、常に同僚に語つて云ふには、彼れの人となりを見るに、意氣、常人に越えたり。彼れをして若し目明きならしめば、或は却つて法を犯し、其の身を損ふこともあらん。盲人なるこそ幸ひなれ。彼れ怠らずんば、必ず一家の業をなすべしと。乘尹は、眞に保己一を知るものであつた。

彼れは、斯くして修業を積み、終には眞淵の門にも入つたが、凡そ盲人には種々の階級あり、一座の長、宮、檢校に昇るまでには、先づ衆分となり、進んで勾當となり、而る後檢校となるが順序である。然る處、久しい因襲で、金が無ければ、學問や技藝がいくら優れても、昇格が出來なかつた。されば當時盲人の多くは、金を貯へるを何よりの大事とし、高利貸と云へば、盲人の事であるかの如く考へられた時代もあつた。然るに、保己一は斯る事にかけては全く無能力で、大抵は、檢校になると、大なる財

產家となるが通例であるのに、保己一のみは、檢校職に上つても、鴻池其他に數千圓の借財があつた位であるから、其の勾當の地位に進むにも、金のないのに窮した。然らば、誰が助けたかと云ふに、全く師の援助に據つたのである。雨富の云ふには、一座の有樣を見るに、格を進むるもの、皆金を旨とし、藝術に敢てかゝはらず。斯くては、後には、一座の內に、藝を學ぶものなきに至らん。汝が學は人に越えたれど、資力なくしては昇格を得べからずと云うて、百兩の金を與へた。卽ち彼れが勾當の地位を贏ち得たのは、此の百兩のお蔭もある。これより彼れは、塙勾當と呼び、名を保己一と改め、師の家を離れて、獨立一家を立つることになつた。これが安永四年で、彼れが三十歲の時である。

渠の事業と述齋

塙は、勾當の格に進むでから八年目、卽ち天明三年、三十八歲の時に、終に檢校の

位地に進むだ。彼れの勾當の格に陞つた頃の事である。竊に思ふに、支那には叢書といふものあいて、世を益すること少からず。我邦に於ても、二三册の小篇で有用の寫本を輯め、之を類從して叢書を作つたならば、一には圖書の佚亡を防ぎ、一には世を長く益するであらうと、こゝに「群書類從」の編纂を企てた。彼れは、之が爲に四十餘年間沒頭し、諸家に藏する寫本とし云ふ寫本を涉獵せざるなく、世に埋沒せる佳書を多く取り擧げて、校正上木し、終に六百三十五卷を世に公にした。而して尙も續集を出さんと、一千一百八十五卷の稿本を作つたが、これは上版までに至らなかつたけれども、寫本としては、いくらも傳はることになつたが、實に盛んなもので、後世學界が此書に負ふことの大なるは、言ふまでもない。

塙の事業にして、單にこれだけに止まるとしても、實に稱賛に値するが、後に塙は、幕命に據つて種々大部の編纂を擔當することになつた。卽ち「武家名目抄」七百卷の如

き、宇多帝より後一條帝に至る實錄四百四十卷の如き、(之を「史料」と名づく) 諸家記錄百七十八卷の如き、皆頗る浩瀚のもので、中には完成に至らなかつたものもあるが、古來、これほど大規模の編著をした者は無い。別して一盲人の事業としては、眞に驚くべきである。勿論、寛政年間に、塙の進言に依り和學講談所を置かれ、塙は之が館長と云ふ位置に坐し、幕府の保護を受けて、一方、學徒に國學を授けると共に、編纂も又こゝに爲したのであるから、多く人手を煩はしたことは勿論である。乃ち和學講談所は、一面、幕府の修史局であると共に、國學の部を擔當する、昌平黌の分校の如き趣きがあつたので、大きな仕事も出來たのである。昌平黌は、林家の傑物述齋が大學頭になつて、寛政の學制改革を行ひ、從來置かれた國學を廢して仕舞つた。然るに、一方、塙の如き國學者が、講談所を置かんことを幕府に請うたから、昌平黌に無きものは、之で補ふべしと、特別の保護を加へた觀がある。其の幾多の編纂を特

に命じたのも、又始終、出版の經費を辦じて遣つたのも、皆述齋の斡旋に因ることは幾んど爭はれぬ。其證據には、述齋が學頭を罷めると、すべて形勢がガラリ變つたのでもわかる。兎に角にも、塙は述齋のごとき知己があつて、其の功業が成り、述齋も亦塙を得て、文教に大なる發展を爲すことが出來た。

塙が和學講談所を開いた所は、番町の井伊直弼の屋敷の筋向うの角屋敷で、曾て越後の五十嵐甚藏氏が、其の一半を購うて住したことがある。それは塙の住宅の方であつたが、これに連接する講談所と書庫は、確某辯護士の有となつて居た。其頃、自分も訪れて各室を巡覽し、此の希有の盲儒を偲んだこともある。塙は、編纂の爲に多くの圖書を蒐集し、之を「溫故堂文庫」と名づけ、篤志者には閲覽も許したから、今云ふ圖書館の趣もあつた。平田篤胤の如き、其他幾多の學者は、塙本のお蔭で修業をしたり著述をしたものである。塙が歴代檢校の内に最も貧乏で、多くの借金のあつたのは、

書物を購ふに多くの金を要したのと、群書類從を私費で出版したからである。

彼れは文政五年、七十七歳で歿したが、仕事は、目明きの學者の三倍も五倍も行つて居る。彼れは、諸大名へ講釋に出かける前には、必ず塾生に其の講釋すべき書物をザツと一遍讀ませ、それを聞くのが例であつたと云ふが、一遍讀むのを聞いて、それで皆諳んじたのである。或る講席に、夜分燈が風の爲に滅したので、座中のものは困り、先生且らく御休憩をと請うた時、塙は其の燈火の滅したためであることを知り、さて〳〵、あなた方目明は、不自由なものだと一笑した。

三　小澤蘆庵

三井を破門す

小澤蘆庵は、和歌に於て、平安の四天王と云はれた大家の一人である。初め劍法を學び、武者修行をした時代もあつたが、後に志しを改め、和歌を以て世に鳴らんと欲し、劍を棄てゝ、冷泉爲村の門に入り、刻苦終に一家を爲すに至つた。

蘆庵は斯く武門出身であるから、普通歌學者流のごとき柔靡の質でなく、其の逸事として傳はつて居る一二の事實は、彼れが高い氣節をあらはして居る。嘗て京都で歌道の門戸を張つた時に、豪商三井の一族も皆入門した。然るに、寛政某年、蘆庵病に臥した時には、多くの門人皆見舞に來たが、三井一族は誰も行かなかつた。蘆庵病癒えて後、三井が其富を賴むで人に傲るの浮薄を憤り、絶交書を送つて破門した。其

書の端に錄した和歌が名高いものである。それは二首あつて、

三井の水濁れるものを澄むやとて
　何汲みつらむ袂ぬらしに

人の世の富は草葉に置く露の
　風を待つまの光なりけり

痛罵、骨を刺すの此二首の和歌は、三井家をして慚悔せしめ、深く其罪を謝したが、蘆庵は終に許さなかつた。

渠と君平

又彼れが東山に逍遙して、長嘯子の墓を撫つた話も、彼れが慷慨の風格を語るものであるが、偶然にも、足利尊氏の石塔を鞭つた蒲生君平を、蘆庵、己が家に宿したことがあつて、其の尊氏の塔を鞭つた出來事は、恰も其宿泊中であつたので、蘆庵も、

自身の血氣時代に同じ樣なことがあると云うて、此事實を語つた。其委細の事が、蒲生と親密の間柄であつた曲亭馬琴の細筆に書かれてゐる。

それに據ると、蒲生が蘆庵を訪うたのは、例の「山陵志」を著さんため、實地調査に京都に赴いた時で、京都には別に賴るべき所もなく、蘆庵とは相識では無かつたが、その古學を好むで、萬葉風の詠歌に名高く、世に拗ねてみづから高く持して居る敬慕の念を抱き、斯る人にこそ助を借るべしと、入洛の日、やがて蘆庵を訪れたのである。取次を請ふに、先づ言ひ寄る言葉に當惑し、ふと蘆庵が箏の名人であることに思ひつき、一時の方便に、箏の門人とならんため、遙々先生の名聲を聞き、京へ上つたもので、姓名は蒲生伊三郎、生れは下野なる宇都宮である由を申入れた。蘆庵これを聞き、聲たかく〜と、それは無益の事なり。自分は久しく隱れて、世と交はりを絶ち居れば、如何なる人にもお目にかゝらず。殊に箏の入門などで訪ね來らるゝこと、

案外の事なり。自分も若かつた時分箏を搔鳴らしたこともあつたが、彼れに聞かせよ我れに敎へよなどと云はるゝが五月蠅く、箏を打摧き薪に代へてから、既に幾年を經たる今日、箏の師となることなど思ひも寄らず。斯樣な藝に志す人ならば、別に師を求めらるべしと、取次に命ずる聲の襖越に聞ゆるを、蒲生、仕損じたりと、取次の出て來るをも待たず、主人に聞えよがしに、高く聲をあげ、實は、箏入門の志願と申せしは僞なり。自分は他に畢生の志願ありて、江戸に學びたる儒生にて、此度京都に來たのも、やはり同じ志願の爲なれど、何分此地に相識の人なく、翁が古學を好み給ふと、その氣品の俗ならぬを傳へ聞き、御助力を仰がん爲にお訪ねしたのであるが、差當り言ひ寄る言葉の無きに窮し、箏の入門など申出で、假にも長者を欺いた無禮は申譯なけれど、幸ひに容されて、面接を賜はらば、肝膽を吐露して具に心事を申上げん。其の上にて御意に稱はずば、お斷りあるも致し方ないと、精神を籠めて訴へた。

蘆庵は、襖越しに、客人の高らかに面會を求むる趣意を聞き、その來意の凡ならざるを察し、隔ての襖を押し開き、自ら『お上りなさい』と出迎へたので、蒲生も大に喜び、其の宿願の次第を縷々と述べ、少壯より「山陵志」の著述を思ひ立つたこと、古帝陵を尋ねる爲、旅より旅に移つて、此度も同じ目的で京に來たことを語り、果は王室の式微を慨して、潸然涕の下るを見て、蘆庵大に感服し、足下は眞に得がたい學者である。弊庵が君の志しを達せらるゝため幾許の役に立つこと、誠に本意なれば、不自由を厭はれずば、こゝに筇を止めて、徐ろに御陵を探り給へと、飽くまで深切にもてなし、夫よりは蒲生、毎日、蘆庵方を足場として、あちらこちらと古陵を尋ね歩き、ともすれば夜に入つて歸ることもあつた。

蘆庵は此の客人の待遇に特に意を用ゐて、飲食の事より入浴のことまで、奴僕に任せず手を下したが、蒲生却つて之を心苦しく思ひ、幾度も辭した。併し、翁は聽き入

れず、己が斯く爲すは、客を愛する故のみでなく、國の爲に盡さるゝ君の勞を慰したき微意に出づることなれば、決して辭退に及ばぬと云うて、其後も同じ待遇を續けた。

然るに、或る夜、蒲生は如何にしけん、十二時を過ぎても歸つて來ぬことがあつた。蘆庵は、例の如く、獨り寐ずに待つて居たが、二時とも覺ゆる頃、漸くに歸つたのを見ると、酒氣さへ帶びて居た。蘆庵も、少しく平かならず、入浴や食事を侑め了つて後云ふには、吾れ君を宿してより、飲食とては蔬菜の外に物もなく、もてなしとては無けれど、君歸らねば、我れ寢所にも入りかねること、君の知らるゝ通りである。御陵を尋ね廻るとて、徹夜にも及ぶまじ。今夜の如く遲く歸らるゝは、道草喰うての事か。老人に物を思はせ給ふは心得がたしと云ふを、蒲生聽いて恐縮し、坐を正して詫びて云ふには、翁の恨みはまことに道理なり。我が非を飾るに似たれど、今夜夜深けたにはいさゝか仔細あり。お笑艸に懺悔せん。實は、今日、某帝陵を尋ねたが、日

の暮るゝまで尋ね當らず。圖らずも金閣寺の北郊、石不動と云ふあたりに迷ひ行き、足利氏十三代の木像を安置すと聞く等持院の境内に入つたが、尊氏の墓を見るに及んで、年來の恨みムラ〳〵と心頭に起り、抑へんとするも能はず。携へ持てる杖もて幾度か墓を鞭ち、我の言ふには、汝逆臣、一旦治つた建武重祚の世を亂し、毒を後世に流して、二百幾十年、干戈治まらず。國の舊典も之の爲に燒け失せ、王室も式微に赴き、帝陵も跡方なきまで頽廢して、吾等迄をも煩はすこと、皆汝が罪である。天罰思ひ知れと、聊か懲罰を加へて、こゝに積年の欝を散じたが、餘憤尚刃如として制しがたく、幸ひ寺の門前に酒店があつたから、酒を貪り飲むで、終に前後不覺となり、醉臥圖らず時を移した失體は、如何にも申譯なし。願はくは吾が愚を一笑あつて、今宵の事は許されたしと云ふを、蘆庵、心よげにカラ〳〵と笑ひ、さる譯なれば甚だ興あり。實は、われとても、年若かりし頃、同じ愚をなしたものである。ある日、東山

に遊び、圖らず木下長嘯の墓を見た時、さすがに宿恨なきにあらねば、之を罵り叱して、われの云ふにも、汝、不滅の罪あり。汝、豐公の外戚ながら、心術、武士に似ず。伏見の籠城に、敵の旗色を見て鬼胎を抱き、鳥居元忠等を棄殺にしたは不義である。こと平ぎて後罪を獲、纔に命の助かつたを幸ひに、恥を知らず、心にもあらぬ世捨て人の顏して似非歌をよみ、歌のしらべを亂して、永く累を後の世まで殘した罪は恕す可からずと、杖をあげて思ふ存分撻つたことがあるが、何ぞ君の今夜成せしこと、相似たるやと、互ひに打語らうて、夜の明くるをも知らなかつたと云ふ。(世に、足利の木像を高山彦九郎が鞭つたと云ひ傳ふるは、多分此の話を聽き違ひたのであらう。)

蘆庵は、享和元年、七十九歳で歿した。

四　平田篤胤

大道講釋

平田篤胤は秋田の人で、通稱大角と名乗り、氣吹舍と號し、本居系の國學を大成した人である。

此人の著述は千卷にも餘り、皇朝の古典は勿論、廣く漢土、印度の典籍を涉獵し、古今未發の說を立て、其名、一時海內に轟いた。併し、篤胤は、幼少より中年位までは、非常の困難と戰つた。第一、家庭に於ては繼母に困められ、家に居ることが出來ずして家を出たが、糊口に苦んで饑餓に迫つたことが一再なくある。其の江戸に出た初めなどは、日雇人足となつて、大八車を押したこともあり、消防夫となつたこともある。その消防隊に入つて彼れの驚いたことは、すべて首領の意に逆らふものは、「ムシ

死」と云うて、撲殺せらるゝが常習であつたので、篤胤も其の慘に感じ、遂に梨園の投じ、其頃名優と云はれた市川團十郎の門に入つた。流石に團十郎は人を見るの明があつて、特に厚く遇したと云ふ。篤胤は、大家になつてから、戯れに淨瑠璃を語り、往々人を驚かしたと云ふが、恐らく梨園に在つた頃の仕込であらう。彼れは斯く苦境に彷徨したが、併し、如何なる境遇に在つても、寸暇を偸むで讀書に耽つた。

彼れは、此の困難時代に、糊口のため賣講を遣つた。これは寄席の樣なもので、大道で葭簾を垂れ、去來常なき通行人を相手に遣つたものである。彼れが、如何に通俗に如何に巧妙に言辭を弄したかは、左に掲げる講釋振に依つても知られる。其の歌道の一席に云く、

さて、伊勢物語を一鎖申しませう。

「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つは元の身にして」是は、心餘りありて、詞

足らずと、貫之主が評をつけられたのは、譏つたのではない。さて、是につけて淨瑠璃ぶしの文句などにも、作者がいかう骨を折つて作るもの故、至極感心して物のあはれを知る場が幾らもある。夫も風雅の趣、物の哀れと云ふことを辨へんで聞くのと、又少しにても知りて聞くのとは、面白味がいかう違ふ。恰も狼と云ふ獸の、こはいものだと云ふことは、誰れも知つて居るけれども、一度嚙附かれた事があれば、格別身にしみ〴〵と怖れをなす樣なものだ。夕霧の文句に、

「昔は遣が迎へに出る、今はやう〳〵……」云云と有つて、伊左衞門、久し振とて尋ねよれば、夕霧は奥の間に、賑やかに騒いで居るを聞いて、さては此の方を落ぶれたと見限りて、他へ心變りしたりとて氣をもみながら、立ちつ居つの獨り言。あゝ、彈くは去年の月見の奥座敷。そこは、限なき夜と共に、飲み明したる大騒ぎ。太夫とわれが連彈で、ひいた時の面白さ。彈く其の主はかはらねど、變つたはお

が身の上。あいつの心底、あの樣にあらふとは、「思はぬ人に留られて、澄まぬ心の中にも暫し、すむはゆかりの月の影……」と唄になる所は、トンと此業平の趣向でござる。

篤胤の賣講は、此の速記のごとき調子で、眞に聽者を醉はしむるの妙がある。彼れが著した幾百種の著書は、皆一種の言文一致體であるが、其の文體は、早く困窮時代の此の賣講に工夫され鍛錬されてゐる。近世學界に講義の名人は、故人に黑川眞賴博士現代に坪内逍遙博士の二人あるが、蓋し、二博士の講義は、範を篤胤に取つたのであらう。

富豪の聟

篤胤も、長く貧困と戰つたが、終に幸運の身となつた。彼れは、ある富豪の聟となり、それよりは、一意著述に身を委ぬることになつた。彼れが大家になり得たのは、

實に此の富豪のお陰である。

藤井高尚と云ふ國學者が、親しく幸運の篤胤を訪うて、箕田水月と云ふ人に、委しく其樣子を語つた、其の筆記樣の手紙が殘つて居る。それに據ると、名は逸してあるが、江戸近在に大福長者があつて、殊の外學問を好み、篤胤の博覽宏才を聞き込み、是非自分の娘を娶はしたいと、仲人を以て其事を申入れ、他事には、一錢たりとも貢ぐこと叶ひ難けれども、學問著述の爲ならば、何程にても仕送りすべしと云はせた。篤胤は妻を失つた後で、貧境に著述をする痛楚をいたく感じて居つた時であつたから、承諾を與へて、右の娘を申受け、それより、勝手向のことは、一切萬端、女の在所より仕送り、家も將棊所の宗桂の舊宅に移り、前日の貧戸とは事變り、玄關も小玄關もあり、書院も座敷もあつて、藤井高尚が訪問して滯在中などは、篤胤著述中とあつて、五日も六日も面會すること叶はず。併し、どの室に主人が居ることか、一向知れぬは

どの大きな家で、下男二人、下女二人の外、書生も居り、時々泊り客も來る大繁昌。高尚、篤胤と對話の折、篤胤の云ふには、俺の借財も、遠からず千兩に達するであらう。千兩に達した時は、一ト仕末を要するなどと云ふを聞き、高尚、心窃に其の大言を嘲り、如何に大きな家に住めばとて、誰が千兩の金を出し與ふるものぞと、信を措かざりしも無理は無かつた。高尚は、此時未だ娘の實家が背後に在つて、金主方となつて居ることを知らなかつたのである。高尚其後、或消息通より、篤胤の住宅は、百兩や二百兩で買へる家でない。それを買つて與へたのは娘の實家である。千兩の借金は愚、二千兩でも、三千兩でも、娘の實家に於て之を出すのは、朝飯前の事であると云はれて、高尚は益〻篤胤の境遇の變化に驚いたと云ふ。

篤胤、幼時、鄕里に在つて、小野崎道貫と竹馬の友であつた。秋田には、木端を削り尖らして、群童互に之を土中に擊ち、他の擊ちたる者を仆して、輸贏を決するの遊

戯がある。之を「ネツキ打」と云ふ。道貫は、いつも篤胤に木端を削り與ふるが常であつたが、ある時、山刀を揮つて削らんとして、誤つて篤胤の指頭を斬つたことがある。それより、世運幾變遷して、篤胤は藩を脱して、江戸に門戸を張り、道貫も又藩の勘定奉行として、江戸に祇役することになつた。藩の制度で、脱藩者と往來することを嚴禁して在つたが、道貫、舊友を思ふの情に堪へず、一日、禁を犯して刺を篤胤に通じた。これが幾十年振りで、篤胤は驚喜迎接、往を語り舊を話し、談「ネツキ」の削損ひのことに及ぶと、今昔の感に打たれ、しばし無言であつたと云ふ。

篤胤は、天保十四年、六十八を以て歿し、鐵胤が其の後を繼いだ。先年歿した醫界の大家青山胤通博士も、一たび平田家の養子になつたこともある。其の名に「胤」の字あるのは、其の記念と見るべきものだ。

五　尾高高雅

吟咏天聞に達す

其身は佐渡に生れながら、若い頃、鄕里を離れて遠國に遊び、遂に他國で歿したため、佐渡でも越後でも餘り事蹟を殘さぬ者で、而も玆に逸す可からざる傑物がある。それは、尾高高雅といふ人で、文化九年六月に、堀口彌左衞門の二男として佐渡相川に生れた。種々の事情から姓を變へて、尾高姓を名乘る樣になつたのであるが、幼時から頗る溫厚な性質で、自然、和歌の道に親しみ、少年にして既に幾多の佳作を示し、知人間に激賞された夙慧の人であつた。そこで、十一歲といふ幼弱の時、早くも擢でられて、佐渡奉行の書記となつた。

處が、此十一の少年は、案外にも頗る鮮かに事務を執るので、之にも時人は目を圓

くして驚き合つた。十五歳の時、親族のうちに、何等かの事件が起つて、其爲に切腹した人があつた。當時の法として介錯をせねばならぬので、尾高の長兄某が其任に當つたが、臆病の爲に介錯が出來ぬ。それを見てゐた此少年が、『然らば私が』と、刀を執つて美事に介錯の役目を仕果せた。其動作がいかにも老成で、少しも怯んだ樣子もなく、萬事節度に適つてゐたので、和歌で感歎され、吏務で激賞された彼れは、更に度胸で周圍の人の舌を捲かせた。

文雅にして而も沈勇、殊に才幹ある彼れは、長じて大に志す所あり。佐渡の小天地は、以て驥足を展ぶるに足らずとしたのかも知れぬが、佐渡奉行の仕を罷め、國を去つて江戸に出で、自ら尾高と姓を改め、當時、和歌の大家、清水濱臣に就いて斯道の研究に努めた結果、忽ち同門中に頭角を現はし、其名大に揚がるに至つた。斯くて、諸大名、殊に彦根の藩主は深く其才を愛し、是非仕へるやうにと、再三の勸めもあつ

たが、彼れは辭して應じなかつた。其後、京都に上つたが、之も歌の道を修めるのが目的で、越後出身中、第一の歌人と稱せられた大江廣海に就いて、益ゝ研鑽を積むことになつた。彼れが京都に在つた時、ふと詠じた一首の歌は、圖らず著しき好評を得たもので、其の歌は、

和歌の浦に身は老づるのいつまでか巣立の雛の音をのみぞなく

といふのであつた。然るに、これが雲上に聞えて、西三條季知卿は、就中口を極めて感賞し、特に左の一首を贈られた。

和歌の浦に千歳を呼ふ田鶴がねは雲井にさへも聞えつるかな

一首の和歌が、畏くも天聽にまで達する程であつたから、飄然、佐渡から出た一書生の彼れは、少くとも京都に於ける歌人の範圍には頗る知られたが、どういふ考へか、天保十三年に、武州川越に移つて居を卜し、手習師匠のやうなことをして、成るべく

其の名を知られぬやう、深く韜晦して閑居した。然るに、それが又思はぬ事で一般士民から敬慕され、而も和歌以外の方面で、偉大な功績を貽すことになつた。

民政を執りて信望を博す

一體、彼れは、甚だ溫厚で、人と爭ふことを好まなかつた。彼れ、川越に閑居中、其近傍に火災があつて、上を下への混雜中、一人の騙局が來て、混雜に乘じ、此家に貸して置いた金があるから、是非返せといふ、無法の言ひ懇りに、家人は、然る覺えがないと言爭うて居る處へ、彼れは出かけて來て、騙局と知りつゝ、爭ひもせず、『何、構はない。それ位の金ならば、持たしてやれ』とて、餘り少からぬ金を、言ふが儘に與へたといふ。かくてある中に、其の底深く包まれた光が、何時とはなしに世の中に知られて、或機會に、彼れは川越の藩主松平侯に用ゐられた。始めは、歌の名人と聞いて、添削を受くべく採用したのであつた。處が、永い間に人物を見ると、決して之

は風流文雅のみの士ではない。慥に見所のある人物だと、侯は早くも看破して、遂に擧げて、彼れを牧民の職に當らしめ、單に一歌人として目されてゐたものが、忽ちにして郡奉行となり、民の訴へを聽くことになつた。人々は、當時、驚異の眼を輝かして、あの溫順一方の人が、果して此の大役に耐へるであらうかと、疑惧や不安や嘲笑の言葉が、到る處に呟かれた。

處が、溫厚なる彼れは、役人になつたとて更に傲慢の態度なく、訴へを斷ずる時の如きも、其時代としては、威丈高に言渡すが通例であつたのに、彼れのみは、全く對等の人と、膝を接して話すが如く、殆ど權柄といふことを知らぬかのやうに懇切を極めた。そこで、其頃の人々は益〻呆れて、苟くも役人が、あの調子ではと、一時、甚だ惡聲を放つものもあつたが、安くんぞ知らん、此態度で深く罪人を制し得て、高聲を揚げない此人の一言一語が、却つて人民を歸服させた。如何なる難事件も、彼れの手

にか、ると、さつさと圓滿に解決して行くのを見ては、嘲罵や危惧の聲は、やがて信望の念に變つてしまひ、大に其眞價を發揚するやうになつた。

又其頃の風として、牧民の官などに在るものへは、賄賂であるとか、さなくとも、盆暮には贈物をすることが例であつた。然るに、彼れは、斷乎として之を受けぬので、時人は稱して『今度の御奉行樣は、買ひ物が御嫌ひだ』といひ、此の評判が擴がつて、爾來、役人に金品を贈る弊風も熄んだので、郡民大に喜んだといふ。

維新の堺目には、彼れの地位も益〻進んで、權少參事となり、川越の藩政にも與つた。一體、彼れは、大いに謙德ある人で、功があつても、人に推すといふ氣質であつた。で一般の士民、擧げて、之を敬した結果、藩政も大に改まつて、今日、猶彼れの事を、川越地方では德として景仰してゐる。

財政難を救ふ

更に、其の才幹と思はる、一話がある。川越藩も、他藩と同樣、維新當時には、甚だしい財政難に襲はれて、止むなく政府から借金しようと試みたが、聽かれぬので、愈〻窮した。併し、如何に困つても、藩の恥辱を他には曝したくないので、出來るだけ藩内で始末したいと、彼れは百方苦心した。斯くて、一日、土地の富豪某々六七人を自邸に招き、酒肴を供して此話を持出して見る、一策を案じた。處が、當時、役人側から斯ることをやる時は、必ず御用金の談判ときまつて居たので、招かれた五六の徒は大いに警戒して、『又しても御用金か。招かれた上は行かずには居られぬが、好い加減なところで逃げねばならぬ』と、内々相戒めて、當日、彼れの邸へ出かけた。

さて此の注意深い連中に對して、彼れは果して如何なる方策を用ゐたであらうか。

尾高は、例の如く、謙讓の態度で迎接し、酒酣に至るも、少しも話は其事に觸れず、悠然として面白く語つてゐる。はて訝しいなと、連中は心窃に怪しんでゐたが、

ホンの極僅かの間に、尾高は、ふと座を立つて、最上席に居た一客を、『一寸』と言ひつゝ、別室へ伴ひ去つた。一同は、「さてこそ」と心配してゐると、忽ち三分か五分の間に其話は終つたらしく、同時に手を叩く音が聞えて、間もなく兩人とも席に復した。樣子を見ると、孰れも快然たる面持で、特に其別室に伴はれた客は、一同に向ひ、『どうぞ諸君、尾高樣の仰せらるゝことに御同意下さい。私は、實に御話を聞いたばかりで、落涙して感じました。御話の筋は、藩政の爲に金を出すことであるが、之を出さねば相濟まぬ』と、打つて變つた感心ぶりで、一同、此豹變の態度に、覺えず不審の眉を寄せた。

且つ其人は、感激した調子で、『諸君が應ぜずとも、私は明朝金を持參する』とまで言ひ出した。先刻別室から手を打つ音の聞えたのは、卽ち其人が承諾の意志を表示したものと分つたが、兎に角其人に動かされて、最初は「出すまい」と誓つて來た連中も、

尾高の持出す話を聞かうといふ氣になり、さて聞いて見ると、其說きかたの巧妙、といふよりも誠實な點に感動し、遂に招待客、一人も漏れなく之に應じて、豫期の如く相當の金が出來、藩の財政は、爲に立派に整理し得た。斯る工合で、所謂金の募集に就いても、彼れは不思議なる手腕を藏したと傳へられる。併し、それも、常に士民の信服を得てゐたのが、其素を成したものと見える。

明治初年には、權典事といふ職に擧げられ、老境に入つたので職を辭し、一切世事に交涉せず、

何事もいはじ語らじ口無しの花のむひらのむつかしの世や

の一首を殘して隱退し、爾後、家の號を梔園として、專ら和歌の道に親しみ、明治廿年六月、七十六の高齡で歿した。此人の謙遜家たる一例としては、曾て頗る紛糾した水論を治めたことがある。何でも餘程困難な問題であつたが、彼れ自ら進んで、係

爭の兩村を說諭すると、双方、大に感動して忽ち和合し、記念の爲に幟を書いてくれといふ賴みを受けた。彼れ固より能書家であるが、例の謙遜で容易に應ぜぬ。再三懇請せられて、漸く書いた。其文字は今解らぬが、凡べて水に因緣ある字を選んで、再び水論を繰返す勿れ、といふ意味を寓して、淋漓たる墨痕を留めたといふ。歌は幾千となくあるが、門人が其出版を望んで、草稿を乞うても承諾しない。それを、頻りに求めると、一旦は其の稿を示したが、是非今一度校閲したいといふ口實で取戻した儘、遂に再び與へなかつた程、飽迄謙抑な人であつた。畫は狩野風の筆を揮ひ、其他茶道でも、花道でも、殆ど達せぬといふことなく、と思ふと、又方角違ひの武術に於ても、亦頗る秀でてゐた。蓋し獲易からざる隱れたる傑物と評してよからう。

六　閑叟と穀堂

穀堂の忠勤

前卷に話した古賀精里は、佐賀の鍋島侯に仕へた儒者として傑出した人であつたが、初め幕府から昇平黌に教鞭を執るやうにといふ內意に接し、心中之に應じたがつたが、元來九州の藩風は頗る頑固で、藩外に去つて働くものなどは、動もすれば、不忠の譏りを受けたものだ。依つて精里も、藩主に向つて己れの進退を問うた處、『それは汝の隨意で宜しい』とのことに、そこで意を決して、大都に其才を顯はすべく、勃々たる雄心を蓄へて上京し、遂に豫期の如く學界に覇を唱へた。併し、其頃の藩風は、精里の此擧を決して快く見てゐなかつた。寧ろ彼れに比しては、二流三流の草場珮川などが、鄕土に於ては持てゝゐた。

併し、精里は、藩を去る時、其息穀堂(長子侗庵の弟)を藩に殘して置いたので、此穀堂が父に代つて其役目を擔當した。此人著しい忠勤家で、殆ど藩の爲に其全身を捧げ盡した。卽ち維新の人傑なる閑叟侯を護り立てた人で、單に外から、詩文の師範をしただけで無く、內に於ては、政治顧問にもなつて、藩政改革も、此人によつて成されたと言はれてゐる。彼れは、一面、侗庵にも讓らぬ學者であると共に、一面、立派な政治家であつた。閑叟をして維新の當時第一流の人物たらしめたのは、閑叟自らの素質天稟にも由るであらうが、穀堂の薫陶助言が貢獻した所も頗る大であつた。

其頃閑叟は十七歲位であつたが、既に偉かつた證據には、當時穀堂に贈つた長篇の詩がある。それは穀堂を讃美したものだが、十七八の子供上りとは思はれない佳作である。否、單に詩文に長けたのみならず、彼れは日本に例の無かつたことまでやつた。元來其の師の穀堂が王陽明學者だから、閑叟も其教へを受けて、此學派の流れを汲ん

だ。さうして飽迄學んだ所を實踐ぜんとし、又現に實行したもので、今の所謂社會主義的なことを、率先して自分の領內に行つた。

蓋し閑叟は王道論を實行せんとしたもので、之を領內に徹底さすべく、先づ自ら綿服を着ける。粗食をする。驕奢悠遊の他の諸侯とは全く別で、閨閤を謹んで、妾などは一切置かない。更に料理店、芝居、相撲、遊廓などを嚴禁したので、中には、苦し紛れに領外の隣國まで出掛けて遊ぶ士民もあつたが、之すら嚴重に處罰した。閑叟は、又親の代から幾つもあつた別莊を、一般の爲に開放した。或は自分で馬に鞭ち、領內を巡回して、直接百姓の訴へを聽く。これは其土地の役人に酷く恐慌を來したもので、隱してゐた罪などが、續々と尾を出して來る。斯くして領內のことは、殿樣がよく知つてゐるのだから、風紀は大に改まつて來た。

そこで、閑叟は更に改革の歩を進めて、愈〻今の社會主義と同じやうな政策施設に

手を着け始めた。

閑叟の新政策

閑叟が試みた新しい政策は、領内の大地主に向つて、五町歩以上の小作料は、向う十年間、予にくれたものと思つて、決して取るなといふ命令であつた。之には大地主連いづれも甚だ苦しがつたが、何分殿様の仰せと言ひ、一つは十年間といふ期限もあり、まア十年だけ辛抱するの外はないと、神妙に其命を奉じて實行したのである。然るに、十年經過すると、更に又向う十年間實行せよといふことで、之が三たび繰返された。さうして丁度其時に、大政維新の新舞臺が開けて來た。

形式主義と階級觀念が、十重二十重に時代人心を取り圍んでゐた其當時に、而も大藩の君侯が、身自ら斯る勇斷決行に出で、或は風紀を矯め、或は經濟の基礎を定めて、非常に窮迫してゐた佐賀藩も、此殿様によつて、幕府からの負債も悉く償つた上に、

更に餘財を生じたのは、洵に名君といはねばならぬ。殊に其生じた餘財は、之を維新前天下の風雲大いに動くの時に於て、開國進取を促すに最も大切な西洋の種々な物を輸入することに費した。就中軍器の輸入は、其主なるものであつたが、それよりも寧ろ無形的な海外知識を取り入れたのは、實に貴い働きであつた。

斯る次第で、維新前に在つては、佐賀が全國第一に開けてゐた。隨つて明治となる境目には、凡べて有爲な青年を託する所は佐賀だといふのが輿論であつた。岩倉、三條、木戸などの人々も、皆佐賀を推賞し、殊に岩倉公などは、其子弟を學ばしめるに何處がよからうと考へた末、佐賀こそ風儀はよく、人物は多く、我子を益する所だといふので、遂に佐賀へ遣つたといふ話もある。維新の當時は、諸侯のうちに、容堂、春嶽、閑叟と、孰れも著しく頭角を抜いたが、而も閑叟が一般から第一に尊敬されたものだといふ。

けれども、深く考へると、閑叟が爾く偉かつたのは、其參謀に古賀穀堂が在つたからである。尤も此人は、閑叟と餘程年齡も違ひ、殊に比較的若く死んだ。それは閑叟の十七八歳位の時であつたらしいが、其感化は、深く閑叟の人格志操を養はしめたに相違ない。穀堂の病むや、閑叟は、師傅の恩に感ずる餘り、親しく其邸に病を問ふこと屢々であつたが、歿するに及んで、葬式萬端、君侯自ら取扱ひ、且つ別邸の地を割いて、其處に墓を建てた。之は實に當時に在つて異數のことで、臣下に對して斯樣な例は殆ど無い位であるが、之を以ても、穀堂の力が、いかに強く閑叟を動かして居たかが想像されると共に、其父精里が佐賀藩を去つたことに、假りに罪ありとしたところで、それは其子穀堂によつて、償はれて尙餘りありといはねばならぬ。

七　谷文晁

斯界の巨匠　田安家との因緣

谷文晁は、狩野探幽以後の畫界の大立物で、且つ畫學の大問屋であつた。彼れは八宗兼學とも云ふべく、狩野派から出て、土佐をも學び、宋元あたりの支那畫にも涉つたのみならず、洋風の畫も試みた。畫の種類に至つては、山水よし、人物よし、花鳥よし、何でも能くした。而して彼れが門下から多くの大家の輩出したことは、其の門人錄を見て一驚を喫する位である。卽ち抱一、武清、椿年、雲峰などは言ふに及ばず、崋山や竹田や靄厓や竹谷なども、皆其門人だ。

彼れは氣廣の性質で、一流一派に偏することを好まず、所謂何でも來い主義で、大風呂敷を擴げた。その子弟の內には、土佐派を學んだものも居る。彼れの弟元旦は、

時に洋風の畫を試み、文晁自身も、樂翁公に隨從して、豆相を遍歷して圖した其の風景帖は、洋式の筆を弄して居る。彼れは斯く多方面なるが上に、多くの子弟門人を有し、妻の幹々まで、畫を以て持囃され、江戸繁榮時代、社會の上下を擧けて、文晁の畫を持たぬことを恥辱とした位であるから、彼れの家は、常に依賴人を以て滿ち、玄關前は、繁昌の醫師の如く、毎日雜沓を極めた。文晁は、中年まで、酒を飲まなかつたが、その以後は豪酒となつて、家は、毎日、書畫會でもあるかの如く、甲乙丙丁の諸室、皆別々に宴を張り、文晁は、其の中に坐して客に接しつゝ、或ひは談じ、或ひは飲み、或ひは筆を把つた。當時、文晁の名を刻した筆墨が盛んに行はれ、毎日、筆墨商は、文晁宅に出張して之を賣り、文蝶(蝶は畫して)の銘ある酒は、新川に販賣され、柳橋の藝妓は、月幾度の會に、必ず文晁方に來りて酒興を助け、文晁は、宛然畫界の大成金であつた。當時、各諸侯は、爭うて文晁に畫を需めた。殊に正月には、

祝幅に富士の圖を掲げるのが例であつたから、歳晩になると、富士を描くに文晁は如何に多忙であつたか。今日存する富士の幅の、幾百を以て數ふるを見ても、推し得られる。勿論、門下には下職も澤山居つたであらう。百千の幅、皆文晁自身の筆でもあるまいが、併し、彼れは全く精悍の人で、多々益々辦じた樣である。彼れが畫した幾千の圖を控へた、半紙二つ折の册子が、夥しく存して居るに徵しても、其の多作は、眞に空前の觀がある。彼れは、田安侯の家臣であるから、或る時代には隔日出仕し、歸宅後、深更まで筆を執つたと云ふ。彼れは、なか〳〵の勉强家であつた。

彼れは、又田安家から出たる樂翁公に寵せられ、「集古十種」を作るに與つたのみならず、公又文晁に就いて畫を學ばれた。文晁は斯く田安家に大なる關係がある。全體文晁の祖先は江州の人であるが、文晁の祖父猶右衞門と云ふが、田園經濟に通達し、其の著した「田園類說」其他二三の書は、當時代官の金科玉條として重んぜられ、田安

家の財政を整理する時に、幕府は特に猶右衛門を推薦して、其の衝に當らしめたので、美事紛亂せる財政を整理し、立派なものとなつた。田安家では、之がため大いに猶右衛門を徳とした者だ。此猶右衛門の子乃ち文晁の父は、麓谷と號して、詩文に名聲があつた。文晁は、斯樣な血統を受けて生れたものであるから、凡庸畫家と違つて、大なる氣宇のあるは偶然でない。文晁は、畫に於て一代の巨擘となるだけの能もあつたに違ひないが、田安家とは深い因縁のある所から、樂翁公も一層寵用され、それで頭角を擡げたのであることも爭はれぬ。

文晁は、天保十一年十二月、七十八歳で歿したが、其辭世の歌は、

長き世を化けおほせたる古狸尾先な見せそ山の端の月

どこまでも灑々落々である。

八　曾我蕭白

揮毫の神速　渠の美人畫

曾我蕭白は、名を輝一と云ひ、蛇足軒、鬼神齋などの號がある。雪舟風の畫を學むで、一家の機軸を出し、筆力の强健は、時人を驚倒した。

蕭白と時代を同じうして且つ互に交つた森島長志（伊勢の人、中井竹山の門人）が、其の隨筆に書いて居るのを見ると、此の人の性格が解る。蕭白、伊勢に漫遊の時、長志は家に招き、屏風を出して畫を請うた。蕭白、早速に承諾し、寒山拾得を書くべしと云うて、人物の足より筆を着け始め、逆さまに上に及び、終に面部に至つて美事出來上がつた。揮毫は如何にも神速で、幾ど思ひを構へざるごとくであつたと云ふ。又京都の東山のある會に臨んだ折、席上、某畫家が人物を畫いて、腰邊に及ぶと行き詰

り、沈思工夫の態なるを、蕭白、後に立つて見て居り、もどかしがつて、突如背後より現れ、沈思の畫師を脇へ推し除け、己が頭上に戴ける頭巾を硯に押し込み、たつぷり墨を含ませて、さァ御覽なさいと言ひさま、縱横に塗抹して腰下を畫きたるには、一座、不敵の振舞に一驚を喫した。蕭白は、大雅と畫の流派を異にしたが、懇親の間柄であつた。ある時、蕭白、大雅が苦心して筆を下す樣を見て、其の遲筆を笑ひ、さてさて無調法なる畫法かなと云うた逸話も殘つて居る。又ある時、本願寺の門主、使僧を蕭白の許に遣はして畫を請はしめた時に、使僧の言辭が無禮であつたので、蕭白其使を逐ひ歸したこともある。又某諸侯、蕭白の畫の禮にとて僅の金を贈つたのを、蕭白、無禮なりと云うて、突還した事もある。さうかと思ふと、姫路侯が蕭白の畫を視て感賞されたのをひどく喜び、わざ〳〵一大快畫を作つて之を獻じ、謝したことも

ある。

蕭白は、豪放跌宕、羈束す可からざる性格で、其の畫く所も往々奇矯に過ぎ、例へば、人物を畫いても、ともすると、妖怪のごときものが出來る。現に大隈家に藏する大幅のごときは、其の一例である。全體、此人の畫は、抵ね剛健奇峭であるが、こゝに意外なるは、京都の鳩居堂に、此人の畫いた美人の立像が一幅藏されて居る。これは衣裳に彩色まで施したもので、顏も優しく、眉目其他美人らしく出來て居る。併し、よく〳〵見ると、美人の足下に蘭が描かれて居る。これだけが蕭白式とでも云ふべきであらう。蕭白は、性酒を嗜み、酣醉、前後を知らぬ樣になるのが常であつた。其の伊勢に遊んだ頃などは、醉後、籃輿に後向きに乘つて、三味線を彈きながら市中を通行したと、森鳥長志は記して居る。併し、斯樣な粗豪の所もあるが、傑作を作らんと氣構へては、思構を練るに一心不亂であつたと傳へられる。乃ち某家に宿して、一大畫の揮毫を賴まれた時などは、畫室と定められた一室に閉ぢ籠り、決して人を室内に

入れてはならぬと固く制し、三度の飲食は、窓より差入れしめ、斯くして數日を經ても出て來なかつた。然るに、ある日、室内に物音が聞えるので、何事かと、そつと覗いて見ると、蕭白、筆を揚げて、紙を前に置き、起つたり坐つたりして、何かしきりに獨語して居るので、戸外より、先生何をして御座ると云ふと、蕭白怫然として怒り、汝は吾を妨げる者と云うて、抜刀で其者を逐ひかけたことがある。彼れが、時に如何に精神を凝らすかは、この逸事で推することが出來る。

蕭白は、應擧の畫を蔑視し、常に云ふには、畫を望む人は自分方へお出、圖をお好みの方は圓山へお出なさいと云うた。

九　久隅守景

師の畫に惡戯　加賀へ放浪

狩野探幽の門下より傑れた大家を出した。それは久隅守景である。恰も雪舟の門下より秋月を出したと同じ樣だと、昔から藝苑の評判となつて居る。探幽も、守景の畫には、つくづく感服したと傳へられる。或る時、狩野尙信に向つて探幽の云ふには、後世、恐らく俺の拙畫を守景の筆となすであらうと云ふと、尙信の云ふには、否、後世、守景の巧畫を師の筆とするであらうと、逆に取つて褒めたと云ふ話が殘つて居る。守景の畫は出藍と認められたことが、此の一小話に依つても窺はれる。

守景は、天才であつただけ、羈束す可からざる所があつて、探幽を師とはしたが、狩野家の繩墨を守ることを屑しとしなかつた。云ふ迄もなく、狩野家は、長い間、

畫苑の柄を握つて居つた爲に、人物を書くにも、山水を畫くにも、ちやんと典型があつて、一木一石、一線一點と雖も、その典型を脱することを許さなかつた。狩野家が後世、畫の精神を失つて墮落したのも、實は此故である。守景の如き天才が、此の窮屈なる桎梏の下に居らるゝもので無い。彼れが往々狩野派の典型を蹴破つて、一家の筆を弄し、爲に師の叱責を受けたことは、一再ならずある。併し、今日、守景の畫が一般に尊敬を受ける所以は、寧ろ狩野派の典型に拘らず、縱横其の天才を發揮した所にあるは勿論である。一説に、守景は師の破門を受けたとある。或は然らんとも思はれる。古く畫苑に傳はつて居る一談柄に、探幽、或る時、某諸侯の需めに應じ、三幅の畫を畫き、試みに畫室に掲げて、使の來るを待つて居ると、守景、酒氣を帶びて外より歸り來り、偶〻師の不在に乘じ、三幅の畫を見て、何と思うてか、忽ち筆を執り、山水の間に怪しからんものを書き添へた。それは、人間に擬したる陽物が、大小相連

つて行列を爲すの圖で、折角成つた師の畫は、此の惡戯のため、さんぐ汚された。守景は、筆を投ずると共に、畫側に醉臥し、鼾聲、雷の如くである。師、歸宅後之を觀て愕然たる處へ、折惡しく侯より、畫を請取りの使が來た。探幽も、已むなく、包み隱さず右の次第を語つて謝罪をした。侯は、かねて守景のことを承知されて居り、是非其畫を見たいと所望され、探幽、已むなく、それを差出すと、侯は、此の加筆は却つて一興を添へたと賞され、終に侯の珍藏となつたと云ふ。守景が豪放不羈の面目は、此の逸話によつてよく發揮されて居る。此の惡戯は、醉興の沙汰ではなく、或は師の畫に内々服さない所があつての皮肉であつたかも知れぬ。探幽は、其才を惜みながら、斯樣な亂暴人を門下に留得なかつたであらう。破門か否かは確とせぬが、彼れが加賀に赴いたのは、其後である。彼れは身を寄せるに處なく、加賀の九谷窯の陶家に傭はれ、陶器に畫を書いて糊口したこともある。此の時代の九谷燒に、ともすると

名畫のあるのは、守景筆と稱されて居る。彼れは、加賀に在ること、三年の長きに及んだが、前田侯よりは何の沙汰も無かつたので、これほどの大才を侯の閑却さるゝは不審であると、或る藩臣、侯に云云すると、侯の言はるゝには、それを思はぬ譯では無い。併し、彼れは不羈の拗物である。衣食に窮すればこそ、色々の物を書きもする。扶持など與へれば、恐らく筆を執るまじ。彼れを窮地に措くは、乃ち彼れの畫を領内に多からしむる所以であると謂はれたと云ふ。

守景は京都の人で、通稱半兵衛。無下齋、或は無礙齋と號した。元祿年間の人である。

一〇 松尾芭蕉

君侯の侍女と翁の遁世

芭蕉翁遁世の動機に就いて、種々の說がある。某書に載せたる說は、いくらか艶氣が籠つて居る。翁、壯年の頃、藤堂侯に仕へ、近侍を勤めたが、觀櫻の會に陪した折、袴を綻ばしたので、それを繕はんとして君前を退き、納戸の方へ行くと、偶〻翁の親戚にあたる、侯の侍女が居つて、繕つて上げんといふに任せ、袴を脫ぎ、その繕ひを待つて居る所へ、朋輩の者不圖來り、かねて評判の美人が針仕事をなし居る傍らに翁が着流しで居るのを見て、嫉妬半分、これは怪しからんと、燒持連中の間を觸廻り、終に此事、君侯の耳に入つた。君侯は寬容の人で、殊に翁を寵して居られたから、糺問することを爲さず、侍女には暇を出され、暗に翁に嫁せよかしと、粹を利かせられ

たるを、侍女は覺らず、意外の濡衣を着て、暇さへ出されたるを不面目とし、遂に水に投じて果敢なき最後を遂げた。翁はこれを聞いて、吾ゆゑに氣の毒なこと、深く悲み、無常の感に打たれて、爰に遁世の心動き、勤を辭して、一生、俳諧行脚の人となつた。其後、ある歳、久方振りに侯に謁した時、恰も庭前の櫻爛漫と咲き亂れて居るのを觀て、懷舊の感禁じがたく、

さまゞの事思ひ出せり櫻哉

と詠じたとある。

翁は、姓松尾、名宗房、幼名金作、後甚七郎と改め、芭蕉、桃青、風蘿坊等の號がある。元祿七年、五十三歳で世を去つた。

因に云ふ。世に芭蕉の像がいろゝある中に、溫藉、敦厚、毫も圭角なく、如何にも俳諧宗匠と云ふ風貌のと、反對に、一癖ある武張つた風采のとがある。後者が翁の

眞の肖像であることは、翁の歿後、間もなく寫した畫像に證して明白である。翁は武弁の人であるから、いくら風流に落ちても、風貌まで好々翁である筈はない。

一一　山崎宗鑑

それにつけても金のほしさよ

山崎宗鑑は、足利時代の著名な連歌師である。もと近江の人で、支那を氏とし、名を範光、通稱彌三郎と云うた。一たびは足利將軍に仕へたが、後に薙髪して、例の山崎合戰で世に隱れの無い山崎村に庵を構へてから、山崎宗鑑と名乘つた。彼れ、此庵に居る頃は、竹筒に油を入れて、毎日賣歩き、些しばかりの價に換へて口を糊した。庵には、唯古樂鑵一つあるのみで、他に何も無かつたと傳へられる。併し、彼れの連

歌は絶妙と謂はれ、庵に訪ひ來るものも少からずあつた。彼れが來客に對する定めがある。それは、上客は、直ちに歸れ。中客は、一日にして歸れ。下客は、一泊してもよしと云ふので、庵の入口に之を標榜したとある。

宗鑑、ある公家に召された折、公家は得意顔に、此頃、如何なる上の句にも付く下の句を工夫したと云うて「といふ歌は昔なりけり」は、どうだと言はるゝを、宗鑑笑つて、あなたがたの境遇から工夫すれば、そんな句も出ませうが、下々の方では、夫よりも「それにつけても金の欲しさよ」と云ふ、下の句こそ、如何なる上の句をも承けて、却つて味ひがあると答へた。又ある人、宗鑑を困らせんと難句を工夫し「尻尾を傳ふしづくだく〳〵」といふに、付句をと求めた。宗鑑、言下に「水鳥の尾羽根の氷今朝とけて」と付け、俗臭紛々たる上の句を、忽ちに美化せしめた。又其人、更に一難題を持出し「切りたくもあり切りたくもなし」と云ふに、上の句を付けてと求め

たるに、宗鑑苦もなく「盗人を捕へて見れば我子なり」、「さやかなる月をかくせし花の枝」、「心よき窓やのすこし長きをば」と三句を連發し、其の人を驚かしたこともある。

宗鑑は、讃岐に遊び、彈琴山下に一庵を構へ、一夜庵と名づけた時代もある。その遺址は、今寺院となつてゐる。八十九歳の高齢で、天文二十二年に歿した。

一二　細川幽齋

風流武將

織豐時代の武將で、風流の奇才と謂はれたものは細川幽齋である。幽齋は、和歌に造詣が深かつたは勿論、料理に於ては、空前の達人と呼ばれ、千利休のごときも、特

に請うて、鶴の庖丁の手前を一覽した位である。勿論、幽齋は、茶道にも名人と云はれた。

此人、滑稽諧謔の才があつて、豐公は、しば〳〵幽齋を困らせんと、いろ〳〵の難題を出されても、嘗て困つたことが無いので、流石の豐公も舌を捲き、幽齋には叶はぬと、匕を投げられた。「視聽艸」と云ふ書に、幽齋の狂歌が多く載つて居る。ある時豐公、難題を以て困らせんと、「寄橋摺小木」と云ふ題を出された。幽齋、苦もなく、

宇治川の橋の柱のしけゝればすりこき通るまきの柴船

と遣つた。豐公又一難題を案じ「あやうき上のあやうきを見る」と云ふ句に付けよと命ぜられた時、

一つ橋渡る座頭の子をだきて

と付けたので、豐公も流石に感賞され、幽齋は歌神であると激賞された。

ある時、三齋(忠興)と共に烏丸家を訪はれた。其席上に菊亭も居られ、細川が二人居ることに氣がつき、「細川二つちよつと出にけり」と云はれた。幽齋、取り敢へず、

御所車通りし跡に時雨して

と付けられたので、一座何れも其の當意卽妙に感じた。幽齋辭し去らるゝ時、烏丸殿玄關まで送り、秘に家來に言ひつけ、幽齋の玄關に出らるゝ機に、背後より突き轉ばさせて、幽齋のまごつく其の刹那に、烏丸殿、一首をと望まれた。其際も直ちに、

こんとつくころりところぶ幽齋がいつの間よりか歌をよむべき

と口吟まれた。或る時、幽齋、三齋を伴うて旅行中、阿倍川を渡る砌に、屁を放られた。三齋戲れて、

流るゝ水の邊くさかりけり

と口吟まるゝを、幽齋、

川上にぬれたる石のひるやらん

と、奇想天來の付句をされたこともある。

又ある諸侯、幽齋の才を試みんと、一首の内、卽座に「ひ」の字十を入れて詠まれよと望まれた時、無雜作に、

日の木の肥後の火川の火うち石ひびにひとふたひろふひとびと

と詠まれ、更に「木」を十種詠みてと望まれ、

かならずとちぎりしきみがきまさぬはしひとまつよのすぎゆくはうし（楢、橡、桐、櫟、柿、椎、松、杉、柚、桑）

一首の戀歌に、巧に詠み込まれた腕前、流石にと驚かれた。

又ある時、族中、明石の浦に船にて通りかゝり、人丸の社に參詣せんと上陸され、社殿に行かるゝと、大勢の村人寄り合つて、歌をよみつゝあつた。大勢は、幽齋公と

も知らず、あなたも一首手向けられよと望むを、幽齋、わざと、われは歌よむことを知らずと辭された。多勢の連中、此武士を一つなぶつて遣らんと、强ひて請ふを、幽齋、然らば一首仕らんが、惡筆なれば、代筆されよと云うて、

ほのゞ〳〵と明石の浦のあさぎりと

と口吟まれたのを、一同笑を催し、中には嘲弄するものもあつた。筆者は笑を忍んで、それだけでは歌にならぬ。あとは如何にと催促するを、幽齋、そつと書いたものを見ると、最後の「と」の字が、脫けてゐるから、「と」の字を、終りに書いてと賴まれた。そこで、愈〻妙な歌だなどと笑ふ者もあつたが、幽齋「と」の字の書添へられたのを見すまし、

よみし翁もこの苔の下

と口吟まれ、直ちに去つて、船に上られた。皆々、何者ならんと跡をつけて見れば、

幽齋公であつたので、一同、赤面して恥ぢた。

一三　烏丸光廣

公家の變種

烏丸光廣は、門地の高い搢紳家に生れ、和歌を善くし、書に巧で、高名の人であるが、公家には稀な曠達の性格を有つて居た。

後水尾法皇、或る時、高樓より公家の屋敷を御覽になると、何れも大破に及んで凹る中にも、光廣の第宅が尤もみすぼらしく哀に見えたので、所司代の板倉重宗を召され、修繕して遣れと仰せられた。重宗畏まり、光廣に思召を告げ、修繕の間、何れへか移られよと云ふと、光廣辭して云ふには、如何にも、自分の屋敷は雨が漏る。併し、

東の室に雨が漏れば西の室に避け、西の室に雨が漏れば又他の室へ移るから、修繕などに及ばぬと云ふ。重宗も強ひかねて居ると、法皇より、どうなつたとお尋ねがあつたので、爾々と申上げると、あの男は一風變つて居る。本人に拘らず、是非修繕を加へよと、重ねての命に、重宗は、強制執行で光廣を外へ移し、やつと修繕をしたと云ふ。

光廣は、法皇の仰せの如く、珍しい變り者で、物に拘ちぬこと、尋常でなかつた。平牛使つて居る硯匣は、扇子の明箱を間に合はせに用ゐ、御歌の會などあつて參内する時も、之を携帶した。曾て江戸へ出て、三年程經て京都へ歸つて見ると、庭にあつた倉庫が、取拂はれてゐる。家臣を呼んで、庫はどうしたと問ふと、久しく江戸の廣い屋敷にお住きひになつた主君、定めて京都のお屋敷を手狹に思召すだらうと、家臣共相談の上、取崩したといふ。光廣云はるゝに、それはよい事をした。そこで庫の中の

拜領の品などは、どうしたと問はれ、それは、家臣共皆々頒けて、頂戴致しましたと云ふと、公は、それはよく取計らつた。して貴樣は何か分配を受けたかと問はれ、手前は、一物も頂戴致しませぬと聞き、公はカラ〳〵と笑ひ、貴樣は案外馬鹿な奴と云はれ、倉庫を失ひ、寶物を無くして平氣であつた。

江戸土産の都々逸

公、江戸より歸られた時、いろ〳〵の友人集まり、定めし道中に詠まれた秀歌が多からう。承はりたいと云ふを、光廣、自詠にはお目にかける程のものはないが、爰に感服した名吟があると示された、其歌は、意外にも俗歌で、大宮人の齒牙にもかけぬ者であつた。

宮は朝舟、四日市どまり、關の地藏は直ぐ通り

光廣の云ふには、これは卑しい歌ながら、如何にも感じ入る戀歌で、折角、關に泊つ

て、戀人（そのかみは、宿場毎に賣女などは無かつた、こゝに「地藏」と云ふは賣女の事）に會はんと期したのが、宮（伊勢）からの朝舟が出て、番狂はせとなり、關を素通りすることとなつたのを恨んだ歌で、言外の情は、をさ〳〵歌作の意にも遜ひ、なかなか己れの及ぶ所でないと說き聞かせたので、一同も、初めて成るほどと感服した。

光廣は、流石に活きた歌を解する人であつた。

光廣は、光悅に書を學び、別に機軸を出し、當時、書道で名聲があつたが、例の氣質で減多に揮毫しなかつた。ある好事家、その筆蹟を得たいと、いろ〳〵苦心したが獲られないので、島原の某樓の妓が光廣と親昵であると聽き、それに賴むだ。妓は一策を案じ、盆梅に和歌を添へて光廣に贈つた。其歌に、

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

必ず返歌を書いて寄越すだらう、と期した妓の胸算は外れ、光廣は、一二の字を加除

して返歌とした。乃ち「誰にか見せむ」の「に」を削り、「か」の下に「は」の字を加へ、それを文箱に入れて戻したので、好事家も失望した。

光廣は、何故か、非常の入浴嫌ひで、強ひて勸めると、泣き出したと云ふ。寛永十五年、六十歳で薨じた。

一四　近衛家熙

名物家の大名物

近衛家は優れた文藝の人が多く出た家である。三藐院と云はれた信尹は、書に於て本阿彌光悦等と三筆と謂はれた程の能書であり、信尹を繼いだ信尋は應山と號し、これ亦能書を以て聞こえた。此等二公は、天正慶長の昔に於て早く文名を博したが、

近衛家で文藝を大成した人は、豫樂院と謚された家熙であらう。

家熙は太政大臣關白基熙の子で、此人自身も攝政關白となり、太政大臣にまで進んだが、性多藝多能で、書畫和歌茶道は勿論、學は和漢を兼ね、凡そ文藝に屬するものは、何一つとして窮めないものはなく、其の遺された墨蹟や著書は、皆後世の軌範とするに足るものである。全體近衛家は我が華胄界の一大名物であるが、家熙公は、此の名物家の大名物である。

公が如何に他方面に渉つて文藝趣味があり、又此等の造詣が如何に深かつたかを徵するに、幸ひに「槐記」と云ふ一書が存してゐる。これは、山科道安と云ふ法眼が、幾ど毎日關白家へ伺候するを例とし、其都度公から、古今人物の評、有職故實、茶の事、香の事、花の事、書畫骨董の事などに就いて、公より承はつた談話を、其の儘歸宅後書き記した一種の隨筆であるが、之を見ると、何人も公が如何なることにかけても

深い知識を有せられ、當時何人も遠く及ばぬ高い識見があつたことを會得する。此の十册程の筆記は、今日に於ても趣味界の顧問として珍重され尊敬されてゐるのは決して偶然でない。

原來近衞家のごとき歴史的の名門には、何によらず、其家に傳はつて居る些細の談柄でも、修史の好資料となり、或は文藝の手本となるものが自然にあるものだ。例へば豐太閤などに就いても、近衞家で無ければ知れぬ軼事がある。或時豐公、狩に出掛けた歸途、御所の南門の前を通過した。聖上も之を御覽になりたしと思召され、わざと南門を開き、三貌院も供奉で、豐公の行列をみそなはした。豐公の例の派手好、此時は一段と華美な工夫があつて、先づ鶴百羽を青竹に結び付けたものが二列、雁二百羽を同じく青竹に結び付けた一隊がそれに從ひ、家康始め諸豪は、何れも鷹を手に据ゑて騎馬で通る。そのあとに豐太閤、唐冠に唐服の扮裝で、朝鮮の輿に打乘り、手には

鳴を据ゑて徐かに通行すると云ふ順序で、如何にも芝居がかつて居た。此日は天覽にまでなることであるから、殿上人も、公然通路に毛氈を敷き、酒盛などして見物するもあつたが、例の灑落の豐公、その酒盛しつゝある前を通過の折、輿をとゞめて、我れにも一杯と望まれ、殿上人より酒を侑めると、豐公、手にしたる鴟の首を取るよと見えたが、中から肴を取り出して、手づかみでムシャ〳〵と喰はれたので、何れも鴟と見えたのが器物であつたことを覺り、どつと笑つたと云ふ。此事實は、三貌院自身、當日目のあたり見られたまゝの記事が傳はりあり、それを家熙が話されたと、「槐記」に錄されてゐる。これは唯一例を擧げたに過ぎぬが、「槐記」は、文藝の各方面に渉つて、近衞家の如き家筋で無ければ知れぬ事實が少からず載つてゐる。

文藝の府とも云ふべき名門に生れては、自然に何事にも達するは不思議は無いが、家熙は文藝に天才があつて、且つ努力もしたから、書道の如きは、先人二大家(信尹、

信尋）を凌駕し、且つ大成するに至つた。畫なども明人の風を慕うて、墨竹を巧に畫き、茶でも、香でも、花でも、和歌でも、皆中興と云はるゝの妙に達した。此公が如何に努力の人であつたかに就いては、公が書を學ぶ爲に書かれた種々の墨蹟が、如何にも數多く近衛家に傳はつて居るのでわかる。是等を見ると、上代名賢の假名を初め、空海の草書、羲之の草行、漢代の隷書までも學ばれたことが、ありゝと知られる。又公は無用の費を節して圖書の購入をつとめ、希有の藏書家であつたと傳へられてるが、其藏書の内に、公自ら美事な楷書で丁寧に謄寫された圖書が、如何にも澤山あるのに一驚を喫せざるを得ぬ。

唐六典の較刊

公は廣く漢籍に渉り、造詣の淺くなかつたことは、前にも云うたが、玆に一美談がある。公は、唐代の法律制度の取調べに苦心されたことがある。其の關係から、「唐六

典」を自ら飜刻されて、今も近衛本と云はれて流布してるるが、此書の出版は、實に公の非凡の精力を語るものである。當時公の購ばれた支那版の「唐六典」は、善本で無かつた爲に誤謬が甚だ多く、公は之を正す爲に、數百の圖書を渉獵し、長い歳月を費し、毎紙殆ど眞赤になるほど筆を加へられた。則ち此の校正を經て出版された近衛本の「唐六典」は、支那の流布本よりも夐かに正確のものである。

さて公が斯くまで努力され、愈〻較正の出來た後に、初めて宋版の「唐六典」が手に入つた。此宋版は、今も其頃も極めて稀な貴重なものであるが、これが手に入つたので、公は自分の較正本を取つて一々比較して見られた所が、其較正された通り、全く符合したので、大に喜ばれたと云ふが、此の宋版が、四五年も早く公の手に入つたとすれば、公も數年較正に努力されずに濟んだのである。若し功名心のため斯る勞を敢てした族などであらば、善本の現るゝを見て、己が勞の徒爾に了つたことを歎息するでも

あらうが、流石に公の篤學と人格は別段なもので、常人の及び難い高い處がある。此一事に依つても、公が如何に篤學の人であつたかゞ窺はれる。

公は關白家に生れながら下情に通じ、變に投ずる機才があつた。寶永の京都の火災の時などは、上下共に公の咄嗟の思ひつきに感服したと云ふ。其仔細は、此火災には聖上も御避難あつた位で、其際、公は先驅で供奉をしたが、今出川町を通過の際、多く竹杖を賣つて居る商家を認め、從者をして悉く之を購はしめ、右往左往に逃げ惑ふ市民の内、歩行に難澁する老人を憐れみ、此等に杖を與へられたので、孰れも感泣恩を謝した。又聖上は、此日近衞家に御避難になつたのだが、車駕に從ふ多數の殿上人其他の從者が、泥に塗れた足の仕末に困るを見、急に土藏より晒木綿幾十反を取り出させ、それを適當の長さに截り、銘々に配ち與へ、其泥脚を拭かしめたので、何れも便を感じ、これがため玄關先に混雜が無かつたといふ。

公は、元文元年、七十歳で薨去された。吾樂軒、昭々堂、烹舟子、墨汝などの別號がある。

一五　山崎闇齋

權貴眼裏に置かず

山崎闇齋は、嚴勵寧ろ度に過ぎ、人の細過と雖も假借しなかつた。門人共、定刻を少しでも後れて來ると、ひどく叱した。家に在つても性急で、家人は皆困じた。唯淺見絅齋や佐藤直方などの高弟が訪ねて來て談論すると、喜色滿面で、ひどく機嫌がよかつた。そこで闇齋の妾が此兩人に私語して、『あなた方、どうぞ毎日お出で下さい』と云うた。闇齋は、非常の記憶力を持つたと云はれる。ある時、浴室に在つて、門人

が、垢を流しながら、話が梅花の事に及ぶと、闇齋、梅花の詩を吟誦し始めたが、無慮五十四首に及んだと云ふ。

闇齋は傲岸な人で、權貴を屁とも思はなかつた。ある時、福山侯の家老に招かれ、佐藤直方を連れて出掛けた。闇齋は、頭巾を戴きながら、門に入ると、其家の主人を始め、地位ある面々、皆出迎へて居た。家臣に至つては、土下座をして敬禮を表して居るのを、闇齋、頭巾も脱がず、偶ゝ迎へて居る面々の内に、門人の永田養庵を認めて、『よい天氣だのう』と云うて、傍ら人無きが若くであつた。又某侯、講官を求めたいとあつて、親しく闇齋の許を訪はれた時、多くの門弟子、座に在つた。其中に高足佐藤直方、淺見絅齋の兩人も居つたが、闇齋指して曰く、彼れは直方、彼れは安正(絅齋)、これは傑物だが、侯の聘には應じません。其他は、皆擢用するに足らざるものであると云うた。侯は思案の上、國元より二三の者を江戸に上せ、先生の門に從學せし

めて、之を登用してはどうであらうと問はるゝと、闇齋『それはお廢しなさい。儒生は大根蕪を育てる樣な譯にはゆきません』と答へた。

闇齋も傲岸であるが、門人の淺見絅齋も、亦それに讓らぬ人物であつた。絅齋、嘗て闇齋の酒筵に招かれた。絅齋は豪酒であるが、獻酬の禮がなか〳〵嚴重で、客が杯を擧げざれば、主人、杯を擧ぐべからずの酒令を固守し、師の闇齋と雖も之を犯すを許さなかつた。流石の闇齋も、これには閉口して、『此男は、平素は順良だが、酒間順良でないのには困る』と云うた。絅齋、初め名を順良と云うたから、闇齋、洒落を云うたのである。

或る時、門人永田養庵が訪ねて來た。闇齋は蚊帳の中に寢て居たが、養庵、蚊帳の外に坐して、話次、仁を說くこと甚だ精晰、且つ通爽であつたので、闇齋驚き、『子はどうしてそんなによく判るのか。眞逆寢ても居られまい』と云うて、急に家人を呼び、

蚊帳を去らしめた。

一六　荻生徂徠

さはられない人物

徂徠が初めて將軍家(德廟)に謁見した時、雷の鳴る譯を問はれた。徂徠答へるに、恰も痴氣の起る樣なもので、何と云ふ譯も知れ難いと云うたので、將軍も、譬喩がかしいと云うて笑はれた。徂徠は學界の泰斗と仰がれ、一世の學者を愚弄した程であるから、權貴を憚る樣なことは無かつた。其の禁中の丹楓殿に召された時などは、主上の出御前、皆々屏息肅敬、一語も發するものも無かつたが、徂徠ひとり家に在る樣な氣持で、傍人に話しかけて笑つたりした。

徂徠は、甲斐侯に仕へた。侯は、犬公方と云はれた將軍の歿後、報恩の爲とあつて、徂徠等に命じて「憲廟實錄」を編纂せしめた。出來上つて見ると、例の犬好き、殺生好きの事實が麗々と載つてあつて、而もそれは侯が勸めたものとなつて居る。侯之を見て、徂徠に、事實相違であると云はれた。徂徠は、君の惡い事は、臣下その責に任ずべきであると云うたので、侯は默然苦笑したと云ふ。

肥後の學者で細川家の要路に在つた藪震庵が、始めて徂徠を訪問した時、折節自身で座敷を掃除して居つたが、震庵之を見て、誠に痛み入る。掃除には及申さずと挨拶に及ぶと、徂徠の云ふには、其許の爲に掃除するのでは御座ちぬと云うて、軈て座に就き、一應の挨拶終り、徂徠の云ふには、貴下は肥後の國政に與つて居らるゝが、貴國は水國なれば、定めて水軍のこと御巧者ならん。追々承はりたいものと、意外の難題が出た。震庵大に當惑し、有體に、未だ水軍の事學び申さずと答へると、徂徠は、

夫は賴もしからぬ事なり。水國の要務は水師にあるは、云ふまでもない。然るに、之を御存じ無いとあつては、お役目は勤めかねる道理。それを措いて學問をなさるなどは、然る可からずと、初より極めつけられ、震庵も意氣挫け、迚も太刀打ならずと心服し、爾來、政務の事も、敎を徂徠に請うたと云ふ。震庵は、其頃肥後で名高い學者で、仁齋既に歿した上は、目の上に上がるものは徂徠一人である。之さへ説服すれば、天下に恐るべき者は無いと訪問に及んだ所、斯くの通りで、震庵、肥後に歸つて後、嗣子に云ふには、徂徠は、なか〳〵さはられない人物であると云うて畏敬した。

或る人、徂徠に、先生の御嗜好は何かと問ふと、俺には何も道樂は無い。唯炒豆を齧つて天下の人物を詆るのが、俺の何よりの樂みだと答へた。徂徠の眼中には人無しであつたが、伊藤東涯のみを勁敵とした。京都より人が來る毎に、必ず東涯の事を問うたものだ。徂徠常に云ふには、熊澤了介の智惠と、伊藤仁齋の德行と、自分の學識

とを、一人で兼有するものあらば、こゝに東海に始めて一聖人を出さんと自負した。徂徠は、勿論一世を風靡するの大學者ではあつたが、自惚も甚だしかつた。其歿する時、偶〻大雪が降つたのを、天下第一の人物、將に命を殞さんとするから、天地も感應して、斯く銀世界を現出したのだと傲語した。

一七　林述齋

家傳の秘事

林大學頭述齋は、林家累代、羅山以後の傑物である。幕府の舊規に、將軍宣下を受けた時、全國大小の諸侯、百官有司を、江戸城の大廣間に會し、新將軍親臨の上、一同に「武家諸法度」を讀み聞かせる式がある。此の式に諸法度を讀み上げる役目は、

歴代大學頭の最も重い任務の一つで、述齋は、一たび此の役目に當つた。之を讀むに林家に傳はる祕訣がある。その訣に據らねば、稠人廣座に聲が徹底せぬのみならず、法度の權威を發揮することが出來ぬ。述齋は乃ち家傳の祕訣で讀み上げ成功したが、實は、場に臨むまで、幾度も練習を積んだのである。其の祕訣とは、どんなものかと云ふに、佐藤一齋の談に、格別祕密のあるわけではなく、唯虛氣平心に、一字毎に句を切り、間隔を置いて讀み下し、悠々として周章てず、段々末に至るほど、益ゝ聲を張るのが卽ち祕訣である。例へば「武ー家ー諸ー法ー度ー一ー文ー武ー忠ー孝をー闕むーー可きーー事ーー」と云ふが如く、初めの字音が遙かに席末まで屆かぬ間は、持重して次の字を口より發せぬやうにする。斯くして、末の年號月日より將軍の名に至るまで讀み下し、少し間を置き、「御朱印」と、一段聲を高くして、これだけは、三字連讀するのである。此の「御朱印」の讀み方が全篇の主眼で、之を嚴肅に讀む呼吸がむづかし

い。此の「御朱印」の三字を讀むと共に、滿廷をして、凜然手に汗を握り、覺えず首を低けしむる妙が無ければならぬと、一齋は語つて居る。如何にも、大衆に對しての朗讀は、此工夫が肝要だ。偶然か將た倣つたのか知らぬが、近年頻々としてある美術倶樂部の入札の場合に、落札の讀み方は、これに酷似し、落札者の氏名を呼ぶに、特に音を長く引くから、場内によく聲が徹する。思ふに、政治的集會などに、政綱を發表したり、決議文を朗讀したりする時などは、林家の讀み方に倣つたならば、莊嚴にも聞え、聲もよく徹するであらうに、匆卒に且つ輕口に過讀するから、一向に權威が無い。政治者流の讀み方は、書畫骨董商の落札讀よりも、迥に劣つてゐる。

英雄の持病

さて、こゝに、述齋の暗黑面を語る一通の書簡がある。それは、述齋を登庸した松平樂翁が述齋に與へたもので、「一覽後火中」とあるけれども、述齋は之を燒き捨ても

せず、今に存在して、日下勺水翁に藏せられてゐる。これには、述齋の一私事が語つてある。それは何かと云ふと、述齋は房事が過ぎたと見え、樂翁は之を憂へて、絮々切々、學界のため、國家のため、自愛を說いてゐる。當時の手紙の書き方は如何にも婉曲で、房事の、身を賊ふことを、「內損」というて居るなどもおもしろい。述齋は、あれ程の學者で、氣魄も壯んであつたから、多くの事業を爲し遂げた。斯る人に斯る性癖のあるのは、所謂、英雄色を好むの類で、敢て異しむに足らぬ。

一八　土井聱牙

二箇の奇室

伊勢の學者奧田三角は、三角の家を造つたが、玆に又同じ伊勢の學者で、奧田に倣

うて七面堂と三面堂を作つたものがある。それは、墨竹を書くので名のある土井聱牙である。聱牙が、此堂を作る趣意書とも云ふべき記文を見るに、自分は、祖先以來祿を津藩に受け、文學を以て業として居るが、幼少から多病で、幾度も死に瀕した。併し、養生と讀書を力め、年は六十二に達したものゝ、讀まんと欲する書は、未だ讀み盡さぬ。敢て長壽を望むにあらず、敢て名譽を求むるでもない。然るに、虛名の爲に敎を請ふもの、詩文書畫などを請ふものが日增に多くなつて、之を拒むことが出來ぬ。斯くあつては、病身の上に老と衰とが益ゝ加はつて來て、到底遣り切れぬ。こゝに於て、七面堂を作ることを思ひ立つたと云うてをる。

七面堂は、世事を避けんための城廓である。其構造はどんなものかと云ふに、七角堂であることは云ふまでもないが、こゝに此堂の特色とも云ふべきは、七方面共に壁を厚く塗つて、戶牖も設けず、軒窓も作らず、空氣も通らず、日光も入らず、堂中眞

黑闇であることが、此堂の特色である。聲牙の云ふには、闇室こそ生前の幽冥界で、又死前の極樂界である。此中に坐すれば、目に睹る所なく、耳に聽く所なく、心に思ふ所なく、こゝに始めて完く閒を得るのである。世事を避けて一息の命を保つの道は、唯此の堂に入りて靜坐するの外は無いと。これが七面堂構造の大要で、彼れは、之を保養の室としたのである。

聲牙は、斯る闇室を造ると共に、三角堂をも、其傍らに建て添へた。彼れの云ふには、苟くも人生、命を天に受け、呼吸のある限り、絶對に交際を拒むことは出來ぬ。自分の七面堂を造る趣意は、佛者の爲に倣うて、一概に耳目を塞ぎ、世を遁るゝを以て高しとするのでは無い。一面、人を避けると共に、一面、人と交はるの必要があるからとあつて、三角堂を其の應接室に充てた。さて堂中、室を三つに劃して、各〻別種の人を延く樣にした。乃ち一面を君父師長承恩の人に接する所とし、一面を親族骨肉

舊識僚友と交はる所とし、他の一面を文雅風流技藝の人と接する所にした。此の堂に窓戸の設けあることは、云ふ迄もない。聲牙の云ふには、十面の敵は七面に防ぎ、唯三面のみ敵を受く。庶幾はくば、斯くして志しを養ふことを得んと。

斯る二個の奇室が、實地に用ゐられたかどうかは知らんが、立派に記文まで存して居るのを見ると、晩年、斯樣な建築を起したことは疑ひを容れぬ。當時口善惡なき友人の、祕に云ふには、七面堂の工夫は、少くとも借金の督促に遇つて逃げ込むにもよい思ひつきで、それがやがて養生にもなると云うて笑つた。

一九　村瀬栲亭

才思敏贍

村瀬栲亭は、京都に生れ、初め堀元厚に就いて醫を學び、廿三歳に迨むで、醫を罷めて儒となつた。

此人、初めから才思縱横、尤も詩を善くした。其の十二三歳の時、江村北海の子秉と云ふが略同年で、聰慧を以て神童と稱せられ、何人もこれと才を爭ふものが無かつた。ひとり栲亭は、同年輩で深く交はり、嘗て五言排律三十韻の唱和をしたことがある。これが先輩を驚かし、髫齔の二美と、文苑に謳はれた。

栲亭、長じて經國の才あり、嘗て秋田侯に聘せられて、其の賓師となり、傍ら治務に參し、當時紊亂せる財政を整理するため、幕府より巨額の金を借り、終に整理の效

を奏した。彼れは、三百石の扶持を受け、大阪に出でて、秋田の藏奉行をも勤めた。晩年致仕の原因に就き、秋田の故老の說には、栲亭、大阪に在る時、收賄のことあり、藩宰西田松塘の彈劾を受け、致仕したとも云ふ。藩宰が栲亭の勢力を厭うて、陷れたのかどうか判然せぬが、收賄の評判は、當時大阪にあつたと見える。栲亭の友人上田秋成が、其隨筆に、栲亭は大家なれども、浪華には評判が惡いと云うて居るのは、恐らく此事を云うたのであらう。栲亭は、學者としては勿論、詩書畫の如きも、賴山陽などに後れを取るものではない。然るに、其の割合に關西に名聲の揚がらないのは、吏務に長じて、却つて躓づいた爲である。江稼圃が長崎に來て、本國へ戻る時、日本の儒者の著述の中、唯栲亭の著した「秋苑日涉」と、太田錦城の「九經談」のみを持ち歸つたに見ても、其の學殖がわかる。

彼れは書を能くし、亦蘭竹を能くした。書は東坡を學むで、其堂に入つた。併し、

彼れは、晩年、吳匏庵の眞蹟を得て書法を悟つたと、竹田に直話したことが、其隨筆に載つて居る。栲亭が、人の依頼で多くの絹紙を揮毫せんとする時は、いつも、前日から飲食を愼み、墨を磨るは女子に限ると云うて、娘共に磨らせ、當日は、朝早くより全く世事を絶ち、終日筆硯に親しむが例であつて、其の剩つた墨で蘭竹などを揮灑して、興を遣つたとある。斯樣な場合に出來た畫は、殊に妙趣があつたと云ふ。竹田の如き大家も、栲亭の墨竹は、宮崎筠圃以來の名筆であると云うて、力を極めて稱賛して居る。栲亭は、餘程書畫趣味が深く、其の家に珍藏も多かつたと見えて、竹田は、其の訪問した時に見た某々々の名書畫は、年を經ても忘れ難いなど云うて、其の隨筆に書いて居るのでもわかる。栲亭は茶の趣味もあつて、上田秋成とは茶友であつた事は、既に上卷秋成の項に言うた。又音律にも通じ、なか〳〵趣味の範圍が廣かつた。晩年、京都に在つて便祕の疾に罹つた時、或人、見舞に來て云ふには、先生の廁は鬼

門に當つて居る、病因これにある上は、速かに改築あるべしと云ふと、栲亭笑つて一詩を賦した。

空裏已無二門可一關。不レ知何物住二其間一。何妨鬼子來相闖。吾有二筆鋒劈二大山一。

彼れは悟脫して洒々落々である。

栲亭、名は之熙、字は君績と云うた。文政元年、七十歳で世を去つた。栲亭に一男一女あり。男は名を修、右門と稱し、石齋と號し、書を能くした。河内の四條畷に楠正行の碑を建てた時、栲亭の撰文を書いたものは、乃ち此石齋であるが、不幸にして早世した。

二〇　貫名海屋

悉く是れ努力の賜

貫名海屋、或は菘翁といへば、書畫の社會には、今日猶喧傳される人であるが、貫名といふのは本姓でない。之は全く故あつて自ら命けたもので、夙に文藝に志したため、意を決して藩を脱した。斯くて、目的を達するに非ずんば、脱藩の罪を償ふ能はずと思込んだ結果、飽迄名を貫くといふ意を寓して、此姓を命けたのである。其若い頃には、自ら省吾とも稱してゐたが、之亦志しを遂げ名を貫くには、深く自己を省みるを要すといふ、自奮の意を託したのである。さうして此決心から、彼れは刻苦して大家となつた。

海屋は、書道に於ては、天下無比とまで言はれ、又畫に於ても、南畫界では、先づ

指を此人に屈するといふ姿だが、詩も相當の域に達した。凡そ文人でも、詩を善くすれば書が拙だとか、畫は巧いが詩が出來ぬとか、孰れ一長一短はあるものだが、彼れは三拍子揃つてゐた。世に持囃されるのも、之が其一原因かと思はれる。世人は、多く、彼れを以て、驚くべき天稟の大才だと想像して居るらしいが、少しく調べて見ると、彼れは、眞に非常の刻苦と精勵で名を成したものだといふことが解る。

日下部鳴鶴は、深く海屋を崇拜して居るものだが、其の話にも、海屋の筆は天稟でなく、努力の結果だと言つて居る。之も鳴鶴の話だが、曾て二十歳未滿頃の海屋の書を見たこともあるが、それは甚だ拙なるもので、到底、天才などの閃きすらも見なかつたと言つて居るが、自分も、成程と首肯いた。現に、近年、海屋の家から、長持一ぱい位の、海屋が書き散らした種々なる反故樣のものが出た。自分も京都で一見したが、總べて臨書したものなどで、之に依つても、彼れが其昔の苦辛精勵を察するに足

る。

彼れは、脫藩後、高野山に登り、暫く足を留めてゐたが、其間、頻りに空海の書を學んだらしい。さういへば、高野から下山した頃の彼れの書を見ると、全く晩年の書風とは甚だ違つた、空海流であるから、第一歩の修養が高野山であつたのは、益〻事實と思はれる。

畫に就いても、彼れの大成には淵源がある。當時の文人は、多く誰といふ一定の師匠もなく、自分の心持で南畫の筆を染めたもので、山陽なども、敢て正式に畫を學ばずして、而も相當に描いたものだ。そこで大抵の人は、海屋も亦此類で、唯器用に自分の意を紙上に寓したもの、如く想像して居るらしいが、實は決して然うでない。彼れは、幼より深く畫道を心掛けたものである。其外祖に當る矢野某といふものが、狩野常信の畫を學んだ人で、此矢野家は、代々阿波の君侯に仕へ、殿樣附の畫家たる家

筋であつたので、自然海屋も、此親戚から畫を學ぶやうになつた。且つ彼れの母が、又殊の外に畫を好み、盛んに其子に畫道を奬勵したもので、海屋は、何か一枚描くと、必ず之を母に見せる、母は、それを見て大層喜ぶといふ譯で、家庭に於ても、專ら畫を修養した。此親戚と母との感化が、他日彼れをして丹青界にも重きを成さしめる素地を作つた。

即ち彼れは、初め、やはり狩野派の畫から出たので、母の歿後、國を出でて、それから狩野の畫風を棄て、南畫に赴いて大名を博したので、其書も、其畫も、他の多くの文人に比しては、其素養に於て、將精苦に於て、迥に群を拔くに至つたのである。

二　釧雲泉

崛奇孤高

肥前肥後の境界に阿婆灣と云ふがある。其灣頭に屹立した山は雲仙山（溫泉嶽）で、釧雲泉は、乃ち其山村に生れた。彼れが米點山水に妙を得たのは、斯る煙雲溟濛の空氣を呼吸したからであらうとは、田能村竹田が、此の山下を過ぎた時、雲泉を懷うて作つた詩中に見えて居る。彼れは、斯く西海の濱に生れ、遂に遠く越後に遊び、北海の濱に歿した。竹田は雲仙山下を過ぐる時、雲泉の事を尋ねても、誰も知るものが無かつたと云うて、其の長篇の終に、

如今十里蜃烟寒。幾叢蟹舍擁二村市一。居民說三山有二雲仙一。不レ知三邑有二雲仙子一。

と歎じて居る。彼れが如き名手も、生前には、其技能が認められなかつた。乃ち盲目

千人の世の中には、畫品が高いだけ、それだけ珍重されなかつたのである。柏木如亭は、雲泉が生前知己を得ず、其畫の價の無かつたことを悲み、雲泉の歿後、一詩を詠じて、其の不遇を悲んで居る。

有二此畫一來無二此法一。望知亡友老雲泉。所レ憐世上無三眞眼一。了使二生前不レ直レ錢。

雲泉の越後に來た頃、鈴木芙蓉も、恰も越後に來會はせた。然るに、芙蓉の畫を望む者は門前市を爲したが、誰も雲泉の畫を望む者が無い。芙蓉は、斯る名手の居るに、何故、彼れに往かず、吾に來るかと云うて訝しがつたと云ふ。俗衆は、無論、此の高韻の畫を理解する能力が無かつたのである。併し、越後に於ては、石川侃齋の如き眼識の高いものは、雲泉に就いて畫を學んだ。亦龜田鵬齋の如き大家も、恰も越後に居つたので、深く雲泉と交はり、其畫品の高いのに服して、雲泉の歿後、其碑文を書いて居る。其碑は、漸く近頃になつて越後に建てられたが、當年鵬齋自筆の稿本は、今

も坂口五峰君に藏せられて居る。

雲泉が越後に入る途中、白川を過ぎて、或る士人の家に宿した時、其厚く遇さるゝに任せ、毎日、其嗜む釣にのみ耽つて居て、畫は一枚も書かなかつた。主人終に地金をあらはし、實は、貴君を款待する所以は、畫を請はんためであるのに、釣ばかりを事とするは何故ぞと詰ると、雲泉も怒つて、斯る所には一刻も居りかねると、即刻去つたと云ふ逸事がある。越後に居つた時も、これと似寄りの話が、いろ〳〵傳はつて居る。それ故に、雲泉は傲癖ありとさへ言はれた。彼れは、倪雲林や黄大痴の如き、支那の大家を學んだ者で、彼自らも、自分の畫は俗には喜ばれぬと知つて、漫に書かなかつたのである。彼れ、其頃某所に寄宿して居り、一日、天に歡び地に喜ぶと云ふ有樣で、手を舞はし足を踏むで踊廻つたことがある。其の家の人々、此の狂はしい樣子に驚き、何事かと怪しむで問へば、自分は、多年、米家の點法を會得しなかつたが、

今日は圖らずも初めて其髣髴を得て、喜びに堪へずと云うた。小俣栗齋が、木曾路を經て雲泉を訪うた時、雲泉の問ふには、木曾の山水はどうでした。その眞景を寫されたかと云ふに答へ、格別、好風景とも思はざりし、又寫しもせざりしと云ふを聞き、雲泉云ふには、それでよし。全體、强ひて眞景を寫さんとのみすれば、草木泉石おのづから書畫の趣きとなつて、却つて面白からず。諺に繪空事とも言へば、兎角に、畫は餘り眞に逼らず、我が意中より如何樣にも佳妙に書き出すこそ、雅趣もあり、天工にも勝るなれと云うて、畫訣を語つた。

雲泉は、俗稱文平、名を就、字は仲孚、六石、磊々居士の別號がある。文化八年、五十三歳で越後出雲崎に歿した。

二二　田能村竹田

非凡の向上心

豐後の邊境に生れ、其の邊境の一村落、竹田村の名まで、世に知らしめたのは、田能村竹田で、其の仕へた岡藩も、實は竹田あるが故に知られた程の小藩である。

竹田の父は醫を業とした故に、竹田も亦醫を以て藩に仕へた。併し、彼れは、醫として立つには志しが高過ぎた。彼れ、幼少より藝術に身を寄せ、好む所、畫であつた。廿三歳に迫んで、終に醫業を廢し、藩の學問所、由學館の學頭に擧げられたが、實は竹田の本意で無く、畫を以て一世を風動せんには、仕へを罷めて、早く畫の修養に專らならんことを欲した。彼れが、廿三歳の時、江戸詰を命ぜられたのは、其一生の運命を開く端緒で、彼れに取つては幸ひであつた。其谷文晁の門に入り畫を問うた

のも、此時からである。

竹田は、畫に於て天才があつたと云ふよりも、非凡の向上心があつて、他人の及ばぬ苦學をしたと云ふ方が當つて居るだらう。彼れは、技の拙なるを自覺し、汲々乎として自ら修むるに努力し、大家となつても、決して滿足しなかつた。竹田の竹田たる所は全く茲に在つて、其賞賛に値する所も亦こゝに在る。彼れは、天下に多くの知己を得んとは冀はなかつた。彼れは、常に曰く、廣く天下に歡ばるゝ樣な畫は、自分の本意とする所でない。識者で無ければ、理解が出來ぬ妙が、卽ち自分に於ても妙とする所だと云うて、賴山陽一人の外、何人をも許さなかつた。彼れは、元明大家の畫を磨せんとするを目的とし、幾ど其目的を達したが、彼れは、畫に於て斯る抱負があつたのみでなく、詩に於ても、題語に於ても、亦支那人を駕せんとするの抱負をもつた。彼れは、之が爲に、詩にも題語にも、人知れず苦心し、他の畫家の企て及ばない題詩

と題識を以て、畫に光彩を添へた。實を云へば、竹田以前の題詩や題語は、あらずもがなの贅物であつた。眞に意味ある賛と云ふは、竹田から始まつたと云ふも誣言でない。彼れが作品の、今日貴まれ、其價の、拱璧啻らざるものあるは、其畫品の高い處にもあるが、亦其の題識や題詩にもあるのだ。

併し、斯程の人も、鄉國にては、當初、一向顧みられず。其の金に窮した場合には、大分町の八人衆と呼ばれた富家に駈込んで、畫一枚、金二分に買ひ上げて貰つたことが數〻で、大分では、「二分竹田」、「駈込竹田」と云ふ言葉が、今も存してゐる。又別府に、富める煙草屋があつて、それが大壁紙を所持して居ると聞き、それに書きたいと、竹田懇望に及ぶと、持主は拒んで、君に書かせる位なら、津田秋皐に花鳥でも書いて貰はうと云うた位で、竹田は、鄉里に輕んぜられた。然るに、後年、竹田の名大に揚つてからは、その鄉里に、贋作の製造盛んに行はれ、それから大分縣の一大産物と

なつて、幾萬の金が這入る樣になつた。大分町で三戸屋竹田と云へば、竹田の贋物を意味するのだが、竹田の居と遠からぬ所に、三戸屋と云ふ商家が、之を製造する所から、斯樣な名がある。

竹田は、畫にも、題賛にも、精力のあらん限りを盡して、苟くもしなかつたことにつき、その親友筱崎小竹は、下の如く云うて居る。竹田は、畫を書き終つて、さて題詩や題語を如何に書くべきと苦心すること、實に一通りでない。曾て床を竝べて寐た事があるが、何時目を覺しても、竹田は、蓐中に寢もやらず推敲苦悶して居る。畢竟、彼れが早く死んだのは、其精力を推敲に耗盡した結果に外ならぬと云うて居る。天若し彼れに藉すに、尙十年の壽を以てしたならば、自得の域に進み、滿足して大往生を遂げたらんに、惜むべき事である。

竹田、名は孝憲、字は君彝、通稱行藏。天保六年、大阪に客死した。享年、五十九

歳である。

二三　細井廣澤

立志の妨と情婦を一刀の下に

細井廣澤が、書道の大家であることや、赤穂の堀部武庸(安兵衛)と、劍道の同門である關係から、義擧の日、武庸と別杯を傾けたことなどは、多く知られて居るが、爰に廣澤に就いて隱れた逸話がある。

廣澤は、もと京都の嵯峨の廣澤村の人で、其の號も鄕貫の地名から來て居る。青年の頃、深く言ひ交した女があつたが、廣澤つく〳〵思ふに、兎角、志しを立てる者は、江戸へ出ねば目的を達し難いと、千里獨歩の思ひがあつた。女は之を聞いて、切に同

伴を望むだが、廣澤之を聞き入れず、或る日、秘に京都を出發した。然るに、二三宿も行くと、女後より慕うて來て、どうあつても離れられぬと附き纏ふので、是非なく連れて、七里の渡しをわたり、とある林のある處で、不憫とは思ひながら志しには易へ難いと、一刀の下に女を切り殺し、こゝに繫累を絶つて江戸に上つた。此事は廣澤の大祕事で、廣澤の友人服部南郭の如き、之を祕しながらも、廣澤の立志の堅固なるを特に褒めたと云ふ。

廣澤は、文人に稀なる勇武の人であつた。江戸の中野邊に、源頼政が禁裏より賜はつたと傳へらるゝ太刀を所持して居る者があつた。松平侯(右京大夫)之を聞かれ、廣澤が其人に懇意である所から、之を介して一覽を請はれた。然るに、取次のものが窃取したものか、後日其の太刀が舊主に戻らぬため、廣澤ひどく迷惑し、幾度松平家に談判しても要領を得ないのに憤懣し、終に、右京大夫登城の折、刺し殺さんとまで意

を決したことがある。

又廣澤の、柳澤侯に仕へて居る頃、諸家よりの進物を數多く掠め取つた執事があつて、それが罪せられ、甲州に檻送せらるゝことになつた。廣澤、其護送の役目に當つたが、罪人、途中で、小用のため藍輿より出して貰ひたいと賴むので、廣澤、逃走を企つるものとも心付かず、言ふに任せて出して遣ると、一散にかけ出したので、警護の兵卒、之を引き捕へると、罪人、死力を盡して、兵卒を引きずりながら、尙も走るのを、廣澤、韋駄天の如く追ひかけた。罪人も愈ゝ叶はぬと見て取り、懸崖より身を躍らせて飛び降りると、續いて廣澤も飛び降り、雜兵共もそれに倣うて、終に之を縛し得たと云ふ。

是等の話は、孰れも廣澤の、尋常文人と、大いに選を異にすることを語るものである。

二四　勝間龍水

佛具が初松魚に早變り

寛延寶曆の頃、江戸の市井に俳諧や書道で名の高かつた勝間龍水は、名は定安、號を新泉と云うた。

此人は畫も出來て、「海の幸」、「山の幸」と云ふ畫本は、今も傳はつて居る。亦當時著名の篆刻家池永道雲に學んで、篆刻を善くし、印に就いても著書がある。新和泉町に住居して、家塾を開き、幼童を集めて書法を敎へる傍ら、俳諧の門人もあつた。當時梨園で有名な市川三升(團十郎)も、俳諧は此人に學んだのである。龍水の父は町役を勤めたもので、その支配下にある町屋は數百軒あつた。隨つて、それから取り上げる

役徳も少く無いわけで、家は富饒であるべきだのに、龍水の天性は淡泊で、且つ慈善心があつたので、兒童の束脩も、半分は返して遣るを例とし、長屋の役徳も、幾ど取らず、屑屋が來れば、日々兒童の書き散す多くの紙屑を、たゞで與へると云ふ遣り口であるから、家はいつも貧乏で、着替への衣類も無い位であつた。或歳の四月の上旬、老母も女房も、佛參にと外出した留守に、初松魚を賣つて歩く聲が聞こえたので、龍水堪りかね、持ちたる筆を抛つて呼び入れては見たが、さて嚢中は空であつた。そこで何か金に換へるものは無いかと、邊を見合せた處、佛壇にきらめく眞鍮の三つ道具（眞宗の佛壇には、例として花瓶、香爐、燭臺を置く。之を三つ道具と云ふ）が眼に入り、婦人連の不在を幸ひと、近所の仕末屋に賣飛ばして松魚の代を拂ひ、大喜びで急に俳友の平砂、百庵、乾什、買明などを呼び集め、宴會を開いて居る所へ、家内のもの歸り來り、佛壇に三つ道具のないのに驚き、主人に問へば、主人、一杯機嫌

で、佛具は初松魚に變じた。其變じたのが南無不可思議だ。そんなに恨んでは困る。お前達は、今日お參りに行つて、有り難いと思つたであらう。それが卽極樂であると同じく、俺も友達を集めて、喜び樂む所が亦極樂だと、妻女の苦情を鳴らすを耳にも入れず、談笑自若であつたと云ふ。

寶曆六年、杉森稻荷の幟を作つた時、揮毫を龍水に需めた。龍水、折節病んで筆が執れず、已むなく子息に代筆をさせた。子息も、代筆の出來る程の能書であつた。揮毫終つて、名を何と書くべきやと問ふと、龍水且らく思案し、堺町の役者は親方の名を承け繼ぐのが此頃の例であるから、それに倣うてよからう。卒體釣鐘の子は半鐘、半鐘の子は風鈴だ。貴樣は龍水の子だから、蛇水と云ふがよからうと云うて、蛇水と名を署させた。幟の依頼主が、やがて受取りに來た時、龍水、代筆をさせた言譯に、蛇水と落款した次第を備さに語ると、依頼主も、その話しの面白いのに興に入つたが、

追々其の話が講中に擴がり、終に市井の大評判となつて、杉森稲荷の幟を見んと、遠方から足を運ぶものも出來、爲に稲荷も繁昌したと云ふ。

二五　森川竹窓

不換妓之書

關西の文苑に、美男子として聞えたものは森川竹窓である。此人、浪華に生れ、十七の歳江戸に出て、佐竹侯に仕へた。人と爲り洒落で、繩墨に拘らず、頗る多藝の人であつた。畫は蘭竹を最もよくし、書は和漢を窮めて、造詣甚だ深く、篆刻の如きも、專門家の壘を摩するほどの名手であつた。非常の趣味家で、書畫、骨董の類を多く收藏し、殊に圖書に趣味があつて、希覯の珍籍を多く藏した。松平樂翁公が「集古十種」

を編纂するに方り、器物肖像の部は、谷文晁に賴むで蒐集摸寫せしめたが、文書の方面は、竹窓に囑して蒐集せしめられた。彼れが此道にかけて、當時何人にも許された ことが、此事實に因つてもわかる。彼れは、平素好むで本朝諸名家の墨蹟を摹勒する を好み、且つ甚だ巧であつた。又彼れは、平素の心掛で、此種の摹本を多く藏して居つたので、樂翁公の編輯にも與ることになつたのである。勿論「集古十種」に自家の材料を多く供給したに相違ないが、「浪華帖」、「草行集」、「款藪」など云ふ書を、自らも刻して居る。皆書道に關するもので、竹窓自身も書名が高かつた。

竹窓は美男子であつたから、花柳界に於て、ひどく持囃され、それが累をなして、多くの財を散じた。前にも云うた通り、竹窓は多くの珍籍を愛藏したが、女の魔力は圖書の趣味慾に打勝つたらしく、ともすると、愛藏の書を賣つて花柳の勘定に宛てねばならなかつた。そこで竹窓も、心竊に思ふには、折角集めた珍奇の圖書を失ふは

甚だ残念である。せめては某某幾十部の書物は、どうあつても賣らぬと決心し、みづから一印を刻して、それを大切な書物に捺した。其印文が甚だ奇拔である。乃ち「竹窓不レ換レ妓之書」の七字を刻したのである。當時、友人連は此事を聞き、折角、斯る印まで作つても危いものだと云うた。竹田の如きは、「知否一倏難レ信事。有レ書不敢換二春風こ」と云ふ詩を寄せて竹窓に戯れたが、果して友人連が危んだ通り、其後間もなく此等の書物を賣つて、一妓を購ふことになつた。友人共は、「そら見ろ」と云うて一笑した。

竹窓はなか〳〵の好事家で、晩年、古淨瑠璃の珍しいものを多く蒐め、且つ古調で之を語つて見たいと思ひ立つたが、近松が淨瑠璃に一革命を起してから、古淨瑠璃は廢つて、その節廻しなどを知つて居るものは容易に搜し當らなかつた。それをば百方搜して、漸く一老人の、之を知るものを見出し、これに就いて熱心に稽古を續け、購

ひ入れた妓には三味線を教へて、終に友人など會して、語り聞かせる程に進んだ。竹田なども、毎日聞かされた一人で、友人連は、皆内々傍聽させられるのに閉口したが、御本人は、大の得意であつたと云ふ。

竹窓は、名は世黄、字は離吉、通稱曹吾。竹窓の號の外、柏堂の別號もある。天保元年十一月、六十八歳で歿した。

二六　細川林谷

一粗字是れ渠の勝處

細川林谷は讃岐の人で、篆刻に於ては、高芙蓉以後の名人と謂はれた。此人、天性竹を愛し、旅行の時など、竹のある所に必ず宿を取る。氣に入つた竹林があれば、何

日でも逗留する。竹のある家へは訪ねて行く。珍奇な竹があれば、或は懇望して貰ひ受け、或は價を論ぜず買ひ取り、辛苦して培養する。いつも、旅行先から宅へ屆くものは、竹であつたと云ふ。斯くまで竹を嗜んだから、彼れは竹石をよく畫した。そしてそれが妙を極めた。

林谷は、同鄕の先輩阿部良山に篆刻を學び、後長崎に遊んで、刀法大に進み、出藍の譽を博した。此人は印を彫るに非常の達者なもので、其の鐵筆を操縱すること、宛ながら毛筆と一般で、刻の神速なることに至つては、毎々人を驚かした。ある時、酒客に會し、戯れて云ふに、君が一升を傾ける間に、吾れは百の印を刻さんと云うて、看る看る百顆を刻つたが、酒客は一升の酒が殘つて、終に敗を取つた。

林谷は鐵筆を取るに達者であつたが、動もすれば、刻が粗に失した。こゝに於て、或は之を非難するものもあつた。實は、林谷の篆刻の妙は、却つて此粗な處に在つた

のだ。當時、林谷を知るものが評した言葉に、林谷の刻は、よく其人に似て居る。林谷其人は粗の樣だが、甚だ雅骨を具へて居る。恰も其の刻の粗に似て、却つて風致を存すると一般だと云うたが、これが洵に適評である。林谷は長幹清癯、一向飾り氣のない、一見粗野な風采であつたが、どこかに凡骨ならざる處があつたと云はれる。彼れが、詩に於ても、書に於ても、畫に於ても、人意の外に出で、超脫した處あつたのは、卽ち其の風骨の反映と謂はざるを得ぬ。

頼山陽は自ら印を刻し、又印には頗る鑑識があつて、容易に人に許さなかつた。ある時、林谷の作つた印を山陽に示したものがある。其時山陽は、醉後寢て居つたが、つく〳〵印を見て、急に起き直り、印を推し戴いて、ひどく敬服し、自分も頼みたいと云うて、人を介し、其事を申入れたといふ。

初め林谷が浪華に遊んだ頃、師の子息阿部鎌洲が、恰も浪華に在つて、印の名人と

持囃されて居つた。林谷來ると聞き、浪華の人々は、縑洲を介して、印刻を依頼する者が續々あつた。縑洲、之を林谷に取次ぐと、林谷、頭を左右に掉り、此地は君の繩張り内である。吾れは決して彫るまじと云うた。縑洲、色々に云うて勸め、漸く林谷も刀を執る氣になり、數月間足を留めて、例の健筆で多くの印を刻し、潤筆の收入も隨つて頗る多かつたが、元來磊落な性質で、金は得るに隨つて散じ、日夕酒に親しんだので、浪華を去る時は、囊中一金をも留めなかつた。併し、林谷は平氣なもので、縑洲に別れを告ぐる時、『お蔭で浪華の滯在は愉快であつた』と云うて、飄然として立去つた。

神前より古鈴を失敬

林谷は多方面の趣味家で、骨董などにも深い鑑賞力があつた。ある時、鄕國の某神社を訪ひ、社殿の卓上に古鈴の置かれてあるのを見た。其鈴、形貌奇古、蒼古の味

掬すべきものがあつたので、流石の林谷も食指動き、終に所望に迫んだが、神社に由緣あるものだとあつて、割愛を肯じない。林谷、失望しながら、斷念が出來ないのである。竊に筆硯を借り受けて、鈴を宛てながら、實物を見るごとくに摸寫し、宮司には寫しを取つて持ち歸るものと見せかけ、畫が成ると、倉皇之を神前に獻じ、鈴をそと懷に入れ、失禮ながら、交換お許しあれと云うて、何れともなく去つた。

先年、自分が讃岐の高松に遊んだ時、偶ま讃人の書畫の陳列會があつて、一室に林谷の山水の長條幅が掲げられ、其前には卓が置かれて、古鈴が載せてあつた。此の幅が乃ち當時林谷此の宮を訪うた時の實景で、幅中の人物は林谷自身である。又前に置かれた古鈴は、甘折失敬して持去つたものであること、知れた。或る好事家が、幅と鈴と、別々の手に在つたのを、苦心して一手に集め、珍藏して居るのだと聞いたが、成程此の鈴は、露の垂る樣な古色淋漓たるもので、林谷の失敬しさうなものだと、自

分も頷いた事がある。

林谷が天性器用であつた事につき、竹田に依り、一話が傳へられて居る。竹田、曾て讃州人で蒙葭堂の門人であつた竹坡を訪うた時に、座上に山水の一畫册が置かれてあつた。竹田取つて之を見るに、趙不烈と云ふ落款があつて、如何にも眞蹟に相違ないと見て取り、竹田も欲しくなり、誰の所藏ぞと問へば、幸ひに賣品だと云ふから、遮二無二購うてかへり、早速改裝して珍藏して居つた。然るに、ある時、二三の友人と會した折、竹田より此畫册のことを言ひ出すと、友人中に此の册子の由來を知つたものが居り、氣の毒さうに、あれは林谷の擬筆であると告げたので、竹田大いに驚き、家に歸り、つく〳〵畫册を見遣つたが、如何にも贋作と思はれぬほど、よく書いてあるので、自分の鑑識の錯つたことを恥づると共に、林谷の筆の超絶なるに服し、其の事を特に畫册の餘白に識して、時々話柄としたさうである。竹田程の人を欺き得た林谷

の腕前は、凄いものと謂はねばならぬ。

林谷、京都に在る頃は、靈山の麓に山房を構ひて、其の景勝に耽つたが、去つて東都に出づるに迫んでは、天地全く變じて、濛々たる黄塵の中に起臥することゝなつて、流石に堪へかねたが、自ら京都の舊居を圖して、自詠の詩を書し、之を額として掲げ、僅に悶を遣つた。

林谷、本姓は廣瀬氏、名は潔、字は瘦仙、或は氷壺と云うた。通稱は春平と云うたが、後俊平と改めた。號は林道人、忍冬庵、三生翁、不可刻齋、有竹家等、いろ〳〵あるが、白髪小兒、天然畫仙などの戯號もある。天保十四年六月、江戸に歿した。享年六十五である。林谷の衣鉢を次いだ林齋は、先代に比し、技は劣つたが、決して下手では無かつた。

二七　建凌岱

可なら不る莫き才

建凌岱は、書、畫、和歌、俳諧、往くとして可ならざるなき奇才を有した。彼れが俳諧を業として、淺草に住した頃は、觀音の雷門がまだあつた頃で、門の兩脇に風神と雷神が竝立つてゐた。其風神の荷つてゐる風袋がおもしろいと云うて、凉袋を俳號とした。後に俳諧を廢してから、凌岱と改めた。

彼れは、才藝に非凡の天分があつたと見えて、其俳諧の作り初めは、ある時、人を訪ね、低ゝ人々集まつて俳諧を遣つて居るのを見て、己れも一句と口吟んだのが始まりで、某と云ふを師としたが、三ヶ月も經つと、師の句を非難して、それを直す樣になり、師も舌を捲いたさうである。全體、此人は東奥の生れで、故あつて京都の東福

寺に入り、僧となつたものである。乃ち俳諧を始めた時は、僧の時代である。彼れは俳諧に興味を感じ、加賀に巡錫した時、其地に名聲のあつた希因といふ俳人に教を乞うた。希因は、僧の俳諧に耽るは宜しくないと戒めたが、彼れは腹を立て、伊勢に遊び、乙山の門に入つた。彼れは、僧の修業よりも俳諧の方がづん〳〵進むで、一家道の門戸が張れる樣になつた。そこで終に還俗して、俳諧師となつた。江戸に居つたのは、還俗の後で、終には大阪で一門戸を張つた。浪華では、ひどく珍重され、門人常に室に溢れ、爲に富饒の身となつた。此頃、賀茂眞淵しきりに萬葉の古歌を唱へ出したので、凌岱は、其力を入門せしめて學ばせ、己れも間接に之を學び、終に大いに感ずる所があつて、半生熱中して大家と呼ばる、迄に至つた俳諧を、無用のあだ言であると罵つて、一朝フツとやめ、之より萬葉風の片歌と云ふ一種の體を工夫した。併し、斯樣な古調は、勿論人に珍重されなかつた。彼自身も、覺悟の上で此の古調に移

つたのである。彼れの言ふには、人が用ゐないでも、片歌の元祖は自分である、自分は、俳諧と云ふ寶の山を去つて、片歌といふ淵に身を投げたのだと云うて、花山院右府に請うて、「片歌道守」の四字額を申受け、これを自室に掲げて悶を遣つた。又片歌は、日本武尊の御詠、「にひばりつくばを過ていくよかねつる」に倣つて、工夫したものであると云うて、尊の薨去の遺址伊勢の能褒野に紀念碑を建てた。

彼れは、俳諧を廢めてから、糊口の爲に專ら畫筆を揮ひ、殊に墨竹に妙を得た。其の寒葉齋を畫號としたのも、云ふ迄もなく竹から來た名である。彼れが江戸に在る時、某諸侯、甘畫を一覽あり、若し更に學ばしめたらば、必ず天下第一の名手とならんと、特に三百兩を賜ひ、長崎に至り、熊斐(熊代斐と云ふ)に就いて學べよと勸められた。凌岱お受をしたが、直ちに其三百兩を携へて吉原に至り、かねて愛する遊女を落籍して、之を家に殘し、自分は長崎へと旅立をした。然るに、六年も留守をした間に、家

に殘した妻は、何時しか門人と通じたことがわかり、敢て怒りもせず、直ちに門人に與へて、己れは別に他の妓を納れて妻とした。眞淵に就いて學ばしめたのは、乃ち此の女である。さて修業を勸められた諸侯から、何か書いて差出す樣命があつた時、彼れは、大膽にも團炭の樣なものを塗抹して獻じた。之がため侯の怒りに觸れ、出入を禁ぜられたが、實は、三百兩のため、一生覊束を受けては迷惑と、わざと其の怒りを買つたのである。彼れは豪放不羈にして一世を玩び、苟くも他人の跡を踏まなかつた。

安永三年、武州熊谷の門人の家に宿泊中、五十六歳で歿した。

二八　寶井其角

反故の幅

寶井其角は芭蕉門下の逸才で、其の俳句の妙は、往々師を凌ぐものがあつた。天性豪放跌宕で、奇抜の行ひが多かつた。ある時芭蕉、某侯の需に應じ、萩の畫幅に一句を題した。

白露をこぼさぬ萩のうねり哉

其後、侯は、之を其角に示さるゝと、其角、何の會釋もなく筆を執つて、「白露」の二字を「月影」の二字に改め、

月をこぼさぬ萩のうねり哉

と云ふ句となし、折角の幅を反故にした。侯は怒つて其無禮を咎め、それより出入を

禁ぜられたが、後に芭蕉これを聞き、如何にも其角の直しの力が、含蓄があつて面白い。月と云へば、露は言外にあるものを、吾は拙かりしと云うて、侯に其事を告げ、且つ幅の一部に、「上二字は其角の加筆」と記し、芭蕉い名を署して、感吟の裏書をしたので、侯は其角に對する怒を解き、此の幅を「反故の幅」と名づけて、珍藏さるゝことになつた。

梅香の句

荻生徂徠が茅場町に住した頃、隣家に其角が居つた。其角の

梅が香や隣は荻生惣右衞門

と云ふ句は、其頃の作である。或說に、此句は暗に徂徠を譏つたのだとも云ふが、實は、白樂天の「梅香隔歲在二隣家一」と云ふ句から、思ひ付いたのであつた。梅に「好文木」の異名があるから、「梅」を以て儒家になぞらへ、「香」の一字に稱賛の意をふくめ、

「荻生惣」と云ふ音を鶯にはめたので、寧ろ美めたのであると云ふ説もある。其角の意は、恐らくこれにあらう。

二九　中川乙由

遊里劇場は句の仕入所

芭蕉門下に隱れもない中川乙由は、伊勢の山田の社司慶德圖書が、俳人となつての名である。此人、俳諧に隱れてから、人と交はつて淸閑を妨げらるゝを厭ひ、人里離れた麥畑に茅庵を營み、自ら麥林舍と號した。ある人、庵に訪ひ來り、自分は俳諧を學びたいが、式がむづかしく、その道に入り難い。あはれ、吾等ごとき庸愚の者に、俳諧を學ぶ近路もあらば、敎へ給へと云ふを、乙由笑つて、俳諧は然のみむづかしいものでない。志しさへ深ければ、苦もなく作り得らるゝ者だと云うて、折節農夫の寒けに鍬をかたげて、畑の中を過ぐるを指ざし、あれが發句の姿である。これを十七字にするには、「百姓の鍬かたげ行くさむさかな」とすれば、それが卽ち句だと云うた。これは、香川景樹が、歌詠む法を問はれ、をりふし豆腐屋の家前を過ぐるを、歌に詠むで示したと同一の談である。

乙由は、付合には殊に妙を得て、當時、何人も及ぶものが無かつた。ある時、涼菟を判者とし、支考などと付合を遣つた時、「老僧の顏ゆ佛師にみせて置く」といふ妙句を吐き、一座を驚かした。判者は、之を釋敎のさしあひありと云うて、取らなかつたのを、乙由悔しがり、幾度も此句を吟じて云ふには、これほどの秀句、一生のすたり句とならんは惜しいものだと、泣かん許りに歎じたのには、一座興を催し、長く藝苑の談柄となつた。

乙由は、人交はりを厭うて、畑の中に隠退しながら、遊里や劇場に行くことを好み、老境に及んでも改めなかつた。或友人、之を已めよと諫めたが、聴き入れなかつた。乙由の云ふには、俺は沙門で無いから、敢て妨げない。人は、兎角老境に入ると、句も自から古びる。遊里や芝居は、句の仕入場所と云うてよい。さうかと云うて、遊女や役者を材料とするのではない。艶ある女に親しみ、三絃を聞いたり、藝を見たいすれば、おのづから句に變化を生ずる。又面白い工夫も、斯様な所に於て生れて來ると云うた。斯くて劇場に出入し、かねて知る遊女などが桟敷に居れば、平氣で座を割つて其中へ混り、快く酒を飲みかはし、談笑もする。時には句も作る。彼の人口に膾炙する、「浮草や今日はあちらの岸に咲く」といふ句は、斯る場合に口吟むだものだと、「俳家奇人談」には書かれてゐる。

乙由の句の調には變遷はあるが、一讀、何人も忘れぬ程の感興を覺ゆるものは、

よき物を笑出しけり山ざくら

行秋を道々こぼす紅葉かな

荒壁に蔦のはじめや飾縄

喰ふことも濱の眞砂や冬籠り

などで、晩年は、理に拘らず、所謂正風の眞處を得た。

三〇 卷菱湖

胡坐かいて追出さる

書道の泰斗として知られた卷菱湖は、常時、法帖の事に精通してゐた點に於ても、亦頗る著名であつた。書道の修養を根據としての鑑識であるから、其頃、第一に推さ

れたのも當然である。菱湖には、從來、傳はつてゐる一小話として、曾て遊歷中、一泊した家で、甘床の間に經書が置かれてあるのを見て、他の磊落な菱湖先生、手を伸ばして其一二册を引き寄せ、寢ながら讀み耽つてゐると、家の主人が此體を見て、大いに立腹し、『苟くも聖賢の書を寢てゐて讀むとは無禮千萬。斯やうな不謹愼者には、一夜たりとも宿は貸されぬ』と、遂に菱湖を其家から逐ひ出したといふことは、よく人の知る話らしいが、併し、それは、恐らく之から自分の話す次の事實が誤傳されたものと思ふ。

上州の吾妻郡山田といふ村に、町田延陵なる人があつた。此人、非常なる法帖通で、其頃、日本に傳はつてゐた法帖が、悉く彫のわるいのを遺憾とし、常に產を傾けて貴い法帖を藏すると共に、又自ら刻しもしたといふ點で、當時、高名な人であつた。卽ち恰も彼の三井と親族であつた程の豪家にも拘はらず、法帖癖の爲に、遂に身代を潰

したといふ、伊勢の韓天壽と、其癖に於て頗る似て居るが、此町田が法帖通の因から、曾て菱湖は、米庵と共に態々町田を訪ねたことがある。米庵は町田と同鄕の上州人であるから、恐らく彼れが東道となつて、菱湖の爲に同行したものでもあらうか。兎に角、町田は、此大家の來訪を喜び、種々其珍藏の法帖を取り出して見せたが、菱湖は、折柄旅の疲れもあつたらうし、殊に豪放な性質とて、ゆつくり拜見といふ格で、先づ大胡坐をかいたものだ。

すると、之を見た町田は、忽ち怫然として怒つた。『苟くも書を以て立つ者が、斯道に最も重んずべき法帖を見るのに、禮を失した其態度は何事である。斯る野人にも等しいものには、我が貴重なる祕藏品は決して見せられぬのみならず、早速此家から立去つて貰はう』と、泊める筈で迎へた兩人を、今度は、いくら詫入つても耳にもかけず、殊の外の立腹で放逐した。

處が此山田村は、今でも餘程山間を辿らねば達せられぬ僻遠の地。殊に其頃は一層邊鄙で、町田家から放逐されては、別に旅館とてもない所。兩人頗る困難して、漸く一夜を辻堂に明かし、這々の體で歸つたといふことである。前に擧げた、旅宿に於て寢ながら經書を讀んだといふのは、蓋し此話しの訛傳ではあるまいか。

講釋の旨さに烈公泣出す

丁度、町田延陵の名が出た序に、こゝに、彼れの事を一二話して置く。

町田は、頗る面白い人であつた。財産も、法帖の爲に失つてしまつた。幼時から頗る聰慧で、彼れは三男に生れたが、家庭で、二人の長兄が書物を教へられてゐるのを、傍で聞いてゐる彼れの方が迥に早く覺えたといふ。殊に書道は天才的で、非凡の筆致は、幼少から人を驚かしてゐた。本人も亦書を好んで、幼時、大般若經六百卷を手寫し終つたといふ話もある。

祖徠派の學にも通じ、餘藝として刀劍の鑑識にも精通して、殆ど百發百中であつたさうだ。併し、其中でも、最も長じたのが法帖の鑑識と書であつたらしい。今は、もう延陵の刻した法帖も多くは傳はつて居らぬが、最も著名で且つ幸ひに殘つてゐるものに、尊圓親王の書を集めた「田尊寺法帖」がある。其他は餘り見られぬが、彼れは、曾て定武の蘭亭帖を得て、喜ぶこと限りなく、臨書、八千枚に及んだ程の法帖狂であつたといふ。自分は、前に延陵を韓天壽に比較したが、學問に於ては、寧ろ延陵が上らしい。此人、當時の大名に知られて、師として迎へられたもので、始めに、水戸の烈公が、禮を厚うして迎へた。之も畢竟學問のためだが、其烈公の邸で孝經の講釋をした時、說き方が巧いので、傾聽してゐた烈公は、坐に感涙を流された。やがて講義が終るを待ち、立派な膳部を出して饗應すると、一種變つた男だけに、『斯樣な御馳走は頂戴致さぬ』と、どうしても手を附けない。强ひて賴んで、麥の粥に味噌汁を出す

と、彼れは喜んで食べたといふ。

又其時代に、水戸家から屢〻使者が來たものだが、或時、使者が延陵を訪ねると、折柄、彼れは、門前の畠に、せつせと草を刈つて居た。使者は、まさかに其男が延陵先生とは心附かず、『御主人は御不在か』と聲を懸けると、『不在だよ』と、其男が答へる。併し、折角來たものだからと、一應家へ入つて、改めて在否を聞くと、『主人は、ソレ其處に草を刈つて御座る』と聞かされ、驚いて引返して『なぜ御自身で不在だと答へられたのか』と、不審の餘り問うて見た。すると、延陵は聲に應じて、『光る刀をさした人は、兎角怖いからなァ』とばかり、呵々大笑して、澄ましたもの。

彼れは、又加賀侯にも、有馬侯にも、屢〻召された。曾て有馬侯の爲に論語を講じたが、其第一回の時、侯の態度が甚だ倨傲であつたため、延陵入いに不快として、今後、相當の敬意を以て待たずんば、斷じて講義に罷り出ないと、きつぱり斷つたので、

侯も深く自ら悔い、爾來、頗る優待したのみならず、信寵益〻厚くして、遂には侯の勸めに依り、幕府の寶物改め役を拜命した。

此一事は、彼れに取つて頗る意義ある任官で、例の法帖通たる彼れは、幕府の寶物を扱つて、一層眼福を得たことであらう。有名な「世尊寺法帖」も、幕府の書庫で優品を見たのに、其端を發したものと思はれる。延陵が、いかに有馬侯に寵せられたかは、彼れが墓には、侯が親しく篆額を書いて居られることによつて、十分に窺ひ知られる。苟くも當時の諸侯として、滅多に人の墓などへ自ら筆を執る筈はない譯だ。

三一　中澤雪城

廣告術の妙諦

中澤雪城は、越後長岡の出身者である。幕末に際して、長岡藩は、三人の才俊を選び、江戸に游學を命じた事があつた。其時雪城は、自ら心に其選に入るべきを期待してゐた。然るに、其選に漏れたので、彼れは大に憤慨し、よし、自分は、彼等三人に譲らぬ程の名を成して見せると、奮然意を決して上京した。

彼れは考へた。學問の方面で成功は困難である、寧ろ異つた方面から彼等を凌駕したがよいと。そこで大に書道を志し、當時、書を以て天下を風靡した、同じ越後人の巻菱湖に入門し、遂に菱湖に亞ぐの名聲を揚げ、其素志の如くに成功して、長岡藩から遊學した三俊才の名は傳はらぬが、彼れの名は、今も傳はつて居る。尤も其大名

を成したに就いては、彼れが慧敏の性も、亦與つて力があつた。茲に彼れが名を得るに巧であつた一話がある。

彼れは、同門の秋巖と、菱湖に次いで竝び稱せられ、二者、甲乙なしといはれ、師の沒後は、兩人が書壇の牛耳を執るやうになつた。其頃、向島の或神社に幟を獻ずるものがあつて、其關係者から、二人に揮毫を依頼した。處が秋巖の潤筆料は極めて廉いのに、雪城は二十兩を請求した。其頃の二十兩といふ金は、今と違つて非常の大金であるから、依頼者は頗る驚き、二人敢て甲乙はないのに、一が廉くて一は之に幾倍の高値とは、不當も甚だしいと、内部では大分揉めを生じたものゝ、そこは江戸ッ兒だけ、兎に角要求通りを渡した。

斯くて二つの幟は出來た。其後、向島に祭りをした時、之を押し立てることになり、さて筆者たる秋巖、雪城にも案内して、參拜旁〻幟を見にお出下さいと招いて來た。

やがて其晴れの日になると、雪城は、柳橋から屋根船を傭ひ、之に多くの藝者を載せ、大變な陽氣で、三味線などを彈かせ、向島の神社近くへ船を艤して出かけて來た。前に依賴したものが出迎へると、雪城は、先づ祭禮を祝し、甚だ輕少ながらと言つて、船に積んで來た菰冠りの大きな樽を三樽出して、之は寸志だと寄附をした。そこで一同は大に敬服し、曩に二十兩の謝金は法外だと苦情を鳴らしたものも、今更内心面目ない思ひがした。然るに、一方の秋巖は、極めて質朴に、こそ〳〵とやつて來て、殆ど何處に居るか分らぬ位なのに比べると、一方は藝者を引連れての豪奢ぶりだから、大に祭禮の景氣を添へて、之が江戸ッ兒の肌合に投じ、成程、先生なるかなだと、生きた大廣告ともなり、名聲更に一段と高くなつた。

此雪城の遣り方は全く一種の廣告で、而も、江戸ッ兒に喝采されること受合の、最も效能ある廣告であつた。彼れが機に投ずるに敏なることは、此話によく現はれて居

ると思ふ。

雪城は、毎月必ず某々の日を定めて、諸方から依賴の山成す揮毫を、一擧にして書き上げるを例としてゐた。常には悠然として遊んでゐるが、其日になると執筆する。而も其當日には、二三の藝妓を柳橋から呼び迎へ、之に紙を展べさせ、墨を磨らせ、或は依賴しに來た人々が其場に居れば、それに酒を侑めて斡旋させるといふ、實に贅澤な遣り口をして、其間に染筆しつゝ、何百といふ澤山のものを書く。彼れが健筆の事は、今も尙傳はつて居るが、鄕里越後へ歸つた時、或豪家に滯在中、屛風二十餘枚を一日に書き上げ、尙綽々餘裕があつたといふ。十雙にしても、一雙十二枚、都合百二十枚書いた譯だから驚かれる。又大書箋に千字文を書く時は、字數が多いので、普通は、字割をして書かねば、到底納まらぬのであるに、雪城は曾て字割をせずして、きちんと書く。所謂手中に尺度ありといふ趣きがあつた。

彼れは、今話した如く、家に在つて執筆の際は、藝者と杯盤との間に取り圍まれてゐたが、旅行中も亦贅澤で、何處へ行つても、次の間附の堂々たる客室を占め、必ず伴を連れて、恰も殿様御泊りといふやうな形であつた。

義士遺墨蒐集の苦心

雪城には今一つ小話がある。曾て旅行中に、例の忠臣藏で誰も知る赤穗の地に、暫く滯在したことがある。其頃からでもあつたらうか、頻りに義士に感興を有つて、非常の苦心で義士の遺墨を集め出したが、これが却々當時に在つてすら得難いもので、隨分流行物だけに贋物も多かつた。それを、雪城は書の鑑識家であるから眞贋を鑑別し、四十七人の正しいものを得ることに沒頭し、年を重ねて追々と集め、遂に殆ど大成したが、茲に一つ芝居でいふ力彌、卽ち主税良金の墨蹟だけは、若年者だけに、一向何處にも傳はつて居らぬ。そこで雪城は、此一枚を手に入れたいと、久しく大なる

苦心を費した。

然るに、赤穗で交はつた某から、其本家に、主税の手習ひした文字が二枚殘つてゐて、今も家寶としてゐることを聞き込んだ。併し、容易に讓り受けることの出來ぬのに閉口したが、漸く一案を獲、其分家某が極めて愛石の癖あることに思ひついて、世才に富んだ雪城は、之は何でも此人を石で動かすの外はないと、其後、諸方遊歷の間に、珍らしい、愛石家の乖誕するやうな奇石を發見し、之ならばと其石を携へ、再び赤穗に來て、彼の分家某に示した。一見した某は、腰を拔かさんばかりに驚き、是非讓つてくれと言つて切に欲しがる。雪城は態と、『これだけは自分は到底離しかねる』と、大いに讓り惜む色を見せ、先方が尙强ひて求める時に乘じて、『御本家に在る主税の書二枚の中、其一枚を讓り受けたいが、貴下が若し此石の代りに其書を貰ひ受けて下さるなら、喜んで差上げませう』と切り出した。

處が其策は中つて、分家某は、石を手に入れたい一念から、兎に角其頼みを承諾した。併し、自分の物でない本家の家寶、それを容易に取り出し得る筈はない。どうしたものかと苦心の末、病に託して、態と悄然とした姿で本家を訪うた。本家では、元氣のない其樣子を怪しみ問ふと、待構へた某は之に答へて、近年、心の病を得て、慾念ばかり内に燃え、少しでも物が欲しくなると、十日も食事が出來ぬ程だと云ふ。之を切掛に、だん〳〵話を進めて、始めて主税の書を一枚貰ひたいと言ひ出した。本家では、二枚もあるもの、家寶だからとて、分家の生命にも係はる場合、之を救ふが親戚の道だと、遂に一枚を與へたので、大喜びで立歸り、それを以て彼の石と交換し、此苦肉策が成功して、主税の書は雪城の手に歸した。河野鐵兜が、此事を記した長い詩中に、

明日詣二宗家一。眉間有二戚色一。宗人問二來由一。掀レ膺長大息。近來心疾偏。百慾皆内

逼。玩好一觸レ懷。旬日不レ能レ食。

とあり、更に本家は「義人雖レ可レ崇。不レ及二族人德一」と言つて遂に與へたと叙してある。即ち雪城は之を得て、始めて義士墨蹟の全部を蒐集したのであつて、此事は五峰君の「北越詩話」中にもある。斯くして完璧となつた義士遺墨は、後に越後塚山の長谷川家に珍藏されて居ると聞く。

雪城には子がなかつた。曾て一度明治の文壇に重きを爲した川田甕江を養子としたが、それは、恰も醫界の泰斗青山胤通が、曾て平田篤胤の子、鐵胤の養子になつたと同樣に、一寸面白いことに思ふ。今の石黒男爵も、一度は雪城の門に教へを受けたさうで、丁度其頃、川田の養子時代であつたといふ。自分の手に、雪城が旅行中に持ち廻つた手帖樣のものが十册程あるが、其内に、自己の經歷を簡單に一詩として、之を印に刻したのが押してある。其詩は斯うだ。

曖姓中澤名俊卿。字曰二子國一號二雪城一。北越長陵寒村士。硯田糊レ口一書生。

三一　賴春水

剛毅の質

賴家は、春水山陽以來、有名な家となつたが、もとは紺屋が家業で、家號を賴金屋と云うた。春水、春風、杏坪の如き、兄弟皆學者が出たので、賴金の「金」の字を省き、賴の一字を姓とすることになつた。

春水は細心謹嚴の學者で、山陽の如き豪放の資を闕いた樣にも見えるが、其傳はつて居る逸事から見るに、なか〳〵剛毅の質であつた樣である。

廣島藩の世子の侍讀であつた時、一日、世子は、自らまた穗の延びぬ青麥一本を折つ

て、之を花瓶に挿み、床の上に置かれた。偶〻春水、世子の側らにあつて、之を見て云ふには、これは怪しからんことをなさる。麥は萬民食料の主なるものである。君侯貴しと雖も、妄に麥を折つて一時の娛樂に供さるべきでないと、座を起つて花瓶より麥を拔き取り、之を戶外に棄て去つた。侍臣は手に汗を握つて、若殿の氣色如何と氣遣つたが、春水は毫も畏れ憚る色が無かつたと云ふ。亦浪華に在つた時、蒹葭堂の木村巽齋、多くの古玩に富み、遠近の名流は遙々訪問して、門前、市をなす有樣であつた。元來蒹葭堂は多能の人で、書でも、畫でも、人に優れて居つたから、骨董癖などと同視すべき者で無いは言ふまでもないが、晩年較〻自負の色があらはれたので、春水之を忌み、ある時、蒹葭堂が、多くの名流の來るのを鼻にかけて云云すると、春水笑つて云ふには、貴公、それは思ひ違ひだ。多くの人が君を訪ねて來るのは、主人に遇はんとするのではなく、君の藏品を見たいためであると、一本喰はしたので、蒹葭

堂もこゝに鼻を折られた。又春水の頃には、上方は勿論、全國、應舉の名聲が響き渡つて、何人も、其の一幅を藏せんと心掛けた位である。而るに、春水は之を俗畫と賤んで、自ら求むることをせなんだのみならず、時に人から贈られても、直ちに他人に與へ、之を家に存することをしなかつたと、春水自身云うて居る。

此等の資質を見ると、山陽の父たる所がよく現はれて居る樣に思はれる。

三三　筱崎小竹

渠と精里父子　山陽をして詩文に驥足を展べしむ

亡友吉田東伍博士のため、親戚故舊が鄕里の墓地に碑を建てようといふ時に、自分は、其撰文を久米邦武博士に賴んだ。其碑文は既に出來たが、元來、久米翁は、賴まれたからとて、妄りに碑文を書くやうな肌合の人ではない。日外も大隈邸で遭つた時、翁は、此頃彼地此地と旅行したが、大阪其他で隨分碑文の註文が出た。だが、孰れも成金だから、斷つて來たといふ話であつた。吉田博士は幸ひ成金でなかつたから、翁も早速其碑文を書いてくれる氣になつたのかも知れない。

今話した其碑文の一件で、曾て大崎の邸に翁を訪うたことがある。ふと見ると、應接間に、筱崎小竹の七律を書いた酒の詩が一幅懸つてゐる。七十歳といふ落款で、久米翁の爲にと書かれてある。そこで、談は端なく此事に及ぶと、翁の話に、父は、佐賀藩の用を帶びて大阪に出張し、其頃、小竹と往來した。之は、父が、當時小竹から贈られた詩で、此詩の酒に關してゐるのは、父が大酒であつた事を意味してゐるといふのであつた。處が今の邦武翁は、一切酒盃を手にしない下戸であるから、自分は、貴下の父君にして豪酒とは妙だといふと、翁は一笑して、更に話を進めたのであるが、其時

の小竹に就いての話が頗る面白く感じたから、紹介しよう。

それは、久米翁と同藩の古賀精里竝に其息侗庵と、小竹とに關聯する話だが、由來、小竹の書は、一家の風あり、一時、小竹風の書といふものが行はれた程の能書であるが、之が又精里の書風によく似てゐる。といふのは偶然でないので、彼れは、實に精里に師事したことがあつて、其門から出たものである。彼れ、初めは徂徠派の學者で、志しを立て、江戸に出た。折柄、精里は、昇平黌の學頭として名聲頗る高かつた。小竹が、精里の教へを受けようと、其門を叩いた時、自分は、徂徠派の學問をやつてゐますと告げると、精里は之を聞いて、足下は、朱子學派の某々の書を讀んだことがあるかと、二三の書名を指摘して反問した。處が孰れも小竹の未だ讀破せぬ書であつたから、其通りを答へると、それ位の書は一通り讀んだ上で、自分の學派を定めるがよからう。兎に角、息子がお相手をするだらうから、其書を毎日二人で讀んで御覽な

さいと、精里から深切に注意された。

爾來、其家に寄食することになつたが、小竹の相手になつてくれる筈の、此家の若旦那で、古賀塾の塾頭たる、精里の息侗庵は、毎日碁ばかり打つて時間を費し、それが終ると、悠々として釣に出かける。そんな工合で、精里から言はれた書を、更に一緒に讀んでくれない。已むを得ず、一人で其書に眼を曝し、驚くべき精力を以て、毎日、高さ一寸に及ぶ位も讀書をしたといふことである。

然るに、一方の侗庵は、稀に、思ひ出した如く、其書を手にすることもあるが、例に依つて、一向熱心な樣子は見えない。小竹も、心中に、之では困ると思つてゐたが、時々、書の事で、侗庵と議論を鬪はして見ると、其陸に讀んでゐない筈の侗庵が、所論頗る要領を得て、且つ案外に書中の事實に通じてゐるので、初めて其異常の天才に驚き、之は全く非凡な人だと、漸く畏敬の念を生じた。

或日、塾の風呂に、小竹と侗庵と、二人で浴することになつた。先づ侗庵が、衣を脱して浴槽へ飛び込んだが、酷くぬるいのに辟易し、小竹に向つて、君は幸ひまだ裸にもなつて居ないから、一つ火を焚付けて貰ひたいといふことで、小竹は遽に火焚役となつた。斯くして一人は浴みながら、一人は火を焚きながら、世間話から學術談と、彼れ一語、我れ一句、いろ〳〵言葉を交してゐた。其時、侗庵は、窓から庭前を眺めると、恰も梅の眞盛りだ。話が自然梅花に移る。侗庵は、先づ、日本人は大いに梅花を賞するが、支那に於ても亦然うだと冒頭して、支那では、何の時代から梅花を賞揚し始めたとか、如何なる詩人に最も梅花の詩が多いとか、數ある梅花詩中にも、傑作といふべきは之々だとか、一寸した梅の事に就いてすらも、一々驚くべき該博な知識を示して、談話は滾々として泉の如く、全く小竹の知らざる事を、典據を擧げて滔々とやるので、小竹の敬服は、更に一層を加へて來た。

併し、侗庵は、餘りに記憶がよすぎた爲に、それが却つて累をなして、其文章は、どうも面白く思はれない。要するに、彼れは餘りに物を知り過ぎた。而してそれを避けるため、故らに一種捻つたものを作り、詩でも文でも、成功しない氣味があつた。精里の門人が、退塾或は旅行する時、之に贈詩の場合などは、彼れ自ら詩を作らずして、咄嗟の間に、恰も其時に箝るやうな古人の詩を、すら〳〵と、當意卽妙に、例の得意な記憶力の底から取り出して直ちに書く。恐らく此方が彼れに取つて大いに樂であつたのであらう。孰れにせよ、侗庵は、世に傳へらるゝ以上に、驚異すべき學殖を有したらしい。

そこで、流石の小竹も、つく〴〵敬服した結果、之から學問をしようといふには、古賀の塾では、到底追ひ付くものでない。寧ろ、諦めて引き取らうと、斷然決心して、さつさと鄕里へ歸つてしまつた。斯くて別懇な賴山陽に、其の仔細を物語ると、山陽

は例の傲岸、『いや、俺は是非とも上京して、學問で大功を顯はして見せる』といふ。親友の小竹は、それを頻りに氣遣つて、詳かに古賀父子の畏るべき學殖あることを告げ、之から遣るのでは、とても頡頏は出來ぬと言つて、切に山陽に說いたので、山陽も、遂には其の言を容れて、學問に對する雄志を一擲し、精里父子の短所とする文と詩とに向つて驥足を展べ、其異れる方面に於て、彼れは遂に對抗し得た譯で、山陽をして、其詩文に、光輝ある名と力とを殘さしめたのは、卽ち小竹の忠言に、全く其端を發したのである。斯くて賴久太郎の名は、古賀小太郎と竝稱せられ、當時の所謂「三太郎」中の一人となることが出來た。

三四　福地荀庵

附會問答　「雲耶山耶」の粉本

明治の初期に、操觚者として名聲のあつた、櫻痴居士福地源一郎の父は、長府の產で、通稱荀庵、名は載世、字は大車、石橋と號した。中年、長崎に移つて、醫を業としたが、文久二年、六十八歲で歿した。其の書生時代は、專ら大阪なる筱崎小竹に師事し、其の塾の先輩であつた。荀庵、非常の才物であつて、小竹も、每々懇意の人に之を誇りとした位である。此時分、賴山陽、京都で漸く名聲揚がり、小竹とは、特別に親しく往來した。ある時小竹、荀庵を伴うて、京都に山陽を訪うた折、山陽と共に、大丸の別莊に招かれた。其際、小竹は荀庵を指し、每々君に噂してゐる門人はこれだと云う、山陽に紹介した。軈て種々の雅談が湧いた。荀庵、山陽に向つて云ふ

には、我邦の文物、大抵、支那より來て居るは云ふ迄もないが、私案ずるに、和歌の如きも、支那より來た樣に思ふと、奇警の言を發した。山陽の、其の意を解しかねたのを見て、さもこそと、試みに一例を擧げんと喝破し、論語にいはずや、「司馬牛が、憂へて曰く、人は皆、兄弟あれど、我れ獨り無し」これ和歌にあらずやと。一座、意外のこじつけに一笑した。山陽は、斯ることに負けて居る人物にあらざれば、成る程、君の云ふ通りだ。併し、發句も支那から來て居るが、君はそれを知つてゐるかと、更に奇警の語を發し、荀庵の答へざるに先ち、語を次いで、春秋にいはずや、「夏五月、鄭伯段に、鄢に克つ」と云うて、一座を賑した。

此時分、天滿宮の宮司に、有名な國學者が居つた。山陽、ある時、荀庵を伴うて訪問した。話次、宮司の云ふには、近年、漢學盛んに行はれて、何もかも漢字を以て讀むことになり、國音もて讀むべき天照皇大神、八幡大明神などの神の名さへも、皆漢

音を以て稱せらるゝことになつたが、數年の後は、大方、春日大明神をシユンジツ大明神と云ふことになるであらうと云うて笑つた。山陽之を聽き、如才なく合槌を打つて居たが、傍らに荀庵、默して居られず、軈て喙を容れて云ふには、漢音濫用の弊は誠に御說の通で、御同感である。それに就いて國音をますゝ弘めんことを欲するの愚詠がある。試みに淸聽を汚さん。題は「みくにぶみを讀みて」といふのである。さて歌は、

はりとびがながくちなはのほことりてながさかばしにたつぞゆゝしき

と、いくたびも朗讀したが、宮司も、山陽も、一向に其の意を解しかねた。そこで荀庵、講釋を始め、先づ「みくにぶみ」と云ふは、「三國志」を國音に直したのである。歌は、張飛が長蛇矛を執つて、長阪橋に立つぞ由々しきと云ふのであると說き、皮肉に宮司を嘲つたことがわかつた。山陽、後に荀庵の世故慣れざるを戒め、彼の老人が「シ

ユンジッ」のしやれは非常の滑稽なるに、それを挫くは、人と應對するの法でないと諭した。

後年、山陽が九州に遊んだ頃、荀庵は長崎に在つた。其頃長崎の通辭に吉村迂齋と云ふがあつて、詩を善くしたが、山陽の尤も激賞した詩は、左の一首であつた。

三十六灣灣接レ灣。蜻蜓西盡白雲間。洪濤萬里豈無レ國。一髮青分吳越山。

然るに、山陽、長崎を發して天草洋に泊り、例の「雲耶山耶」の詩を賦し、それが盛んに傳誦されるに至つたので、荀庵、妙に感じた。といふのは、此の詩は、山陽が激賞した迂齋の詩と語意甚だ近く、惡く云へば、燒直したかの如き嫌ひもある。そこで荀庵、遙に山陽に書を寄せて、此事を詰つたが、山陽は、終に之に答へなかつた。

三五　江馬細香

山陽と相思の仲

山陽の女弟子に江馬細香のあつたことは、人の知る所であるが、細香は別に湘夢とも號した。山陽は門下に此婦人を得て、恰も袁子才に多くの佳秀なる女弟子があつたやうに、頗る得意であつたらしく、頻りに其才を持囃したものである。實際又日本の女流で、彼れが如く才學を有し、且つ詩を善くしたものは珍らしい。處で山陽と彼れとの關係に就いて考へるのは、單に師弟といふこと以外に、又別箇の興味がある。

山陽がまだ盛名を博しない放浪時代に、曾て細香の家なる美濃大垣の江馬氏に宿つたことがある。江馬氏は、大垣でも名ある醫者で、山陽は、當時本國の妻を離別した獨身時代、いはば一介の貧乏書生に過ぎなかつたが、滯留中、こゝろひそかに江馬家の娘に思

ひを寄せた。自分は曾て細香の肖像を見たことがあるが、それによつても、山陽が意を囑したのも道理と思ふ程、それはなか〳〵の美人である。處が其美人も、亦同じく山陽を慕ひ寄つて、若い男女は、何時しか婚約まで堅めるやうな仲になつた。然るに、細香の父は、始めから山陽を見縊つてゐたので、此事を耳にするや大に不興で、祕藏娘を、斷じてあの貧書生には與へられぬと、遂に之を遮つたため、相思の兩人は、氣の毒にも其間を割かれてしまつた。

併し、之が因緣となり、細香は、せめて生涯先生の御弟子になりとも加はりたいと熱烈な希望に、山陽も快諾して、爾來細香は、身を終へるまで往來した。此婦人は終生嫁せず、獨身で通して、七十歳を越えてから歿したが、其詩を讀むと、山陽の手も這入つたことではあらうけれど、閨秀の作としては、星巖の室たる紅蘭などの比ではない。畫にも亦巧で、殊に好んで竹を描き、墨竹に於ては、既に定評もある程だが、

さて此細香と山陽との間に、何か普通の師弟關係以上の關係が存在してゐなかつたかどうか。此點が相當興味ある研究として取扱はれ、當時から久しく問題とされてゐたものである。

之に就いては、どうも兎角の說がある。それも畢竟、細香が、婦人としては餘りに頻繁に大垣から山陽の所へ態々來て居る。勿論、詩文の添削を乞はんがためでもあらうけれど、それにしても往來が甚だ多い。さうして京に留まつてゐる間は、山陽の行く所へは必ず隨ひ、山陽の遊ぶ所へは必ず伴はれたのみならず、旅宿を一にし、起臥をさへ共にして居る。山陽の友人は、皆其際一緒になるが、孰れも細香を夫人扱ひにし、細香自身も細君氣取であつたので、其頃から、こいつは尋常の關係でないと、睨んだものもあつたらしい。

處で細香の歿後出版された「湘夢遺稿」二册がある。其劈頭に、山陽から細香に贈つ

た書簡が一通、序文代りに載せられてあるが、書狀の大要は、「貴女の詩を出版してはどんなものか。尊父も最早御老境、其御慰み半分に上木するが可いであらう。若し其場合には、自分が更に詩に斧鉞も加へようし、序文も書かうし、出版の世話もしよう」と頗る懇切に勸めた上、幸ひ手許に隨園の女弟子の詩集が一册あるが、進上するとまで附記してある。さて此「湘夢遺稿」を讀んで見ると、其の詩は、殆ど事の山陽に關せざるなしともいふべき有樣だ。或ひは先生と何處へ行つたとか、或ひは一緒に酒を飲んだとかと云ふ類だが、此の詩集から、又いろ〳〵の事實を知ることが出來る。そこで山陽、細香の關係に就いて、今少し話を進めてみよう。

果然祕密あり

細香は、今の所謂新しい女ともいふべきであらうか。彼れ、山陽と相遇へば、必ず共に酒を飲む。元來山陽は有名な酒豪であるのに、それと共に對酌するのみならず、

細香の妹で他に緣付いてゐるのが實家に歸つた時、細香の詩に、妹が歸つて來て洵に結構、これで酒呑の好伴侶が出來て、毎日無聊を忘れることも出來るといふのがある位だから、其妹も酒呑で、細香自身も、大分左黨であつたことが判る。

山陽が歿した時、其死別を悲しんだ詩は、幾つも幾つも「湘夢遺稿」中に載せられて、痛絶、骨を刺すものや、情味、人を動かすものを見るのであるが、彼れは、晩年に喀血した。然るに、先生と同じ病に罹つたとて、寧ろ之を得意がつたらしい詩も見える。又嘗て山陽が長崎に遊んだ時、淸客江芸閣(稼圃の弟)と交はつて、大に之を得意としたことは著名の話だが、江芸閣は當時邦人の珍客として迎へたものであるから、山陽は細香の事をも紹介して、門下に斯樣な女流がある、一つ御遇ひ下さいといふので、手紙で態々細香を長崎まで呼び迎へた。其時、細香と江との間に詩の應酬があり、其詩は「鴛鴦」の字を用ゐて、二人で作ることになつたのだが、細香は、詩中で、巧に男

の肌はまだ知らないといふ意を含めたものである。此時も彼れは、山陽先生のお蔭で、外國の大家と應酬するの光榮を得たと、酷く恐悦がつたことが、又此の詩集で窺はれる。

要するに、細香の遺稿は、山陽の裏面を知る材料ともすべきものであるが、玆に不可解なことは、曾て男に交ばらぬといふ細香に、「閨怨」の詩が一首見えることである。それも、決して架空的に課題で作つたものでないので、兎に角尋常の作ではないらしい。女丈夫と稱せられた彼れの詩には、奇々怪々と謂ふ可き譯で、其詩の評者も、解す可からずと云つて居る。卽ち此等から考へても、二人の上に、益ゝ疑雲が濃くなつて行かざるを得ない。

果然、此疑ひは獨り自分のみでなく、近來山陽の研究家は大いに探索の歩を進めて、愈ゝ之は無關係でないと斷ずる人も出て來た。坂本箕山といふ人の書いた「賴山陽」と

名くる相當厚い本があるが、此人、餘程研究を積んだと見えて、細香に就いても、なかなか詳しく書いてゐるさうだ。自分はまだ其書を讀むの機會を得ぬが、一讀した人の話によると、同書に據れば、山陽と細香との間には、一人の子供さへあつたので、細香が之を隱すに一通りならぬ苦心を拂ひ、名古屋の或農家へ、密に之を託して置いて、毎月仕送りしてゐたが、幸か不幸か、其子は早く死んだといふことである。此研究は、つい此頃のことだから、孰れ何かの證據を得て、斯く斷定したものであらうが、自分も亦此說に左袒せんとするものである。

三六　中島棕隱

泥鰌割き

中島棕隱は、賴山陽と時を同じうし、一時才人の名を博した。其の住所は京都の二條で、この二條を銅駝坊と云ふ所から、棕隱は自分の居を銅駝餘霞樓と云うた。

此人、文才あり、又詩にも長じた。性來放縱で、物に頓着しなかつた。ある日、友人が訪ねたが、不在であつた。いつ歸ると聞くと、先生は、家を出ると、十日も歸つて來ない。どこに居るかも知れないと云ふ。其人、翌日或町を過ぐると、泥鰌屋の店先きに、町人共に交つて談笑して居るのを認めた。そこで、一禮して、通過ぎんとすると、棕隱、待ち給へと呼び留め、おれが庖丁の腕前を見給へとあつて、急に兩肌を

ぬぎ、俎に泥鰌を載せ、釘でトンと留めて、刀を操り、美事之を割く業は、なか〳〵素人でないのに、友人も喫驚したが、棕隱、四五尾割き了り、どうです、うまいものだらう。

嵯峨小稿

此人が、嵯峨嵐山に遊ぶ毎に詠じた詩を、輯めて上木した「嵯峨小稿」と云ふ書がある。これを見ると、此人が如何に多才で、文字を弄するに如何に自在であつたかがわかる。或時、嵯峨よりの歸途、左の詩を口吟んだ。

青梅累々麥含々。節感相移顧再三。昨日全都風詠路。行厨無三復一人擔。

ある友人、此詩を見て、これは妙に險韻を履んで居る。一詩は出來もするが、「含」「三」「擔」の樣な韻で多く詩を作ることは、君と雖も難からうと云ふと、棕隱の云ふには、險韻ではあるが、いくつでも遣れるであらうと云うて、それから、嵐山に遊ぶ毎に、

此韻を用ゐて詩を作つた。ある時の如きは、一日三十數首を作り、終に前後百に垂んとする同韻の詩を得て、同人を驚殺した。「嵯峨小稿」は、此等の詩を輯めて版にしたものである。

因に云ふ、此人に棕軒の號のあるのは、家の庭に多くの棕梠樹が植ゑてあつて、秋風一たび拂へば、老翠簌々の聲あり、霜白く月冷かなれば、凛として鬼髪のごとく見えるを喜び、棕軒を號としたといふ。

三七　菊池五山

出入の一書肆曰く、

東都の詩壇に、一時名聲の高かつた菊池五山に、「五山堂詩話」と云ふ著述があつて、

毎年一册刊行するを例とした。此の詩話の内へ詩の入るのを、田舍詩人などは、此上もなき榮としたもので、爭うて入選料を五山に納れ、採錄を求めた爲に、五山の懷も溫まつた代りに、時の詩人連からは、皮肉な評も受けた。お婆さんとかけて何と解く、五山と解く、詩話(皺)がある、などと云はれたのも此故である。

五山は、幼少から貧乏育ちで、其の栗山の許に入門した時なども、著のみ著のまゝであつた。自分の友人の家に、五山が入門の時、父より栗山に贈つた書翰を藏して居るが、貧窮のことが委しく書かれて居る。栗山が、直ぐ其手紙の餘白に返事を認めた、著のみ著のまゝでも苦しく無いから、世話をして遣ると云ふ文言も添はつてゐる。彼れの貧乏時代には、人の爲に寫字などをして、僅に口を糊したこともあつて、五山白寫の本が往々ある。彼れが大家になつてから、或は彼れが尊大に構へて居ることを難じた文人もある樣だが、こゝに、晩年、彼れを知る、或書肆の主人が書き殘したもの

がある。それに據ると、五山の晩年卽ち七十位な時分は、下谷の練塀町に住んで居つた。書物屋は出入をしたが、曾て一たびも本を賣つたことは無く、いつも買ふ方であつた。五山から、月に幾度も、手紙を添へて、本引換に金を渡せと云うて來る。其の手紙には、必ず此本は一兩位するものだが、お前には特別に半値に賣つて遣るから、直ぐ代金を渡せと云ふ樣に書いてある。本を見ると、成るほど先生の云ふ通りで、廢なる拂物であるから、直ぐに代金を渡したものだ。然るに、こゝに可笑しいのは、先生から拂物があると、幾日も經たぬ内に、必ず誰か店に來て、此頃五山先生より何か本を寄越しはせぬかと云ふ。來たと答へると、其人の言ふには、あれは、自分の大切な本を、先生に貸して置いたのだ。それを無くされては、自分は困ると云うて、價を論ぜず買戻すが常であつて、自分の店は、二重に利益を得た。全體、五山、詩佛の二先生を、世間でいろ〳〵わるく云ふが、實際は、洒落な處があると評してゐる。五山は、

老境に入つても不如意であつたと見える。

五山の號は、李義山、陸象山等「山」の字のつく支那人の詩集五部の外、家に何物も無かつたので、此號を命じたと云ふ說がある。又無絃、桐孫などとも云うた。

三八　平野金華

默齋饒舌金華文無し

徂徠門下に二人ありと知られたる平野金華は、玄沖と云うた。非常の豪酒家で、徂徠の塾に居る頃も、時々豪飲を遺つて、塾中の治安を害した。口やかましい徂徠も、初めの内は、風三度節酒を勸めても見たが、一向に改めないので、徂徠も遂に其の爲すに任せた。或人が、先生、何故玄沖にのみ寬大なると問うたら、徂徠は、あれは見所

のある男だ。小節を彼れ是れ云ふに及ばぬと云うた。流石に徂徠は、人を識るの明があつた。

あるとき、徂徠の塾に、多くの同窓、會した時、石川默齋が、いろ〳〵口を利いて止まぬのを、金華、五月蠅く感じ、『君は默齋と名乘りながら、默さぬは如何』と云ふと、默齋もさゐもの、言下に金華に向ひ、『君は金華などと云うて金がありさうで、其實無いのは如何』と一本遣られた。金華は、事實、酒故に常に赤貧であつた。

金華、仕官して後も、一世を侮弄して、放縱を改めなかつた。佳節に、上官の注意で、祝賀の場合、餘りに垢のついた衣類を着けて登城するは、無禮に當ると云うた。金華は、そこで妻の衣類を着し、臆面もなく登城したが、役人は之を見咎め、婦人の服を着くるは禮であるまいと詰つた。金華は平然として、薄祿の小臣、家貧にして、衣類の新調、思ひも寄らず。女服なれども、己が服に比ぶれば、垢つかず且つ美麗で

ある。敢て敬意を失ふにあらずと辯じた。此事、主侯に聞え、卽日祿幾石の加增を受け、過ちの功名、飛んだ幸ひを得た。

三九　本田正郷

肥前越中の取組

肥後の本田正郷は、詩に俊逸の天才があつて、一氣數十篇、立どころに成り、人皆其の敏絶を稱した。

曾て長崎に遊び、其の學館を訪うた時、館の諸生は、かねて正郷の、才を負うて倨傲なるを聞き、一番挫いてやらんと、皆々申合せ、豫め腹稿を具し、正郷を迎へて、次韻を乞ふと云うて、諸生吾勝に詩を出すのを、正郷一讀、直ちに筆を下して次韻し、其

次其次と、忽ち十數詩に次韻し、筆を揮ふこと飛ぶが如く、幾ど構思の暇も無い程神速であつたので、皆々瞠若として自失した。座に畫を能くするものあり、今度は畫贊を と求めたが、これは構思の餘地もあることなれば、正鄕には樂なもので、一畫成る毎に直ちに題詩を錄し、これ又數紙に及んだが、一向に滯滯が無い處から、今度は品をかへて、舌戰以て壓服せんと、口々に難題を持出し、正鄕は、孤軍、八面敵を受けた。併し、彼れの才辯は能く之に當つて、毫も窮することなく、終に舌戰に於ても勝を占めた。

諸生が出した難題の一に、貴君の熊本藩では、古來儉素を尙ばれ、犢鼻褌の如きは、長尺のものを厭ひ、必ず「越中褌」を用ゐられるさうだが、全體「越中褌」は、貴藩の祖とも云ふべき細川越中守三齋公の創製されたもので、越中の名も、それで附いた譯だ。仙藩に於ては、此の褌を越中と呼ぶこと、敢て妨げなしとするも、貴藩に於て、

君侯の稱を、斯る不淨のものに呼ぶのは不敬であらう。貴藩、必ず別名あらん。他藩の人に向つては、「寡君褌」とでも呼ばるゝか、(漢學時代には、自分の藩侯を、謙遜して寡君と呼べり)と云ふごとき皮肉の問を出し、暗に正鄕を愚弄した。正鄕之を聞いて、なか〳〵負けて居らず、笑ひながら、自分よりも諸君に問ふことあり。世に所謂「肥前瘡」なるものは、多く卑賤のもの、罹る病だが、士大夫も、動もすれば傳染を免れぬ。論より證據、諸君の內には、その瘡痕を面部に殘して居る人も見える。全體、此の花柳病は、貴國より始まつて、追々全國に蔓延した。他國では、肥前瘡で通つて居るが、貴君等の鄕土では、何んと云はるゝ。他邦人に對しては、「敝邑瘡」とでも呼ばるゝかと一本參つたので、一座、其の機警に服し、再び嘲謔するものがなかつた。

四〇　館柳灣

館姓の由來

越後文壇の傑物として、近世に於ては、何人と雖も、館柳灣を第一に推す。

彼れは新潟の人。菱湖とも親族の間柄で、共に西蒲原から起つたもの。兩人互に刎頸の交りがあり、菱湖は柳灣を兄と呼び、柳灣は菱湖を弟のやうにしてゐた。今新潟に在る館家は、柳灣の一族であるが、別家に當つて居るらしい。柳灣は、幕府の役人をして、格別高い地位でもなかつたが、資性頗る謹嚴で、役人としても評判がよかつた。長所は、何と言つても詩で、彼れが作詩の、如何に價値あるものであるかに就いては、友人坂口五峰君が、其著「北越詩話」に於ても、十分發揮してあるが、自分は、柳灣の遺稿を二三册借りて見て、頗る面白い事實を發見することが出來た。

柳灣の著で、世に現はれたものは、既に「柳灣漁唱」三册があるが、此以外のもので、館家所藏中に尊い珍らしいものがある。其中から語るべきものもあるが、先づ其遺文を一讀して、此詩人の素姓を知るのも一興である。

西蒲原郡卷町の或醫者が、古い榎の樹を材料に、小さな机と藥籠箱を作つて、柳灣に、其記を書くやうにと賴んで來た。柳灣は、自分が生地の人からの依賴でもあり、且つは其榎の樹にも因緣があるので、直ちに快諾して一文を草した。其文によると、卷町に古い館の跡がある。其館は、上杉管領幕下の士で、西山某の住まつたのだと傳へられる。上杉氏去つて後、西山も亦隨つて越後を去つた譯であるが、其城址を、土民が開墾して田を作り、今は全く面目を改めたが、「館新田」の名に其昔を偲ばせて居る。柳灣、猶此地に在つた頃、其屋敷跡に大きな榎の樹があつたが、其一本は腐朽して倒れ、二本目のも、享和の頃に倒れてしまつた。そこで、土地の醫師某が、文字あ

るものだから深く之を惜み、机や箱に作つて、保存したのである。

斯る因縁ある上に、柳灣にとつて、卷は4家の起つた所「舘新田」の名は、卽ち其姓の起つた所以であるから、彼れは、喜んで其記文を草したといふのである。此事が件の稿中に出てゐる爲に、卷と柳灣との關係や、舘姓の由來なども、始めてよく判然した。尤も此文中に少しく事實を誤つた點もあるとやらで、其誤記の部分に就いては、今の新潟の舘氏が曾て訂正したこともあるが、管々しいから玆には言ふまい。

聟等が制裁覺悟の詩集出版

柳灣は、稀なる長壽で、九十歳近くまでも生きた。詩集の、初めて上梓されたは六十歳の時であつたが、爾來十一年目に一集を出すといふので、七十歳の時に又一集、八十にして又一集と、三集までも公にしたが、四集目は、稿本はあるが、何處へ逸したのか、舘家にも殘つて居らぬ。彼れは、性來謙遜家で、容易に自分の詩を上木しな

い。人が勸めても肯じないので、其一集を出す時も、三人の聟が出したいと思つたが、父へ氣兼ねして言ひ出せず、親戚なる菱湖を訪うて相談した。菱湖は曰く、『構ふに及ばぬ、出したがよからう。親父さんが若し草稿を出してくれねば、幸ひ俺の所に書き留めて置いたものが相應にあるから、其中から選ぶさ』と、甚だ無雜作に同意したものだ。

それでも三人は尙決しかねて、若し父に叱られてはと躊躇してゐる。そこで菱湖は三人に向つて、叱られた時は罰盃を受けるが可い。其覺悟で遣るべしといふ。處が惣領娘の聟に當る人が、更に酒の呑めぬ生下戸であるから、『其懲罰は甚だ困る。假りに父の詩を百首錄するとしたところで、一つの詩に一盃づつなら、百盃を呑まねばならぬ。之は亦迷惑至極。其時は、どうか貴下もスケて下さい』と賴むと、其時、一番末の聟が進み出て、二人の相聟を顧みつゝ、『我々は皆酒嫌ひであるが、此大切の場合

に際し、酒を恐れて成功せぬやうでは口惜しい。宜しい。叱られたら、百盃でも、二百盃でも呑みませう』と立派に言ひ放つたので、菱湖も満足し、斯くして柳灣の第一集は出版される運びとなつた。

柳灣と菱湖は、餘程密なる交情で、彼れが詩中にも、菱湖が金を寄越してくれる筈であるのに、それが送られて來ぬ爲に、春になつても遊びにも出られぬ。困つたものだといふのがある。彼れは又長壽ではあつたが、老いるに從つて、耳に故障が出來るやうになつた。何でも酷く耳が鳴るので、其外に、眼華といふ眼病にもなつた。此二つには頗る閉口したらしいが、彼れは滑稽の才もあり、天性洒落でもあつたと見え、此病に就いても諧謔を弄した詩が、既刻の詩集にもあるが、未刻の方にも一首ある。それは斯うだ。

聵々瞽々那用レ嗟。幽觀清聽自堪レ誇。耄年奇況無二人識一。耳裏風泉眼裏花。

彼れは、詩に於て名聲を博したが、別に和歌にも淺からぬ造詣を有つてゐた。現に館家に殘存する、其の歌集「浮萍草」に、「夢に新潟にかへる詞」といふ和文があつて、末に左の歌が記されてゐる。文は、頗る情味ある面白いものであるが、長いので、今茲に紹介出來ぬは遺憾である。

年を經てかへりこし身のあはれさを月にかたらふ有明の浦

四一　柏木如亭

薄倖の詩人

江戸に高名の大詩人中、柏木如亭は、二度までも越後へ往つてゐる。如亭も、越後には餘程興味を感じたと見えて、殊に新潟に流連し、美人趣味には最も心醉したらし

く、此人の新潟を詠じた詩は、「新斥富史」にも載つて居る。之も慥富史に收められた詩と思ふが、其終りに、

花顔柳態令二人艶一。火蟹霜螯開二酒懷一。莫レ道三年留二一唉一。此間何恨骨長埋。

と詠じて、新潟の鮭や鱈場蟹に、例の食道樂の面影を殘してゐるが、花柳界には特別に興味を動かしたもので、越女一笑、三年留るどころではない。長く骨を埋めても辭せぬとまで、此詩人は讃美して居る。尤も之は、一番最初に遊んだ時の詩であつて、其後越後再遊の時は、三條邊まで來てゐたので、新潟の舊知から、今一度此方へも來てはどうだと勸められた上に、本人も遊志勃々であつたが、風雪甚だしく、舟行に艱んだため、遂に新潟へは來遊の機を失した。そこで非常に之を遺憾とし、歸京の途上、新潟の圖を自ら作り、それに追想の一首を題した。其詩中には、「此境于レ今猶入レ夢。時追七十二橋春」とあつて、大に新潟に戀々の情を寄せた。

彼れは、若い時から頗るの風流才子で、頻りに花街に出入し、有名なる「吉原詞」といふ作がある。又「詩本草」といふ一册の書もあるが、此書は彼れの食道樂を現はしたもので、自分の好む食物を詩で表現したものである。先づ越後では鮭が第一といふやうな譯で、到る處、食物を詠じてある。彼れは、如何にも才氣横溢した詩人だが、併し又其生涯は、稀なる薄倖なものであつた。殆ど放浪の間に其の生を終つた人で、歿した當時は、墓すら建てるものが無いので、小竹や山陽や玄瑞などが集まつて、漸く建てゝ、やつたといふ程、洵に薄命な人であつた。

自分は、其薄倖な點に於て、常に此の詩人に同情して居る。固より彼れは、流浪の生活であつたから、妻子もありながら、殆ど之を顧みず、又顧みることの出來ない境遇に在つたので、後には剃髮して僧となり、到る處、口を衝いて玉の如き詩を作つた。隨つて其詩は、幾千あるか分らぬが、惜しいかな、多くは今傳はらず、僅に百首の詩

を集めて版にしたものがある。其詩集の序文は、因是が書いたので、それに據ると、如亭は割愛に勇なる人だ。既に妻子を割愛し、更に己れの髪をも割愛し、而して其詩まで割愛して、幾千とある詩を捨て去り、唯百首だけしか殘さぬ。實に驚いた割愛家で、凡そ何人も、自己のものは、成るべく多く殘さうとするのに、如亭は、成るだけ少くして傳へたいとする所を見ても、洵に一種の人物だとある。

家は固より窮乏を極めて、一番大切にしてゐた硯までも、友人中村佛庵に割愛した。其時の悲しい情を、やはり詩に託して漏らしてゐるが、是等の點から考へて見ても、彼れが一方に驚異すべき天才であつたと共に、一方又甚だしく處世に迂であつたことが想ひ遣られる。

如亭は幕府の大工方で、江戸の町家の出であつた。勿論大工方と言つたところで、自ら大工をする譯ではなく、卽ち大工の元締ともいふべきもので、大工から若干の納

付を受け、それで衣食するといふ、一種の株であつたのである。明治の後、博物館長などにもなつて、多趣味家として知られ、また古器物の鑑識でも有名であつた、柏木貨一郎といふ人も、大工方であつたといふから、多分如亭と同じ家であつたのかも知れぬ。

兎に角、如亭は、斯うした畑から現はれた人物とて、所謂江戸ッ兒氣質であつたのも、敢て怪しむを要しないが、殊に如亭は、餘程の美男子であつたと傳へられてゐる。隨つて花柳の巷へ往來して產を破り、死後、其墓を修めるものすらなかつたといふのも、畢竟、美男子の祟りと見るべきであらう。友人某の家に藏する書簡に據れば、信州漫遊中、田舍芝居の俳優にまじつて、舞臺にも上つたとある。其頃の詩人にしては、頗る例のないことだが、江戸町家の出たる如亭としては、此位のことは奇とするに足るまい。

渠の吉原詞

如亭に就いて茲に又一話がある。自分は、親友坂口五峰君の所に、如亭の詩を書した二枚折の屏風があると、久しく聞いて居りながら、ついそれを見ずして過ぎたが、偶〻一昨年新潟に出て、五峰君を訪問した時、初めて其屏風を見ると、それは非常に面白いものなのだ。卽ち前にも話した有名な「吉原詞」を書いたもので、其詩は二十首、洵に健筆で書かれてある。元來如亭の書は、此種の詩を書くに最も適當した、才氣走つた書風だから、詩書共に氣の利いたものだ。

且つ此の屏風を書いたのが何處かといふと、やはり越後に遊んだ時で、之も友人の三輪潤太郎君の家に、曾て如亭が泊つた當時、主人の需で書いたといふことが題識によつて分る。卽ち、

少時穹廬二酒海脊山于北黑之中。作二吉原詞一數十首。爾來糊二口百方一。詩稿散落。

今爲二快亭一。書レ所レ記者二十首。匆々追二懷往事一。亦遊僊枕上一夢哉。

丁丑菊月　如亭山人。於二越後與板一。

とある。此が五峰君の家に在る所以は、三輪家で賣立の時、手に歸したものだといふ。處で此の二枚折の周邊には、所謂繪表裝で、極彩色の花卉が描かれて居るが、其畫が中の艶麗なる詩と相映じて、甚だ趣きを成して居る。五峰君は、此畫の筆者は分らぬと言つたが、其瀟洒の筆致を一見し、自分は、どうしても凡筆でないと思つた。尤も繪表裝の性質として、落款などの無いのが當然だから、筆者を知るに由もないが、自分は恍惚として、其畫と詩とに見入らざるを得なかつた。

其後、自分は、五峰君の友人等と會した時、頻りに此の屏風を褒めそやした。すると、圖らず此事が五峰君の耳に入り、自分に對して無雜作に、『それ程面白くば、君に上けよう。實は吉原詞だから、家に置く所が無い』といふ話だ。自分は深く好意を喜び、

『何よりの賜、謹んで受けよう。成程、君は吉原に興味を有つまいが、自分は、若い時鄕國を去つて東京へ來たので、强ち吉原に因緣が無いではない。但し、今は既に老いて、夢寐の間に此境に往來するのみ。そこで之を寢室に置くのも亦一興と謂はざるを得ない。殊に平生此詩人に同情する一人として、之を受くるは大なる幸福である』と、早速持ち歸つて、面白い藏品の一を加へた。

處で繪表裝の畫は、依然として筆者不明だ。これが知りたくて、三輪君に一簡を送つて問ふと、それが市上春琴だといふ返書を得て、之あるかなと膝を打つた。春琴も其頃越後に遊び、三輪家に寓した時描いたものと分つて見ると、當時の大手筆を一雙のうちに併せ收めた、双美双絕の此屛風を、自分は一層珍重せねばならなくなつた。

さて此「吉原詞」に就いては、多く語るにも及ばぬが、吉原繁榮の時代には、江戸の文人は、此場所を以て文を競ひ才を鬪はすの場としたので、當時吉原の詩に有名な

ものが三つあつた。其一は米庵の父章齋と、今一つは菊池五山の作で、他の一つが即ち如亭の此詩である。此三つとも、當時文壇に不朽の味ひを成したもので、三人の吉原詞が、いかに喧傳してゐたかを知るには、前卷に話した中村佛庵が、之が一家の文人で、又有名な好事家であつたが、今から百年程以前、吉原の大火で、あはれ不夜城も烏有に歸した。其時佛庵大に悲しんで、僅に燒け殘つた人門の木材を集め、三大家の吉原詞を銘々に書かせ、之を其木に彫りつけた上、向島の或佛殿へ納め、記念の意を表したといふ來歷さへある。之に依つても、此詩の人口に膾炙したことが分るが、此時の始末や詩は「崑岡炎餘」といふ一册の書として、當時世に行はれたものだ。

四二　鷲津毅堂

文人知事

維新の初め、奥羽に登米縣といふを置かれた。此縣に權知事となつた鷲津宣光が、毅堂と號した著名の文人であつたことは、今日では、右の縣の名同樣に、知つて居る人は尠いだらうが、近世の文壇に於ては、彼れも亦一傑物であつたと言へる。單に詩界に敬せられたのみならず、文章に於ては、近來の詩人中、如何なるものでも遠く及ばぬ腕があつた。一體、一口に詩人文士とはいふものゝ、此二つを兼ね備へて、頭角を現はすものは稀なのであるが、彼れは、二者共に非凡であつた。

勿論、其文藝に長じたにも謂はれがある。彼れは、維新の少し前、尾張侯に召されて、同藩の儒者となつてゐたもので、尾張侯は、實によく此人を優待した。其昔、紀

平洲が尾張侯に用ゐられて、藩學を司つたことがあつて、平洲も亦頗る重用されたものだが、毅堂は、之と趣きを同じうして、尾張侯では、無上の禮を以て待つた。そこで、彼れは、曾て平洲が詠じた八首の律に次韻して、感懷を遣つて居るが、之もつまり、同じ境遇、同じ待遇からの作である。

毅堂の曾祖父に當る人で、幽林といふ者があつた。此人、恰も平洲と同時代で、平洲の下に、藩學の事に當つてゐたのであるが、兎角兩者は議合はず、幽林は、自ら退いて家塾を開き、學徒に教へたものである。斯くて祖父に當る松隱といふ人も、父なる益齋も、此家塾を繼承し、尾張では、鷲津の塾は有名なものであつた。斯う云ふ來歷で、三代目に至り、始めて毅堂が藩學を司ることになつたのであるから、以前、曾祖父が、議合はずして袂を拂つて去つたと云ふ當時に於ける藩學の首座と同等の地位と待遇を贏ち得た譯で、鷲津一家としては、頗る感懷が深かつたことであらう。い

はゞ、曾祖父の恨みを霽らしたやうにも取れる。同時に、之が遡つて平洲の詩に次韻した所以でもあらうと思ふ。

此鷲津の塾からは、毅堂自身の如き、詩文に秀でたものを出したが、他にも、頗る著名の詩人を、二人まで出した。卽ち一人は、江戸の詩壇に鳴つた大沼枕山で、今一人は、一時尼弘の詩壇に覇を唱へ、後に東京に出て一層高名となつた、森春濤である。

二人は、毅堂の父の教へを受けたので、其在塾中には、隨分趣味ある話柄を殘した。二人は、其頃から詩に凝つて、殆ど色食よりも作詩を好み、寐ても覺めても苦吟推敲の姿であつたが、或時、塾生等は、夏季好晴に乘じて、一同の書を日當りよき庭前に持出して、所謂曝書をやつた。籤引で、其番人に春濤が當つた處、番人先生、頻りに膝を抱いて詩作に耽つて居た。折柄夏の頃だから、大雨驟に到つて、折角干した書物は散々に濡れた。それを、程經て漸く氣が附き、塾中から、大苦情を持ち出されたこと

がある。

枕山も亦在塾中、曾て郊外へ遊びに行き、頻りに苦吟しつゝ、ぶら〳〵歩いて、遂に溝に落ち、濡鼠となつゝことがある。そこで、當時は、何か戯れの話が出ると、必ず二人のことが話題に上つた。其頃春濤は浩甫、枕山は捨吉といふ名であつたので、よく「捨吉帶レ水。浩甫漂レ書」と言はれたものだ。

然るに、此の二人が、其後、東西に立別れ、相對して、詩壇の二大權威となつた。

毅堂は、晩年、當時を追想して一詩を賦した。

與二森春濤一話レ舊。戲賦贈。

旗鼓東西壇坫開。以レ詩爲レ命況天才。當年佳話吾能記。高鳳庭前漂レ麥來。

四三　僧西笑

案側に女子を侍せしむ

比叡山に、伊豫出身の僧で西笑と云ふが、大慈精舍の住持であつた。此僧、詩を善くし、文雅を愛し、他の俗僧と大に異なる所があつたが、他に猜まれて、終に叡山を逐はるゝことゝなつた。此時分、叡山の法として、凡そ醜評あるものは、其事實の有無に拘らず、傘一本を與へて放逐するが例となつて居た。そして西笑は、好色破戒の故を以て、此制裁を受けたのである。

西笑が斯る醜評を得たに就いては、そも〳〵原因がある。此頃、一山の僧徒は墮落を極め、書を讀み文を解する樣なものは、幾んど無かつた。西笑は、此等の徒と交はるを屑しとせず、堅く戸を鎖して精舍を出なかつた。これがそも〳〵種々の評を招く

基となつた。ある時、俗僧共、西笑は立籠つて何をして居るかと、そつと窓の隙より窺いて見ると、西笑、經案の下に趺坐して、行ひ濟ましては居るが、其傍らに、花を欺く一美人の、侍つて居るを認めたゝかねて猜んで居る者共は、一議に及ばず、此の深山に女子の居る筈はない。あの坊主、狐に魅せられてか、さなくば、何れよりか、人知れず女子を連れ來り、妾として居るのであらうと、口々に此事が說き傳へられ、一山の大評判となつて、終に山法に據り、處分されることになつた。

西笑、此處分に對し、不服を云ふでもなく、一本の傘を受けて揚々と山を下り、京都に一草庵を結び、之に住した。ある人、後日、西笑を訪うて、此事を詰つた時、西笑の云ふには、自分を色を好むと云ふ者があらば、全く其通りである。夫れ春花秋葉も色、山水烟華も亦色である。吾實に之を好む。紅裙紫袖、娥眉翠黛も亦色であるが、吾は尤も之を愛す。併し、女子を視て目を悅ばしむるは色を好むもので、女子を蓄へ

て行ひを穢すものは淫を好むものである。自分は色を好むけれども、決して淫を好むものでない。叡山の俗僧輩が、自分の院を覗き、案側に女子の侍するを見て、多分驚いたであらうが、あれは人形で、活物ではない。經文には、維摩の室に天女ありと記されてある。自分は、戯れにそれに倣つて、人形を置いたに過ぎぬ。實は、俗僧等に交はるよりは、語を解せざる美人に對する方が遙かに優ると思うて、寂寞を破るため、斯くしたのだと答へたので、其人、深く此僧の凡ならざるに服した。

四四　了覺道人

元祿義擧の識

人見寧の著した「黒甜瑣言」に多くの謎詰が載せてあるが、中にも赤穂義士の行末を

豫言した謎語もある。

義士が、事を舉げるに先ち、原、吉田、小野寺の三人、何か所用ありて紀州に赴き、其序を以て高野に登り、高臺院の了覺と云ふ僧が博識で、深く卜占の妙を得て居ると云ふを聞き、これを訪うて、心中に藏する大祕を、それとなくトはんことを需めた。道人は、初め『老衲は唯自然の無爲に任すのみ、人に示すべき語を知らず』と云うて空嘯いて居たが、三人が懇請して止まぬから、終に諾し、先づ三人を近づけて、其面を相し、掌文を案じ、目を閉づること半晌ばかりにして、忽ち四句を唱へ出した。

南村北落悉痴童。塗抹何時終作レ工。字母有レ神看レ所レ脚。一牛前定在二其中一。

三人は、之を解することが出來ず、歸つて之を大石良雄に語ると、良雄は、しばらく思案の後、はたと手を拍ち『成るほど、了覺は高野の名僧と聞くが、其言ふ所、如何にも、肯綮に當つて居る。先づ起句の「南村北落」は、面前の童子を把つて、卿等三人

に比したのである。「塗抹何時」云云は、道人の讖文も、終には當るであらうとほのめかし、第三句「字母有レ神看レ所レ脚」と云ふは、弘法大師の「いろは」を、七字づゝ排列して、其の脚字を看れば、「と、が、な、く、て、し、す」となる。道人は、一生の前定を、高野の開基空海の作りし字母に託して、吾等に教ふるものである』と說明したので、三人も初めて偈の意を領したと云ふ。義士は、復讎の後、罪を法律に得て死したが、道德上の罪を得なかつた。然れば、科無くして死すと云ふ讖文の豫言も當つて居る。意ふに、此一話は、或は好事家の擬作かも知れぬ。併し、趣味ある文嬉として傳ふべき價があるから、こゝに收めておく。

四五　岸玄智

玄智梅

出雲は、君侯に松平不昧の如き大茶人を出した國柄で、古來有名な茶人や風雅な人が多く出て居る。岸玄智も亦其一人である。

玄智は、茶道を以て國君に仕へ、此道に深かつたのみならず、和歌をも善くした。性質磊落洒脫で、風流を樂み、往々奇警の行ひがあつて、今尙藝苑の談柄となつて居る逸話が少く無い。彼れは、或る時、自宅で和歌の會を催し、四五の雅友を招いた。其の折、某貴人も座中にあつた。その貴人が小用に起つて、便所に行かんとするを、玄智押し留め、そこは不潔だから此方へと、自ら先に立ち、庭園に導き、鍬を以て地を堀り凹め、こゝになさいと云うた。全體、淸潔を旨とする茶席には、新に砂を盛つ

て當座の厠に充つる例がある。玄智はやがて此例に據つたのであらうが、客人を伴うて咄嗟に便所を作るなどは、磊落な仕業である。

玄智、ある年の春先、郊外に出じて遊んだ。圃の中に老梅が花を發して居るのを見て、笻を駐めて之を賞して居たが、ひどく氣に適つて、遂にその梅樹を購ひたいと言ひ出した。農夫は早速承知して之を讓り、代金も受取つたが、さて何日經つても其の樹を引取らず、毎日〳〵瓢簞を携へて來て、樹下に徘徊しながら、何か口吟んで頻りに樂んでゐる。農夫も不審に思ひ、何故御宅へ此の樹をお引取りにならぬと問ふと、玄智云ふには、俺の庭は手狹で、迚もこんな大木を植ゑる餘地が無い。どうか迷惑でも、永く此儘圃中に置いて貰ひたいと云ふ。農夫は妙なことを云ふものだと思ひながら、折角頼むから諾し、其内實が熟したら、お持ちなさるがよいと云ふと、玄智笑つて、俺は花を愛するので、實などは要らぬ。それは皆お前に遣る。併し、樹を損じな

い樣に頼むと云ふ。農夫あきれて、一體、此樹に價あるのは、實が多く着くからだ。實も要らぬ、樹も引取れぬとあれば、代金はお還し申す。尤も花は、何年でも御隨意に御覽なさいと云ふと、玄智は頭を掉り、否、それは困る。自分のもので無ければ、花を賞しても、何となく興が薄いからと云うて返金を拒み、毎年花候には、連日必ず笻を樹下に駐めて、花を賞するを例とした。此の奇行、當時評判となつて、誰云ふとなく、此の梅を「玄智梅」と呼び、態々見に行くものもあつたと云ふ。

玄智は、淨瑠璃作者近松門左衞門と時を同じうした。曾て浪華に游んだ折、近松の評判の高いのに、何を感じたか、ある日、若干の金を包んで近松の家を訪うた。幸ひに主人在宅で、早速客間へ通された。玄智は懷中より包を取出して贈り、別に來意を言はず、默々として門左の面貌を見詰めて時を移し、漸く口を開いたが、『誠に有り難う』とのみ云うて、早歸らうとするから、近松も變に思ひ、何の爲に訪ねられたと云

ふと、玄智の云ふには、格別の用があつて來た譯でない。足下の名聲が都下に高く、婦人小兒までも知つて居るから、自分も一たびは顏を見知りたいと思うて來た迄のことで、もう望みは足りたから御免を蒙ると云うて、近松が、今お茶を上げると云ふをも聽かず、そこ〳〵に立去つたと云ふ。

四六　一陽齋豐國

渡世の筆と感激の筆

文政天保から安政にかけて、盛んに錦繪双紙を書いたので、世に知られた、二代目一陽齋豐國といふ浮世繪師が、曾て江戸の藏前なる札差某の隱居から、其肖像を描くやう依賴を受けたことがある。處が容易に筆を執らぬので、隱居は、やきもきして、

頻りに督促してゐたが、漸く三年ばかり經つて、其繪が出來た。そこで、先方へ通知してやると、隱居は、使つてゐる一人の小僧を請取りに遣つた。小僧は、軈て豐國から渡された隱居の肖像を請取つて、暫しは無言で、つく〴〵それを見詰めてゐたが、『あゝ、よく肖た』と覺えず叫んで、頗る感に打たれたらしい樣子であつたが、果ては、不思議にも、ほろ〳〵と涙を零した。

之を見てゐた豐國は、なぜ泣くのかと、不審の餘り、件の丁稚小僧に向つて其詞を問うて見た。處が其少年の曰く、私の田舍に居る年老いた父の像も、斯樣に書いて貰つたら、常に遇ひたいと思ふ時、それを見ては、恰も膝元に居るやうな心持がするであらうに、それも叶はぬと思うたので、つい、涙を流しましたと答へるを聞くや、豐國は深く感じて、『お前の父は遠國にゐる人だから、其顏を寫すことは出來ないが、其代りに、白分は今直ぐ、お前の顏を寫してやらう。それを國へ送つてやつたら、お前が

遇ひたいと思ふ以上に、お前を見たがつてゐる老いたる父が、さぞ喜ぶであらうから』と、卽座に筆を執つて、見る〳〵少年の面景を、宛然、生けるが如くに寫し、彩色までも加へて與へた。

小僧は非常に喜んで、歸つて之を主人の隱居に出して示した。併し、隱居は甚だ不機嫌で、其後、飄然と豐國がやつて來た時、隱居は散々苦情を言つた。『小僧の寫にはすぐ目の前で書いてやりながら、自分のものは、なぜ早く書上げてはくれなかつた。三年越しも待たせるとは酷い』と、皮肉や愚痴を連發した。

其時、豐國は、儼然として隱居に言うた。『凡そ肖像といふものは、學問があるとか、徳があるとかいふ人の面影を描くもので、貴下の如きは、失禮ながら別に學問があるでもなく、又徳があるでもない。口の金持の老人だといふのみでは、どうも其の姿を書く氣になれぬ。自分は、繪によつて渡世をする身であるから、客の註文に應じて是

非なく書くが、實は、中心から好んでする譯ではない。然るに、御宅のあの小僧は、幼少ながら孝子であるから、肖像を書く値打も興味も出て來たのである。あの樣な親孝行者ならば、本人から乞はれずとも、自分は進んで書いてやりたい』と、滔々として說き立てたので、隱居は一言もなかつたといふ。浮世繪師でも、名流になれば、流石、何處かに見識のある所が嬉しい。

四七　葛飾北齋

渠の大宣傳

葛飾北齋が、文化十四年十月、名古屋本願寺の別院に於て、百二十疊敷の半身の達磨を書いた話は、彼れが一代の歷史を飾る一大事件とも云へる。

此の大畫は、今尙別院に保存されて居るが、餘りに大きい爲に出し入れが厄介で、人の見る機會が幾んど無い。之は北齋の大作として有名である計りでなく、恐らく是程の大畫は、何人の作にも無からうと思はれる。全體、疊百二十枚と云ふ大きさは、竪幅十間、横幅六間に當るもので、誰にも大きいと云ふ概念は起るが、はつきり、どれほど大きいと云ふことは、像の各部の寸尺を知らねば見當がつかぬ。北齋は、此畫を書くに就いて、引札を出して居るが、今それに據ると、口が七尺、目が六尺、耳が一丈二尺、頰が九尺、顏が三丈二尺とある。凡そこれで畫の規模が思ひ遣らるゝであらう。

さて、此の大畫を描きたる場所は、別院本堂の東北の方なる廣庭であつて、一面に見上げるほど高い足場のやうなものを作り、その兩端に滑車を仕掛け、百二十疊敷の紙の上頭には軸を裝置し、それに細引の綱をつけ、畫を滑車で上へ引き上げる設備を

した。

さて又用筆は如何にと云ふに、勿論、毛筆など役に立つべきでない。毛書をする細筆と云うても、蕎麥殼一束と云ふ譯なれば、面部を畫く筆は、藁一束の大きさで、身體、衣紋を書く大筆に至つては、俵をくづした薦を五つ程寄せた程の大きさで、なかなか一人の力では動かしかねる程のものであつた。墨汁は、勿論幾十の手桶に入れて場に運び込まれ、それを青銅の大水盤に取り分けて、硯に代へたと云ふ仕末。僅に一筆畫けば、盤中の墨は急ち盡きるのであるから、間斷なく墨を桶より移さねばならぬ。此等の補助として、場に在つた四五の門人の多忙なることは、目を廻はす程であつた。北齋は、襷がけで先づ鼻を書き、右眼より左眼、それより口、耳に及び、顏の輪廓に及び、胸より以下は、俵筆、或は棕櫚帚を用る、或は薄墨を以て暈取り、或は淡彩を施し、午後一時頃より揮毫を始めて、夕刻に至り全く完成を告げたと云ふ。

當日、此揮毫を見んとて集まりたる群衆は、さしもに廣き場の四方を塡めて、實に盛んなことであつた。畫成つて後、滑車の作用で、之を吊し上げ、凡そ七間ばかりの高さに及んだが、まだ半分は地上に在ると云ふ始末であつた。實は、全部吊し上げる設備がなかつたため、見物人は、唯達磨の面部を見るに過ぎなかつた。

北齋が斯る畫を試みた動機は、常に纖細な畫に筆を取つて疲れ果てたので、腕延しにと、或る人の勸めに任せ、斯る擧に出でたのだと云ふ。此出來事は、北齋が名古屋の門人墨僊の宅に寓居して居つた時である。此畫を作る動機は何に在つたにせよ、實はこれが北齋の大廣告であつた。其後、此縮畫は、永樂屋東四郎に依つて印刷され、都鄙到る處盛んに行はれ、今に至るも藝苑の談柄となつて居る。

御前席畫の離れ業

彼れの畫名は、啻に市井の間に喧傳したのみでは無い、終には將軍家の耳にも入つ

た。或時、文恭院、放鷹の道すがら淺草の傳法院に立寄られた時、文晁と北齋を召され、席畫を所望された。文晁先づ筆を揮つて得意の畫を作り、愈ゝ北齋の書く番となつた。北齋、憚る色もなく將軍の前に進み出で、幾丈と云ふ長い絹を展べて、一氣に刷毛を以て長く藍を引いた。將軍を始め並居る面々、何を書くのかと、不審に思つて居ると、北齋は座を退き、戸外に出たが、やがて鷄を入れたる籠を携へ來つたので、皆々愈ゝ不審に堪へず、何をするかと見て居ると、北齋、徐ろに籠より鷄を出して、其趾に朱肉をつけ、之を絹上に放つた。無心の鷄は、あちらこちらを歩き廻り、歩々赤い趾痕を印するのを、皆々、何の故とも氣付かず、意外の事に、各ゝ手に汗を握つて居たが、北齋は、適宜と思ふ所で鷄を捕へて籠に納め、恭しく一禮した。座に在る文晁、早くも畫意を覺り、立田川の風景、洵におもしろしと稱へたので、皆々、初めて成る程と感じた。

北齋は町繪師ではあつたが、權貴を畏れぬ膽氣を有して居つた。當日斯る離れ業を遣つたのも、彼わが膽氣を示したものである。

四八　其一と孤村

蕭疎と濃艶

抱一上人の畫の門人として、第一に盛名を馳せたのは、青々其一と池田孤村の二人である。其一は、專ら畫道に於て師風を承け、抱一歿後の繼承者として現はれたが、孤村は、獨り畫のみならず、其俳句までも師に承け得た。其一は江戸の町家に生れ、而も餘程裕福の家の好き者であつた。孤村は、反對に越後が鄕里で、水原の字山口といふ村から出たもの。所謂當時の苦學生で、其一と境遇が全く違ひ、先づ内弟子といふ

格で、抱一の家に、書生同然、厄介になつてゐたと傳へられる。

其一は、金持の側であるから、或場合には、抱一の道樂方面に對する資本の供給者といふ趣きもあつた。然るに、孤村は、時々家の内外を掃除したり、屋尾の使も仰せ付かつたりしたものと思はれる。其一は、何處迄も師の富麗な畫法を發揮し、其畫は、多く、濃艶な、人を眩すると言つたものが多く殘り、孤村の畫は、孰れかといへば、蕭疎とも評すべき、俳味ひを好んだらしい。二人の事蹟は、餘り多く傳はらず、別して其一の事が、詳しく殘つて居らぬやうである。

其一も、曾ては越後に遊んで新潟に來り、藤井忠太郎氏方に、暫く足を留めて居た。藤井の當主に、其際の事に就いて聞いて見ると、幾許か彼れの面目を窺知するに足る話がある。同家に滯在したのは、幾日間だか、分らぬが、可なり淹留したものらしく、一人の門人を伴れて來たといふことだ。藤井家でも、揮毫を求めて、其描いたものが

あゝさうだが、揮毫の樣子は、流石に抱一の繼承者だけに、普通畫家の如く、勿卒の閒に揮灑せず、丹精を凝して一作を成すといふ遣り口であつたといふ。殊に此人は能の趣味があつて、自ら仕舞もやる程だから、其筆に成つた能の圖は一々格に入つてゐて、斯道を解せぬ尋常畫人が、筆に任せて胡麻化しに描いたものとは、迥に撰を異にするのみか、能畫に至つては、其師の抱一以上であつたと思はれる。彼れが藤井家に在る時も、よく話頭が能の事に及んださうだ。

更に彼れが畫道に熱心な例として、或時、肴屋が藤井家へ肴を擔ぎ込んだ折柄、猫が肴を啣へて逃げ出した。家人が之を追ふと、チョコ〳〵ッと走つて、猫は屋根の上に逃げた。其一はそれを見てゐると、恰も一羽の鳶が來て、猫から肴を浚つて飛んだ。此光景を、頗る興味深い眼で眺めて居た彼れは、俄に筆硯を喚んで之を摸寫し、自ら スケッチ帖中に收めたといふことである。

彼れは、斯く細心な所があるかと思ふと、又非常に酒癖のわるい人で、藤井家で晩酌をやる毎に、どうも酒の上がよくない。動もすると、鐵拳を揮つたり何かするので、同伴の門人も、此時分になると、何處へか避けて出てしまふ、そこで、藤井家では、出入の者の八平といふに其お酌を申付けた處、八平も又辟易して、主人に乞ふやう、『假令如何なる苦しい役目でも致しませうから、どうか、あのお客のお相手だけは御免を蒙りたいものです』と、兜を脱いだといふことである。

一方孤村は、頗る多趣味の人であつたことが、其遺愛の品を一見して分る。自分は、彼れと同村の誼もあるので、孤村の跡が甚だ零落して、家の什物を賣拂つた時、聊か手に入れた物もある。自分は、成る可く同村の畫家の物を他に散逸させぬため、大抵は買込んで今も所持して居るが、之に就いて見ても分る。祇園の有名な五重の塔は、頗る古い建造だが、今から百年程以前に修繕したことがある。其時、幾らか古い板の

やうなものは、取外されたので、孤村は之で硯箱を作つて居る。それも今手許に在るが、此他に彼れの印が百近くもある。當時の印としては、材もよく刻も立派で、殊に之を納めてある箱などは、其昔、彼れが抱一から貰ひ受けたと傳へられたものであるが、角の透し彫を以て全部の裝飾を成してゐる、頗る精巧なる支那物で、今日と雖も、容易に手に入れられぬものである。又素燒で、茶の用に供する風呂に、自分が菊を描いて、其花だけは呉粉の高盛にしてあるが、夫を、も一度火を懸けたもので、斯る重くて且つ壞れ易いものを、京都へやつて製作まで試みたことは、餘程の物好きであつたことが呑込める。孤村は、晩年、文人畫も描いたが、之は、師の道とは全く違ふ方面に手を延ばしたものといふべく、自分は、畫箋全紙の水墨山水を有つて居るが、宛然、文晁の筆かと擬ふ程である。

四九　大石眞虎

版行の詫證文

大石眞虎は、名古屋に隱れも無い畫家で、後には名聲を四方に馳せた。

名古屋の或る町に町代を勤むる、何某と云ふがあつた。此者、身分の町人であるのを厭ひ、町代であるのを幸ひ、士人氣取りで、肩を聳やかして街路狹しと横行し、其の頭髪も士人に倣つて、前額を狹く剃り明けて大髷に結つたが、眞虎は其の近隣に住し、其士風を粧ふを片腹いたく思ひ、何とかして彼の頭を町人並に剃り擴げて遣りたいものだと、妙な隱謀を企てた。元來此の町代は聟養子で、女房に對しては權力が無かつた。そこで一策を案じ、町代の平生行く髪結床に出かけ、店主に内々云ふには、

『お身達も知つて居る町代某殿は、養子の御身分で、何事も内儀任せだが、旦那は頭の

剃り方を人並にしたいと望むで居らるゝけれど、何分内儀が士人風を好まるゝので、旦那も據ろなく狹く剃らるゝことは、お前承知の通りだ。實は旦那から内々の頼みだが、これから、來らるゝ毎に、次第々々に剃り擴げて上げて貰ひたい。旦那は内儀に氣兼があるから、直と頼み悪い。事に依ると、外面を粧ふためお前に小言を云ふ樣なことがあるかも知れぬが、辛抱して貰ひたい』と云うて、金一分を遣はし、誠らしく頼むだので、店主も眞に受け、それからは、町代が來る毎に少しづゝ剃り擴げ、あゝ遣り損つたと云うて、お茶を濁して居た。然る處、いつも〳〵剃り擴げ、遂には目立つ樣になつたので、町代大いに怒り、なぜいつも剃り擴げるのだと詰つたが、店主笑つて相手にならぬので、町代愈〻怒り、店主も終には實を告げ、大石さんが云云と云ふと、町代始めて眞虎の仕業と知り、急に眞虎を呼び寄せ、自分の頭を弄り物にするは、何か怨みでもあつての事かと、さん〴〵に怒り、眞虎よりいろ〳〵詫びても、な

かなか承知せず、『汝の如きものは、誤り證文を版にでもして置くがよい』と罵るを、眞虎もさるもの、家に歸ると、自ら瓦版に證文を彫りつけ、百枚餘りも摺つて、仰せの通り、度々失禮をするかも知れぬから、版に摺つて來たと差出した。これには町代も呆れたが、此の事急ち評判となり、町代も流石に慚ぢて、それからは謹愼の人となつた。

五〇 謝蕪村

開帳に日參

謝蕪村、本姓谷口、名は寅、字は春星、一號蕪菁。畫界にも、俳壇にも、名聲を馳せた人であるから、云ふべきことが少くない。今は唯一二を語る。

京都某寺の開帳に、蕪村、何人よりも早く參詣に出かけし、何人よりも晩く歸るを例とし、如斯すること、數日に及び、幾ど寢食を忘れて居る樣に見えた。寺僧は其何人なるを知らず、佛法に隨喜の篤きものとなし、悅むで、あなたは誠に御信心が厚く、感心だと云ふと、蕪村笑つて、自分は佛を有難がつて毎日來るのでは無い、佛よりも有難いもの、開帳があるからだ。其の佛より有難いものは、これ斯にあると云うて、毎日來る毎に、其前に坐し、瞬時も眼を離さない一大畫幅を指ざした。寺では、開帳を機として寶物を陳列した。其中に文徵明の山水があつたので、蕪村は之を觀る爲に日々通つたのである。

芝居の眞似

蕪村の門人に田原慶作と云ふ者があつた。一夜八時頃、師を訪ねて見ると、戸が堅く鎖してある。さては今夜は早く寢られたと見えると、立去らんとしたが、家の内に

バタ〳〵物音がするのみか、叫ぶ樣な聲も聞えるので、不審に思ひ、戸を叩いて見ると、先生の聲で誰ぞと問はるゝに、田原なりと答へる内、戸が開いた。這入つて見ると、家には先生のみで、家族は一人も見えぬ。室内には、帚や拂塵が取り散らしてあつた。田原は、あたりを見て、誰も居らぬに氣がつき、皆さんはどこに行かれたと問ふと、先生の云ふには、今夜、妻も娘も、下女を連れて親戚へ出かけて、自分ひとりだと答へた。田原は、先刻、バタ〳〵音が聞えたが、あれは何でしたかと問ふと、實は、此頃芝居を見、芝耕と云ふ役者の藝に感服したので、今宵誰も居らぬを幸ひ、其眞似を遣つて見たが、幾度試みても、旨く行かぬと云ふを聞き、門人も師の無邪氣に一笑を發した。

五一　坂田鷗客

眞面目で自信が厚い

坂田鷗客は越後の畫家であるが、東京に居つた爲に餘り知られて居らぬ。此人、南蒲原郡鹿久間に生れ、村松藩の大庄屋を勤めた素封家である。號に鹿園とあるのは、生地から來て居るは云ふ迄もない。鷗客は長男であつたが、繼母に弟が生れて、家庭に面倒が起り、爲に家督を弟に讓り、自分は風流三昧に入つた。初め行田雲濤を師として、專ら花鳥を學んだが、師の勸めに任せて上方に遊び、しばらく梅逸の門に入つて花鳥を研究した。雲濤は、雲濤を師とした時からの同窓で、梅逸の門に遊ぶ時も、相携へて入つた。

雲崖は、十年も梅逸に師事し、花鳥を以て終始したが、鷗客は、感ずる所あつて

志しを變じ、山水家たらんため江戸に出た。當時、渡邊華山の門人福田半香が、山水家として持囃されて居つた頃で、鷗客も之と交はり、時々畫道を問うて之に私淑した。鷗客の畫に半香の臭味のあるのは、之がためである。丁度その頃、某知人は鷗客の畫を見て、君の技倆は、半香の後に落ちるもので無い。半香などに私淑せんよりは、一段高い處に目を着くべしと忠告した。それより鷗客、支那の元明あたりの畫を熱心に研究し、進境大いに見るべきものがあつた。其傑作に至つては、嵐溪などの及ぶ所でない。

此人、身の丈五尺六七寸もある長幹で、痩せた體格であり、頗る好人物で、ひどく酒を嗜むだ。江戸に出初めは濱町に住み、後には下谷に住むだ。其の門下から、知名の畫家が出て居る。猪瀬東寧、大出東皐なども、門人である。自分の知人で、今泉雄作(也軒)、久須美秀三郎(雪堂)兩氏も、其の門人である。今泉氏の話しに、鷗客は、非常

に眞面目な自信の厚い人であつた。其の一例として、曾て趙子昂の畫册を何れよりか借り受け來り、之を半年もかゝつて丁寧に描寫したことを語られた。此の畫册は、實は眞蹟で無かつた。鑑識ある知人は、鷗客が餘りに描寫に苦心するを見て、眞蹟にあらざることを注意したが、鷗客、どうしても承知しない。これが贋物であるものか。凡そ手本とすべきもの此外にあるべきでないと云うて、到頭全部寫し了つて、之を珍藏したと云ふ。

此人、學問もあり、詩などもあるさうだが、未だ手に入らぬ。其の詩のない爲に、坂口五峰氏も、「北越詩話」に此人を逸した。歿年は詳かでないが、明治の初年、東京に死し、其の墓は、下谷池の端某寺にあると云ふ。

五二　菅井梅關

畫是れ子孫

菅井梅關は、仙臺柳町の葉茶屋で菅原屋といふ家の忰であるが、舍弟に家を讓り、自分は專ら畫道に身を入れ、終に大家として知られた。

梅關の俗名は菅井岳輔といひ、初めは東齋と號して、江戸で文晁の門に學んだが、其後、文晁が畫風を改むるに迫んで、門下を辭して京阪に赴き、同じ仙臺出身の畫家東東洋の世話を受け、當時長崎に江稼圃が居るといふ事を聞き、同地に行つて大に學んだ。稼圃は非常に梅關を愛し、畫道の祕奥を授けた外に、詩や書法迄も敎へてくれた。更に別れに臨んで、梅關に墨梅を書かせ、それを大層な佳作だと褒め、梅道人(元の吳鎮)のやうだと言つて持ち歸つた。其時、稼圃の贈つた詩があつて、それから梅

關と改めたといふことである。

梅關は、長崎に凡そ十年も居て、京都まで歸つて來た。山陽、小竹などと交はり、山陽の爲に水西莊の景を畫き、小竹の部屋の襖や聯などを書いた。之より以後、梅關の名が京都邊に一時に擴がつた。越後の長谷川嵐溪は、梅關を慕うて、はるゝ仙臺に抵り、其の門下に列した。後、再游の折は、梅關の死後であつたから、殘つてあつた粉本を借りて、嵐溪は歸つたといふことである。

小竹は梅關の碑銘を書いて、奥州第一の畫手であると褒めてゐる。併し、梅關は、畫よりも、寧ろ人格の方が一層上であつたらしい。京都に居た時に、仙臺の舍弟から、眼がわるくなつて母を養ふことが出來ぬと言つて來たので、梅關は直ぐに歸國した。彼れは親に孝行、兄弟仲も亦極めて親しかつた。朋友の急難にも、何事を差措いても救ひに行つた。近邊の貧乏人には、自分の書いた畫を與へて、『之を賣つて米を買へ』

といふことが度々であつた。酒が好きで、肌合は豪俠といふ風であつたが、最も奇なことは、一生、女房を持たなかつた。さうして彼れは常に言うた。『おれに子孫の必要はない。おれの書く畫が卽ちおれの子孫である』と。

斯樣に其畫を子孫としてゐた彼れのことだから、如何に泥醉した時の畫でも、しつかりと正確に書いてある。是れは後世に殘すべく、其筆を苟くもしなかつたのであらう。

渠の死因

此人、天保十五年の正月中旬に、腹を切つて死んだ。其の死因に就いては、種々の說があるが、眞の原因は、高利貸の爲に負債を督促られ、進退谷つて自殺したのだ。死因が面白く無い處から、筱崎小竹も、碑文を書くにわざと之を省き、梅關の推奬家も、皆種々の附會說を立てゝゐる。今、梅關と鄕國を同じうする館森袖海氏の語るを

聞くに、仙臺藩の勘定奉行の配下に松井榮三といふものがあつた。江州の牛れで、算數に長けてゐた爲に、計算方として奉行所に使はれたが、江州人の事だから、なかなか貨殖に脫目なく、藩の會計を司る傍ら、內々高利の金を貸して產を作ることを力めた。勿論、文藝などを解する人物では無かつた。梅關、ある時ひどく家計に困り、此人より若干の金を借らざるを得なかつた。其時、擔保にとて預けたものは、梅關の最も大切にしてゐた、師たる江稼圃より贈られた繪の粉本類であつた。梅關にして見れば、是より大切なものは無かつた。そこで、松井も、これを預つて金を貸したもの、、よく見れば、一束の反故に過ぎぬ。勿論、之がどれほど價のあるものか、見分もつかぬ。何となく不安を感じて、ある日、內々同僚に圖ると、此奴も、風流や繪事などに眼識が無かつたと見えて、此の貴重な粉本を、二束三文の廢紙であるかの樣に云うたので、松井は梅關に騙られたと速斷し、直ちに梅關を訪うて返金を督促し、一刻の猶

豫も與へなかつたので、梅關の忿怨は極度に達したが、急に金策も出來ず、進退谷つて、自殺するに至つたと云ふ。時に六十一歲であつた。

五三　田崎草雲

佛前より斗帳の拜借　內君の鬱力

田崎草雲は、足利の人で、「足利文晁」と云はれて、生國の崇敬み受けて居る。此文人の故宅は、今足利公園の中に保存されて居るが、嘗て訪うたことがある。此の舊宅を白石山房と云うて居るが、其仔細は、草雲の父、外に出て歸宅の途中、美麗なる白色の小石を拾ひ取つて家に戻ると、草雲が生れて居つたと云ふ。草雲長じて此事を聞き、紀念の爲に、居を白石山房と謂ひ、又之を其號とした。

草雲も、最初、江戸に遊んだ頃は、畫名揚がらず、衣食にも窮し、已むなく、門人の名で俗受のする畫筆を弄して、僅かに其の日を送つたこともある。此の時分の事だ。或時、草雲、米代　窮したが、他に工面も出來ぬので、淺草山傳法院の僧正に泣きついて、金を借りるより方法がないと考へ、早速、傳法院を訪問したが、生憎、僧正は外出中で、寺に居らぬ。そこで、其歸坊を待つて話さうと、方丈に通つて、良暫く待つて見たが、僧正は中々歸らぬ。草雲、手持無沙汰の餘りに、ふと床の間を見ると、厨子を安置して、其中に觀音樣が收められてある。其の前に掛けられた斗帳が古代錦で、頗る値打のするものであるから、彼れは、心中窃に思うた。どうせ、自分と僧正とは、常から心安い中だ。今此の斗帳を一時借りたとて、敢て彌喧しくも言はぬであらう。然うだ〳〵と、一人で承知して、『南無大悲救世菩薩、しばらく吾が手に貸したまへ』と、其斗帳を外して懷中に隱し、歸宅の後、豫て知合ひの質屋へ入れて、金五

兩を手に入れた。

然るに、其時分、江戸に在つて、草雲に劣らぬ窮困生活をやつてゐた、梁川星巖が尋ねて來た。而して草雲に向つて、『我々夫妻は、あらゆるものを賣り盡し、今は囊中一物も無い。現に米鹽の料にすら事缺いて、實に進退谷つてゐる。若し一二分もあつたなら、どうか暫く貸して貰ひたい』と、困つてゐる最中の草雲に無心を言つた。

そこで、草雲は、たつた今懷中したばかりの金ではあるが、其内から二兩を割いて、之を星巖に與へた處、星巖は其金を見て、大に驚き、『君のやうな貧乏者が、斯る大金を所持するのは甚だ怪しい。安心が出來ないから、此の金の出處を話せ』と、頗る危んで問ふのであつた。併し、草雲は微笑して、『まア〳〵、暫く金の出處だけは言はぬことにする。嚴しく問はれては困る』と答へて語らぬので、星巖は、益ゝ怪しみの色を深くしたが、彼れも亦當面必要な金であるから、不安ながらも持ち歸り、數日を經

て、金を得たので草雲の所へ返しに來た。其時草雲も、亦他から工面が出來たため、斗帳を受け出して傳法院に赴き、僧正に遇うて、實は、御不在中、斯くの始末と、事情を陳べて斗帳を返したが、其時僧正も笑つて、咎めなかつたさうな。

彼れが、斯る窮乏時代に、或る人の勸めにより娶つた妻は、某諸侯の奥に仕へた婦人で、これが容色もあり、亦貞淑の女であつた。草雲が、明末の盛茂燁の書いた山水の幅を、ある處に觀て、ひどく感服し、是非欲しいと思つたが、なか〳〵價が高くつて、貧境界の畫家には、買ふ力がなかつた。細君、その樣子を見て、密に自分の頭飾や衣類を賣却して此幅を購ひ、良人に與へたので、草雲は歡天喜地の思ひをなし、日夕此幅に親しみ、それより、畫境は、一段の進歩を見たと云はれてゐる。此の幅は、今足利の某家に珍藏されてあつて、先年一覽した。

草雲、嘗て渡邊崋山の書いた土佐繪の卷物を一覽し、流儀違ひの畫を、よくも畫し

たものかなと感服し、畫界の大家となるには、諸流何にてもよくせねばならぬと發憤し、自分も、流儀違ひの土佐繪を試みたいと心掛けて居る際、京都の御所の襖の繪を命ぜられたのを幸ひ、土佐繪を試みた。其の粉本が、今足利に存在してゐる。

五四　瀧和亭

北海道で拾はれた

越後村松濱に、平野安之允といふ人があつた。此人、其當時に越後の錢屋五兵衛ともいはれたもので、三本「マスト」の西洋形の船を作つて、勘察加あたりに密貿易をした人である。其時代に、彼れが函館へ行つて、泊りつけの旅宿に居ると、同じ宿に、瀧和亭といふ畫工が滯在してゐたが、聞けば、其畫が一向に賣れず、宿料にも困つて、

進退谷つてゐるといふ。そこで、多少は書畫の鑑識もあつた平野は、試みに其揮毫した畫を見ると、なか〳〵相當の手腕を具へてゐることが分つた。之は惜しい、氣の毒なものだと、大に同情して、宿料も拂つてやり、自分の手船に和亭を乘せて、新潟へ同行して來た。

平野が、此歸航の船中に在る時、鄕里の自宅では、殘して來た彼れの妻が、恰も男子を產んでゐた。折柄、平野は、和亭を伴れて歸つて來て、深く此出產を喜び、生兒の爲に初幟を和亭に描かせた。それは、長さ八間といふ大幟であつたが、和亭は、恩人の依囑とあつて、努力して龍を描いた。それが、今から約十年も前に、或者の手に入つて、金にしようとも考へたが、何分、大きなものだから買人が無い。そこで、上京して、和亭の息で、現に文學博士たる瀧精一氏に、之を見せた。瀧博士は、一見して大に驚き、『父の書いたものも多く見たが、併し、これだけの腕があつたことは始め

て知つた』と感歎し、後に、博士によつて完成された和亭帖の開卷劈頭に、此圖の寫眞版が、折込んだ形になつて收められた。

又此の龍の幟に用ゐた和亭の印は、厚紙に字を書いて、切抜いて用ゐたので、其型紙が、今も瀧家に殘つてゐる。幟は木綿で、上部に平野家の定紋があり、其下五間が龍の畫で、鱗まで、一枚〳〵丹念に書いてある。此幟に筆を執つた時は、慶應三年頃であらうといふ。

さて此の北海流落の一貧畫師の實力を看破して、遂に之を扶け、之を用ゐた、越後の錢屋五兵衞、平野安之允が、頗る豪邁不羈の男であつた事を知るべきは、此幟の「乳」は、土分のもの、みが左に附け、普通一般は右に附けるものと決つてゐるのに、平野は一向頓着せず、土分同樣、之を左に附けて居る所から見ても、略〻其の性格が想はれる。

全體、和亭の苦心した作は、多く新潟の荒川家に、今も殘つてゐるが、平野歿後、和亭は、主として故荒川太二氏の後援を得たのである。坂口五峰君は、明治二十一二年頃、荒川氏と共に上京の際に、和亭を訪問したことがあるさうで、其の時の事に就いて、同君は自分の爲に左の如く話された。

丁度、其時、和亭は畫室に在つて、皇后陛下の御化粧室に用ゐらるゝ格天井の、二尺か三尺のものに、專心筆を執つてゐた。其時、窃に、高貴の御室に用ゐるもの故、定めて精選された桐の板の薄いのを、一枚づつにでもしたものかと思ふと、それが二枚づつ合せたのであつたから、内心案外に感じたが、後で聞くと、板の反らない用心に、特に注意したものだと判つた。其時自分の註文した畫を、其後受取に行つて、再び和亭と語つたぎりで、爾來會はずして終つたが、人品もよく、風格も高く、且つ至つて溫厚の、君子らしい畫家であつた。又今こそは、和亭の畫といふと頗る高いが、其時、自

分は、金三圓の畫料を以て、彼れの畫を手にするを得たと。

前に話した幟の印文もさうであるが、このころの和亭の印には「雪城」とあつて、其印は今も殘つて居る。多分、北海道や新潟などを意味して自刻したものらしく、他の人は、殆んど知らない印である。

五五　小川子明

忘卻先生

安濃津の學者で、忘卻先生と云ふがあつた。健忘の人で、何でも忘れて仕舞ふので此名が命き、夫子自身も之を認めて、自ら名とした。餘りに此の名が喧傳したので、當時實名を知らぬ人が多かつたと謂はれる。嘗て一貴人の宴に招かれ、懐中物を置き

忘れて家に還つた。後に此の懐中物を發見し、中に若干の金も入つてあるので、多分あの人のものと目星を打ち、態と持たせて遣ると、先生、そんなもの覺えが無いと云ふ。さうでは無い。貴君の遺失物に相違無いと云うても、さうでは無い。他人のものだと云うて受取らぬ。使の者も已むなく持ち返ると、家人から色々謂はれて、初めて己が物と氣がつき、受取のため出かけたと云ふ一笑話がある。又或る時、借金取りを家に待たせ置き、外に出でて金を才覚し、家に戻る途中、早例のごとく、借金取の家に居ることを忘却し、偶ゝ市上で美酒嘉魚を販いで居るのを見て、囊中を傾けて之を購ひ、家に歸つて始めて借金を返すための外出であつたことに氣がつき、悔いたと云ふ話もある。

齋藤拙堂は、先生と交際があつたので、其の記する所に據れば、拙堂の二十の時に、先生は二十六歳の長者であつたが、先輩振るなど云ふことなく、よく交はつてくれた

とある。又先生、性仁厚、士の身分で祿も豐であつたが、客を好み、施しを樂むだ爲に、いつも貧乏であつた。併し、如何にも同情の厚い人で、人の急を聞き、或は人の窮を耳にすると、己が貧を忘れ、身を挺して之を救はざれば已まなかつた。さて此の健忘の先生も、人に對し一旦氣の毒の情起れば、決して忘却しなかつた。それが爲に、先生の名は四方に擴がつたと、拙堂は記してゐる。

曾て大窪詩佛が先生を訪うたことがある。先生大いに歡び、一見舊の如き交りを結び、某日、某莊に會し、觀月を約した。さて期日に至り、莊の主人と詩佛は酒肴を設けて、先生を待つて居たが、例のごとく忘却して、夜半に至つても來なかつたので、詩佛は「忘卻先生歌」を賦して、先生に贈つた。此の長篇、詩佛の「西遊稿」に收められ、出版になると、先生の名は益ゝ廣まり、吟社中の一話柄となつたと云ふ。又尾張の秦滄浪は先生の知人で、先生の家に宿することもあつたが、いつも留連十數日に渉

り、互に詩の贈答唱和に耽つたもので、詩題は、いつも「忘却」の二字であつたと云ふ。

先生、詩、書に長じ、書は奇々怪々で、其の落筆に方つては、心、手を忘れ、手、筆を忘れ、妙は其の不用意の處に在つた。又詩も瀟洒閑雅で、其の巧と拙とを忘れ、恰も其人の如くであつた。先生、姓は小川氏、名は經固、字は子明、天保と號した。

五六　間宮林藏

路銀の始末に窮した乞丐の變裝

間宮林藏は、平山行藏(子龍)、近藤重藏(守重)と共に、文化の三藏と稱せられた。三人は、藏の名を同じうするのみでなく、冒險性に於ても、よく似通つた所があつた。林藏は專ら蝦夷探檢を以て聞えて居るが、其の蝦夷地に入つたのは、享和元年、勘定

奉行石川忠房に隨行したのがそもそもの初めで、それから文化五年、百難を冒して此島の北界を定め、樺太が自ら一島をなすことを邦人に知らしめたのは、乃ち林藏の發見で、又其の功である。

林藏、此の探檢を果して後、或る年、幕府の命を奉じ、國事探偵として諸國を周歷したことがある。當時、九州方面は、嚴重に外來の人を拒絶して、入ることを許さなかつた爲に、林藏も之には閉口したが、一策を案じて、其の隣國のものであると云うて、某大藩城下の經師屋の弟子になり濟まし、略その國情を窺ふことが出來た。併し、如何にしても城内に入ることが出來なかつた。然るに、三ヶ年を經て、初めて城内に襖の修理のことがあり、こゝに城内に入る機會を得、烱眼なる彼れは、城内隈なく探究し、仔細に圖を作つて幕府に報告した。幾年かの後、其の藩公江戸在府の節、幕府の有司を其の藩邸に招飲の折、有司が餘りに自藩の城内の事に精しく居るのに不審を

抱き、其故を問はれた所、有司は笑つて、其說明は口頭に申し難し。御歸藩の上、襖を剝ぎ、中を檢索されなば、おのづから分明せんと答へた。藩公、早速國元に申送り、取調べられたが、成る程、襖の內より幾枚となく名刺があらはれて出た。夫には明かに「大府探偵間宮林藏」とあつたので、さて〳〵彼れの仕業か。油斷のならぬ奴と、一驚を喫したと云ふ。

林藏、後年、人に語つて云ふに、探偵となるには、形を變じて種々の人物に變裝せねばならぬが、一番困るのは、乞丐となることである。乞丐と云ふからには、着る物も薄く、手荷物など有るべきで無い。然るに、路銀百兩程はいつでも所持したから、之を隱すには實に困難をした。古布などに包み、腰に纏うたこともあつたが、物に觸れ、ばガタリと聲して、人に覺られはせぬかと、始終氣が咎めたと云うた。

五七　大鹽後素

矢部の大鹽論

大御所と謂はれた、德川家齊將軍の惡政が、大鹽事件のごとき騷動を生んだのは不思議はない。此事件あつて後、三十年にして、德川幕府は終に滅びたのである。大鹽は、俗稱平八郎、名を後素、中齋、又洗心洞主人と號した。陽明學者で、文藝にも通じ、賴山陽の如きは、深く交はつて之を畏敬した。彼れは大阪に東組與力を勤め、後隱退したが、所謂大鹽事件なるものは、隱退後のことである。彼れは、此の事件のため、叛逆を以て罪を論ぜられたが、大阪の士民は、騷動後も尙大鹽先生と云うて畏敬したことを思ふと、彼れが人物の程も想像される。

藤田東湖は、當時名奉行と聞えた矢部駿州(定謙)に就いて大鹽の事を聞き、其の隨

筆に書いて居るが、それによると、矢部は大鹽を傑出の人物となし、彼れが如き暴擧も、畢竟、憤慨の餘りに出でたものであらうと云うて居る。

今、矢部の語る所を、爰に掲げて見よう。元來、平八郎は、肝癪持であつた。しかし、なか〳〵の人物で、其の與力勤務中、豪商を挫き、細民を救ひ、奸僧を懲し、邪教を吟味する等、天晴の吏と謂ふべきである。學問も有用の學を修め、尋常學者の及ぶ所でない。自分の奉行奉職中は、度々書齋に招き、密事を相談したが、言語容貌決して尋常人でない。彼れを目して叛逆と云ふは、決して當らぬ。彼れ實に叛逆を謀らんには、いかで大阪城に立籠らぬことのあるべき。大鹽は、平生大阪城の固めの甚だ手薄なることを憂ひて居つたものである。自分は嘗て平八郎を招き、食事を共にしたことがある。其時、膳部に金頭と云ふ魚の大きな燒物が附けてあつた。大鹽、憂國の談に及ぶと、忠憤の餘り、怒髮、冠を衝くの有樣で、如何にも興奮が甚だしいのを、

自分いろ〳〵慰め諭したが、平八郎益〻激發して、金頭を、首より尾に至るまで、わりわりと嚙碎いて食ひ盡した。自分の家の者は、之を目して狂人の所爲だとして、翌日、自分に、彼れを近づくる勿れと云うた位だが、彼れの持前の癇癪が激發したので、狂人でもなく、寧ろ彼れが忠誠の發露とも見るべきものであるから、自分は、其後も不相變交はつた。さて何故斯る暴擧に出でたかと云ふに、普通の人情として、再三反覆して忠告なり諫言なりをする、それがどうあつても聽かれない時に、ともすると之を憤り、座に有り合ふ火鉢などを、其人に投付けたりすることがある。穩かに諫むるのが忠で、手を出すに及んでは暴となる。平八郎も、數回の忠告が用ゐられず、終に暴となつたのだ。併し、暴は暴だが、之を叛逆とするは如何のものか。平八郎は自焚したが、所謂死人に口無しである。些しも訊問を爲さず、直ちに叛逆罪を以て問ふは、裁判の法でない。自分は、常時、不敬罪を以て處するが然るべきだと建議したが、自

分を以て、犯人を曲庇するものだなどと譏るものもあつたと、矢部は言うて居る。矢部は、甘平八郎が、子の婦にせんと養つた女に姦通したと云ふ事實を、平八郎の罪狀の一に數へて居る事に言ひ及び、それは、下女に置いた者を己が妾にしたまでで、何の仔細もないことだと云うてゐる。

矢部は、大鹽亂の前年、大阪西町奉行の職を退き、勘定奉行に轉じたが、其年、大阪東町奉行大久保讃岐守の後任に來た跡部山城守が、何か心得となるべきこともあらば、教へられたいと矢部に請うた時、矢部は、與力の隱居に平八郎なるものがゐる。非常の人物であるが、悍馬の如きもので、よく御すれば用を爲すが、御し方を誤れば危險であると語り、其他は何も言はなかつた。跡部は之を聽き、矢部ほどのものが、一與力の隱居を目の上に上げて居るなどは不似合だと嘲つた。然るに、何ぞ圖らん、其翌年、青天の霹靂、大鹽の暴發を見るに迨んで、跡部も始めて矢部の言に服したと

云ふ。

大鹽の賓人に就いては、兎角の論が多いが、矢部は、恐らく尤も大鹽を知るものであらう。

五八　藤田東湖

勝つた方から白旗

東湖は磊落豪放で、大酒客であつた。酣醉の時、いつも拳を鬪はして戲るゝが例であつたが、其の癖餘り上手では無かつた。海江田信義が、ある時、その相手になつた。東湖の云ふには、負けた者は、體に着けて居る衣類でも、帶でも、脱し去るのだと云うて始めたが、東湖連戰連敗で、始めは羽織を脱ぎ、帶を去る位で濟んだが、追ひ追

ひ衣類迄も脱がねばならぬ樣になり、果ては襦絆まで脱ぎ、犢鼻褌一つの丸裸となつた。それでも休戰も講和も承知せず、さア來いと云ふので、相手の方では、犢鼻褌まで脱がれては迷惑と、勝つた方から白旗を揭げて降服したとある。

小兒に閉口

東湖が書き殘せる「心のあと」と云ふ書に、其の家庭のことが書いてあるが、中にをかしみのあることがある。八月の中ごろ、小兒共は、裏の屋敷(太田誠太の居)に槍が墻根ごしに通るを見つけて、あれは誰の槍だらうと云ふから、定めし興津か岡部が暇乞ひに能州方へ來たのであらうと云ふと、座に居つた客(吉田又彦)は戯れに、豆腐では無い、甘草であらうなどと云ふを聞き、小兒共は不審に思ひ、其客去つてから疑を晴さんとて、なぜ重い人を豆腐だの甘草だのと云ふかと、眞面目に問ふに、東湖も、眞逆喇罵の意味だとも言ひかね、笑ひながら、重い人は豆腐の如く軟かで、又甘草

の樣に甘いからたと言ひ紛らしたが、それでは小兒が解る筈もなく、解しかねた樣子であつたが、再び問ふこともせず濟んだから、東湖も辛うじて切り抜けだと思うて居ると、其後、臺所で豆腐を買ふ毎に、小兒は隣家の友達に、けふは重い人を買つたと云うて吹聽し、東湖が病氣に臥して、甘草入の藥を服して居るのを見て、おとうさんは、重い人の這入つて居る藥をあがると、無邪氣に言ひ囃すので、その度毎にヒヤヒヤしたとあるが、當時士風頽廢、賄賂公行、東湖などが見て、豆腐たり甘草たる高官人は、滔々皆然りであつたらう。そして些細の事が直ちに讒構の種となつた當時、これ式の隱語すら、喧傳して、どんな禍を招かぬにも限らぬ。東湖程の豪傑が、ヒヤヒヤしたのも無理は無い。

五九　佐藤信淵

物質界の開拓者

佐藤信淵は、平田篤胤と同じく秋田に生まれ、秋田の一名物である。此人、英邁の資を以て經濟の學に志し、其の著述は實に盛んなものであるが、亦に農業經濟に關係した著述が多い爲に、農家を益したことが少く無い。篤胤を以て思想界の開拓者とすれば、信淵は正に物質界の開拓者である。併し、信淵の理想はなか〳〵廣く大きく、終には世界一統の策まで畫するに至つた。信淵は、一種の政治家と云うてよろしい。彼れは格物研究から早く西洋の事に通じ、彼れの着眼と議論は、漢學者流のそれとは、おのづから其の撰を異にし、世を警醒するものがあつた。それが爲に、天保十年五月、幕府が崔山や長英を獄に下さんとする時、信淵も亦連坐した。當時、鹽谷甲藏（宕陰）

は、捕吏かしきりに信淵を探偵することを逸早く知り、深夜跣足で信淵の門を叩き、密に失踪せしめたこともある。信淵は、知人竹口直兄の家に數十日潛伏したと傳へられる。

信淵も、青年の頃は大の亂暴ものであつた。酒が大好きで、到る處飲み倒し、放歌して市中を歩き、傍若無人に人を罵り、實に仕末に困つた惡少年で、鄕人は佐藤の狂兒と云うて、一齊に排斥した。併し、信淵、一向之を氣にかけず、乃公の將來を見よと云はん許り、傲然として傍〻無人の振舞をつゞけた。

彼れは、小兒の時から、其の掌の中が際立つて紅色を帶びて居つたので、家人は戯れ半分に、紅掌君と云うたが、彼自身も紅掌君と自稱して、朋輩の間に振り廻した。嘗て幼年の頃、父に從つて芋狩に山野に出かけ、幾何の獲物があつた。然るに、歸路には其の獲物を悉く路に棄て、仕舞つたので、父は怒つて之を詰ると、『僅ばかりの芋、

何になります』と、平然として答へたとあるが、彼れが小器ならざること、早くほのめいて居るやうに感ぜられる。父は信淵の粗豪を憂ひ、僧となさんとして、某寺に託したことがある。然るに、彼れは坊主となるが大の嫌ひで、寺に預けられると、間もなく何れかへ失踪した。百方捜索して、七高山に居ることがわかり、父みづから攀ぢ登つて捜すと、山巓に朗々讀書の聲が聞える。彼れは七日斷食して天に祈り、立志の願をかけたのであつた。父も其の志しの奪ふ可からざるを知つて、それからは其の意に任せたと云ふ。

信淵は僧となることを忌んだが、刻苦して佛典を渉獵した。これは佛に佞するためでなく、篤胤同樣、智惠拜借のためであつた。秋田に傳つて居る話に、信淵曾て篤胤を訪うた所、篤胤讀書最中であつた。信淵、何の書を讀むと尋ねると、篤胤は、一切經を讀むで居ると答へた。信淵云ふには、君は今頃そんなものを讀むで居るか。俺は

既に三度まで閲讀したと云ふ。篤胤驚いて、經典中の色々のことを擧げて問ひ試みるに、信淵滯りなく答へたので、流石の篤胤も之に服したと云ふ。一切經の如き大部の書を、三度まで閲覽したと云ふは法螺の樣であるが、篤胤ごとき法螺家を威すには、此の意氣無かる可からずだ。

六〇 小野蘭山

勤勉無比

小野蘭山は、京都に生れ、寛政十一年、古稀の歳を過ぎてから、江戸に召されて、醫學館の本草學の教授となつた。此人、幼少の時から草木を好み、十二の歳に、陳扶搖が著した「秘傳花鏡」を手寫した。後には、本草の大家松岡玄達の門に入り、遂に物

産學の大家と仰がるゝに至つた。

蘭山は、頗る勤勉の人で、多くは山野に入つて、藥草の採集を事とした。江戸から召狀の來た時も、比叡山に採藥中であつたが、町奉行より達しの旨を言ひ聞かせた時は、喜びもせず、却つて迷惑の樣子であつたと云ふ。江戸に出ては、邸宅を醫學館の東隅に賜はつたが、庭傳へに學館へ行くのが捷徑であるのに、毎日、必ず門を出て往來を經、大迂回をして學館に到るを常とした。人に會しても、寒暖を述べる外、沈默して何事も語らぬ。併し、本草の事に渉ると、諄々として說き、深切懇到に話して、倦むことを知らなかつた。平生、交遊なく、六疊の室に獨坐して、讀書抄錄を事とし、一たび室に入ると、翌朝まで出て來ぬが例で、室は締め切つて、誰も入ることを許さなかつた。三度の食膳のごとき、飯櫃と共に戸外に置かせ、自ら室に運んで、食事が濟むと、戸外に出すと云ふ風で、誰も飲食の樣を見たものは無い。此人には一種の養

生法があつて、三食共に、散蓮華で酒を三杯飲むのが例であつたと傳へられる。夜分もいつ寢て、いつ起きるのか、同棲の門人すら、知ることが出來なかつた。或る時、蘭山、浴室に入り、時を經ても出て來ぬ。室内は寂然として聲も無いので、門人怪しんで、戸外より、先生どうなされたと問ふと、蘭山初めて聲を發し、餘り湯が熱いので、冷めるのを待つて居ると謂うた。蘭山は、斯く沈默の人であつた。蘭山の孫の蕙故と云ふが、京都から來て家事を見て居たが、其の妻は、三年後に江戸に來た。蘭山は、孫の妻であることを知らず、あれは何處の御婦人だと、孫に問うたと云ふ、笑ひ話しもある。世事に心を留めなかつたことの一面が、これでわかる。蘭山は、七十六の頽齡に至つて、官庫から稻生若水の著した「庶物類纂」一千卷を借り出し、之が謄寫を始めた。其半まで寫した時、文化丙寅の火災に罹り、烏有に歸したが、其後又再寫したと云ふ。其の篤學勤勉、老いて倦まざる精力は、眞に驚くべきである。

六一　屋代弘賢

卷冊故の借金

屋代弘賢は、塙檢校の高足で、國學に精しく、和歌にも書にも名聲があつたが、藏書家として最も聞えた。彼れが藏書は實に四萬册を超えた。一個人で斯く多數の圖書を藏したものは、古來餘り例が無い。もとより好學の餘り蒐集したものであらうが、僅ばかりの俸祿を受けた幕臣の身分として、よくも斯くまで蒐集したものである。勿論、此の蒐集を爲すには、飲食の費用まで節して掛つたに相違ないが、其の嫡子が不孝もので、親の衣鉢を繼げず、孫の又太郎と云ふに望みを囑したが、それも先立ちて死んだので、翁の晩年は、實に悲慘を極めた。唯翁を慰めるものは、其の一生の力を

傾けて集めた四萬卷の圖書であつたのに、後には、不如意の爲に、此の唯一の慰安物までも他へ抵當に入れて、若干の金を借りねばならぬことになつた。誰か一滴の涙なからんやである。

曾て、田中成美の曾祖父雅樂郎と云ふ人に、弘賢が百兩の金を借りるにつき、世話を賴むだ手紙の寫を見たことがある。それには、弘賢が圖書蒐集に苦辛した經歷から其の蒐集に尠からず借金をしたことなどが精しく書かれてあつて、有名な藏書家且つ金石家の狩谷棭齋を保證人に賴むことなども記されて在て、珍しいものであるから、今其全文をこゝに載せる。

老拙事、卅二歳の年、父跡式被ニ下置一候て、表御臺所人相勤候。祿わつかに四拾俵貳人扶持にて、借財多御座候き。然所、其砌より書籍をこのみ候て、より〳〵取入候所、少祿、ことに借財多候故、有餘と申は無レ之、珍書に心かけ候度に、借

財いたし候ては集申、年を重候て、今に至候ては、凡四萬卷程の藏書に相成申候。此代金、御推察可レ被レ下候。扨只今追々御足高も被レ下候へとも、從來借財にて集候事故、當時も借財多御座候。しかしながら、手跡門人數多御座候故、二季に莫大の收納御座候に付、夫を引當に仕、追々返濟いたし候事に仕候。右の通には仕候得共、幾口も御座候に付、經濟甚むつかしく御座候。依て、去年、或人へはなし候へは、利安なる金子二包ほと、かり出し可レ遣候間、夫にて舊借を返し候へ。然らは、六七年の内には、心安相成可レ申と申候に付、ひたすら賴候て、心當にいにし居候所、其もの、故障御座候て、成就不レ仕候。右の次第故、萬事あてに仕置候所、事成不レ申候付、去暮はたとさしつかへ、當春迄に申のへ候方あまた御座候て、こまり申候。依て御賴申上候。金子百兩、年一割位の利にて、六年賦に借受申度候。尤、拙者老年に付、嫡孫に加印いたさせ、萬一滯候儀も候はゝ、藏書の

内、右金高に應し候品、引取可レ被レ申と書入候て、證人には、津輕屋隱居梭齋と申もの賴可レ申候。もし又、年賦には成かね候と申候はゝ、二季に書かへ、其度々、年賦の割にて返濟いたし候樣にも可レ仕候條、御懇意の内にて、調候道御座有へく候はゝ、何とも乍レ憚御世話被二成下一候樣仕度、何分奉レ希候。頓首。

正月廿三日　　弘賢再拜

此書の中に「正月」とあるは、田中家に存する他の書簡に依つて推測すると、文政四五年のころにあたる。然れば、弘賢六十四五歳のころの書狀であらう。

弘賢、太郎と稱し、輪池と號す。天保十二年、八十四歳で歿した。

六二　松崎慊堂

娼婦の仕送で勉學

松崎慊堂は、肥後出身の學者で、狩谷棭齋、山梨稻川、市野迷庵と共に、深く金石の學を研究し、說文家として特に名聲が高い。

此人、幼少の頃は、寺に託されて僧であつたが、十五歲の時、發憤して儒者とならんと志し、寺を脫して儒者修業のため江戸に赴かんとした。何分旅費の無いのに當惑し、一計を案じて、伴つて眞宗の威德寺の嗣僧であると吹聽し、各所を遍歷して喜捨金を募り、不十分ながら旅費が出來た。そこで門徒等に向つて、自分は、これより京に上つて佛學の修業をすると云うて別を告げた。門徒共は其の擧を賛し、馬を給して送るもの、餞別に金を贈るものなどあつて、若僧得々として出發した。後に、門徒連、

威德寺に詣り、主僧に就いて、令嗣は上京されて目出度いと云ふと、主僧は不審に思ひ、俺の忰は、前年京に上つて居る。昨今、此寺より上京したものは無いと云はれて、門徒連は、初めて此の若僧に一杯喰はされたことを覺つた。

慊堂、江戸に出て、苦學の末、終に昌平黌に入ることが出來た。此頃は慊堂も血氣正に盛んで、或る時、人の遠行を送るとて、友人と共に品川に到つた。日が暮れて、歸ることが出來なかつたので、他の友人に伴はれ、娼家に宿つた。慊堂は非常な勉强家で、こんな處に泊つても、夜半、燈前に坐して、携へ來つた書物を讀んで居る。それを娼妓が見て、心竊に感服し、此人必ず他日大成するであらうと、試みに、一ヶ月の學費は幾何かと問ふと、慊堂打明けて云ふには、僅に金二分(五十錢)であるけれども、自分に取つては大金だと云うて、苦學の有樣を備さに語つた。娼妓は之を聞き、それ程の金なら、失禮ながら毎月妾より辦じます。學費に心を勞せず、折角勉强なさ

いと、意外の申出に、慊堂大いに其の俠氣に感じ、爾來、其の仕送りを受けて、一意專心、學を力め、終に大成に至つた。後年、慊堂、此の妓の、既に容色衰へて、尙娼家に在るを氣の毒に思ひ、之を落籍して己が家に置き、厚く遇して舊恩に報いたと云ふ。

慊堂は、斯く娼妓の世話にまでなつて苦學した人である。其の昌平黌に在學中、一椿事が起つた。それは、慊堂が借用の官書を同窓の澤九輔に貸したのが、そも〳〵禍ひの本で、澤がづぼらで、其の書札をどうしても返却せぬ爲に、慊堂は、返却の期に到り、官の問ふ所となり、縲紲の辱めを受けんとしたが、幸ひに免れて、退學處分で濟んだ。慊堂は、これほどの迷惑を受けても此の友人を捨てず、終生交りに冷熱が無かつたさうだ。

彼れは、學成つて後、遠州の掛川侯に仕へ、後には、國政の顧問たるの地位にまで

進むだ。彼れが掛川に在つた時の事である。玆に彼れの晩年に悲しむべき不幸な一椿事が起つた。ある時、庭園の栗の實が熟したので、僕をして之を落さゝうとした。然るに、毬彙を被つた栗が、丁度樹の下に立つて仰ぎ見つゝある慊堂の右眼の上に落ち、運惡く芒刺が眼の眸子を激しく擊つたので、血が流れ出るのみか、芒刺が折れて幾本も眸子に止まり、之を拔かんとしても容易に拔けず、治療に手後れしたため、終に右眼の明を失するに至つた。

慊堂は、名を復、字は明復、初の名は密、字は退藏と云うた。弘化元年、七十四歳で歿した。

六三　小川心齋

晩酌の興に國史談

小川心齋は、通稱五平、名を弘、字を道甫と云うた。越後北蒲原郡島潟の人で、新發田藩の里正であつた。

此人、誰を師と仰いだでもなく、獨學で和漢の學問を修めたが、博識で、着眼が高く、殊に有用の書を多く著はした。當時、漢學隆盛の時に方り、心齋は感ずる所あり、心を專ら國史の研究に潛め、其上木した「鍬倉史」の如きは、安井息軒が見て、能く其體を得て居ると激賞し、山陽の日本外史、中井竹山の逸史と並べ稱するに足るとまで評した。心齋又日本の上代の歌に韻あることを唱道し、「古歌韻解」を著はした。又早く地名辭典を著はさんと志し、「國邑志」數十卷の稿もある。其姻戚吉田東伍博士が、

後年著はした「大日本地名辭書」は、乃ち心齋の遺志を繼ぎ、「國邑志」を大成した樣なものである。心齋は、確に越後の學者中、永く傳ふべき一人である。

心齋を知る或老人の話を聞くに、此人、身の丈五尺五六寸もある、かつぷくのよい體格で、且つ豪邁の性質であつた。人に應接する時などは、横柄で、頭を低く下げることはなく、寧ろそりかへる樣な態度であつたと云ふ。年中、公用で幾ど新發田の鄕宿に起臥し、家に在ることは稀であつた。新發田の宿には、各里正も多く止宿した。心齋は豪酒で、晩餐の時は、各里正の上席に坐し、杯を擧げて、居並ぶ里正を相手に歷史談をするが常で、なか〳〵話上手にやり、誰にもわかる樣、おもしろく談じた。偶〻支那の史談も出たが、多くは國史の談で、いつも口を極めて上杉景勝を賞讃したものである。當時、漢學流行の時代で、多くの學者は、史記や三國志などを談ずるのが通例であり、又それを興あること、して聽いた時代に、專ら國史を談じたのは、心

齋の一見識と云ふべきだ。併し、その談を聽く里正連の多くは、欠伸を忍んで、無神經に聽いて居つたに違ひないが、心齋の膳の上の興は、全く史談であつた。酒がなかなかに長く、皆々膳を撤しても、心齋のみは、十時頃にならねば酒を罷めぬ。醉後には三時間位寐て、それより起き、冬なれば炬燵の上、夏なれば赤裸々で、蚊帳の中で薄暗い燈下に著述の筆を馳せ、天明に達するのが例であつた。されば、心齋の幾十の大著述は、概ね人の睡眠中に成つたと云ふも誣言で無い。

當時、新發田藩では、學識あるの士を、社講と云ふに取立て、其の次席に社長と云ふを置き、一鄕の子弟を敎授せしめたが、心齋も、社講に取立てられた一人で、諏訪山の大野致堂などと、大學や小學の講釋をしたこともある。毎年の年頭には、社講は、輪番に、自分の家に門人を會して、輪講を遣るのが例となつて居た。且時の講義は、口でするものと、筆記で出すものと二種あつて、文章で出すものも三十篇位はあつた

と云ふが、大抵の社講は、文稿を預り置き、日を經て批評を加へたものである。然るに、心齋のみは、必ず卽座に批評して返したと云ふ。文章も達者で、書も如何にも見事であつた。匆卒に書いた草稿などでも、まことに見事のものである。

六四　秋元安民

國學者連の珍妙運動

こゝに、少し毛色の變つた話しがある。大體の筋は、芳原の某樓に、世に稀なる貴重の書物があつて、それを借り出すに、四五の學者が聯合して、先づ遊女を味方につけ、其の遊女の連合を以て樓主を口說き、其の珍藏の本を借り出すと云ふ軍略、夫が美事效を奏したと云ふ一條の物語りであるが、事は惡所に關係すとは云へ、實は文苑

の一事件として、長く傳ふべき佳話である。樓の名は玉屋で、書物は古寫本の日本紀である。これが玉屋に藏せられて居る所から、「玉屋本日本紀」とうたはれ、古來名高いものである。此談話の標題に置いた「秋元安民」と云ふは、此の運動の主人公であるから、代表的に之を題としたのだ。

さてこれだけのことを吹聽すれば、幕が開いてもい、譯だが、こゝに識者ならざる人の爲に、聊か云ふべきことがある。それは、昔の芳原と云ふものは、今の性慾を滿たす一天張りの場所と同じ樣に考へると、なぜ學者が渴仰する樣な本が、そんな所にあるのだと、不審の晴れぬことになるが、當時は太平の世の中で、位地ある人までも此の巷に入り込み、藝術を鬪はしたり、風流を競うたりしたものであるから、こゝに一種狹斜文學と名づくるものさへ起つた位で、遊女の如きも、唯枕席を薦めるのみが能でなく、其の入り込む客人に諸侯もあり富豪もあつて、上流の社會を相手としたか

ら、遊女も相當の教育が無ければならず、隨つて歌よむこと、書をかくこと、茶を點じ花を挿すことは勿論、或は漢詩漢文を作ることまでも學んだものである。それが爲に、若い學者で志しを得ない面々は、糊口の爲、內々遊女の家庭教師をつとめて、國語漢文を教へたものだ。加藤千蔭の如きも、盛んに遊女を門人に取つて、和歌や書を教へたものである。斯る時代に於て、樓主ひとり文盲であるべきで無い。これも今日とは大いに趣を異にして、なか〳〵文藝に長じたものがあつた。現に關根博士が藏して居らるゝ、此の珍本所藏の娼樓玉屋山三郎が、昔扇面長者と云はれた仁杉某から、遊女筆の扇面の鑑定を乞はれ、それに答へた手紙の如きは、近衞流に書かれた、如何にも立派なものである。斯樣な時代に、芳原の或樓に稀なる珍書があると云うても、實は不思議は無い。但し、如何なる由緣で此の希有な古寫本が藏せられてあるかは分明ならぬが、餘程古くから持傳へたものらしい。

さて又此本は、永享年間の寫本であると云へば、圖書界に於て珍とすべきは勿論であつて、啻に足利時代の遺本として、骨董的の價があるばかりでなく、斯樣な古い時代の遺本には、末代のと較べて、種々異なる所があつて、學者の研究に助を爲すことが少く無い。當時、國史研究者が一見を欲したのは、決して偶然でない。況んや此本は、古くから「玉屋本」として、學者間に知られて居つて、祕して見せなかつたから、諸學者が、計略まで構へて、借覽運動を試みたのも無理は無い。此の本は、惜しいことに、十册の内、古くから三册失せて、七册のみ存して居らぬ。維新後、政府は、官權を以て之を借り受けたことがある。然るに、其後、持主が殁落したり、世の中がいろいろ變遷したりして、終に返却に及ばず、其儘になつて居ると、いつか聞いたこともあるが、今は何れに在りや。

「玉屋本日本紀」の借覽運動に隊長となつた者は秋元安民で、其の士官となつて働いたものは別に四人ある。是等は皆國學畑に知られてゐる面々だが、就中近頃誰も知つて居るものは、久米幹文や小杉榲村の兩人である。小杉の家には、世間題に關し、當時秋元から小杉に寄せた書狀も藏してあつて、曾て自分の友人が發行した「手紙雜誌」にそれを載せたこともある。今小杉博士が當時の事を物語つた筆記を、こゝに掲げる。

先づ秋元の事より談を起し、

秋元安民は、播磨姫路の藩士にして、通稱を正一郎といひ、平素大阪寓居、嘉永安政年間ごろより世に知られたる國典學者なり。安政四年丁巳の夏、榲村、二十に足らぬ頃、はじめて江戸に出でしが、恰も好し、秋元も江戸に來り居て、はじめて面晤を得たり。これより先、水戸藩の久米幹文、吉田於菟三郎など、榲村、同學の因みに交はりしも、秋元も亦交はりありて、互に往來す。

四人の學者の、相識る關係は斯くの如くで、さて此間に一樁事の起つたにつき、榲村

語を進めて曰く、

この秋元氏交誼中の一奇事あり。一日、安民を姉路藩邸内に尋問するに、在舍したれば、學事談に及びて後、同人ひそかにいふ。新吉原妓樓玉屋山三郎が家に、中古より、永享年間古寫本の日本紀を所藏す。されば、江戸にて、國典家は、皆其事を聞き知りて、見んといへど、祕本なりとて、所有者、容易にこれを許さずといふ。秋元、如何なる方法を以て之を借出さんとするか。榲村は更に話頭を進めて云ふ。

今こゝに一計策を設けて、借り出し、寫さんとの心付にあれど、必ず一人の手際にては、速かに成し得べからず。御互に協力して寫さんと欲するが、助力せらるゝか如何。果して御同意あらんには、久米、吉田、余と先三人、外に同藩春山弟彦といふ、若者ながら篤志あり、君と五人、同心協力しなば、分擔、五六日中に寫し了へん。其日本紀は、四より十迄、七册の殘闕なり。榲村、手を拍ちて喜び、無論協力

せん。久米、吉田等に、よく談じ給へ。扨其の計策は如何と問へば、

安民が八ねり出した苦肉策に就いて、榲村は語を次いで曰く、

さればよ、君達の如き若壯者に對し、甚だ勸めにくき事ながら、一同其玉屋に登樓し、其妓を介して、樓主に應接の道を開き試みん。大かた其策當るべしと、笑ひながらいふ。榲村云く、それも可ならん。久米、吉田など、如何あらん。まづ談じ試み賜へとて別る。

久米、吉田も、謀主の策に同意し、愈〻決行とまで進んだにつき、榲村曰く、

其後文通ありて、兩人共同意なれば、猶打合はせの爲め、五人、秋元の寓に會することゝなり、愈〻近日決行と決したる時も時とて、七月燈籠の一佳節が、登樓の第一回で第二回を經て、始めて、それ〴〵の妓に實際を打明けて談じぬ。

打明けて密事を談ぜられた五妓は、如何に感じたか。これにつき榲村語る。

妓等は、一同大いに意外の趣興に驚きながらも、さて〳〵妙なることよ。いやしき身に取りて、さる文學の皆樣を御客に持ちたるも冥加あることなり。いかで、われわれ及ぶ限りを盡さずして濟むべきと、五妓、力を協はせて、樓主に談判に及びたるところ、意外にも樓主は喜び、直接面會すべしと申出で、秋元の心算は全く圖に當りたり。

さて樓主は、五學者に會して、如何なる挨拶をなせしか。楹村曰く、

樓主出でて五人に應接し、皆樣の御所望、まことに滿足餘りあり。仰せ通り、十日許りを期して、川立申さんと申出でたるに、何れも雀躍して喜びたり。云云。

如斯して、秋元等が久しくあこがれた貴重本は借り出され、期を違へず、八月三日より十二日迄に、七册の謄寫全く成り、原本は返却に及んだ。世に流布する「玉屋本日本紀」の副本は、これが本となつて轉寫され、國史の研究家は、先輩苦心のお蔭で、

今は格別の困難もなく閲覽することが出來るのである。

六五　清原雄風

遁世菩堤居士

清原雄風は、豐後の國、岡の人で、小澤玄達と名乘つて、醫を業とした。初めは龜井道載に漢學を學んだが、村田春海、加藤千蔭などと交はつてから、國學に志し、和歌の修行を積み、國學界に知らるゝ樣になつた。清原雄風と云ふは、國學者になつてからの名である。

雄風が四方を周游して歩く頃は、少壯血氣時代で、或は人の家に寄食し、或は奴僕に傭はれ、僅に口を糊したこともある。併し、彼れが卓犖不羈の天性は、境遇に因つ

て枉げられなかつた。彼れが初めて江戸に出た時、且らく岡藩の屋敷に寓したが、藩邸に堀宗本と云ふ典醫があつて、雄風の才を愛し、養子にしたいと百方說いたが、蕉ずる氣色が無いので、宗本も困つて、いろ〳〵歡心を得るに力めた。雄風も、追々義理が重なつては辭しかねると見て取り、一夜、髻をフツと切り、「遁世菩提居士」と書いた紙に包み、之を遺して、何れともなく脫走した。當時宗本は、君寵を賴むで政事に干與し、飛ぶ鳥を落すの勢ひがあつた。斯る勢力家から養子に望まれるのだから、凡庸の靑年ならば、立身のため直ちに諾するのは普通の人情であるのに、雄風は流石に眼識が高く、醫者が政事に容喙するなどは、軌道を逸した邪まなこと、指彈きした。案のごとく、此の典醫は後に罪を獲た。

雄風は、藩邸を去つてから流浪して、上總の某寺の僕となつた。ある日、主僧は、詩を作らんと切りに苦吟してゐる。雄風は、庭の掃除をしながら、和尙さん、何を考

へて居らるゝと問うた。和尙は、言うても詮の無いことゝは思つたが、明日こゝで詩會を開く。課題は「半面美人」だと語ると、雄風は苦吟の樣子もなく、筆を借りて一詩を錄して示した。和尙、之を見て驚き歎じ、これほどの詩が出來るなら、お前も明日の會に連るがよいと勸めた。雄風も有り難うと當座の挨拶をしたが、さて翌朝になると、此僕の踪跡がわからぬ。彼れは田舍の屁つぽこ詩人の相手になるのを五月蠅く思ひ、逸早く脫走したのである。

彼れは、寺を脫して後、銚子港のある酒造家の家に身を寄せ、帳簿を司ることになつた。彼れは、暇さへあれば讀書に耽つた。主人も其の志しの篤いのに感じ、斯樣な男を永く番頭にしたいものと思ひ、足留の爲、屢〻妻を娶れと勸めたが、雄風は之を五月蠅く思うて、主人に預けてある貯金や給料を其儘置き去りにして、何れともなく出て行つた。雄風は、斯く到る處人に喜ばれたが、小節に安んずるを厭ひ、逃げ廻つて

終に一家を爲すに至つた。

彼れは、性來非常の無性で、一家をなして後も、頭髪は梳づらず、面に垢がついても濯ふこともなく、書齋は曾て掃除せず、書籍や紙屑や塵埃か浪藉たる中に、纔に膝を容るゝを常とした。彼れの奇なることには、毎日、門人が敎を受けに來ると、先づ講義を始める前に、門人を相手に、角觝を一番取つたものである。彼れは、何よりも刀劍に趣味があつたと云はれる。ある時、一刀を購ひ、折節之を佩びて友人を訪ねた。主人の未だ座に來らぬ内、爐に鐵釜がかゝつてあるのを見て、急に佩刀の利鈍を試したくなり、矢聲をかけて眞二つに割り、大いに其家の人々を驚かしたことがある。彼れは、前に云うた如き無性な性で、湯にも入らず、髪も梳づらず、外に出る時などは、勿論衣服を美にすると云ふことは無かつたが、不思議に佩刀に埃のつくのを厭ひ、必ず刷毛の樣な塵掃を帶に挿むだもので、座に着く時には、先づ佩刀を塵掃でよく掃つて、

刀と共に塵掃を側に置き、去る時も又丁寧に掃つて佩びたと云ふ。

彼れは巢雲道人と號し、字を伯高と云うた。文化七年、六十四歳で江戸に歿した。

六六　原雲庵

病家に告ぐる三箇條

安永頃、江戸に原雲庵といふ醫者が有つた。博學で氣骨あり、醫術に於ては、國手と謂はるゝ程の名人であつたが、一向世に用ゐられず、門前は常に雀羅を張ると云ふ不景氣で、家も甚だ貧乏であつたが、生涯志操を變ぜず、卓然貧に安んじた。友人は氣の毒に思ひ、君の樣な名人が不遇であるのは、如何にも惜しいものだ。畢竟、君は世と交はることをしないから、知られないのだ。少し我を折つて、當世流に權門富豪

へ出入し、名を賣つて一家の計をしてはどうだと云ふと、雲庵『俺は幼少から醫方や博物の學を學んだが、まだ人に詔ひ世に媚びるの道を學んで居らぬ』と云うたので、友人もかへす言葉が無かつたといふ。

雲庵は先づこんな調子で、世に求めることを一切欲しなかつた。ある時、一大諸侯、侍醫を物色したが、容易に見當らなかつた。家臣は、雲庵に相談したら、誰か名醫を紹介してくれるも知れぬと、試みに訪うて之を圖ると、雲庵の云ふには、一人、相當の大家がある。その人は非常に醫術が精熟して、治療は實に上手だ。當世無雙の國手と云ふは、先づ此人であらう。唯此人は放埒で酒を好み、醉ふと、人を罵る癖があつて、ともすると、人に嫌はれる。缺點と云へば、これが缺點だ。併し、方今侍醫に召さるるには、此人の外はあるまい。して祿は、いくら與へらるゝのであるかと問ふ。使臣の云ふには、祿は、次第に依つては、いくらでも遣るが、全體、その人は何處の誰だと尋

ねると、雲庵『それは別人で無い、乃ち我輩だ』と云うたので、使臣も腹を抱へて去つたと云ふ。

雲庵は貧乏であつたが、藥禮を貪ることを陋なりとして排斥した。彼れの藥局には、墨くろぐゝと大書した、病家に告ぐる三個條が張付けられて居た。其大略を擧げると、富豪は藥價を前納さるべし。中產の人は五節句毎に納めてよし。下產の人は、家計に餘裕のある時、何時でも納むべし。貧者に至つては一切拂ふに及ばず。且薪炭の資を與へて治療すと云ふの但書がある。啻に施藥を行ふのみならず、薪炭の費を與へるに至つては、破天荒の所業と謂はざるを得ぬ。雲庵の此の仁惠は、いたく貧者を感激せしめて、報恩のため、日々水を汲むで臺所を助くるもあり、使ひ走りをするもあり、夜中提灯を持つて從ふもあつて、雲庵、意外の便を得たと云ふ。

又一日、友人の墓に詣でんため、某寺の墓場に到つた。時は三伏の夏候で、草がひ

どく戻つて居て、道も定かならず、日も漸く暮れ、いくら搜しても墓が見當らぬ。雲庵困却し、『確に此の方角にある筈だのに、見當らぬは遺憾だ。併し、こゝ迄來れば、俺が誠意は故人に通ずるであらう。よし〳〵』と獨り頷き、墓のある方位に向つて大聲を發し、『雲庵墓參に來たよ』と叫び、腰をかゞめて拜禮をして去つた。彼れが物に拘らぬ灑落の氣風は、又珍とすべきである。

六七　曲直瀨道三

英傑の意外な一方面

和田倉門を出ると、誰も知つて居る通り、道三濠といふがある。なぜ斯く言ふかといふと、維新前迄は、すぐ和田倉門前に曲直瀨の家が存在して居つた。道三は曲直瀨

家の先祖で、其の家の附近であるといふ處から、誰いふとなく、此名が出來たわけである。

曲直瀨といへば、言ふ迄もなく、德川家の世襲典藥である。家康を始め、將軍家は勿論、幾多の名門は、皆此の醫者の手にかゝるのが通例となつて居た。將軍のみならず、天子と云へども、此の醫者にかゝる外は、最終の救濟法がなかつたのであつた。即ち曲直瀨家は、實に當時に於ける醫界の明星であつた。

曲直瀨は、斯くの如く、多くの名流を手掛けて居るから、其の記錄を見ると、色々の人の病狀がよく分る。曲直瀨の手にかゝつた人々は、皆歷史中の人物であるから、其の病狀や病因などを調べて見ると、中々に興味がある。啻に興味があるのみならず、歷史を補ふ材料も、いろ〳〵其れから發見することが出來る。たとへば「唐瘡」といふものが、天正頃から盛んに日本へ這入つて來て、文祿頃には最も流行した。「唐瘡」は

今日の所謂花柳病である。家康の愛子たる秀康の如きも、此の病の爲に斃れた。其他、意外の豪傑が、此の病に罹つて居たことが、此の記錄に載つて居る。こんな工合に、花柳病に罹つたといふ事實から裏面を見ると、其の人となりや內幕が自ら知れて來るやうなわけであつて、種々の點に於て、歷史を補ふ材料ともなる。

曲直瀨の記錄と云ふは、外ではない、卽ち「醫學天正記」である。是れは、旣に史籍集覽の改定版第二十六册の新加別記類の中に載つてゐるから、知つてゐる人は、蓋し少なくないだらう。勿論、醫者の手控にしか過ぎないものである。卽ち曲直瀨が醫案を書き留めたものであつて、殊更に、其の人々の性行などを書き記したものでは無論無い。たゞ、其人、何れも著名。上は天子、將軍、其他名高い武將、學者、工藝家等、當時の所謂名流は、此の中に澤山載つてゐる。其の醫案は無論、漢方式であるが、色々の點に於て、今日の醫者の參考ともならう。そこで、此の天正記から、一二の例を引いて見たいと思ふが、先づ此の書は、寬永四年立冬開板のものは、上下兩卷になつてゐる。寬文三年の版本も、亦さうである。前記集覽本では、之を乾卷として、乾上、乾下とし、更に坤卷を添へてゐる。併し、此の坤の方は、寫本で、世間にも多く流布してゐた。又集覽の編者は、寬永板の書を見て居ない。さて其の文章は、殆んど總べて漢文で、處々假名交りになつてゐる。年代の順には書かず、病名別になつてゐる。さうして天正十一年の正月二日から書き出してある。左に、寬永の古板本から、二三のことを抄錄する。たとへば片桐且元と秀吉が出てゐる。それは斯うだ。

一片桐東市正四十余才　傷酒瀉利、又感冒、脉浮數、右關弦實。安胃湯。藿香正氣二加葛。

一大閤相國秀吉公於大坂　感冒、流涕聲嗄、口乾咽痛。桔梗湯。陳、芩、朮、甘、桔、羌、莎、勺。

內傷附飲食の部に、天皇御不例のことがある。

五ノ七日
一今上皇帝和仁　食傷、瀉利嘔逆。安胃湯。云々。
一今上皇帝和仁三十五才　祝酒御胸中滯、心中冷、飲如レ盤、咳時引レ痛、御脉、右關緊實。延齡丹。云々。

心痛の部を見ると、加藤浩正が、酒の飲み過ぎで、病を得たことが出てゐる。

一加藤肥後守殿　過酒、心下痛、吐二黃水一。鐵刷湯。云々。（本項坤卷）

淀君が、氣鬱病にかゝつたことも出てゐる。

十ノ二
一秀頼公御母御年三十余　御氣鬱、滯不食、眩暈。快氣湯。木香飲也。
十一ノ朔
一内大臣秀頼公御母三十余才　氣鬱、胸中痞塞而痛、全不レ能レ食、于レ時頭痛。順氣湯回痞滿。養胃湯。

淀君の外に、婦人の病氣もいろ〳〵出てゐるが、片桐且元の妻が痳病を病んだことも見える。

一片桐市正室　夜必足心熱、小便淋澁、頭中鳴。八正二加二斤弓赤芍莎止一。（本項坤卷）

これは、且元自身が、同じく痳病にかゝつてゐた證據として見ることが出來る。

有名な影師後藤長乘の病が、嘔吐の部に見えてゐる。色々の種類の人がある一斑を示すに之を掲げるが、左の如く云うてゐる。

九ノ十五
一後藤長乘四十　久患二嘔吐一、止虫衝二上于心下一、而口中唾出、服二煎汁一則惡心嘔逆、脉沈細。安胃散。云々。

○大便不通。丁香脾積圓二十粒。二行瀉。云々。

記事があまり簡潔なのと、醫案が少しも分らないから、隔靴の感がないでないが、それでも何となく其人の面影が知れるやうで、多少の興味がないでもない。

禁裏拜診の模樣

記事の内、極めて稀ではあるが、少し長いものもある。長いだけに歴史の參考にな

る。癰疽の部に、

一今上皇帝和仁　患癰腫、在臍下左傍、色赤而不痛不熱、脉細弱。托裡湯。十六味流欽也。

○破潰外醫岩倉梅陰菴　大德寺支首座兩人參内、在緣上而隔漳子、破紙作穴視之。灸腫上。慶長三年之秋、御腦之時、予欲灸治、依無其例、不能灸、頃中院入道也足軒、觀出舊記而奏上、依其今灸腫上。自今已來、可有灸治之勅意也。内藥、始終十六味也、大便結、則用潤腸丸、二旬而全愈。

この當時に於ける、朝廷の掟や、至尊に對する醫者の拜診ぶりなども見えて、面白く思はれる。「慶長三年」云云とあるは、前に「十月之末、予奏上、欲灸膏肓、有詔攝家名家、見尋舊記、九條殿、二條殿、近衞殿御答、雖無舊記、以艾灸、木復、醫師奏上之旨分明、可被灸治、一條殿、鷹司殿御答者、無舊記云云、故不能灸」と出てるるのが

卽ちそれだ。

氏鄕病狀錄

此天正記全部の中で、最も長い記事は、蒲生氏鄕の病狀錄である。これを讀んで見ると、當時、太閤を初め、家康、利家などが、如何に氏鄕の病氣に焦慮してるたかゞ、極めてよく分る。筆者は、自分の手柄を傳へる爲に、特に詳しく書いたでもあらうが、文字を多く用ゐれば、目的以外のことも多く現はれて、後世に意外の利益を與へる。これが卽ち文字の功德である。氏鄕の病狀は下血の部にある。其全文。

一會津宰相氏鄕蒲生忠三郎也年三十余　朝鮮征伐之頃、於肥前名護屋、患下血、諸醫技盡、而堺之宗叔治之而愈。予其時從朝鮮歸而上洛、故後之翌年之秋、法眼正紹語曰、氏鄕へ養生藥進上スト、時予曰、名護屋ニテ所勞後、脉ヲバ不見、面色ヲ候ニ、終ニ不調、色黃黧ニシテ、頂頸ノ傍肉瘦消シ、目下微浮腫、若腹脹肢腫生ゼバ、必大事トナル

ベシ、藥進上スモ分別アルベシト。其後十一月ニ、大閤秀吉公御成ヲ申、予其供奉ノ時ニ、又顔色ヲ候、腫彌甚。其後、脹腫增。十二月朔日、大閤殿下、民部法印ノ亭ニ座シ玉ヒテ、藥院予二人ヲ召メ、氏郷所勞如何ト問玉フ、二人曰、終ニ不レ能レ診レ脉、藥ハ誰カ與ト問玉フ、堺ノ宗叔藥ト申、左右ハ大納言家康、中納言利家、二人ニ仰テ、諸醫召メ脉ヲ見セヨト、卽上池院、竹田、駒菴、盛方院、祥壽院、一鷗、祐安其外、已上九人、氏郷ノ床下ニ至ル、家康、利家、左右ニ在テ、諸醫、脉ヲ見テ退ク。同月五日、利家家康卿、予一鷗トヲ召メ、氏郷脉ノ樣躰ヲ問フ、予曰、十ハ九ツ大事也、今一ツカ、ルハ、年ノ若ト、食ノアルト計也、猶食減、氣力衰テハ、十ハ廿モ大事ナルベシト申、利家曰、殘ノ醫一人ヅヽ尋シニ、或十ニ五ツ大事、或ハ十ハ七八大事ト申ス、宗叔ヲ召メ曰、玄朔ハ十ニ廿モ大事ナルベシト、殘ノ醫ハ或十ハ五六七八ト云、如何ト、宗叔曰、十ハ一ツ六箇敷存ト申。其後、利家、予ニ對メ曰、氏郷所勞彌〻惡シ、宗叔藥ヲ

止ムベシ、今日ヨリ療治セヨト、予ガ曰、宗叔十死ト見テ放タラバ、五日三日、藥ヲ與テ可ニ見申ニ、不レ然バ、斟酌ト申、宗叔ヲ召メ、其旨ヲ仰ラルヽニ、尙十ニ一ハ如何ト申、故翌年文祿四年正月、未レ止、宗叔藥也、次第ニ氣力衰、食減メ、一鷗、藥ヲ與テ、十餘日メ果メ卒ス。

徳川秀康が唐瘡を患つたことは、喧傳の事實であるが、何故か、此の天正記中に出で居らぬ。併し、秀康のことは、耳疾の部に二ケ所ほど見える。

一松平三河守十二才余侍從　耳中痛膿出、出止、晡時潮熱頭痛汗出。清氣湯。小柴胡ニ加ニ莎苛ー。

此の外、眩暈の部に、秀康と思はれる一節がある。年代を掲げてないから、或は他人かも知れないけれども、「越前守殿」とあれば、且らく秀康として置いてよからう歟。

一越前守殿　虛勞、上氣寒熱、眩暈耳聾、食少而瘦。伏令補心湯。加ニ莎宿桑艸蔻ー。（本

養安院本

右擧げた樣に、天正の諸豪傑の病證をよく〳〵味つて見ると、其の人の暗黑面が見えて、何となく其人を髣髴する樣な氣もする。醫案錄であるから、外の事は書いて無いが、若し少しく筆を廻はして、その人の性格や家庭の事などにも及んでゐたら、いかに興味を與へ、且つ史家の參考ともなることであらう。之を思ふと、今の杏林の大家達も、診察錄を作るに、多少の用意が欲しい樣に思ふ。それは兎も角も、曲直瀨は、浮田秀家の病氣を治療し、難治の病を治したことがある。秀家の喜びは非常であつて、謝禮には何物をも惜まぬ、望に任せるから、遠慮なく求めよとあつた。曲直瀨の答に、別に望は無い、朝鮮征伐で分捕られた書物の內、幾許か分けて下さることが出來れば、滿足であると云うたので、それは容易い要求だと云うて、萬を以て數へる書册を贈つた。これが後世「養安院本」と唱へる朝鮮本で、文祿の役を記念する、貴重の圖書であ

る。各册に、曲直瀨の藏記、「養安院書」の細長い印が捺してあるので、世には「養安院本」と云うてゐる。此の書籍は、朝鮮の文化の最も盛んな時に刊行されたもので、何れも立派なものであるが、今は四散して、惜しいことには、多く支那の楊守敬などに持ち去られ、內地の好書家の手に存するものは、割合に少ない。言ふ迄もないが、楊守敬は、他にも良い書を澤山に持ち歸つたもので、彼れの國の學者譚獻の日記にも、

「惺吾自二東瀛一歸。積書至二二十萬卷一。所レ得唐以前經籍卷子本。及宋元難レ得之籍甚夥」

と出て居る位だ。惺吾といふのは、楊の字だ。

文人の旅

小引

旅行には趣味がある。特に文人墨客の旅には、多くの趣味が包藏される。啻に、其時、其事柄を作り出した文人の逸話を殘すのみならず、長く其興を殘すものである。芭蕉の如き詩人が、全國を行脚して、到る處に風懷を詠じ、それが石に刻され口碑に傳はり、其地の風景、これがため名所となり、一段の光彩を添へることになる。豐後の耶馬溪は、山陽の如き文豪の一游を經て、天下に名高くなり、大和の月ヶ瀨は、齋藤拙堂の跋涉を得て名勝となり、野州の鹽原は、奥蘭田や尾崎紅葉に依り、豆州の熱

海は、成島柳北によりて、世に紹介され、東海道は、一九や廣重や北齋などの、小說や繪畫で趣味ある所となつた。間宮林藏、伊能忠敬、貝原益軒、橘南溪などの大旅行家を始めとし、文學ある人の旅行により、僻阪の風景美が世に紹介された爲は、縷指するに遑あらぬ。

昔の文人は稍々なる意味で旅行をした。或は風景美を探る趣味慾の爲に、或は文藝上の交りの爲に遠く人を訪ねる意味から、或は自作の詩や文や書畫を賣る爲に、又は德川時代に流行した武者修行に倣ひ、文藝上の修養の爲にも旅行した。勿論、今日とは異つて、交通甚だ不便であつたのみならず、各藩の掟も區々で、旅行は困難であつた。加へて交通の不便なる結果として、骨も折れ費用も多くかゝつた。然れば、今日僅か一週間で行ける所も、一ヶ月二ヶ月も費した。一旦旅に出れば、一年二年歸らぬが通例と見なされたものである。併し、其道中の困難な所に、長旅であつたところに

趣味もあつたのである。

文人の名高い旅と云へば、三岳道者と云はれた、池大雅、高芙蓉、韓天壽の三人が打連れて富士、白山、立山の三山を踏破したことが、文苑に喧傳されてゐる。是は三人の銘々に就いて既に話したから、大略は知れて居る筈だが、その僅に殘つて居る、道中記の斷片を見ても、旅中の趣が想像されて興味を感ずる。文人と云ふ族は、今も昔も同じことで、俗に疎いものが多いから、到る處に失敗が有り勝である。それに、皆々唯我獨尊的の天狗であるのに、他鄕に入つて見ると、一向に持囃されなかつたり、己れよりも遙に低級の文人に頭を下げねば、宿の拂にも困る樣なことなどもあつて、滑稽な話も生ずる。

一口に文人と云うても、東西兩京の文人と、東北、九州の文人とは、おのづから其の性格が異つてゐる。文人の旅行は、その異つた性格が互に接觸するのであるから、

こゝに動もすれば撞突も生ずるのだが、其の撞突が一種の趣味を生ずる。全體、文人の特能は、事に觸れ物に接して、詩に歌に文に畫に發露するものであることは、言ふまでもないが、旅行は則ち之を生むの最もよい機會である。

旅の恥はかき棄てと云はれ、どんな人でも、旅に出ると、無責任な行動が絶無とは謂へぬ。さてその軌道を逸した所に、趣味の話の泉が湧くものである。これから、文人の旅に就いて聊か語ることにする。

一　太田蜀山

旅中の狂歌

太田蜀山は、旅行中なども、到る處に狂歌を詠じた。宿驛の車夫馬丁と雖も蜀山の名を知り、是非一首などと請うたものである。蜀山は幕府の役人であつたが、請はるに任せて、一向役人振らず、咄嗟口吟んで人を感服させた者だ。今、彼れが、旅行中種々の場合に發した四五の名吟を、有觸れては居るが擧げて見よう。

蜀山、幕府の御勘定方を勤めた折、公用を帶び、土方筋へ旅行の道すがら、乘つて居る駕籠の中の袖炉の火が消えたので、從僕に命じ、街道の人家に火を乞はせた。偶〻其の家に近隣の若者兩三人集まつて居つたが、早くも蜀山なることを看て取り、從僕に向つて云ふに、御主人は江戸で名高い蜀山先生と見受ける。火を乞はれたが幸ひの

事、どうか即吟一首賜はる樣願つてくれと頼んだ。蜀山、駕籠の中で之を聞き、よしよしと云つて、矢立を取り出して鼻紙に書きつけて、投げ與へた即詠は、

入相のかねの火いれをつき出せばいづこの里もひはくるゝなり

蜀山、安房へ旅行中、宿屋の若者共、一首をと望んだ。蜀山無聊の折柄、よろしい、何でも題を出せと云ふ。安房は日蓮崇拜の土地柄であるから、若者共は、南無妙法蓮華經の七字を題にと所望した。實に、甚だ難題である。然るに、蜀山、一向苦吟の樣子もなく、直ちに筆を取り、一首を書いて與へた。

どの樣な難題目を出されてもよむが妙法蓮華きやう歌師

蜀山、甲州府中に旅した時、深く交はつた六樹園飯盛と、旅宿に出會つた。蜀山、挨拶の代りに、さら〳〵と一首を認め、飯盛に示した。

君もまめ我らもまめはまめながらふちうに在てなくわらぢくひ

これは、例の七歩の詩に「煮ㇾ豆燃ㇾ豆萁。豆在ㇾ釜中泣」と云ふを、巧にもぢつたのである。

又はじめて京都に到り、五條の橋を通り過ぐると、橋板が處々朽ち壞れ、板片などで繕つてあるを見て、案外に思ひ、

來て見ればさすが都は歌どころはしの上にも色紙短册

又近江の湖水のあたりを經廻り、瀨田の長橋へかゝると、居合はせた雲助共、頻りに駕籠に乘れと勸める。蜀山笑ひながら、錢が無いからと斷ると、雲助共、此の客人を蜀山と知つてか、旦那、此の八景を一首の歌によむで下さい。さすれば、無賃で乘せ申すと言ふに任せ、蜀山は直ちに口吟んだ。

乘せた(瀨田)からさき(唐崎)はあほづ(粟津)かたた(堅田)のかご比良石山やはせ(矢橋)らしてみる(三井)

又東海道のある宿に泊つた時、座敷に竹と雀を畫いた衝立のあるを見て、つれ〴〵の餘り、筆を走らせ、一首書きつけた。

雀どのお宿はどこか知ねどもちよつ〳〵とござれさゝの相手に

宿屋の主人、大切な畫に樂書されたと迷惑がつたが、蜀山先生と分つて、遽に御馳走をして、厚く御禮を云うた。

二　柏木如亭

旅行詩人

柏木如亭は、大窪詩佛と名を齊しうした大詩人で有つたが、遊歷にのみ歲月を費し、家計はいつも不如意で、歿後は墓を營む親戚も無かつた位だ。

如亭は有名な食道樂で、「詩本草」と云ふ書を著し、自分の嗜む食物を詩に詠じて居る。此の旅行詩人の境遇は、到る先き〴〵の宿屋が假りの家で、其の下婢が、動もすれば一夜妻ともなつた。隨つて惡疾にも罹り、當時の漢方醫者は、種々な食物を害ありとして禁じた中に、此の人の大好物である脂肪性の食物を嚴に禁じた。如亭もこれには閉口したが、其戒めを守らざるを得なかつた。或る豪家に且らく滯在した時などは、脂肪性の食物は、一切嫌ひだと斷つた。さて一夕、五六の人が集まり、晩食の饗應のあつた時、種々の馳走があつた。其中に、鰻の蒲燒が一同の膳部につけてあるのに、首賓たる如亭の膳部には、鰻の代りに野菜の料理が特別につけてある。如亭は、流石に蒲燒の香氣に鼻を打たれ、今は耐へ切れず、隣席の客の油斷に乘じて、ソツと野菜料理と鰻をすり換へた。其家の主婦が傍らに居つて、之を發見して、『オヤ、あなたは脂ものはお嫌ひな筈だ』とスツパ抜かれ、『いや〳〵、これだけは好物だ』と、滿

座を哄笑させたこともある。

三　龜田鵬齋

北地留連の因由

龜田鵬齋は、越後に遊むで、三年の長い間足を留めた。鵬齋の如き、都下で大門戸を張つて居る文人が、よくも三年の長日月旅で暮したものと、何人も不審に思ふも無理は無いが、支那の詩人が、「越女一笑三年留」と云うたのを、鵬齋は、四角四面に之を躬行實踐したものである。綺羅三千、嬌を呈し、八千八水の柳の靡く新潟に遊むでは、流石の鵬齋も、留連歸るを忘れざるを得なかつた。彼れが心醉した新潟の狎妓の名まで、今尙傳はつて居るのみか、三條にも狎妓があつて、それに燒餅をやかせたこと迄も傳はつて居る。と云ふは、鵬齋自身が戲れに書いた詩書が存して居るからである。して見ると、大家の文章は不朽でよいか、わるいか、こゝに至つて疑問と謂はざるを得ぬ。

鵬齋は、越後に在つて多く持囃され、隨つて得たる潤筆は甚だ多かつたと云ふが、幾ど花柳の巷に散じ盡したのである。彼れは、艶福長者の名こそ博したれ、江戸へ歸る時は、旅費が空であつた。

四　頼山陽

寸翁と船中の邂逅

幕府時代には交通が不便で、陸路でも、海道でも、百里を行くには、數日を費さざ

るを得なかつた。船も汽船でないから、のろくさいこと甚だしいもので、船中の客は何れも退屈し、繁華な津に着くのを待構ひ、必ず皆々上陸して、酒樓へ登つたりなどして鬱を散じたものだ。こゝに京大阪より廣島邊まで通ふ船中に、一人の、立派な家老格とも見える武士が在つた。此船が、或る津に着くと、例の如く、皆々ドヤ〳〵我れ勝に上陸し、船中幾ど空明となつたが、此一士人は、落着き拂つて上陸もせず、結局、大勢が留守となつて、靜かでよいと喜んで居る。と見ると、居殘つたのは自分のみでなく、外に一人居る。さまで年も取つて居らぬが、靜かに讀書をして居るのを見て、年の若いのに感心だと思つて、相手欲しやの折柄であるから、初めて口を開いて互に姓名などを名乘り合つて見ると、此の若い人が、乃ち賴山陽であつた。その士人は姫路の有名な家老河合寸翁で、山陽と寸翁の交はりは、實に此の船中の邂逅から始まつたのである。

寸翁は學者で、且つ多方面の趣味家で、山陽が交りを結ぶには、決して不足の無かつた人物である。

五　豐谷

信州の山村で身賣の場に出會ふ

蕪村門下に、豐谷といふ畫家があつた。遊歷中、信濃路で途に踏み迷ひ、ある山村に日が暮れた。宿るべき旅舍も無いから、ある農家に一泊を乞うた。此の農家は、軒傾き壁壞れて、如何にも見すぼらしい貧戸であつた。その主人は、折角のお賴みなれど、見るゝ通りの貧乏ものので、お泊申す夜具も無ければ、食物もないと、再三斷つたが、強ひて賴むで一泊し、僅に一椀の麥飯で飢を凌ぎ、一個の木枕を借り、爐邊に

寢たが、深更になつて、ふと目を覺ますと、女の泣き聲が聞える。何事かと、窮に障子の破れ目から覗ふと、此家の老夫婦が、娘を中に置き、別離を惜む樣子である。何か仔細のある事ならんと、近寄つて尋ねて見ると、打續く不作で納租が出來ず、已むなく娘を權堂に賣ることに極めたと云ふを聞き、豐谷、氣の毒に思ひ、何とかして之を救ひくれんものと、擔へる行李の中から、己が丹精を凝らして畫いた一枚の花鳥の圖を取出し、自分も、旅中だから金錢の貯へはない。若し此繪を幾何かに買ふ人あらば、其料金は進上すべし。試みに、此最寄りの豪家に賴むで見られよと云ふので、老夫婦も、これに力を得、翌朝、老人、繪を携へて、あちらこちらを見せに歩いた。ところが畫の心得あるもの之を見て、老人の驚く程の金を與へて買ひ取り、且つ此の畫を書いた人、若し此地に在らば、別に書いて貰ひたいと言ふから、其人、自分の家に在る由を告げた。然るに、此事忽ち近隣の評判となつて、意外に各所から依賴があつ

たゝ。そこで豐谷も、數日足を留めて揮毫し、その潤筆を悉く此家に與へたため、優に租稅を拂ひ、幾何の餘分さへ生じたので、一家深く其の恩に感じ、娘を嫁に貰つてくれとは申出たが、それは斷つて、飄然立去つた。此話は、前田香雪翁の隨筆に出て居るが、惜しいことには、豐谷の姓が知れぬ。

六　俳人支考

深夜女の一喝を頂戴す

芭蕉の十哲の一人支考、游歷中、ある知人の家に宿つた。折節主人不在で、妻女のみ家に在つた。妻女の言ふには、明日必ず主人歸宅の筈なれば、苦しからずば待たれたいと云ふ。支考も、急がぬ旅だから、主人の歸るを待つことにしたが、時は恰も

三伏炎暑の頃で、夜更けても眠りにつきかね、廣くもない家の中を見廻すと、主人の室に蚊帳が釣つてあつて、細君ひとり寢て居る樣子が見える。支考、ふと妙な氣を起し、あられもない所行に及ばうとすると、細君、目を覺まして一喝を喰はしたので、支考も居堪らず、

動かして見れば石なり苔の花

の一句を書き殘し、其夜の内に何處ともなく立去つた。

翌日、主人歸つて來て、此句を見、客人の支考であつたことを覺り、一笑したと云ふ。

七　江村北海

氣早の待遇振に愕く

江村北海、上方筋の旅に、僻村通行中非常な驟雨に遭つた。ふと其附近に、かねて知合の宇野醴泉が住んで居る事を思ひ出し、走せて其家に飛込んだ。主人醴泉喜むで出迎へ、『まアお這入なさい』と言つただけで、もう姿は見えぬ。大分待つて居たが、一向出て來る樣子もない。濡れ鼠の樣になつて居る北海、一人で困却し、家人に向つて、主人の行方を尋ねて見たが、更に知れない。北海不思議に思つて、茫然として居る處へ、戸外に醴泉の聲が聞える。戸を明けて見ると、主人、簑笠姿で網を手にして居る。豪雨最中の事とて、主人もゾブ濡れである。一體どうしたのかと問ふと、主人の云ふことに、『折角珍客のお出であるが、見らるゝ通りの僻村、何も酒の肴がないか

ら、不取敢一走り魚を抑つて來た』と言つて、今漁した、潑剌たる鮮魚を見せた。北海も其の氣の早いのに一驚を喫し、且つ其の厚意を謝して、一夜飲み且つ談じたと云ふ。

八　森春濤

渠の俳句狂歌

森春濤は、近世詩壇の泰斗であるが、若い時は、俳諧も和歌も善くした。其の旅行中の吟咏で、今尚文苑に記憶されて居るものがいくらかある。ある時、鄕里尾州の佐屋村のあたりを過ぎ、昔芭蕉が「水鷄なくと人の言ばや佐屋泊り」と詠じたのは、こだなと思ひ遣つて、口吟んだ句に、

暮きらぬ月を雨に啼く水鷄哉

水鷄きく泊や佐屋の宿はづれ

とある。又之を絶句にも詠じ、

堠樹滴殘過雨痕。蕉翁墓畔月黃昏。羈愁一片今猶昔。人宿水鷄啼處村。

又春濤、越前に遊歷した時、ある人、破戒僧の鯛を食ふ圖を齎し來り、翁に題詩を求めた。翁は笑つて、これは詩を題する程のものでないと、筆を走らせ、一首の狂歌を題した。

毒食はば皿まで鯛はあたまから觀音などは尻くらへかし

座中のもの、翁の隱し藝に喫驚し、われにもと、更に蘆に鴨を添へた圖を出して賛を求めた。翁又直ちに筆を取り、

浪華江の短き蘆のふしの間も之を接ぎなば憂ひなん鴨

當意卽妙と、皆々感歎した。

九　河野鐵兜

渠の餘藝

河野鐵兜が、漢詩をよくすることは、誰も知つて居る。併し、俗歌をよくしたことは、知る人が少い。鐵兜は、當意卽妙の才があつて、なか〳〵下に置けぬ才子であつた。江州に遊んだ時、岡本黃石、其他の友人は、舟を琵琶湖に泛べ、妓と酒を載せ、一日の雅遊を試みた。黃石の云ふには、けふは藝者も居るから、堅苦しい詩など作るは妙でない。三味線にのる樣な狂詠が欲しいと云ふと、鐵兜、妓に三味線を彈かせながら、唄つた卽詠は、

湖の、ほれぬさきには、わし富士の山、包みつゝみし雪の肌

滿座、絕唱を稱して喝采した。

又某村落に宿つた折、旅のつれ〴〵、女中を相手に杯を傾けながら、村內に何か面白い話は無いかと聞くと、女中は、珍しさうに云ふには、村內、寺の住職、內々妾を蓄へ、いろ〳〵の評判もあつたが、たうとう懷姙して、けふは丁度出產の日だが、破戒の罰で非常の難產。今も醫者が行つたと語るを聞き、それはおもしろい。その女の名は何と云ふかと問ひ、菊と云ふ由答へると、鐵兜、さら〳〵と一首の狂歌を書き、これを其の坊さんに遣れと投げ出した。

和尙さん陶淵明の眞似をして菊を愛して南山をみる

一〇 良寛と西行

默々として打毆かる

釋良寛が、佛門に入つて、備中の圓通寺に十數年修業をして居つた時のことである。或時、巡錫に出かけて、數日旅行をした。乘合船に大勢が混雜中、或るものが何人かに懷中物を攫られたので、上陸の際、船客一同を取調べたが、一向にわからぬ。良寛は、僧の事でもあり、初めは取調も受けなかつたが、終には、誰も盜んだものがないとすれば、此坊主が盜んだとするより外ないと、皆々立騷ぎ、さん〴〵に打つたり敲いたりした。良寛は、固より覺えのないことであるから、罪に服さないは勿論だが、何故か、一向辯疏もせず、唯默々として打ち敲かるゝに任せた。幸ひに良寛を知つて居るものが、現場を通りかゝり、何故と聞糺して見ると、云々の次第である

ので、良寛のため百方辯疏したため、僅に免るゝことを得た。此人の通りかゝることが無かつたならば、良寛は殺されて仕舞つたかも知れぬ。

同行の爭心あるを遺憾とす

西行にも、同じ樣な話が傳はつて居る。ある時、天龍川を渡らんとしたが、乘合船に人が滿ちたと云うて、船頭乘せぬと云ふを、西行懇に請うたが、許さぬのみか、氣荒な船頭、名僧とも知らず、矢庭に其頰を打つて、血を流すに至つた。西行は怒りもせず、一向意に介せざるもの、如く、已むなく乘船を見合せた。此時、西行に隨行して居つた沙彌西住といふもの、船頭の無禮を怒つて大いに罵つたが、西行、其法弟に向つて言ふには、我は汝の爲に諸州を行脚するものであるから、縱令、無禮を受けて、死に至つたとするも遺憾は無い。其許は、まだ世間を忘れかねると見える。斯樣なものは吾が徒でない。これから先、同行は叶はぬと云うて、强ひて都に立戻らせた

とあるが、良寛が、縷々として辯疏しなかつたのも、多分西行と同意であつたのであらう。

二　惟然坊

女の盛服を着て道中

惟然坊は、美濃の人で、相當の財産のある家に生れたが、後には産を破つて、乞丐同樣の境遇となつた。芭蕉の門に入つて、聲名を馳せたが、崎行が多いので、社中では狂僧と呼んだ。諸國を遍歷中、播州で舊知に遇つて、其家に宿つた。餘りに見すぼらしい身形であるのを見て、主人氣の毒に思ひ、翌日出發の時、反物一反を贈り、どこかに滯在することもあらば、これで衣類を新調さるゝがよいと云うた。惟然喜むで

受け、さて或旅店に泊つて裁縫を賴み、出發の時、此新調の衣類を着し、もとの襤褸衣物を脱去りにして出て行つたが、一里ばかりも行つたと思ふ頃、歸つて來て云ふには、どうもこれは着惡い。やはり着慣れた衣物に限ると云うて、前の襤褸衣物に着換へ、新衣を宿に與へて去つた。

又美濃の或る豪家に宿つた折、丁度其家に結婚があつて、新婦の美麗な衣服が衣桁にかけてあつた。然るに、それが翌朝になつて紛失した。まさか、あの坊さんの仕業でもあるまいと思ひながら、試みに惟然の跡を追はせて、其宿つて居る家に聞き合はせて見ると、惟然は平氣なもので、こゝに其衣物はあります。出立の朝、あまり寒かつたので、拜借して寒氣を凌ぎましたと云うて、出して返却に及んだ。惟然は、もとより男女の衣類を辨別せずに、裾模樣のある女服を着け、臆面もなく幾里かの路を歩いたのである。

一二　大岡栗齋

足跡天下に遍し

文人が、河や海を渡る際に起つた軼事がいくらか傳はつて居るが、斯る場合の出來事は、よく其の人の性格をあらはすものである。大岡栗齋は近江の人で、名を寛と云ひ、其の鄕里が竹生島に隣つて居る所から、筐洲の號もあつて、慷慨家として隱れもない人である。此人は大の旅行家で、足跡、天下に遍しと云はれたが、大保七年、佐渡へ渡航の時、颶風に遇ひ、船が覆つて歿した。

栗齋曾て蝦夷地を跋涉し、無人の境を探檢したことがある。此時のことであらう。松前に渡航中、大颶風に襲はれた。其時、船が物に觸れでもした樣に、異樣な大音響

を聽くと共に、巨浪は數十丈飛揚して、左右に奔逸し、船に迫り來る勢ひ凄じく、一同色を失つた。船頭あわたゞしく、鱷魚の襲來ぞと云つたので、一同愈ゝ懼れたが、栗齋ひとり面白いと躍り上つて、其の怪物をつくゞ〳〵睨んで居つたが、忽ち大聲を發し、そこにある錨をこゝへ引き來れと叫んだ。船頭は何をなさると問ふと、錨であれを釣つて見たいと云うたので、皆々其の豪宕に驚歎した。

此人は、晩年佐渡に渡航する時、友人に別を告げて云ふに、自分の足跡は六十餘州に及んで居るが、隱岐、佐渡の二島だけは未だ知らぬ。此の二島を見終れば、自分の旅行は大成するのだと云うたが、終に佐渡の渡航中に歿したので、栗齋を知る者は、盈つるは虧くるものであると云うて、其の横死を悲んだ。

一三　湯淺常山

私送では無い

湯淺常山は、服部南郭の高足で、名を元楨と云ひ、備前の人である。此人は謹嚴の性質で、公務には身を忘れてよく盡した。隨つて治蹟は少くない。備中倉敷の代官野口直方と半生懇親の間柄であつたが、野口が去つて江戸に還らんとする時、藩侯、常山に命じて、郊外まで送らしめた。常山、命に從ひ、長男誠と共に見送つた。其時常山、野口に挨拶して云ふに、私は、貴君を送らねばならぬ情誼があるが、公務のため夫が叶はぬのを遺憾とする。失禮ながら兄を代人に差出したとあるを、野口聽いて不審に思ひ、それは何故であらう。先生現に送つてくれらるゝではないかと云ふ。常山答へて、自分の、今日君を送るのは、主侯の代理で送るので、私送では無いと云つ

た。野口は、常山が、斯る場合にも、公私の別を亂さぬことに服したと云ふ。

常山嘗て藩の命を奉じて、讃岐の丸龜に使した時、海上颶風興り、船は將に覆らんとするの危殆に瀕した。同船者皆生氣が無かつたが、ひとり常山神色自若として、一絶を賦して海伯を叱した。其詩に云く、

南溟奉レ命使臣槎。直破長風萬里波。忽値怒濤似二奔馬一。起提二雄劍一叱二黿鼉一。

豪宕の氣は海伯を壓したが、風濤漸く靜まり、船は無事港に達した。

一四　小河仲栗

博徒を屈す

長崎の醫者であつた小河寛は、仲栗と號し、頗る氣拔な性格を有し、任俠を以て自

ら居つた。されば、豪族の療治を請ふものがあつても、應ぜぬことがあつたが、貧民の治療には進むで出かけた。

ある歳、京都に游び、長崎に歸らんとする時、大村の人某と與に乘船して、淀川通行中、某が小便をする際、誤つて、同船の浪華の年若い博徒の衣類を汚した。博徒は五六人一團となつて居つた所から、衆を頼み、いくら謝罪しても許さぬと云ふから、仲栗大に腹を立て、連れの某を勵まして、一度汚しても殺され、二たびしても殺さる。死は一である。さアもう一遍小便をして汚して遣れと云うて、刀を按じて奮然起つた樣子を見ると、眦裂け毛髪逆立ち、今にも刀を抜かん劍幕であるのに、博徒も辟易し、皆河中に躍込んで逃げ失せた。

一五　案山と雲居

如是草賊發菩提心

文人墨客が、旅中で盜賊に出遇つたり、又盜賊と誤認された樣な逸事が、いろ〳〵傳はつて、昔の道中の物騷な狀況が想像される。

昔、有名な連歌師宗祇が、行脚中、疲れて、野中に牛の遊んで居るのを、持主に斷りもなく悠然乘つて、ブラ〳〵十數町行くと、持主は盜まれたと合點して、之を里正に訴へ、追跡して見ると、一僧が其の牛に乘つて居るので、牛泥棒と捕へて見ると、それが名の高い宗祇で、敢て盜む氣で乘つたのでなく、唯疲れて率爾に乘つたまでとばかり、十二支の歌を卽吟して謝罪したなどの話は、誰れも知つて居る。これは文人が盜賊と誤認された一例であるが、文人が盜難に罹つた話も少くない。先づこゝに、

聊か別方面の、縮流旅中の賊難を一二卑けて見よう。

甲斐の人で、案山と云はれた名僧は、藤本姓で、名を吉道と云うた。天目山に草庵を結むで居たが、其の名聲を聞いて多くの人が訪ひ來るのを五月蠅がり、一夜庵を燒いて何れかへ去つた程で、脫俗の僧であつた。ある年、木曾山を通りかゝると、草賊に襲はれた。案山は素直に衣類を解き與へたが、賊はそれを得て立去つたのを、更に呼び留め、お前に遣るのを忘れたものがある。その忘れたものは、多分お前の最も珍重するものであらうと云うて、襄中から、ある限りの路銀を、惜氣もなく出して與へたので、賊も意外なことに驚き、つくゞ〳〵此の僧を見遣つて、其の凡僧でないことを看て取り、其の金を手にせざるのみか、跪いて無禮を謝し、自分も長い間惡業をなしたが、高僧のなされ方に感激して佛心が萠し、まことに悔恨の情に堪へません。どうぞお弟子になされて下さいと、赤誠が現れた。そこで案山も其の請を容れ、法弟とし

た。

後年、案山、江戸に居つて、死期の近づいたを豫知し、潛かに富士に登り、巖窟に入つて寂した。時は寶永五年八月十五日、案山七十歳の時である。法弟久圓と云ふもの、師を追うて富嶽に登り、漸く尋ね當つたが、師は既に瞑目して居つた。久圓悲むで禮拜し、其の屍體の傍らに己れも座禪し、食を絕つて終に殉した。此の久圓と云ふもの、前身は、卽ち木曾山中の賊であつた。

大阪御陣の前後、世に聞こえた雲居は、仙臺侯の命に依り、松島瑞巖寺の住職になつたのであるが、家老の片倉小十郎が態々雲居を訪うて、瑞巖寺の住職たるべく主命を傳へた時、雲居の云ふには、結局御請をするが、暫時お待ち下さいと云ふ。何故と問うから、其理由が如何にも無邪氣で脫俗であつた。實は、前日、釜を或る人から買ひました 然るに、其價がまだ拂はずにある。それを償ひ了るには、數日勸化をしな

ければなりませんと云うたので、片倉も、其の虚心に感じたと云ふ。

此の僧、美濃の青野原を行脚中、七人の賊が左右から現れて劫かした。雲居は、嚢中から七兩の金を取り出して、銘々に頒ち與へたが、賊は不足を云うて、是非衣類を脱げと云ふ。雲居の云ふには、さて〳〵お前達は蹔くことを知らぬ族である。俺は方外の人ではあるが、衣類まで剝ぎ取られて何とすべき。衣類を剝がれる位なら、寧ろ一命を取られるに若かずと、早覺悟を極め、端座合掌、死を待つ有樣に、流石の草賊も驚愕し、こゝに彼等も菩提心を發し、皆々一齊に罪を謝し、各〻卽座に髮を剪り、法弟となつて瑞巖寺に入つた。

一六　石島筑波

賊徒を追散らす

文墨の人と雖も、一概に弱武者のみではない。石島筑波と云へば、服部南郭門下に其人ありと知られた詩人であるが、此人、卓犖豪邁で、人に勝れた腕力を有した。嘗て旅行中、夜分、小金原を通りかゝると、五六の賊徒現れ出て、其の金を奪はんとし、刀を抜いて迫つた。筑波は、刀を抜くまでもなく、杖を以て二賊の眉間を撃つて氣絶せしめ、一賊の胸膓を蹴つて卒倒せしめた。他の二人は、此の有樣を見て逃げ去つたので、筑波も弱い奴めと一笑した。

一七　春木南湖

山中へ擔込まる

畫家春木南湖が、上州を旅行して、熊谷堤を通りかゝると、舁夫が大勢其邊に居て、何か耳語する樣子であつたが、やがて一人が出て來て、旦那、お安くまけるから乘つて下さいといふ。南湖も、輿中に堤上の風光を賞するも一興と、其の言ふに任せて輿中に坐すると、舁夫等は、よしとばかり、合圖諸共、疾風の如く舁いて行く。南湖も少し變だと思つて居ると、行く方角が違ふ。自分が志す處とは反對の方面にて、間道とも思へない。愈〻怪しと氣が付いて、輿の中から聲を掛けるが、舁夫共は、一向聞こえぬふりで、ずん〳〵山中へ擔ぎ込む。南湖は恐ろしくなり、上州邊には、時々盜賊强請者が出沒し、殊に熊谷堤邊には、此種の博徒惡漢が多いと聞いて居るので、夫を思

ひ出して氣が氣でない。もうすつかり畏に掛かつたものと、口惜しかつて居ると、やがて山中の景色の好い平坦な場所へ出た。

舁夫共は、輿をおろして汗を拭き、さて南湖の前に頭を低れ、揉み手をして、恐る恐る『實は旦那には甚だ相濟まぬ事ながら、有名な畫家と聞いて、是非一つ畫いて貰ひたいのだが、尋常な事では却々書いてくれまいと思つて、斯んな計略で旦那をこゝへ連れ來たので。どうか是非一つ書いて下さい』といつて、輿の上から風呂數包を取出すと、其中には、用意の筆墨や紙が現はれた。

南湖も之を聞いて、先づ命に別條がないと分つて安心し、竊に胸を撫で下ろし、いや、かつがれるとは此事だ。仕方がない。方角も知らぬ山中へ取殘されては難儀、見込まれたを因緣と諦めて、然らば望みに任せよう』と、やがて筆を執り、幾枚かを書いた。舁夫共は大いに喜び、『旦那にお禮をする金も無いから、こんな狂言も仕組んだ

事。就いては、旦那の行かるゝ先が幾里あつても、無賃でお送りしませう』と、十里餘りの路を、飛ぶが如く送り届けた。

此の出來事は、南湖一生涯の大椿事であつて、南湖は、生前しば〳〵人に語つた。且つ南湖自ら當時の模樣を書いた幅さへ、今尙存して居る。

一八　藤本鐵石

轎夫の智に及ばざること三十里

藤本鐵石が、尾州に遊んだ時、森春濤と交つて、懇意な間柄となつた。京に歸つて後、一書を裁し、旅況を春濤に報じた。其の書簡には、輿に乘つて驛路の山谷を賞翫しつゝ過ぐるの狀を畫し、其の末に一佳話を錄してゐる。

近江路に竹轎をやとひて、「蒲團きて舁ぐ姿や三上山」と、故句拈りて打戲れければ、むくつけき男ながら、取あへず、「粟津の晴嵐、比良の暮雪」と付けたるにぞ、何かは分らねど、をかしく打興じて、酒錢僅に取らせければ、笑つぼに入りて、とくさりぬ。かくて思ひかへしつゝ、道行くこと三十里許りにして、始めて悟るこそ、我ながらおぞましけれ。國の名勝に隱して、我を嵐雪かと嘲りしは、卒然微中、心にくゝ又ゆかしくて、ともにかたらまほしく、かへりみれば、雲に隔たりて、及ばざること遠し。

藤本は差向き當年の曹孟德で、雲助子は楊脩といふ格だ。此の書簡、今も森家に藏してゐる。

一九　大窪詩佛

貴僧は眼力が高い

大窪詩佛は、柏木如亭と共に詩壇に名を馳せたが、詩佛、一號瘦梅と云ひ、如亭は一號を瘦竹と云うた。曾て兩人連合して一詩社を立て、二瘦詩社と名づけたこともある。詩佛、遊歷中、信州の小諸の知人稻垣伯弓の家に宿り、しばらく足をこゝに止めた。城下の文學あるもの、詩を求めに來るもの數十人。詩佛は大いに繁昌した。中に觀禪といふ僧があつて、詩佛の詩の非凡なるを歎稱し、詩佛に面會して、あなたは、江戸の瘦梅先生を御承知でありますかと問ふ。詩佛は、自分の別號なんど、わざと素知らぬ振で、知つて居ると答へ、なぜ、それを問ふと反問すると、僧の云ふには、瘦竹先生は、先年、此地に遊ばれた時、お目にかゝつたが、瘦梅先生には、まだお目に

かゝる機會を得ぬ。今江戸では、瘦梅瘦竹の二先生の右に出る詩人は無いと存じますが、あなたのお作を拜見すると、どうも瘦梅先生に下るものでないと思はれますと云ふを聞き、詩佛は笑つて、如何にも貴僧は眼力が高い。瘦梅は自分の別號であると云うたので、僧は驚き且つ喜び、久しく先生の名を聞き、一たびお目にかゝりたいと存じて居つたが、今圖らず、こゝに先生を見ることを得たのは、不思議な因緣であると云うて、詩佛と僧との間に、詩の贈答があつたことが、詩佛の詩作に見えてゐる。旅中の一佳話と云ふべきだ。

二〇　釧雲泉

詩佛の題詩を謝絶す

釧雲泉が、詩佛と、信州路を經て越後に入つたとき、同地に足を留めて居た。或好事家が、兩人を一席に招き、雲泉に一幅の山水を畫かしめた。詩佛は、畫の成るを待ち、上に詩を題せんとしたが、雲泉、遽かに己が畫をぐる〳〵と卷いて云ふには、君は一時の詩豪だ。恐らく君の詩は長く傳はるまい。自讃ながら、俺の畫は百載に傳はる積りだ。どうか汚して下さるなと云はれて、流石の詩佛も一本參られ、慚ぢて筆を投じたと云ふ。

雲泉の、自重の厚かつたことは、右のごとくであるが、當時越後では、此人の畫の眞趣を解する者は尠かつた。所謂大聲俚耳に入らずで、雲泉の畫は、寧ろ高過ぎたの

である。

二一　鈴木芙蓉

人爭ひ索む

前にも、いくらか話したが、雲泉の越後に在る間に、丁度鈴木芙蓉も江戸から遊びに來た。此畫家の名は大いに喧傳して、依頼の絹素は堆く積まれた。ある時、雲泉、芙蓉の旅舍を訪うた時、芙蓉に驚き迎へて云ふには、あなたが、こゝに居るとは知らなかつた。若し居ると知つたら、自分の樣なものが來るでは無かつたと云うた。

芙蓉は、畫を需める人に對しても、雲泉が居るのに、それに乞はずして俺に求めるは、間違つて居ると云うて遠慮したが、やはり芙蓉の方へ頼み多く依頼があつたので、

芙蓉は遂に行李を收めて、去つて他の地方へと行つた。

二三　西山拙齋

春水を嘲す

西山拙齋は、備中鴨方の人で、名は正、字は士雅、至樂居と號した。那波魯堂に學び、君子の風ありと謂はれた。頗る謹嚴の人であつたが、時に戲謔を弄した。賴春水と連れ立つて菅茶山を訪ねた旅行のごときは、趣味があつて、眞面目な人の仕業としては珍である。

春水が、廣島から大阪へ赴く途中、茶山を訪ねんとして、先づ拙齋を備中に訪うた。一日語り暮して、翌朝、春水の出發に臨み、近邊まで見送ると云うて、別に旅裝もせ

す、共に家を出た。拙齋も内心茶山を訪はんと欲し、見送りに託して出たのであるが、態と春水には知らせず、兩人歩しながら種々談論をつゞける。春水の方では、餘り遠方まで足を勞しては拙齋に氣の毒と思うて、一里許りも行くと、もうお歸り下さいと云うて、杖を停め笠を脱いで、袂を別たんとする。拙齋は、まア〳〵よろしいと云うて、又復談論をつゞけて行く。春水は、宿驛毎に袂別の挨拶をせんとするを、まアまアと云うて、いつまでも歸路に就かず。たうとう終日歩き通し、茶山の村も間近になつたので、拙齋初めて實を叫き、俺も實は茶山を訪ふのであると云うて、途上兩人大笑ひで、漸く茶山の家に着くと、茶山に寒暖の挨拶もせぬ内、拙齋は、春水を欺いた次第を面白をかしく語つたので、茶山も笑つぼに入つた。

二三　野呂介石

曾浙熊谿五十回

祇園南海、桑山玉洲と共に、紀州の三大畫家と云はれた野呂介石は、名は第五隆、號を矯楳と云うた。

此人は、紀州出身だけに、那智の深山や熊野の幽溪を探るには、前後五十回の旅行をした。阿部繊洲が介石を詠じた詩に「曾浙熊谿五十回」と云うたのは、乃ち此の事實を語るものである。熊野は有名な深山で、探檢は、今も昔も甚だ困難である。古來、介石ほど、此山をよく極めたものはない。介石が那智の深山を探檢した時などは、修驗者を賴むで同行し、自身も修驗者となり濟まし、各〻米鹽其他必要品を自ら背負ひ、手には苧繩を携へ、鳥も通はぬ所を、繩を樹にかけて、或は絶壁を攀ぢ、或は險澗を渉

り、一七日夜努力の末、これまで人間の曾て到らぬ所を極め、熊野の探檢も、亦同じ筆法で隅々までも極めて、到る處實景を寫した。その爲に畫も大に進み、峰巒溪谷、皆天然の山水に法り、何人も及ばぬ妙があるが、皆此の旅行から得た結果に外ならぬ。

二四　渡邊崋山

渠が閉口した一夜

崋山の自筆の紀行類が三四殘つて居る。其内にをかしなことが載つて居る。ある歳、藩の用で一人旅をした時、道中の都合で、日も高いのに早く宿つた。片田舍の宿屋で、旅情の慰め樣もなく、村釀を傾けて見たが、旨くないから、早く寢に就いた。併し、何分にも眠れぬ。夜も十時頃となつて、生憎隣室に客が一人泊り込んだ。食饌の上に

酒が始まり、騒々しいので愈〻寢つかれず、煩悶して居る内、隣客も漸く寢に就く樣子であるから、これからは靜まると思ひの外、今度は、隣客、下婢に戯れて、亂らなことを言ひ始めた。下婢も始めの内は抑んで居つたが、幾何錢をとらせてから、遽かに調子が變り、喃々の私語となつて、益〻眠を妨げられたとある。道中にはよくある話であるが、これを華山から聞くのは珍である。

二五　卷菱湖

くわつと隣室に闖入す

卷菱湖は、書に於て、天下を風靡した。全體、立派な學者であるのだが、書名に蔽はれて、書家扱ひを受けて居る。或時、菱湖、靜岡邊を旅行して、或る宿屋に泊ると、

隣室に客が有つて、折しも伺候した主人に向ひ、『隣室の客は誰れだ』と問ふ。主人は『江戸の有名な菱湖先生で』と、誇り顔に云ふと、之を聞いた客は冷然鼻で遇つて、『あの嘘字書きか』と、嘲つた調子。此の應答が、襖越しに能く聞える。菱湖は怫然として、失敬な奴、其分には置かぬと、矢庭に襖を明けて現れ、自分は卷だが、今の過言、聞捨てにならぬといきまいた。

隣客は泰然として、先づお坐りなさいと云うて、さていろ〳〵談じて見ると、其客は靜岡に名高い山梨稲川と分つて、種々と字學の話に移つたが、稲川の字學の深いのに、流石の菱湖も舌を捲き、終に其說に服した。稲川は名高い說文學者で、斯道に於ては日本屈指の大家である。然れば菱湖も、この邂逅から懇意となつて、爾來往復し、其の啓發を受けたことが少くない。

二六　山梨稲川

椋齋との初對面

山梨稲川には、二人の友人があつた。卽ち松崎慊堂と狩谷椋齋で、共に說文學の大家である。椋齋は、始め稲川を知らなかつたが、かねて慊堂の話に、稲川の博識なる由を聞き、是非一度會ひたいと考へ、或時、遂に思ひ立つて、靜岡に稲川を訪ふべく江戸を發足した。途中、薩埵峠を通りかゝると、眺望のよい處に茶屋のあるのを幸ひに、腰をかけて酒肴を命じ、風景を賞しながら、ちび〳〵やつて居たが、見ると、他にも一人の客がある。椋齋も話相手の欲しい折柄であるから、其人を招いて種々浮世話に入り、あなたは何方の人かと問ふと、唯靜岡の者と答へる。それでは、靜岡に山梨稲川と云ふ人が居る筈だが、御存知かと問ふと、知つて居るといふ。字の事に詳し

いといふが、眞實かと問ふと、『然うです』とばかり、冷然たる答へ。椋齋も話の腰が折れて、興去り、やがて杯盤を收めさせ、勘定して去つた。其客も、一歩後れて立去つた。

椋齋は、靜岡着後二三日經つて稲川を訪ねて面會して見ると、何ぞ圖らん、前日薩埵峠の客が乃ち稲川であつた。先方も、椋齋の說文に詳しい事を聞いて、一度は會はん事を望んで居たのであつた。此に於て前日の奇遇を語り、名乘り會つて、この今日の會見を喜び、大いに語り興じ、爾來、兩人甚だ親密の間柄となつた。

二七　長尾秋水

詩の著作權の讓渡

長尾秋水は、越後村上の人で、詩を能くし、亦畫も書いた。鄕土の山の名を取つて臥牛山樵などの號がある。

此人の詩の中で、最も人口に膾炙したものは、例の「海城寒柝月生潮。波際連檣影動搖。從此二千三百里。北辰直下建銅標。」の七絕だ。此詩に依つて、秋水は一世に知られ、此詩の爲に、秋水の名は不朽となつた。秋水は常に漫游を事としたが、何より大切な紹介狀は此詩であつて、到る處によく迎へられ、よく遇せられたのは、此詩の著者であ[illegible]故であつた。然るに、秋水は、此の傑作の所有權を失ひ、幾年かの間、人に賴まれても、此詩を書くことが出來なくなつたことがある。其次第が珍だ。秋水、

松前に渡つた頃、仙臺の人で、金忠輔と云ふが丁度松前にゐて、秋水と懇意になつた。此の人も、書畫共に善くしたが、詩は、遠く秋水に及ばなかつた。金は、常に「海城寒柝」の詩を激賞し、口癖に吟誦してゐたが、或る時、秋水に談判に迫んだ。あの詩は、君に於ても傑作であらうが、君の詩才を以てして、あの位な詩は、いくらも出來るであらう。自分に於ては、生れ返つてもあんな詩は出來ない。俺も游歷を事とする者だから、あの位な詩が無くては、到る處、人に交はることが出來ぬ。いくらかの金に替へ、どつか俺に讓つてくれまいかと、懇切に賴み込んだ。秋水も迷惑に思ひ、一時は躊躇したが、再三の賴みに拒みかねて、終に割愛することになつた。さて、此の傑作の謝受け代金は金二分、則ち今の五十錢であつたと云ふ。其頃、秋水は、人に望まれても、流石に、德義上、此詩を揮毫することを辭したと聞くが、此の金忠輔は、松前から何れへかへ行つて、（或は米國桑港に渡つたとも云ふ。）行方不明となつたの

で、此詩は、其後、自然舊主に戻つた。

二八　鴨厓と武四郎

江差の文嬉

頼三樹三郎が蝦夷に渡つた時、江差で松浦武四郎に出遇ひ、或人の勸めるに任せ、一日の間と約して、百印百詩の文嬉を試みた事がある。これは、實に翰墨界破天荒の快擧とも云ふ可きものである。世には、頼三樹が、一日、百詩を作つた事だけ傳はり、松浦が、同時に、百印を刻した事を知らぬ者が多い。實は、百詩百印の印譜は、往年雁金屋が原本を借りて、摹本を作つた事もあつたが、此時は、ほんの親しい好事家の爲に作つたもので、部數も僅かであつたため、今日に於ては、殆んど見ることが出來

ない。然るに、幸ひに武四郎の孫に當る人が、南葵文庫の助けを得て、極めて精細に石版に付して、原本と些しも相違の無いやうなものを作つた爲に、今は自分も所持してゐるやうな譯だ。先づ、此本を見ると、卷頭には、二三の序文題辭があつて、卷尾には、松浦自身が、其の顚末を叙した跋が附いて居る。是に由つて觀ると、事は、弘化三年十月、特に冬至の日を選んで此文嬉を試みたものだ。其時、松浦の齡が二十九、三樹が二十五歳で、齋藤鷗洲と云ふ人が、題を選ぶ役目に當り、二人が、一方は詩を賦し、一方は印刀を取ると云ふ段取で、さて筆飛び刀舞ひ、朝から始めて、遂に夜に入つて事を了つた。卷を開いて一々閲するに、詩も、卽席としては中々妙を得て居ると共に、印も、素人と思はれぬ手際がある。それも其筈だ。松浦は非常に多藝の人で、殆んど文藝には通ぜざる無き人物。殊に畫と印は、長崎に游んだ折、或る淸人を師とし、特に研究した事もあると傳へらるゝに於て、無論、素人として見る可きでない。

既に斯様な素養のある人が、一日中に百印を刻したと云ふのだから、韻趣津々たるもので、百顆、何れも敬服に値するものある、偶然に非ずである。今、此中の一二を紹介して見よう。

一日の朝、晝、夕、其時に應じての卽興を題となし、印となす處などは、殊に妙を極めて居る。例へば、卷頭の「淸晨」、「開窓」の二顆に始まり、「閉戸」、「淸課了引太白」の二顆で終りを結むだのであるが、「開窓」の詩に於て、

開窓何甚早。今日有二淸課一。印士與二吟人一。百詩戰二百顆一。

と賦して、玆に開戰の宣告を試みた處などは、頗る體を得て居る。それから八九顆を作つて、印刀少しく鈍り、砥石にかけると言ふあたりへ行くと、第十に「磨刀」と云ふ印が彫つてあつて、それに、

文嬉到二第九一。勢似レ捲二風濤一。刻雕喜二明快一。不レ惟君磨レ刀。

とある。更に、稍〻倦むで、吹烟一番とも云ふ處を閲すると、果して吹烟の句がある。印には「吹烟」とあつて、詩には、

人道吹レ烟客。等閒淫二無味一。一唉卽吹レ烟。那中有二至味一。

追々進むで六七十に至り、日將に虞淵に落ちんとする時の詩は、流石に氣を揉むだ狀の見えるのが面白い。曰く、

古人惜二寸陰一。我今惜二分陰一。百詩課未レ了。夕照沒二西岑一。

印は「古人惜寸陰」だ。斯くて一吟一刻、九十九詩に及び、卽ち「閉戸」に到るや、

開窓到二閉戸一。九十又九詩。運刀君亦就。一笑了二文嬉一。

と賦し、最終の第百に於て、印の「淸課了引太白」、詩の

驩然引二太白一。一百課成時。寒詩與二頑印一。狂跡留二天涯一。

を以て、日出度此破天荒の文嬉を了つたのである。

以上は、ほんの二三の例に過ぎぬが、百印百詩、凡べて時々刻々の情景躍動し、頗る興を覺えしむるものである。そこで、仲分蝦夷の果にて斯樣な事をやつたのであるから、印材などには乏しく、從つて必ずそれを惜むで、一つの石に六方に彫り、無論それでも足らずに、彫るに從つて磨り潰して、更に彫ると云ふ樣な譯しあつたらう。現に松浦家に遺つて居るものは、僅かに十五六面であるが、皆粗末な石に、六方面、彫つてある。此文嬉な戰はしたと云ふ事は、南葵文庫に藏してある松浦白筆の日記の中にも、また南葵文庫にて出版した松浦の年表の中にも出て居る。

二九　足代弘訓

一　座服す

足代弘訓は、誰れも知る近代の歌人である。若い時、修學旅行をして、某所に國學者を訪ねた。勿論、始めての訪問である。處が、其日は恰も歌の會が催されてあつて、座には、五六の歌よみ連が居並んで、苦吟最中の體。弘訓は臆せず座に就くと、主座に居つた此家の主人、來意を問うた。弘訓は、修學旅行の者で、少しは歌の心得もあるといふ。座客は年若のものと侮り、『貴君、歌が詠めるなら、試みに付けて御らんなさい。下の句が斯うだ』と言つて示したのは、「馬の上にて鳴く〳〵ぞ行く」と云ふ句である。弘訓之を見て、何だか自分の貧乏旅行を嘲つた樣にも思はれて、癪に障つたが、ジッとこらへ、可しとばかり筆を取つて、さら〳〵と、「朝草に刈込められしきりぎり

す」と上の句を付けた。之は確に名吟であらう。山間に起臥して朝早く草を刈り、馬に駄した經驗のあるもので無ければ、道破し得ぬ實況である。恐らく弘訓、旅中より得た詩材を、こゝに發露の機會を得たものであらう。つまらぬ下の句も、此付句で秀逸の和歌となつたので、一座驚歎し、初に侮つた面々は皆屏息した。

三〇　十返舍一九

秋山旅行

「膝栗毛」なる旅の記を著はした、十返舍一九を、此の「文人の旅」の内に洩すことは出來ぬ。一九の傳に闕けてゐて、事實の面白いのは、越後魚沼郡の片隅で、信州と境を接する、秋山と云ふ邊鄙な山村へ旅行した一事である。「北越雪譜」の著者として知ら

れてゐる、越後の鈴木牧之は、多く東都の文人に交り、一九も曾ては越後へ下り、此人を訪うたことがある。其江戸へ歸る途中、牧之の長男牧山の案内で、草津に浴したのは、文政三年の秋であつた。一九は、かねて眼疾を煩つてゐたが、入湯のため逆上して、一層惡くなり、眼を資本とする戯作者の事だから、大いに困つた。そこで牧山が、秋山の見玉不動尊が、眼疾を醫するに不思議な效驗のあることを云うて、參詣を勸めたので、一九も其氣になり、こゝに一九なる江戸ッ兒が、臍の緒切つて初めての難儀な旅行を企てることになつた。

秋山と云ふ地は、今こそ交通が開けたが、其頃は容易に行けぬ程の僻地で、昔し平氏の落武者が匿れた處と、言ひ傳へらるゝ程の處であつた。そこに住む村民は、宛ら原人と、餘り距離のない樣な未開なもので、如何にも粗野な生活を營むで居るものであつた。さて此の處まで行くに、一九が非常の難儀をした譯は、普通の路を行くと、

三十幾里もあるのを、獵師の勸めに任せ、捷徑を取つたからであるが、此の捷路は、獵師や樵夫ならでは全く知らない所で、實は、道の無い所を辿つて行くのであるから、難儀は一通りでない。或は巖石を飛び越え、或は樹木に攀ぢのぼり、或は溪流を渉るなど、宛ら猿に傚うての旅行は、一九の筆に成る紀行を讀む人をして、慄然たらしむる位で、都人士なる一九、殊に眼疾もあるから、辿も此の難所を歩することが出來ず、案内の獵師に負はれて、震ひながら危嶮を冒したとあるが、斯樣な深山幽谷は、歩行に困難であるだけ、それだけ風景はよく、流石に、一九をして、冷汗を握りながらも、四圍の景色には快哉を叫ばしめた。此等の巨細は、牧之の家に傳はる、一九自撰の「秋山紀行」二册に委しく錄してあるが、爰に珍なるは、斯る紀行にも、例の滑稽の筆を弄して、をかしい脚色を構へて居ることである。今、一二を擧げて云はんが、山中に狼に遇つた條に、紅色の舌を吐いて、追々逼り來る狼を、遁けることが出來ず、

絶體絶命の場合、牧山が勇を皷し、手を指し延べて其の舌を捉へ、力任せに、ウンとばかり、後に引くと、案外、苦もなく拔けたるを、よく見れば、舌にはあらで、血潮の着き居る獸類の骨片であつた。獵師の云ふには、狼が、斃れた鹿の肉を喰ふとき、過つて、其の骨片、口腔の急所を刺し、脫せんとするも、脫し得ず、しきりに苦悶して、人間に逼つて來たのだ。その證據に、骨片を拔き去つた後は、態度が柔順になつて、あの通り感謝してゐるかの如き樣子が見えると云ふに、一九も成る程と感じ、狗子、佛性ありと云ふが、狼とても狗だ、豈佛性無からんやだ。よしく、俺が濟度して遣らんと、守囊を取り出し、狼の首に掛けると、狼は首を垂れて、益ゝ柔順になり、終には先に立つて、一行を案内する殊勝の擧動に、一九等をして、益ゝ感ぜしめたが、さて此狼、ある地點まで達すると、しきりに別を惜む如き態度で横道に入つた。不審に思うて、後より見え隱れに跟けて行くと、こは如何に、路の窮まる所に斷崖あり、

狼は、其上に立つよと、見る間もなく、身を躍して崖下の深淵に投じ、敢無き最後を遂げた。これを見て、何れも舌を巻き、濟度、果して效あり。彼れ、佛の功德に依り、一死、百罪を償ふのである、と云うてゐるなどは、所謂る戯作者流の脚色で、事實でないことは言ふまでもないが、これが一九一流の筆法である。

また、これよりも更にをかしいのは、秋山の或る名主の家を訪うた條である。前にも云うた通り、此地に、昔し平家の殘黨が隱れたと云ふ傳說があつて、名主の家には、其の系圖が祕藏されてあると云ふから、一九も江戸への土產に、之を一覽して戯作の材料にせんと、其家を訪ねた。日中なれば、皆々稼ぎに出て、年若い女が、一人留守居をしてゐた。それにいろ〳〵賴み込むで一覽を求めたが、家族と雖も見ることの出來ないものを、他人に見せるなどは飛んでもないことゝ、最初は應じなかつたのを、段々甘言を以て終に說き伏せ、內々見ることゝなり、女は、高く屋根裏に吊されて居

る薦包を取り外し、中より一卷の系圖を出して示した。それには、城資長の名や、其他平家の一族の名が錄され、凡そがわかつて、一九も大いに喜んだ。然るに、こゝに一椿事の起つたと云ふは、系圖を見てゐる內に、どや〳〵と人聲がして、數人の家族が歸つて來た。さア、此有樣を見ると、ひどく驚き、家族すら見ることの出來ないものを、なぜ他人に見せたと、烈火の如く怒つて、先づ女を苛責し、終に一九一行を撲ちのめさん勢ひなるに、何れも辟易したが、一九は、此の難場を切りぬけんと、一生一代の智慧を絞り、わざと平氣を粧うて、怒れる面々を制し、靜かに口を開いて云ふには、吾々は越後のもので、皆平家の流を汲むものだ。遙々こゝに來たのは、吾々と同じ流の家があると聞いたからだ。あなたがたは、此の系圖で見ても、吾々と親類である。親類の間柄に、先祖の系圖を祕するでもあるまいと、一應道理ある言葉に、漸く怒りの手を收めたが、中に一人、お前さん方、平家の流と云ふが、それには何か證

據があるかと云ふに、一九は、敢て臆する色なく、旅先だから、證據の品を持つては居らぬが、こゝに爭ひ難い何よりの證據がある。凡そ平家の流を汲むものに限り、何故か、睾丸が必ず二つある。普通の人は一つしか無いのに、二つと云ふが特徴だと云ふと、成る程と頷くもあり、密と隱囊を探つて見て、如何にもと會得するもあつて、漸く打寛ぎ、初めの權幕と打つて變はり、茶菓などを饗應なして、親類付き合をすることになつたとあるが、一九流の脚色は、こゝに至つて、尤も發揮を見ると云ふべきだ。此の「秋山紀行」は、人の多く知らない著述であるから、こゝに紹介する。此の書は、「北越雪譜」の著者鈴木牧之の家に藏してある。

雜話

一　一勇齋國芳

五十疊敷大の九紋龍圖

嘉永六年、兩國柳橋の河内屋で、狂歌師梅迺舍鶴子の催しで畫會のあつた時、一勇齋國芳が出席して、五十疊敷の布に水滸傳の九紋龍史進を畫くと云ふので、前日から評判が立ち、當日、大入であつた。國芳は、當日、四五の門人を伴うて出席し、稠人環視の間に立つて、帚を以て裸體の大人物を畫き、その肌膚の刺青には、九つの龍が雲間に跳梁する所をかき、雲を配するに、手拭地百反に藍を含ませたるを、墨汁の大樽に投じて十分に浸し、これを以て巧に隈取り、さて史進の足を踏掛けた巖石を畫く段になると、國芳、急に己が纏へる浴衣を脱ぎ、赤裸裸となつて、其の浴衣をおし丸めて墨を

十分含ませ、それを筆に代へて、美事巖石を書き了りたるには、環視の大衆、その筆力の勁健なるを、書き方の奇拔なるに、ドッと驚歎し、喝采堂を撼した。斯る遣り方は、席畫などにはよい工夫であるが、餘り遣ると、輕業藝になつてよくない。併し、斯る氣象は、畫家にありたいものである。

二　勝川春亭

敷居が高い

勝川春亭は、屈指の浮世繪師で、特に武者繪の名手として名を博した。此人洒落で、花柳の巷に流連することが常であつた。ある時、數日家に歸らぬことがあり、流石に妻に對して極まりがわるく、一計を案じて、玩具屋から、小兒の手遊に用ゐる梯子一挺を購ひ、それを持つて靜かに家に戻り、下駄ぬぎの上がり段にその梯子を架け、しきりに登る眞似をしてゐる。妻女は夫とは知らず、角を怒らして『良人は氣でも狂つたのですか。な

ぜ内へ這入らないのです』と、起つて下駄脱ぎを見ると、初めて三寸許りの梯子のあるのに氣がついた。春亭頭を搔きながら、『何うも敷居が高くて、此の梯子では登り切れぬ。どうか手を引いてくれ』と眞面目に云ふので、妻女も吹き出し、怒りを收め、手を引き家に上げた。

三　山東京傳

沓々下駄〳〵

戯作者京傳が機智に富んだことは、今更云ふも野暮だ。ある時、京傳の方へ客が來た。家人、茄子の鳴燒を出して酒を侑めた。客は戯れて、

茄子さへ瓜實顔にまけじとて
くしをさしたり油つけたり

と即吟したのに對し、京傳直ちに、

油つけくしを刺したはよけれども
色の黑いに味噌をつけたり

と答へた。又京傳の雪解の句は、名高いものである。

山々の一度に笑ふ雪どけに

そこは沓々こゝは下駄〳〵

京傳乂狂詩をよくした。加賀前田侯の鹵簿を觀る詩に、

金紋一對箱。鞍上虎皮復。借問大名誰。松平加賀守。

四　畠中銅脈

咄嗟の佳對

皆川淇園、龍草廬、巖垣龍溪などの諸儒、詩社を結むで、毎月一回會して、詩を鬪はした。ある時の會に、戯れに「堂長三十三間秋」と云ふ狂詩を口吟んで、これに對する句をと求めたものがある。皆々思案したが、佳對を得なかつた。そこへ、後れて、狂詩の名人と聞えた、畠中銅脈が遣つて來たので、どうだ、君、これに佳對はあるかと云ふと、銅脈直ちに「弓勁八千八條矢」と付けたので、一座、流石はと歎稱した。云ふまでもなく、三十三間堂は射術を試みる所であるから矢を以て應じたのである。

銅脈は、聖護院法親王に仕へた人で、

詼諧機智を以て一世に知られた。

五　小山田與清

上には上があつても

小山田與清は、松廼舍と云うた。曾て清水濱臣と、和歌のことより、不和を生じたのを、蜀山が中に立つて、花時、墨堤に筵を張り、兩人に褌中の一物を比較せしめ、確執を笑の間に解いた珍談が、蜀山の「一話一言」に載つて居る。それに就いての蜀山の狂歌は、

松の屋の松たけよりもさゞなみや
しがの濱松ふとくたくまし

とあつて、松の舍は後れを取つた樣である。高田博士は與清の後裔であるが、博士の話に據ると、此人は、夏時、眞裸となつて居るが常で、犢鼻褌もうるさいとあつて、一物を納め置く囊を作らんと、工夫を凝らした。恰も其頃、博士の先考が三四才の小兒で、頭巾を被つて居つたのに氣がつき、試みに、それを外して合はせて見ると、入りかねたとあるから、

太さも想像されるが、兎も角、大體の寸尺が定まつて、囊の調製が出來、爾來、之を常用したと云ふ。

六　加藤千蔭

千蔭緞子

和歌と書を以て一代を風靡した千蔭は町方の與力であつた。與力と云へば、今の警部の樣なものである。此人の時代は世の中が奢侈と遊戯に餘念の無かつた頃で、藏前風と云うて、互に豪奢を競ひ、一世を驚かすを手柄とした。千蔭は、所謂十八大通の一人として數へられた程の數奇者で、いろ〳〵の事が傳はつて居る中に、ある時、「竹薫鶯」の自詠を美事に書き、これを緞子に織り出させて、吉原、深川邊の藝者に與へて用ゐしめた。それが一時大いに流行となつて、「千蔭緞子」と云うて、花柳界に盛んに持囃された。警部ともあらうものが、斯ることをして、一向人も怪しまなかつた。當時風紀の弛廢は、思ひ遣られるではないか。

七　中山高陽

火災を餘所に松島行

中山高陽は、俗稱清右衛門、字は子和、松石齋と號し、土佐高知の人である。少小より學を好み、詩文書畫を能くし、畫品の高いことに於ては、世既に定評がある。併し、高陽の尤も長じたのは、人物を描くにあつた。嘗て大阪に遊んで、蒹葭堂(木村巽齋)に交はり、寶曆の頃、江戸に來つた。當時、諸侯爭うて高陽を迎へんとしたが、一切謝絶して應じなかつた。亦諸侯より畫を需められても、多くは斷つて書かなかつた。彼れは、己の畫の、權貴に玩ばるゝを屑しとしなかつたのである。彼れの畫に脫俗の高韻のあるのは、此の氣象から來て居るは、言ふまでもない。

明和九年の江戸大火に、高陽の田所街の寓舍は、全燒に及んだ。其翌月、彼れは灰塵を後にして、飄然何れへか出て往つた。さうして七月餘りも經つてから、

平然として歸つて來た。知人、高陽を詰り、家の燒けたのを餘所に見て、君は何處へ往つたかと聞くと、高陽の云ふには、自分は、久しく松島の風景を見たいと思ひながら、機會を得無かつた。火災が起つて、最早外一物も無いことになつたから、斯る折にこそと思ひ立つて、奥州迄の長途、道々畫を書いて賣りながら、終に宿昔の望を達したと云うたので、皆皆、其磊落不羈に一驚を喫した。

此人、妻もなく、子もなく、安永九年六十四歳で土佐に歿した。

八　高久靄崖

渠と竹田

高久靄崖が、江戸で畫名の揚がらなかつた頃の事である。米櫃が時々ガラ明となつて、困窮を極めた。ある夕方、一酌を欲したが、現金でなければ酒屋は賣らぬのに、靄崖も困つて、珍藏の一畫幅を賣つて、酒資を得んと企てた。試みに、之を妻に圖ると、妻は不服で、これまで

愛藏されたものを、酒ゆゑに手放すなどは、惜しいことだと云はれて見れば、靄崖も愛惜の念無き能はずで、こゝに、薄暗い燈下に愁歎場を演じた。此刹那、戸外より聲をかけて入り來るものがある。見れば、全く面識の無い人であつた。其の人の言ふには、今戸外で聞けば、御不如意と承はるが、やがて、御近傍の料理店より酒肴を持參すべければ、共に一杯を傾くべし。決して御斟酌に及ばぬと、深交ある人のごとく、早種々の談に渉り、畫法のことにも及んだが、此人、なかなかの見識あるので、早く常人でないことが知れた。其内、臺所口より、お誂ひと云うて酒肴を持參したので、こゝに酒筵が開かれ、深更まで雅談に耽つた。併し此客人、一向に己が名を明かさず、終に何人とも知れず別るゝことになつた。

靄崖は、此謎の樣な人物は誰れか、之を解かんとして解く能はざりしこと、幾年の久しきに渉つた。然るに、ある歳、京都に游んで、初めて田能村竹田の居を

訪うて、主人に遇つて見ると、驚いたのは、此主人こそ、往年、己が愁歎場へ酒を持込んだ其人であつた。

九　高橋草坪

師の頼まれた畫を贋して金に換ふ

田能村竹田は、多く門人を有たなかつた。亦門人を有つを欲しなかつた。唯高橋草坪のみを門下に置き、之を愛して、其大成を期した。草坪は大なる天才で、ともすると、師を凌ぐの畫を作り、師を歎服せしめた。若し長壽を保つたら、確に出藍の譽を博したであらうに、不幸夭折した。

草坪が竹田の家に居る頃、まだ青年血氣で、時には惡所に遊び、運動費に窮し、己が器用に任せ、師の贋作を造つて金にしたこともある。ある時、師が頼まれた畫を、其の不在に乘じ、草坪立派に代筆し、落款も印も据ゑて、之を依頼主に遣り、若干の謝金を得て、知らぬ顔をして

居ると、程經て、前の草坪の書いた幅を表裝し、箱書を願ふと云うて持參した。其時、牛僧草坪外に出てゐて、師のみ家に在つた。竹田、箱を明けて見ると、己れの落款も印もあるが、自ら書いた覺えのない畫であるので、不審を抱いた。併し、自分の畫と云はれても、恥しくない樣によく出來て居るので、漸く草坪の所業と勘附いた。併し、贋作と云うて、門人に恥をかゝせるも氣の毒と思ひ、忍耐して請ふがまゝに箱書をして還し、草坪の歸るを待ち、深く其の不心得を戒飭したと云ふ。

一〇　竝河天民

渠の古歌評

竝河天民は、伊藤仁齋の門人で、志氣豪邁、師說と雖も漫りに服せず、終に經學に一家を爲した。此人、又國文にも通じ、和歌をもよくした。ある時、徹書記が「都擣衣」と云ふ題で詠んだ歌、

聞くによも麻にはあらじ都人

うつやいかなる衣なるらん

と云ふを見て、之を難じて云ふには、此歌は擣衣と云ふ題に外れて居る。都と云ふを見せんとて、「麻にはあらじ」、綾にあらずんば錦の類ならんと、暗にほのめかした心根、甚だ卑しと評した。又ある人、「寄レ車戀」を題に、

牛ながら引も入やとあけて待つ
我が門すぐる小車やたれ

と詠んだのを、多くの人々見て、これは、源氏物語の中川の宿りの條を詠みたるにて、おもしろしとほめたるを、天民服せず、此歌のごとくにては、花奢を好む男が妾宅に通ふさまであつて、戀の歌としては不似合である。戀の歌は、どこ迄も人目を憚る情あらむこそと云うた。まことに天民の評は當つて居る。

一一　齋藤拙堂

本居を罵つた歌

伊勢の本居宣長は、皇學を起した大家であるが、皇學に偏して、何もかも皇國

に淵源あるものとなし、漢學を罵り、漢字をも排するに至つたので、漢學者流に喜ばれなかつた。漢學者流は本居を嘲つて云ふに、いくら漢學を嫌ひ、漢字を排しても、皇學を說くに漢字を用ゐるではないかと笑つた。同じ伊勢出身の齋藤拙堂が、本居を罵つた國風がある。

本をりがもとほりかねて唐くさし
くさしながらもからの文字かく

一二　朝川善庵

鼈に遣込まる

朝川善庵、青年の頃、長崎に遊んで江戸へ歸る途中、太宰府を過ぎ、偶ゝ路傍に鼈を賣つて居るのを見て、晩酌の下物に買ひ取つて、ある旅舍に宿つた。善庵旅舍の主人を呼び、鼈の調理を命ずると、主人の云ふには、今日は丁度天滿宮のお祀りの日であるから、殺生は出來ぬと斷つた。善庵も、已むなく鼈を薦包にして

臥牀近く置いて眠つたが、夜半、鼾は、いつしか薦の破れ目より脱け出でて、室内を横行し、終に蓐中に這ひ込んだので、驚いて目を覺まし、ひとり失笑した。其後、幾十年を經て十返舍一九に會した折、此一笑話を語り出すと、一九は興に入つて聽いて居つたが、其「膝栗毛」を著すに迨んで之が材料となつて、彌次、喜多が深夜鼾に驚かさるゝ一段の滑稽佳話となつてあらはれ、今も談柄となつて居る。

一三　曾我耐軒

是可忍也孰不可忍也

曾我耐軒、東海道漫遊の途次、遠州金谷に立寄つたが、驛の讀書家は、耐軒を或酒樓に迎へ、一席の講義を乞うた。耐軒、儼然として、先づ論語の八佾の篇から說き始めたが、一章も終らぬ内に、樓婢、時間を取り違ひ、憂々の音をさせて杯盤を運んで來た。こゝに於て耐軒の目は、忽ち論語を離れて、斜に杯盤を睨み、

急に聲を張り上げ、『是をしも忍ぶ可くんば、何をか忍ぶ可からざらん』と、直ちに見臺を片付け、逸早く杯を取つて一杯を傾けた。一同も笑つて、講義は遽に打切となり、宴會に移つたと云ふ。

耐軒、曾て或る家に宿して入浴中、下婢が、背を流さんと浴室に這入ると、間もなく驚いて奥へ走り込み、先生樣のお手拭には紐が付いて居ますと云ふから、細君、浴室へ入つて見ると、先生、越中褌を手拭に代用して、平氣で顏を洗つて居る。細君をかしく思ひ、『お手拭を進げませう』と云ふと、先生始めて心付き、『これは粗相をした。併し、もう濡らしましたから、手拭を拜借するに及びません』と、澹泊に挨拶をした。

一四　江村北海

忤も生きて居たら

江村北海は、寶曆明和頃の京都の高名な詩人である。其の長男秉といふが夙慧を以て聞え、同年輩の村瀨栲亭が之と頡

頗し、當時の文苑に、髯亂の二美と謳はれた事は、既に栲亭の處で話した。

この栲亭が、後年、大家となつてから、其詩を出版することになつて、或人が江村北海に、其詩集の序文を乞うた。其時北海は、『全體栲亭とは何者か』と問うたので、其人は呆れ返り、『先生ともあらう人が、當代の名家村瀨先生を御存知ないとは心得ぬ』と。そこで栲亭のことを改めて大に吹聽に及ぶと、北海は呵々と大笑して、『いや、實は知つてるよ。今言うたのは戯れさ』と言ひ出したが、やがて頗る感慨ぶかい面持で、さてしみ〴〵と語り出した。

曰く、『算ふれば、もう三十年前の昔となつた。自分の長男が夙慧で、同輩の間に才學を以て推されてゐた。當時悴は十二三歳の小僧であつたが、唯一人同年輩で、悴と對抗した子供があつた。それが今の栲亭である。然るに、長男は不幸にして夭折した。さうして其友人であり又拮抗者であつた、栲亭が、天壽を保つて

大家になり、斯樣に立派な詩を刻すると聞くに就いても、過去を追想して自分は悲喜交〻臻る。自分は、今更喪つた悴のことが偲ばれると共に、生き殘つた兒の友人が茲に至つたことを悅ばずには居られない。あゝ、悴も生きて世に在つたら、村瀨と共に轡を竝べて、同じく斯壇に立たうものを』と言ひ來つた北海は、潸然として暗涙を呑んだので、聞いてゐた其人まで、坐に胸が塞がつたといふ。

此一話から考へても、北海翁は、栲亭より、少くとも三十歳ばかりの先輩であつたらしい。北海の此感慨を記した序文が、栲亭の詩集を飾つて居るが、此情味濃かなる一場の話は、一面、栲亭の名聲を益〻發揚し、一面、地下に入つた亡兒の聰慧をも傳へてゐて、實に意味の深いものだが、併し、そこまで注意して其序文を讀んでゐるものは、餘り多く無いやうだ。

一五　松岡玄達

藥包に狂詩

松岡玄達は京都の人で、伊藤仁齋に儒學を學び、後に本草學に志し、斯界に大名を博した。

玄達、醫を業としたが、或る時、荻生徂徠に藥を請はれた。玄達は、手紙の代りに、包紙に狂詩を題した。

調合進申芍藥湯。生姜一片煎如レ常。平生食物肝要事。唯許牛蒡與二大根一。

此詩中、「芍藥湯」を變ずれば、漢方醫の如何なる場合にも、應用の出來さうな詩である。今ならば、活版摺にして、袋を作り、「芍藥湯」の三字だけを明けて、それに藥名を書き込む工夫をするものもあらう。

一六　有馬涼及

日本の柳下惠

元祿の頃、京都に、有馬涼及と云ふ名醫が有つた。後水尾帝に召されて典醫となり、法眼に叙された。

此人、磊落、物に拘らず、頗る奇行多かつた。醫業は繁昌で、收入も多かつたが、金錢を見ること土芥の如く、貯蓄の念がなかつたので、いつも赤貧であつた。

ある時、病家へ行くに衣類が無かつたので、裸體の儘、迎への藍輿に乘つて出かけたこともある。禁裏より召された時、恰も碁を圍むで夢中になつて居り、終に命に坐せなかつた。それが爲、不敬の罪に當し、職を免ぜられたこともある。或る時、嵯峨に遊んで、櫻の大木を購ひ、數十人の人夫を役して家に運ばせた。さて家の庭が餘り狹隘で、之を植ゑる餘地が無い。人足共は、此の大樹を半分許り庭に入れたが、それで行詰まつた。涼及之を見て、『よし〳〵、その儘にして置け』と云うて座敷に横臥し、高い樹は仰いで見なければならんが、この櫻は庭に横たはつて居るから、寢ながら見るによいと云うた。或る時、又某諸侯に招かれ、治療の爲、數日、侯の家に宿した。涼及宿

泊中、妙な歎願に及んだ。『自分は獨り寐の出來ぬ性分である。どうぞ二人の婦人を毎晩お貸下され』と云ふが、腕の筋であつた。早速聽届けられた。殊に容色ある、年若き二人の侍女を選び、其夜から涼及の寢所に侍をさすることになつた。涼及、二女を己が左右に寢かせたが、決して亂に及ばなかつた。涼及、去るに臨み、此の二女を申受け、侯より賜はつた謝金を盡く頒ち與へ、嫁入仕度をさせて他に嫁せしめたと云ふ。

涼及は、存庵又は臥雲と號した。茶道にも造詣が深かつた。

一七　服部元好

家の黑燒の效能

加賀の醫師で服部元好と云ふは、奇矯の人で、狂歌をよくした。曾て火災に罹り、家が全燒に及び、殘るは門のみであつた。いつも輕口を云ふ醫者の家が燒けたと云ふので、或者、戲れに狂句を書いて、門に張りつけた。

御醫者さん家の黑燒何になる
元好これを見て、こやつ、人の不幸を餘所に見て揶揄やがると、直ちに筆を取つて書き添へた句は、
日傭大工の腹藥なり

一八　名村太吉

膽力露使を屈す

露西亞の使節レサノットが、初め日本に來た時、奉行職と面接の場合、日本流儀で、使節をして次の間から禮をさせんとしたが、レサノット、一向承知しないのに困つた。そこで接見に先ち、種々役人が評議を凝らして居ると、次の間に控へて居つた通辭名村太吉進み出て、自分必ず其通りにさすべし。決して御心配に及ばずと決然受合つた。さて接見の日になると、名村は、使節を案内して、日本奉行の居る次の間まで來り、進まんとするレサノットを確と捉へた。レサノットは、怪しからんと云ふ見幕で、通辭の顏を見ると、血走つて殺氣を含んで居るの

で、從ふともなく、通辭の爲すに任せ、進みもやらで平伏した。斯くて接見了り、奉行より、うまく計らつたが、どうして、あの傲岸の外人を屈服させたと問はるゝと、名村の言ふには、別に方法があつた譯ではありません。彼れ若し聽かずんば一刀で斬り殺し、自分も卽時自殺する決心であつた。其の決意が偶ゝ面色にあらはれて、彼れを制したのだと云うた。名村の膽氣、愛すべきである。

一九　佐久良東雄

天皇こそ吾が主人

常陸の土浦の眞鍋臺に、善應寺と云ふ寺がある。此の寺の住職は良哉と云うたが、これが名高い勤王家佐久良東雄である。

東雄、深く契沖を慕ひ、國典に通じ、又和歌を善くした。土浦の萬葉和尚と呼ばれたのは彼れである。水戸の藤田東湖など、交りが深く、互に往來し、文藝を

談じ、又國事を論じた。ある時、東湖は、東雄に、水戸に出仕を勸めた。東雄辭して、吾は士人ありと云ふ。東湖怪むで、君は誰ぞと問ふと、東雄容を改め、申すも恐れ多いことだが、僅に六萬石の御賄にて、京都にまします天皇こそ、吾が御主人であると云うたので、東湖も口を噤んだと云ふ。

東雄、平素王室の式微を慨し、天保の末年、自ら國事に當らんと意を決し、門弟を會して、吾明日より僧籍を脫すと告げ、翌日、庭に注連繩を張り、薪を積むで火を點じ、讀經の後、己が纏へる法衣を始め、數珠其他のものを火中に投じ、水に浴して身體を淸め、赤裸々となつて寺を飛出し、懇意の豪家色川三中の家へ走り込み、七日間、齋食潔齋して、鹿島神社に到り、三七日間、王政復古の祈願をこめた。これより後、東西に奔走して志士を鼓舞するを任とし、尊王の氣を盛んに鼓吹したが、戊午の大獄にかゝり、終に獄中に憤死した。其の姓を佐久良と

云ふのは、櫻樹千株を鹿島社内に獻じた時、自ら命じた姓である。

二〇　山崎三綱

官の旌表を辭す

山崎三綱、字は如鼎、俗稱彌平。江戸本郷春木町に住し、自ら春樹道人と號した。家が非常に貧しかつたので、母を養ふに由なく、補陶を業とし、毎日、補陶補陶と連呼して街頭を歩き、少し許りの錢を得て、辛うじて家計を立てた。斯る貧境に居りながら、母に事ふることが甚だ篤く、近隣、皆其孝を稱した。終に此事、官府に聞え、賞金の沙汰があつたが、彌平飽くまで辭して受けず、云ふには、子として親に孝なるは當然の事である。況んや自分の行ひは、未だ以て孝とするに足らぬと云うた。當時、彌平の孝行が評判となり、一夜、美婦人が此貧戸に駈込むで來て、貴郎の樣な孝子の妻となりたいと云うた。彌平は、自分は孝子でないと云うて、どうあつても應じなかつた。

此人、性卓犖不羈で、書を讀み、文を好み、最も俳諧を嗜むで、其堂に入つた。母が歿してから補陶の業を罷め、終に薙髪して俳諧師となつた。上手であつたから、門に入るものが多く、中には權貴の人もあつたが、彼れは、地位高き人と雖も、その門に入る者を、必ずお前と呼んで、師たるの見識を有ち、聊かも人に佞ねることは無かつた。彼れは相變らず清貧であつた。併し、母の歿した後は、食つても食はんでも自分の勝手だと云うて貧に安んじた。併し、酒が大好きで、時に大杯を引くと、大聲を放つて、傲々當る可からざる勢ひがあつたので、水滸傳中の花和尚(魯智深)に似て居ると云うて花長老の諢名を博した。

二一　横井也有

隨展隨贊

横井也有は、尾州の地位ある俳人であるが、ある人、一幅の畫を携へて、也有に贊を乞うた。也有、いきなり筆を取り、

少しく幅を展べて見、大津繪の念佛の半身が現れたので、取敢へず「鬼もあり」と書き、更に又少しく展べると、藤娘の笠が現はれたので「姉もあり」と書きつゞけ、更に又展べて見ると、他に何も無かつたので、「けり」と受け、「百合の花」と結びて一句をなした。流石に達者なものである。

二二　藤江石亭

風流合作

天明の頃、淡路の風習として、毎年、元旦になると、玄關先に、書畫帖二册と筆硯を備へて置くが常例で、二帖の内、一帖は賀客の名を錄するため、他の一帖は吟詠を求むる用に供へた。然るに、或る富豪の家へ、出入の左官の親方が年賀に來て、心付かず、吟詠を書くべき帖に墨くろ〴〵と「左官德助」と書いて去つた。あとより、風流氣のある賀客が遣つて來て、之を見、おや〳〵と苦笑しながら、筆を執つて、其の字の上に「塗り殘せ」と

書いて去つた。終に藤江石亭が遣つて來た。此人は學和漢を兼ね、詩歌連俳、皆能くした人であるが、此の帖を見て、よしよしと頷き、やがて筆を執り、德助の字の下に「梅の窓」と附けたので、

ぬりのこせ左官德助梅の窓

と、おもしろい句になつた。主人、あとより見て、ひどく喜び、圖らず佳い合作を得たと云うて、之を珍藏した。

二三　乾貞恕

馬糞子

俳人安原貞室の門下に、乾貞恕と云ふがあつた。越前の敦賀の人で、近江の大津に住した。此人、當時「大津の馬の糞」と云ふ綽名を以て呼ばれた。其謂はれを聞くに、ある時、俳席に、「遠くは行かじ今朝の落人」と云ふ句を出して、付句を求めたものがある。その時貞恕は、直ちに筆を執り、「道ばたにいきり立たり馬の

糞し」と付けたのが評判となつて、此の名を博した。

二四　俳人五雲

疊を踏んで參詣に代ふ

京都の島原に、五雲といふ俳人があつた。毎月廿五日には、北野の天滿宮に參詣するのが例となつて居る。然る處、ある月のその日に雨が降つたので、五雲參詣もせず、家に引籠つて居た。偶ゝ月峰和尚訪ねて見ると、五雲仰むけに臥し、兩手を、左右より組むで枕とし、兩足を蹺げて、ばたゝ疊を踏むで居る。和尚不審に思ひ、何をしてゐると聞いて見ると、五雲の云ふには、いつもけふは北野へ行く日であるが、雨にさゝへられたから、斯く北野へ往復する足の數をこゝで踏むで、參詣に代へるのであると答へた。

二五　關雪江

掛引なしの湯屋淨瑠璃

關雪江は、書を以て名のある人で、土

浦侯に仕へた。非常に謹厚の人であつたが、妙に奇行が多かつた。ある時、盛服して侯の邸より歸る途中、辻店で油揚を買ひ、竹の皮に包み、自ら提げて去つたのを、觀者は、驚きの眼を以て之を見たが、雪江は平氣である。

此人、又淨瑠璃を語るを好んだ。併し家に在つては、曾て語らなかつた。唯錢湯に行くと、暗處に語り出すのが常で、同浴の者は、其の聲を聞き、關先生が居ると私語したものだ。但し、浴終ると恭謹沈默、全く別人となつて、そんなことは知らぬと云ふ樣な風であつた。

二六　尾形光琳

奇想

尾形光琳は、豪商の子で、遺產の多かつた爲に、繪道樂に多くの金を散じた。併し、其の道樂のお蔭で、其の畫の妙と彩色の富贍は、古今竝なしとまで云はれる。彼れが產を破つて後保護したものは中村内藏之助と云ふ富豪である。此人、

大阪の銀座をつとめた人だが、後に京都に隱退して豪奢を極め、邸内に九ケ所の茶室を有して居つたと云はれる。此人、ある時、婦人の爲に衣裳を作らんとして、染め方や模樣の意匠を光琳に依賴した。光琳は、之を諾して、價の高い唐墨五挺を磨り盡し、精神をこめて、反物に何か書き、一見、墨染無地の樣なものを作つて遣つた。中村は之を見て、甚だ不興で、無地の墨染にする程なれば、繪師を煩はすまでもないと、怒つて光琳に之を與へた。且後、中村、光琳の力へ訪ねて見れば、前に刎ねつけた反物が衣桁にかけてある。それを、見るともなしに見れば、光線の加減で、前日、無地とおもひしもの、然にはあらで、薄や、月や、花や、種々のものが隱見して、高雅の味ひ、眞に掬すべきものあるに驚き、はじめて吾が誤りをさとり、深く光琳に謝したと云ふ。

光琳の意匠は、いつも奇想天來で、常人の測り難き處に妙がある。前話は、唯

其一例に過ぎぬ。此の光琳を保護した中村は、豪奢のため忌諱に觸れて、闕所となつたが、後に許されて、茶人を以て餘生を送つた。

二七　尾形乾山

風韻

尾形乾山は、光琳の實弟である。光琳は繪の道を行き、乾山は製陶の道を歩み、共に成功して、兄弟雙美と稱せられた。併し、兩人の性格は、甚だしく違つて居る。光琳は華美を好み、享樂主義で一生を送つたが、乾山は禪に入つて地味を愛した。彼れの書でも、畫でも、一種云ふ可からざる風韻のあるのは、其の性格から來て居るのである。

乾山、京都に在る時、公寛法親王に愛せられ、始終出入した。親王、輪王寺宮となつて、江戸の東叡山に移らんとした時、乾山もお伴をして江戸に來り、東叡山に近い入谷に住して窯を開き、例の如く陶器を作つた。ある時、宮に召されて

伺候した時は、丁度土をいぢつて居た折柄で、汚れた衣類その儘で拜謁した處、宮は御覽じて、餘りに見苦しいと思召され、羽二重の衣類を賜はり、卽座に着換を命ぜられたが、乾山敢て喜びもせず、歸宅すると、脫ぎもやらず、其のまゝ又土いぢりを始め、あたら新衣をさんゞに汚して、一向氣にも留めなかつた。光琳と性格の異ることは、此の一話でもわかる。今下谷に「鶯谷」或は「初音の里」などと云ふ地名のあるのは、乾山が、京都から、鶯を持ち來つて、宮に獻じたのを、宮は、出家の身として生物を玩ぶはよくないと氣づかれ、之を東台の森に放たれたので、追々之が蕃殖し、之より東台人谷の邊に、鶯の美音を聽くことを得るに到つた。東台附近に、鶯に因んだ地名の、今も殘つて居るのは、乃ち其の名殘である。

二八　德川家綱

酒井家の小屏風

德川氏十五代の將軍家の內には、能畫の人が四五あるが、其中に傑出して居るのは、四代將軍家綱公であらう。世の鑑賞家は、此等權貴の人の畫をよくも稽査せず、一概に殿樣藝と云うて、御手本通りであらうとか、誰か助筆をしたのであらうなど云うて、暗に之を斥け、間々傑作があると、代筆でないかなどと疑ふのが常であるが、殿樣の內に、天才が絕無と云ふ譯は無い。果して四代將軍のごときは、稀なる天才であると知れた。

家綱公の筆に成る畫幅は、華族家に往往藏せられて居るが、公の天稟の畫才と其の非凡の手腕を明かに語るものは、牛込矢來の酒井家に、今尙珍藏して居る小屏風一双である。ある知人は、曾て之を觀て驚歎し、自分に委細を語つたことがあるが、前田香雪の「後素談叢」に、同じく委曲が盡されて居るから、左に抄出する。

玆に驚かるゝは、若州酒井家の牛込の別邸、卽ち矢來町に臨御ありし時、種

種の御慰みあり。畫工を招きて席畫をも御覽に入たるに、やがて畫筆をとらせられ、御うしろに建られし、屏風の裏の白張なるをのべさせ、一雙には、牛馬猪鹿猿猴狗子など、それ〳〵草木をあしらひて書かれ、一雙には、同家の家來の射術を御覽に供したる、其實況を書かせ給へるが、左方には二人、肩衣を片肌ぬぎて、弓を引しぼれる處。一人は、矢をつがへて居る處。此左右には、數人居ならびて、こを見る體。右方にあづち的あり。庭上には、膝つきて當りを記する者の、帖を手にし、筆をもてるがあり。其人物の面貌は、古風の狩野派に見る如き面もちにて、各〻活氣あるのみならず、圖樣の位置もよく整ひて、卽席の御作とは思ひも寄らず。席畫に召されしは誰なりしか、知らざれども、恐らくは、直に當日の出來事を、かばかりに圖し得る者はあるべしとも思はれず。云云。

二九　增山雪齋

蟲籍

增山雪齋は、伊勢の長島の城主で、二萬石を領した諸侯である。名は正賢、字は君選。王園、石顚翁、巢丘隱人などの號がある。

此人、大名不似合の大文人で、畫は深く沈南蘋に倣ひ、天機の妙を得た。晚年致仕の後、江戸の巢鴨に住し、文藝に餘生を送つた。當時藝苑の名流は雪齋を欽仰し、之と交るを以て快とした。讃岐の長町竹石の如き、雪齋より自畫の竹石を贈られたのを紀念する爲に、自ら竹石を號とした。春木南湖は此侯の藩士で、侯は捨扶持を遣はして、專ら畫を奬勵した。十時梅崖も亦侯に用ゐられて、其の儒臣となつた。初め梅崖が侯に召されて、江戸の藩邸で侯に謁見した時、偶〻酒宴中であつた。梅崖は多藝の才物で、興を添へるため、咄嗟俗謠を作り、之を歌ひ且つ踊り、一座をあつと云はせた。侯ひと

り喜ばず、聞きしに相違して、これは幇間者流であると云はれた。幾何かの金を包むで、禿頭にとて與へられた。梅崖、それには目もくれず、平氣で宴に陪して居ると、詩を作るもの、畫を書くもの、追々現るゝに及んで、梅崖苦もなく次題し、又席畫を作つたが、何にかけても滿座、梅崖に及ぶものが無かつたので、侯も驚歎して、それより梅崖を儒官に登庸し、傍ら畫の顧問とされた。

雪齋は實物描寫をつとめたもので、寛永寺の境内には、今も雪齋の建てた蟲塚が存して居る。これは、幾百千の蟲を集めて描寫に沒頭した、其の遺骸を埋めた塚であつて、その寫された「蟲籍」は、今帝室博物館に藏してあるが、精妙、眞に驚くべきものである。

三〇　櫻木勘十郎

卓犖けた縞好き

元祿の頃、京都室町通り三條のあたりに、櫻木勘十郎と云ふ人があつた。此人、

文字もあり、書畫古器物の鑑定をよくしたので、當時、趣味家は、多く此の家に出入した。此の人、性來希有の好事癖があつて、永く文苑に其名を留めるに至つた。

其の癖と云ふは、大の縞好きであつたが、縞好きと云うても、縞の着物に、縞の羽織や袴や帶を好むと云ふ樣に、縞も吳服物に限ることなれば、敢て異とするに足らぬが、此人の癖は常經を越え、凡そ衣食住に關するものは、何から何まで、縞で無ければ氣が濟まぬと云ふ、不思議な物數寄で、先づ衣服の縞織なるは勿論、其の身に着ける調度は、扇子、脇指、印籠、巾着、草履、手拭などに至るまで、皆縞ならざるはなく、朝夕の食事も、膳、腕、皿、箸、皆縞形の模樣あるもので、食物も、野菜や魚類は細く切つて、おのづから縞形をなすやうに作り、煮ものも、牛蒡や菜のやうな、筋張つたもののみを用ゐた。

さて家屋はどうかと云ふと、これも世に珍しい造作で、表二階の格子は、さま

ざまの唐木を取り合はせて、縞の様に組ませ、店先には堺格子と云ふを建てたが、これも縞に擬したものであり、庇の大垂木などは、細い紫色の寒竹を以て、さまざまの縞を組ませ、中庭の北面の壁も縞形に塗らせ、此家に入るものは、宛ども縞意匠の陳列所に入つた様な思ひがあつたので、時人、此の好事家を綽名して「縞の勘十郎」と呼んだ。

三一　奥田三角

器物調度までも三角形

奥田三角は、伊勢の人で、伊藤東涯に學び、津輕侯に四代仕へた儒者である。此人、一亭を構ひ、三角亭と名づけ、又之を號とした。其説に、三角は方形の半分であつて、盈つれば虧くるの戒めを寓してをるから、自省の爲に斯く命じたと云ふ。成るほど、斯く聞けば意味もあるが、此人は、終に、すべての器物調度

を悉く三角とし、苟くも三角の器にあらざれば、用ゐなかつたと云ふ。斯の如きは、寧ろ奇を好むもので、自省の意に反するものと謂ふ可きだ。

三二　岡本況齋

札配をへこます

本況齋は、名を保孝、通稱を縫殿助と云うた。本鄕壹岐坂に住し、代々、幕府の小普請と云ふ職に居つた。此人、學、和漢を兼ねて、博覽の聞えあり、著書も多く、且つ藏書は一萬卷もあつて、大藏書家として評判が高く、當時、讀書家が參考書に事缺く時は、皆此人に借覽を求めたものである。全體保孝は、他家から入つて、岡本家を相續したもので、當初岡本家は、家道頽廢して、負債は山の如くであつたのを、保孝、心血を濺いで家政の改革を圖り、萬般の費用を節し、餘財を以て圖書を購ひ、終に大藏書家となつた。

保孝は、家政整理のため、あらゆる寄

附事を斷り、年頭に來る三河萬歳の出入を差止め、日光の神符を始め、諸社より配る守り札の類一切を斷つたが、唯大神宮の御祓札のみを奉祀した。ある時、遠州の秋葉山より、都下一般に火防の御札と云ふを配附し、岡本にも、是非受けよと、再三迫つて云ふには、御近所で之を受けられぬ家は、一軒も無いと云うた。保孝は例の如く斷りを言うて、近隣が皆御札を受けたとすれば、火事は先づ無い筈。自火さへ注意すれば、大丈夫だからと云うたので、札配りも辟易したと云ふ。石黑男爵は、しば〳〵岡本に就いて本を借りられたこともあり、親しい交はりがあつた。男が況齋と同じ號を川るて居らるゝのは、偶合ではなく、何か因緣のある事であらう。男と保孝とは、性格に似た處がある樣に思ふ。

三三　市野迷庵

ジンノシクワウ

市野迷庵は、名を光彦、字は子邦と云

うた。狩谷棭齋、北靜廬と共に三右衞門と云はれた其の一人で、市井の誇りとなつた學者である。德川末期には冠履轉倒で、町人から、多く立派な學者が輩出したが、迷庵は其の尤なるものである。

迷庵、頗る酒を嗜んだ。自分は、曾て其の愛藏の書籍の卷尾に、自ら子孫に告ぐる數行の題語を作り、其の書の重んずべき所以を叙し、ついでに、酒資に窮する時は之を賣るも可なりと云うて居るのを見たことがある。其矛盾の言葉の內に、酒を愛する情も、物に執着の無い所も見える。迷庵は酒を嗜んだが、多くは文友と共に酌み、酣中清談するのを快とし、酒樓には滅多に行かなかつた。然るに、ある時、人に誘はれて一酒樓に登つた。校書も來り、常盤津の「老松」を彈奏した。迷庵、默然聽いて居たが、「秦の始皇の御狩の時」と唄ふに至り、あわたゞしく止めて、『これ〳〵女、俺が前では、「シンノシコウ」と唄ふな。「ジンノシクワウ」と云へ』と、唄ひ直させたので、流石に

學者は假名違ひを容赦せぬと、座中皆感じた。又ある時、迷庵、友人の別莊に招かれ、他の友人と共に出掛けて、種々學說を闘はして居ると、一疑義に觸れて、皆々默考、解を得んと苦心の折柄、窓外の梅枝に、鶯の來て鳴く聲が聞えた。迷庵しづかに窓を開き、『畜生め』と鶯を叱して窓を閉ぢ、『氣樂な奴だ。人が苦心して居るのも知らずに』と言ひさま、座に復したのには、皆々一笑を催した。

三四　賴杏坪

手數の掛る先生

賴杏坪は春水の弟で、名高いものだが、此人は考證に凝り過ぎて、動もすると、友人の笑を博した。田能村竹田が、其隨筆「屠赤瑣々錄」に書いてゐるのを見るに、「茶山翁(菅晋帥、山陽の師)笑つて語りしは、萬四郎(杏坪)は馬鹿にてござる。此頃は、蚊の歌百首を作る。又此頃は、いつも六ケしき詩を寄せ示す。其中

に、さんずゐに草といふ字までも作りてござるとて、且笑ひ且咄されし」とある通り、詩でも歌でも、一首一語必ず來歷出處があつて、妄りにしない。併し、講釋を聞かねば、解しかねることが多かつた。杏坪自身もこれに氣がつき、誦みかねる歌を書いた短册には、其の背面に、註を記すことが屢々あつた。和歌も相當に遣つた人だが、この爲に一般の和歌者流に容れられなかつた。此人の歌集は「唐桃集」と云ふが、これは杏の字の和訓であるさうな。亦此の人の諱を惟柔と云ふが、これは「クバナゴ」と訓むのださうだ。洵にむづかしい先生である。

三五　五弓久文

君は人間で無い

五弓久文は備前の人で、「事實文編」の著者として、世に知られて居る。此人は、多くの師に事へたと云ふを以て、學界の談柄となつて居る。彼れは、足跡、幾ど日本全土に遍く、到る處の大儒を師とし、

一たびは其塾に入つた。彼れの師は、數へ來れば、十幾人の多きに及んで居る。彼れは非常の勉強家で、甲の塾に入り、其の師說を聽き、其の塾の珍しい書籍を見たり寫したりして、もう止まつても別に加ふることが無いと見て取ると、乙の塾へ轉ずると云ふ遣り方であるから、多くの師のあるも無理はない。彼れは、斯る遣り方で「事實文編」の如き大編纂をしたのである。云はゞ、彼れは、此の編纂をする爲に、圖書館廻りをした樣なものである。

ある時、僧と同塾した。五弓は、僧に揶揄つて云ふには、君は人間でない。併し、一たびは人間であつたと云ふ。僧怒つて、何故斯くは侮辱するぞと云ふ。五弓の云ふには、僧と云ふ字を見給へ。「人」偏に「曾て」とあるでは無いか。僧は親戚と絕ち、色を禁じ、肉を斷つ。乃ち人間に遠からんとするものではないか。然れども、僧たらざる前は人間であつたに相違ない。これ「僧」の字のある所以だと。

同塾の僧聽いて、默然苦笑したと云ふ。

三六　服部南郭

垢拔のした人

徂徠門下の大儒、服部南郭は、雪舟風の畫を學び、なか〳〵上手なもので、畫で一門戶を張ることが出來た位で有つたが、學名の爲に掩はれて、今は此人の畫を論ずる者も稀である。

全體南郭と云ふ人は、師の徂徠とは違つて、垢拔けのした面白い人であつたと云はれる。ある時、松前侯から、鎗と熊の皮を贈られたことがある。折節讀書に倦むで居つたので、此の贈物を觀ると、兒女や門生を呼むで、室の前に立たせ、俺が面白いことをして見せると云うて、いきなり熊の皮を冠つて、鎗を小脇にかい込み、ヌッと立上つて滑稽を弄し、一同を笑はせた。斯樣な洒落の人であつたが、徂徠よりもしつかりした見識があつた。徂徠は支那に心醉して、「中華」と云うたり、自國を貶して「東夷」などと云う

たりしたが、南郭は竊に之を笑ひ、斯る卑屈なことを儼然排斥した。

三七　狩野典信

氣の利いた思付

榮川院狩野典信は、狩野家に於て、尤も機智に富んだ畫家である。ある家に招かれ、宴會の席上、主人、百人首の歌ガルタを入れた新調の桐箱を出し、何にても一筆をと所望された。典信は、別に思案もせず、筆を執つて百合の花を描いて與へた。歌ガルタは百枚であるから、之に因んで百合を名とする花を書いた工夫は、當意卽妙である。

三八　谷　文一

繪を書いて關を通る

谷文晁の孫に當る文一は、文晁の養子文一の子で、卽ち二代文一である。祖父に習つて畫もよくしたが、一風變つた所があつた。或る時、水戸へ行き、立原杏所の父翌軒を訪ねた。翌軒は、折角來た

から、君侯にも遇はせんと斡旋し、一日滯在すれば、拜謁が出來ることになつた。然るに、文一は、其事を知りながら、急に江戸に歸つた。後日翌軒、文一に向つて、君はなぜ君侯に遇はず歸京したと尋ねると、殿樣にお目見えするのは面倒だからと云うた。

又文一、箱根の關所は數度通過したが、一たびは畫師として通過して見たいと志し、二人連れで關所にかゝつた時、汐を先きに遣つて、自分は、態と、手形を持ちながら、それも出さず、名前を問はれても、眞の名を云はず、文晁門人文山と云ふものだなどと云うて、面白半分芝居を遣つた。關所の役人も芝居氣になり、畫師ならば繪が書けるであらうと云うて扇面に畫を命じた。文一、緣側に腰もかけず、大地に腰をかゞめて、安宅の關、辨慶勸進帳の圖を作つた。よく見ると、蛸入道を辨慶に擬し、關所の備砲に擬して伊勢海老を書いたので、役人も興に入り、終に通過を許されたと云ふ逸話もあ

る。

三九　岸竹堂

畫室の大穴

岸竹堂は、岸駒の流れを酌むだ畫家で、人物も、畫品も、流祖岸駒よりも、却つて一段高い處があつた。先年歿した寺崎廣業の談に、竹堂は近來の大家である。いつ訪問しても、繪の外の話は一切せぬ。畫室は二階に設けられ、なか〳〵廣いものであつた。普通の畫室と異なることのあつたのは、疊一枚ほどの穴が明いて居て、覗けば下が見える。これに繩が吊してあつて、ワク附の絹本は、此穴から上げ下ろしをする樣になつてゐる。墨でも繪の具でも、人手にかけることは一切なく、皆自身でやる。高齢でも矍鑠たるもので、一週間に一度や二度は、必ず妾宅通をすると云うた。

四〇　風流丐兒

禮謝の一句

菊池容齋、海野友鷗、萩野八百吉など云ふ文人、打連れて、東海禪林に紅葉を賞したことがある。門前に一人の丐兒が居つて、錢を請うた。一同おもしろ半分に、貴樣は酒が好きかと尋ねると、酒は飯よりも好物と云ふから、丐兒の食器面桶に、巨瓢の酒をダブ〳〵注いで與へると、一氣に飲みほして、更に求めるから、亦注いでやると、又鯨飲し、頭を叩いて快哉を叫び、失禮ながら、お禮にと口吟んだ句は、

武藏野にあまるばかりの報捨哉

此奴いかなるもの、果？

四一　乙骨耐軒

都下の溝通

乙骨耐軒と云ふ學者は、曠達、物に拘らず、極めて酒を嗜んだ。外出中、酒を飲んで、家にかへる途中には、路上に寢ることが毎々あつた。又時には、溝の中にすべり込む樣なことも珍しく無かつたので、友人共は、都下の溝の深淺を一

一心得て居るものは、耐軒の外はないなど云うて揶揄つたものだ。一夜、醉後、淺草を過ぎ、誤つて溝に墜ちたが、其儘、そこに熟睡した。西福寺の僧が、通り過ぎに其れを見つけて、やつとの事、扶起して、濕れた衣類を脫がせ、己が法衣を着せて家に還したところ、恰も姙娠臨月の妻君、その姿の異樣なるを見て驚き、爲に卽時分娩に迫んだ。

彼れ、聖堂に教授を司つて居た頃、諸生の輪講に臨み、經書の語意を誤るものがあると、『誤解、誤解』と連呼するのが口癖であつた。ある夕暮、一束の反故を携へて神田邊を過ぐると、拐子が尾行して、携へたものを書畫幅と見て取つたか、急に引攫つて去つたので、耐軒あわてゝ、例のごとく『誤解、誤解』と連呼して追ひかけたが、遂に及ばなかつた。此事、後に同人間に知れて、皆々絕倒した。

四二　寺門靜軒

越女の辯護

寺門靜軒は、立派な儒者であつたが、才筆が禍ひを爲し、戯れに「江戸繁昌記」を著したが、忌諱に觸れ、江戸を逐はれた。爲に靜軒、儒を以て世に立つことが出來なくなつて、八年の間、方々に流浪し、自ら「無用之人」と稱して、風流を事とした。新潟に來た時なども、常に花柳の巷に往來し、「新斥富史」の著あることは、誰も知る事であるが、ある人、靜軒に、『越女は美は卽ち美だが、其言葉を聞くと、愛想が盡きる』とバうた。靜軒笑つて、支那の西施や眞妃なんど云ふ美人も、皆都を離れた地方の女で、其言葉は野鄙であつた。それでも吳王は、西施のため國を亡ぼし、明皇は、眞妃のため天下を失つた。舌豈色に害あらんやと云うて、新潟美人のため大辯護をした。靜軒も新潟の美人には傾倒したと見えて、阿今と云ふ愛妓に贈つた詩に、

玉蕋吹レ香別占レ春。桃李畢竟眼邊塵。三千粉黛渾如レ洗。羅綺叢中第一人。

と云うて居る。彼れが新潟美人の爲に辯

護するのも以あるかなだ。

四三　佐藤直方

言行總べて意表外

山崎闇齋門下の學者として名聲の高い佐藤直方は、磊落秦偉、言行頗る奇拔で、物外に超越する趣きがあつた。曾て長島侯に招かれて講義を遣つて居る最中、卒然、座を起つて緣側に出で、衣類を振つて蚤々と連呼したが如き、又ある時、庭園に逍遙中、草の根を堀つて手が泥土に汚れて居る處へ、何か急な事があつて家人より知らせを受けると、袖で兩手を拭きながら、平氣で家に這入つたと云ふごとき、皆此人の拘らぬ面目をあらはして居る。

直方は闊達の人で、酒を好んだ。飲食すべて豐麗を盡し、酒も、醇ならざれば口にせぬと云ふ贅澤を極めた。彦根侯に講義を賴まれた時、籃輿を以て迎へられたいと申込んだ、其の言ひ草が妙だ。贅澤を申す樣だが、此の老爺、足元が確で

ない。若し躓き轉んで、お手數をかけては相濟まんからと云うた。

直方、久しく外に仕つて、晩年、京都に戻つた時、門人故舊、久し振りの歸洛であるから、故人を會し、舊情を溫めしめんと斡旋した。直方の云ふには、そんなことは休めよ。自分は、年少の英才と會して談ずるをこそ望め、老朽の故人と語るを好まぬと云うた。直方の門人にて醫を業とする者早世して、其の妻年若く、寡居三年後に尼とならんとした。知人之を不可として、直方に圖つたとき、直方の云ふには、『それは尼になる方がよい。なぜと云ふに、紅や白粉に費用がかゝらぬから』と答へた。又ある村學究、直方を訪問し、しかつめらしく、孔子何故に妻を出したかと問ふと、直方答へて云ふに、そんな分り切つたことを問ふことか。三千人も門人があるから、之と通ぜぬに限らぬからと云うた。

直方が土井侯の講筵に臨む毎に、必ず置酒之を待つを例とした。ある時、執事、

酒を出すを忘れた。直方は、侯と對話中、自分から酒をと催促して、酒が出ると、盃を傾けながら且つ談じ且つ飲み、談論、酒を藉りると、雄辯懸河、語々光彩を發するので、侯も左右に注意し、先生の來らるゝ時は、決して酒を忘れてはならぬと命ぜられた。直方は、諸侯の前でも長く端坐が出來なかつた。盤坐を欲すると、机を借りたいと申し出し、低聲に傍人に云ふに、『机は盤坐を蔽すによい道具だよ』と。

四四　淺見絅齋

まだ餅を買ふ錢があるか

淺見絅齋も、闇齋門下の傑出の人物である。江州高島の人で、本醫を業とし、高島順良と云うた。絅齋の名著として何人も知つて居るのは「靖獻遺言」である。此書の、勤王の志氣を皷吹したことも、世人の普く知る所である。

絅齋は武張つた人で、常に一長劍を帶びた、其の鍔は三寸許りの方形のもので、

昔、岳飛が、其の背に黥したと傳へらる、「赤心報國」の四字を刻した。絅齋は之を帶び、毎朝早く起きて馬に乘り、疾驅するを例とした。各方面より迎へられたが、一生仕へなかつた。それがため貧甚だしく、家の屋根は朽ちて雨が漏り、講義をするにも差支へた。そこで先ゞ、門人と共に自ら屋根に上つて、修理を圖つたが、此人肥大の體格で、朽ちかゝつた屋根は重量に堪へず、足の踏む所皆壞れて、修理が出來かねたと云ふ。ある日門生を引きつれて外出した時、門生は途上で餅を買つて、師に進めた。先生健啖で、一口に食し了り、『お前、まだ餅を買ふ錢があるか』と云うた。

絅齋、關東の事情に通ぜず、門人三宅觀瀾に書を寄せんとて、江戸に行く人に託した時、三宅は阿部侯の屋敷に居る。若し其の屋敷が不分明ならば、某々に問へと云うた。當時、阿部侯は、閣老であつた。江戸で此人の家が知れぬ筈はないのに、斯く云うたので、皆々絅齋の迂濶

を笑つた。

四五　三宅尙齋

獄中血書の二著

三宅尙齋は、淺見絅齋、佐藤直方と共に、闇齋門下の三傑と云はれた。曾て阿部侯に仕へ、其の世子の傅となつた。世子が放蕩であるのを、屢〻諫めたが、聽き入れぬので、憤慨して激語を發したことから、不敬罪に問はれて、忍城の獄に投ぜらるゝこと、三年の長きに迫んだ。

尙齋、獄に在り、一たびは自殺を思ひ立ち、鐵釘を拾うて、之を其の用に供せんとしたが、思ひ直して、空しく死なんよりは、身體を保ち、著述を爲さんと志し、毎日、水を請うて身體の垢を去り、且つ朝夕、食後必ず獄室を匝ること數百回の多きに及び、運動を力めた。監視のものは、其の意を解しかね、或は、脫獄を企てるものでないかと、警戒を嚴にした。尙齋笑つて云ふには、無用の事を休めよ。吾も男子なり、脫獄のごとき卑怯の事を

するものでない。毎日運動を事とするは、脚氣を患ひ、死に就く時、歩行も出來ぬ樣な醜態を嫌ふからであると云うた。尙齋、日々差入れられる紙を貯へて、何か書かんと思立つたが、筆墨の無いのに困んだ。偶〻風に吹かれて、竹片の、獄室に飛び入つたのを、よいものを得たと喜び、之を嚙むで筆を作り、さて自殺用にと梁上に隱して置いた鐵釘を以て己が股にさし、血に染めて著した書が二種ある。一は「狼靈錄」、一は「白雀錄」である。

四六　龍女

業平涅槃圖

菱川師宣の門人に、龍女と云ふがあつた。江戸下谷の人、山崎某の女と云ふが、其身分も歿年も知れぬ。併し、此女の筆蹟は、いくらか世に傳はつて居て、人をして、其奇才を偲ばしめる。乃ち「業平涅槃圖」の如きは、其一標本であらう。云ふまでもなく、釋迦の臨終に擬つたものだが、其意匠がおもしろい。

先づ中央に、上畳の上に、直衣着けたる業平横臥の圖を畫き、下髪の官女の、涙を拭ひつゝ、側らにあるを始めとし、俗に御守殿風と稱へる上臈、内室風のもの、妾風のもの、處女らしきもの、歌妓娼妓鴇母らしきもの、下りては夜發らしきもの、町家の妻女、裏家の嬶、花賣婆に至るまで、種々の階級の婦人二十人餘り、遺骸を圍むで泣悲むでゐるさまを寫したものであるが、業平の如き好色家を寫す趣向としては、よい思付きと、何人も領かざるを得ぬ。

四七　小林一茶

渠の俳句

一茶の事は、前卷に、彼れの記文を本として、其あらましを話して置いたが、今其補遺に、こゝに彼れの俳句に就いて一言しよう。さて此人は、前にも言うたやうに、幼少の頃、母を失ひ、繼母に困められて、家に居ることが出來ず、江戸に奉公に出され、長子でありながら、家

は、繼母と其の出の次男に壟斷され、五十年も放浪生活を續けた。

彼れは、天稟に俳諧の才があつたと見え、六歳の時の作として傳へられて居る句に、「己と來て遊べや親のなし雀」と云ふがある。母を喪つて一人ぼつち、寂寥を悲む情が、此の無邪氣な十七文字の内に籠つて、人をして悽愴の感あらしめる。彼れは、悲慘の間に幾んど一生を送つた。併し、彼れの詩才は、此悲慘の境遇に會して益ゝ陶冶され、信州の誇りとする程の大俳人となつた。

彼れの俳句の特徴とも云ふべきは、其の眞率、みづから欺かざる所にある。彼れは、俳諧行脚の序に故郷に入り、自分の家に立寄つたこともあるが、繼母は、なぜ來たと云はぬ計りの面持で、澁茶一杯も與へぬ無愛想に、一茶も幾んどたまりかねた。併し、故郷忘れ難く、時に餘所ながら鄉里を省みたこともある。

思ふまじ見まじとすれど我家哉
又

故郷に花もあらねどふむ足の迹へ心
を引く霞かな

又

故郷は蠅まで人をさしにけり

などの句は、皆懐郷の餘に發したもので、孰れも彼れが欺かざる本音である。

彼れは、妻に先立たれ、愛子を喪ひ、悲惨の間に不幸を重ね、世の味氣なさを感ずると共に、何物に對しても溫かき同情が起り、彼れの眞率の人格を、一層美にするに至つた。その妻子を思ふ句の内に、

亡妻新盆

かたみごや母が來るとて手をたゝく
母のなき子の這へ習ふに
をさな子や笑ふにつけて秋の暮
愛子を喪ひて
露の世は露の世ながら去ながら
露ちるやむさい此世に用なしと

此等の句を讀むで、誰か斷腸の感なきを得よう。

彼れは、妻子に對する愛をば、動植物にまで移して、優しい情を、いろ〳〵の

句にあらはして居る。

雀の子そこのけ〳〵お馬が通る
寢がへりをするぞ脇よれきりぎりす
やれ打つな蠅が手をする足をする
蝸牛壁をこはして遊ばせん
痩蛙まけるな一茶こゝにあり
蛙ゑ蝸牛や蠅や雀や、一茶は皆愛兒の樣にあしらつて居るを見よ。

彼れは、少しも飾氣の無い人であつた。隨つて其の句の妙も、天眞流露の處にある。彼れは、自像の上に贊して、

ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉

と詠じ、鄕國の觀月の名所姨捨山へすら、老いては行くに懶しと云うて、

有合の山ですますやけふの月

と詠じ、「おらが春」と云ふ、己が句集の卷端に、

日出度さも中位なりおらが春

と題し、隣家より餅をくれさうなものと豫期したのが、外れたと云うて、

我門へ來さうにしたり配り餅

と自由するなど、何ぞ其禮度の灑々落々

たる。

彼れは、晩年、漸く家に戻ることが出來たが、不幸にして火災の類燒に罹り、土藏を假の住居として居る內、終に歿した。文政十年、六十五歳の時である。彼れの辭世の句も、例のごとく洒々として居る。

盥から盥にうつるちんぷんかん

四八　伊藤仁齋

堀川塾の青天霹靂事

白河樂翁の「退閑雜記」に、伊藤仁齋が其門人並河勘介(天民)に一本遣られたことが載つて居る。本書の卷頭に掲げた「伊藤仁齋」の項に漏らしたから、今こゝに補ふ。乃ち原文は左の通りである。

並河勘介は、伊藤仁齋の弟子なりしが、道に見ひらきたるところありければ、仁齋の許へ行て、先生は、道を見給ふ事、過りありけりとて、いたく論じたりけり。仁齋もまたそれに應じて論じけるが、晝より論談して、夜明くる頃

に至り、仁齋、退きて猶考へ侍らんと云けるにぞ、勘介、其座を起ちさまに、先生、道に誤りあれば、是より門をはなるゝと云ける。その席に松原才藏ありけるが、また進み出で、勘介の論こそ、尊く侍りき。先生、道に誤りあれば、今より門下にならじと、辭して去りける。この論には、聊か飲食もせず、晝より夜明けに至りけるが、仁齋の末子、ねぶりを催しける。仁齋いと溫順にて、はげしき色あらはせし事もなかりしか、其時は、聲を勵まし大に怒りて、けふの論談は、天地わかれ目の論なり。斯道に於てあやまりあらば、天地の間に立つべしとは覺えぬものを、その席におきて睡を生じ侍るぞ、怠惰の至りとて、けしからず叱りけりと、後に、其の座に居れる人、語りしを、直に聞きしもの、余にかたりけり。德山侍從の醫阪本東かたりけり。德山侍從の醫阪本東策庵なるものは、才藏の弟子にして、醫ことにすぐれたり。此

者、余にかたり侍りぬ。勘介の見は、「天民遺言」に委しくあり。

並河天民は、曾て掲げたごとく、一種の見識あり、師説なりとて一概に服膺せず、其過ちを見るに於ては、之を破棄するに躊躇しなかつたことは、其の性行に依つて窺ひ知られる。樂翁の此の一節は、恐らく事實であらう。誠に此の出來事は、堀川塾に於て青天の霹靂とも云ふべく、仁齋に於ては、振天撼地の思ひありしならん。師より門弟を去るを破門と云ひ來れど、門弟が師門を去るをば何んと云ふべきか。仁齋は、二人の門人より、師たるの拒絶を受けたのである。

四九　英一蝶

女達磨

美人に法衣を纏はせた、顔だけあらはした繪を「女達磨」と云うて居る。禪味のある、おもしろい意匠であるが、之は英一蝶が書始めたと傳へられる。一蝶在世の頃、新芳原中近江屋といふ樓に半太夫

と云ふ遊女があつて、名聲があつた。終に大傳馬町の豪商某に落籍されたが、ある時、其の家に多くの人集まつた折、達磨の九年面壁の話が出た。半太夫、傍らに之を聽き、九年面壁の座禪、何ほどのことかある。遊女の身の上こそ、紋日物日の心遣ひに晝夜店を張るこそ、面壁に異ることなし。達磨は九年、われ〳〵は苦界十年なれば、達磨よりも却つて修行を積むで居ると云うたのを、一蝶聞いて興を感じ、やがて半身の達磨を、傾城の顔に繪いた。これがそも〳〵「女達磨」の始まりで、遂に畫苑の好意匠と稱へられ、永く傳はることになり、隨つて之が畫賛にも優れたものがある。俳人祇空の句に、「九年何に苦界十年花ごろも」とある如き、又市川柏筵が、「そもさんか是こなさんは誰ぞ」と詞書して、「九年母も粋より出しあまみかな」と詠じたるごとき、皆人口に膾炙してゐる。

五〇　荻生徂徠

雇婆さんの觀察

下谷に萬年山祝言寺と云ふ寺がある。これは荻生徂徠に緣ある寺で、徂徠に仕へた老婆は、時々此寺に參詣して法談を聞いた。ある時歸つて來て云ふには、お寺の法談には、いつも人が滿ちて居ますが、先生の講釋の日に、餘り人が多く來ませんねィと云うた。負け嫌ひの先生、之を聞き、さうだ〳〵、臭いものには蠅がたかるから、寺には人が多く寄る道理だと笑つた。

五一　谷　文晁

竹林七賢亦躍る可し

谷文晁の子文一、親に習うて畫をよくした。ある諸侯に招かれた時、席上、侯より、竹林七賢の、醉後躍つて居る圖を書けと命ぜられた。文一は、眞面目の性格であつたので、此の所望を拒み、直ちに辭して家に歸つた。歸宅後、父の文晁に

ありし次第を語り、賢者とも云はるゝ者が、醉うて踊る筈は無いと云うたのを、文晁笑つて云ふには、賢者とても酒を飲む。飲めば踊りもする。汝、何故命に應ぜざりしぞと云うた。文晁は斯の如く曠達な人であつた。

五二　大雅堂

再び指畫を作らず

大雅堂池無名は、時に指頭で畫を作つたこともあつた。伊藤東涯の弟介亭が、ある時、その指畫を見て、感じて云ふには、『翁は、よいことをなさる。田舍などの、筆硯のと、のひかねる時などには、まことに重寶なことだ』と褒めた。それを大雅が聞いて大に慚ぢ、その後は、指畫を全く廢し、決して試みなかつたと云ふ。村瀨栲亭の云ふには、介亭と云ふ人は、極めて眞面目な人で、苟且にも人に皮肉など云ふ人でない。必ず心から、さう思はれたのであらう。それが大雅の意に深く觸れたので、意外にも頂門の一針と爲

つたのであると云うて居る。

五三　柳澤淇園

だいこごんばう歌

柳澤淇園の、なまりや發音の淸濁によつて、物の名にをかしな變化のあることを云うて、戯れに詠んだ狂歌がおもしろい。

大根とはねつる文字ははねやらでは
ねずともよき牛蒡ごんばう

五四　春濤と春水

興味ある對照

森春濤が、俳句や和歌をも善くしたことは前にも陳べたが、それを、後に廢めた仔細は、その夫人が、和歌に於て相當の名聲があつて、春濤よりも、より以上上手であつた。春濤慚ふに、自分の本領は和歌でない。縱令相當の和歌を詠んだ所で、妻の歌を借用したと、誤解を受くる虞れがあると云うて、斷然和歌と俳句

を廢めた。

此の夫人は春濤の先妻で、槐南の實母である。國島氏で、名は何と云うたか知らぬが、門人連は、倚竹夫人と言ひ習はした。此の名の由來は、夫人の室に「倚竹書龕」の四字額が掲げてあつたからである。此夫人の和歌を輯めた小册子二卷は、夫人の歿後、槐南に依つて出版されて居る。春濤が、序に代へて輓詩を題して居るが、「倚竹書龕」のことにも言及して居る。又此歌集の名を「庭すゞめ」と命じ、春濤自身署してゐる。

さて春濤、倚竹、槐南と、三人の名を記憶して、一方に面白い對照は、春水、梅颸、山陽といふ三人の名である。

春水は山陽の父で、其弟には春風、杏坪あり、其室は梅颸、其間に出來たのが山陽である。春水は詩人の名高く、歌も詠んだ。殊に弟の杏坪は、春水以上の歌人であつた。併し、賴家に在つて、歌で尤も名を得たのは梅颸であつた。當時歌道の達人として聞えた香川景樹と、

賴家とは、極めて親密な間柄で、常に往來した。或時は歌の會が催され、梅颸や杏坪が必ず一座し、互に歌を詠み暮らした。されば、梅颸が追々と歌に秀でたのも、詰り景樹の薫陶に依るものである。

森家と、賴家と、斯う並べて見ると、時代を異にする二大文人の家に、偶然にも妙に似たところがあるのも一奇と云ふべきである。濤と水とは、互に水に緣のある名で、其の夫人が、一方は梅、一方は竹の名を取つて、性格も何となく似て居る樣である。兩人共に和歌を善くし、而して双方の子が、共に親優りの譽があつて、而して其名も、偶然とは言ひ、一は南、一は陽、共に「みなみ」の字を名として居るのも奇だ。

藝苑一夕話

大尾

大正十一年四月八日印刷
大正十一年四月十一日發行

藝苑一夕話上下
各一册正價金貳圓參拾錢

不許複製

著者　東京市牛込區東五軒町三五　市島謙吉
發行者　東京市牛込區辨天町一五七　種村宗八
印刷者　東京市牛込區榎町七　渡邊八太郎
發行所　東京市牛込區早稻田　振替東京一一二三番　早稻田大學出版部
〔日清印刷株式會社印刷〕

賣捌所

東京神田　東京堂
東京日本橋　至誠堂
東京京橋　北隆館
東京京橋　東海堂
大阪東區　盛文館
名古屋市　星野書店

其他各地書舗

市島謙吉著

蟹の泡

神珍美本
定價金貳圓
郵程金八錢

本書に輯めた小話百五十篇、其の多くが東西先賢の逸話に屬する所から、書名を「蟹の泡」と題した。畢竟藝苑の天才と云はゞ人は、其の言行概ね一風變つてゐて常徑を履まず、多くが世間の所謂「ツムヂ曲り」なるもので、言はゞ蟹の横行にも似た行き方である。而して又蟹には元來腸が無いと云はれてゐるが、之等先賢の行徑常軌を逸して居ながら、亦甚だ無邪氣な點がそれによく似てゐる。……　此書が讀者に破顔一笑の興を添へることもあれば、全くこの「ツムジ曲り」諸先賢の賜に外ならないのである。（著者序文の一節）

東京振替牛込三二一一　早稲田大學出版部

市島謙吉著　高須梅溪執筆（早稲田大學出版部發行）

大隈侯一言一行

侯の眞筆（寫眞版）二枚　其他口繪八枚

三六判五百五十頁
定價貳圓參拾錢
郵稅八錢

世界的偉人大隈侯逝いて以來、國民が侯を哀惜し追慕するの情益々如はる。此の偉人の日常生活の精細は、何人も知らんと欲して未だ知り得ざる所。玆に市島氏あり、侯に隨身すること四十餘年、侯の一言一行を悉く日記に誌し置き、其一顰一笑をも洩さず。今此日記を土臺として侯の言行を口述し、文壇の雄將にして平生隈侯を敬仰せる梅溪氏之を筆錄す。寔に空前の隨筆的傳記にして、侯の面目宛から生けるが如し。

理學博士　横山又次郎著

世界奇聞　智識の庫

菊判挿畫多數
定價貳圓參拾錢
郵稅十二錢

現今邦人に對する急務は學問趣味を養ふにある。此書はお伽噺では無いかと思はれるやうな世界の珍談奇聞を集めて無數の色刷圖畫を加へ、之に學問上の說明を施したものである。少年少女又は學問上に趣味の無い方々でも、此書を讀めば趣味娛樂の間に緊要の智識を養ふことが出來る。

東京牛込　振替東京一二三一　早稲田大學出版部

理學博士 横山又次郎著

珍談百一篇

袖珍美本挿畫多數
定價貳圓參拾錢
郵税八錢

珍らしい、面白い、しかも爲になる實話を集めたもので、「智識の庫」の姉妹篇である。少年少女には固より、青年にでも、中年にでも、さては老年にでも、興味の多い讀物である。材料の一部は科學趣味を帶びた世界の奇聞で、一部は學者、文人、豪傑等に關する逸話である。著者は「智識の庫」が意外の好評を得た事實に鑑みて此書を著したのである。

東京牛込 振替東京一二三一 早稲田大學出版部

2745